

SM1001墓墳及び墳丘土層土色

・二次の堆積

- | | | |
|-------------------|---------------------|-------------------|
| 1. 明黄褐色2.5Y7/6砂質土 | 2. 黄褐色10YR5/6砂質土 | 3. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土 |
| 4. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土 | 5. にぶい黄褐色10YR6/4砂質土 | 6. 浅黄色2.5Y6/6砂質土 |
| 7. 黄褐色2.5Y5/6砂質土 | 8. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土 | 9. 明黄褐色2.5Y7/6砂質土 |
| 10. 浅黄色2.5Y7/4砂質土 | 11. 浅黄色2.5Y7/4砂質土 | |

・排水溝

12. 明黄褐色2.5Y7/6砂質土

・石室

13. にぶい黄褐色10YR7/3砂質土 14. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土 15. 橙色7.5Y6/6砂質土
16. 浅黄色2.5Y7/4砂質土

・周濠

17. 明黄褐色2.5Y7/6砂質土 18. 明黄褐色10YR6/6砂質土 19. 浅黄色2.5Y7/3砂質土
20. にぶい黄色2.5Y6/4砂質土

・墳丘北側断ち割り

- | | | |
|--------------------|--------------------|-------------------|
| 21. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土 | 22. 灰黄褐色10YR6/2砂質土 | 23. 浅黄色2.5Y7/4砂質土 |
| 24. 淡黄色5Y8/3砂質土 | 25. 灰白色2.5Y8/2砂質土 | 26. 灰黄色2.5Y7/2砂質土 |
| 27. 灰黄色2.5Y7/2砂質土 | 28. 灰白色2.5Y7/1砂質土 | 29. 灰黄色2.5Y7/2砂質土 |
| 30. 灰白色2.5Y8/2砂質土 | 31. 浅黄色2.5Y7/3砂質土 | |

・墳丘東西断ち割り (石室部分)

西側墳丘

- | | | |
|-------------------|-------------------|-------------------|
| 32. 浅黄色2.5Y8/3砂質土 | 33. 灰白色10YR7/1砂質土 | 34. 灰白色10YR8/1砂質土 |
| 35. 灰白色2.5Y8/2砂質土 | 36. 灰白色2.5Y8/2砂質土 | 37. 淡黄色2.5Y8/3砂質土 |
| 38. 淡黄色2.5Y8/3砂質土 | 39. 淡黄色2.5Y8/3砂質土 | 40. 淡黄色2.5Y8/3砂質土 |
| 41. 灰白色2.5Y7/1砂質土 | 42. 灰黄色2.5Y7/2砂質土 | 43. 浅黄色2.5Y7/3砂質土 |
| 44. 淡黄色5Y8/3砂質土 | 45. 浅黄色2.5Y7/3砂質土 | 46. 浅黄色5Y7/3砂質土 |

東側墳丘

- | | | |
|---------------------|---------------------|---------------------|
| 47. 灰白色2.5Y8/2砂質土 | 48. 灰白色10YR7/1砂質土 | 49. 灰黄色2.5Y7/2砂質土 |
| 50. にぶい黄色2.5Y6/3砂質土 | 51. にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 | 52. 浅黄色5Y8/3砂質土 |
| 53. 淡黄色5Y8/3砂質土 | 54. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土 | 55. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土 |
| 56. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土 | 57. 灰白色2.5Y7/1砂質土 | 58. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土 |
| 59. にぶい黄色2.5Y6/3砂質土 | 60. にぶい黄色2.5Y6/3砂質土 | 61. にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 |
| 62. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土 | 63. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土 | 64. 灰白色5Y7/2砂質土 |
| 65. 灰黄色2.5Y6/2細砂土 | 66. 浅黄色2.5Y7/4砂質土 | 67. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 |
| 68. 黄灰色2.5Y6/1砂質土 | 69. にぶい黄色2.5Y6/3砂質土 | 70. にぶい黄色2.5Y6/3砂質土 |

・墳丘東西断ち割り (羨道・排水溝部分)

西側墳丘

- | | | |
|-------------------|-------------------|---------------------|
| 71. 淡黄色2.5Y8/3砂質土 | 72. 淡黄色2.5Y8/3砂質土 | 73. 淡黄色2.5Y8/3砂質土 |
| 74. 灰白色2.5Y8/2砂質土 | 75. 黄灰色2.5Y6/1砂質土 | 76. にぶい黄色2.5Y6/3砂質土 |
| 77. 淡黄色5Y8/3砂質土 | 78. 浅黄色5Y7/3砂質土 | |

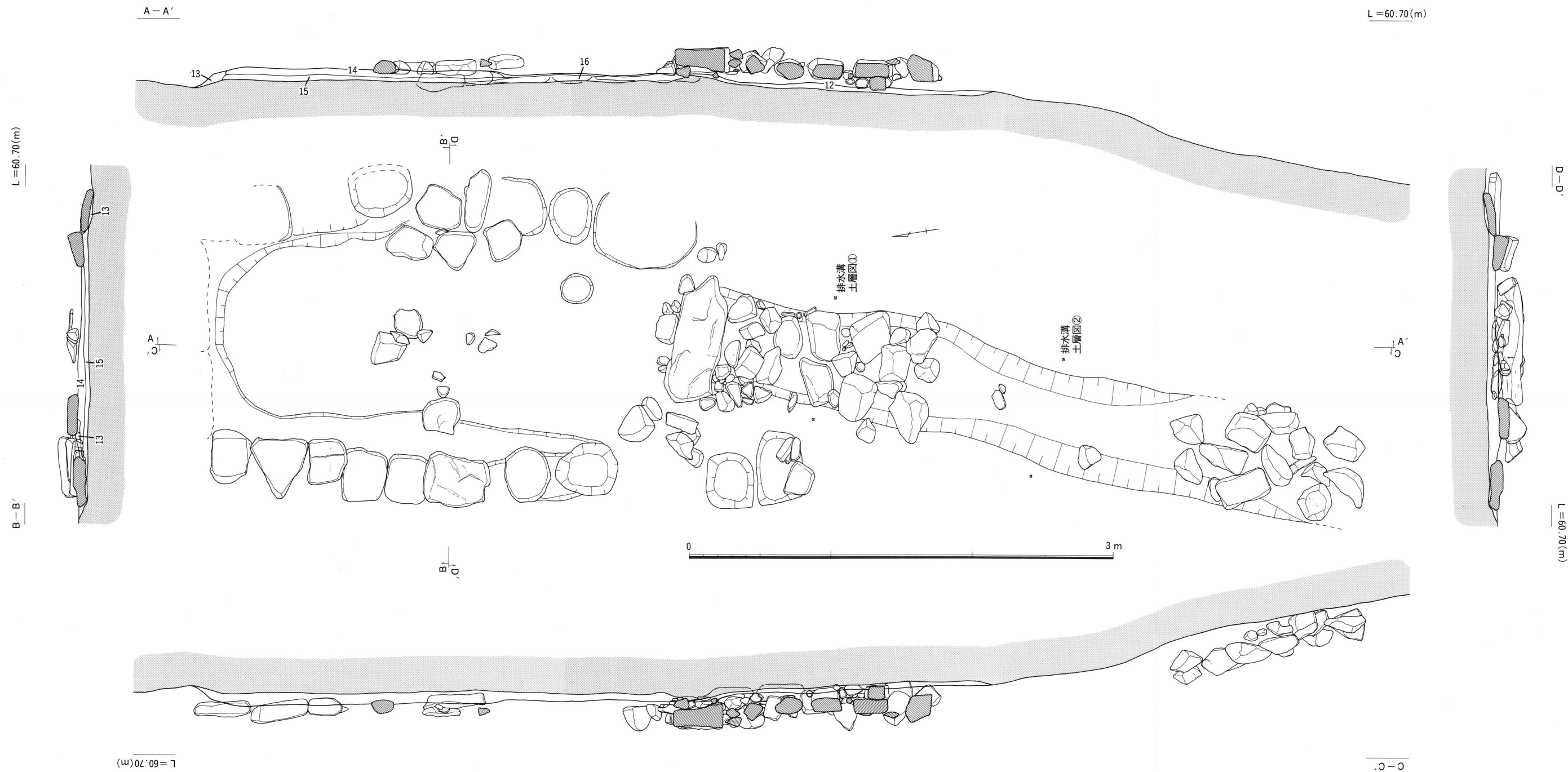
東側墳丘

- | | | |
|---------------------|--------------------|--------------------|
| 79. 灰黄色2.5Y7/2砂質土 | 80. 淡黄色5Y8/3砂質土 | 81. 淡黄色5Y8/3砂質土 |
| 82. にぶい黄色2.5Y8/3砂質土 | 83. 灰黄色2.5Y7/2砂質土 | 84. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土 |
| 85. 灰白色2.5Y7/1砂質土 | 86. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土 | 87. 浅黄色2.5Y7/4砂質土 |

石室裏込め

88. 灰白色5Y8/2砂質土 89. 灰白色5Y8/2砂質土

第7図 SM1001墳丘・墓墳内土層図



第8図 SM1001横穴式石室展開図（土層番号は第7図に一致）

築時や再利用の際に墳丘を再形成するような改変を行う例の少ないことや、列石には掘り方が伴っていないことから、ここでは①の場合を想定しておきたい。従って、礫の下面から出土した須恵器は、作業時に偶然混入したか、墳丘築造時の祭祀に伴うものということになる。また、小竪穴式石室は列石を部分的に除去して、墓壇を掘削していたことが分かる。

内部施設（第8図）

現状

調査前の地形測量の段階で、盗掘坑と考えられる長さ約6m、幅約3mの窪みがあり南側に開口する横穴式石室の存在が念頭におかれた。調査の進行に従って、検出される石材が砕けたものが多く、石室の破壊が予想以上のものであることが明らかとなっていった。中でも羨道部排水溝の上面には、石室を構成していたと思われる砂岩の石材が一辺5～30cm程度に砕かれ、集められていた。

石室内土層の観察によると、わずかに残存する床面にまで二次的堆積土が及んでいることから、玄室の保存状況はきわめて悪いといえる。割石を含む層（第7図第8・9・10層）には瓦器碗が含まれており、中世以降の堆積であることが確実である。さらに割石の層を切り込む層（1～7層）がみられ、玄室床面をほぼ覆い尽くし壁体と裏込めのほとんどをも切り込んでいる。この層には古墳時代以降の遺物として白磁碗が含まれていたが、先述の瓦器碗との先後関係が逆転しており、盗掘や攪乱の年代を位置づける資料とはならない。

構造

墓壇を掘削した後、まず整地を行い（第7図第14・15層）、礫床を敷き詰め、基底石を据える掘り方（13層）を掘りくぼめる。

石室は玄室内の基底石の一部を除き、完全に破壊されていた。辛うじて原位置を保っていた基底石と石材の抜き穴および2号墳の横穴式石室の形態から復元すると、玄室は基本的に長方形で、中央部でわずかに張り出す胴張のプランをもち、最大幅1.55m、奥壁部での幅1.3mとなる。框石の北西に接する抜き穴を玄門立石または袖石と考えた場合玄室長は2.7mである。また、この抜き穴を最重要視せず框石が玄門の位置と一致すると考えた場合玄室長は3.2mである。

排水溝（第9図）

横穴式石室玄室内から墳丘外へ向けて直線的に伸びている。主軸はN-19°-Eで石室の主軸(N-14°-W)からは反時計回り方向へ5°程度のずれがみられる。規模は現存長が4.65m、幅が0.6～0.8mである。断面形態は浅いU字形を呈しており、最も深い部分で20cmを測る。溝内には明黄褐色砂質土が全体に堆積しており、堆積後の攪乱や再掘削の痕跡はみられなかった（第9図）。底面のレベルには石室内と石室外では約0.5mの差があり、排水に際しての

充分な傾斜をもっている。框石より外側約2mには一辺30cm以上の砂岩の自然礫による蓋石が置かれ、検出時にはさらに蓋石の隙間には拳大の礫がみられた。この蓋石が置かれている部分は遺物が集中して多く出土した箇所でもある。

遺物の出土状況（第10～13図）

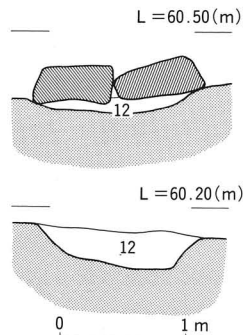
山田古墳群Aの出土遺跡のほとんどを占めているのは、1号墳に関するものである。しかし、白磁碗が玄室床面直上より出土するなど遺存状況は良好ではなかった。玉類を除くと玄室内から出土した遺物は相対的に少なく、原位置を保っていた遺物は極めて少ないものと思われる。追葬や石室破壊の時点で1号墳より持ち出されたことが想定できるものも含め、1号墳の周辺から出土しており、1号墳の副葬土器である可能性を強くもつものの、帰属させることを断定できないものについては別項を設けた。

周濠内からは少ないものの須恵器片が出土した（第11図）。いずれも数点ずつの破片がままとまっている。甕や杯身などの器種が含まれているが、玄室近くで出土したものと比較すると、新しい傾向がみられる。副葬土器の石室外への持ち出しとともに、周濠内への祭祀行為に伴う意図的な投棄行為の可能性も残される。

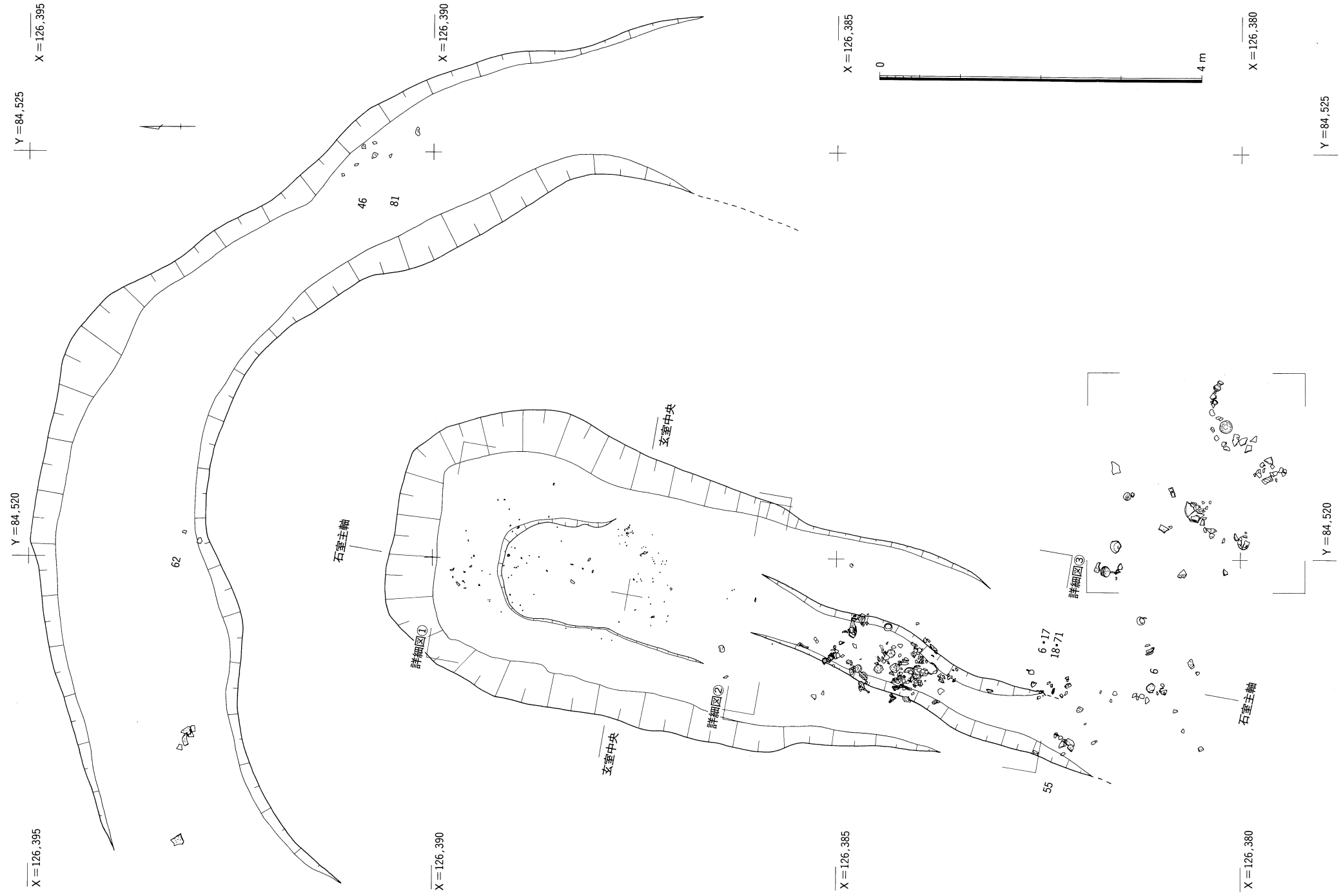
須恵器は玄室内からの出土はほとんどなく、排水溝内・同上面（第12図）、石室前庭部（第13図）より多数出土した。須恵器は形式的に数段階に分かれるものが含まれているが、型ごとにまとまった出土傾向はみられない。また、排水溝で須恵器が最も多く集中して出土した地点（第12図 出土状況詳細図②）においては、出土した土器のレベルに約80cmの高低差があったが、ここでも須恵器の型式差は反映されておらず、破片の接合関係にも秩序はみられない。石室前庭部においては、完形の平瓶が出土するなど石室内遺物のある程度の大きさのものは徹底して持ち出され、前庭部などに投棄されている。

馬具をはじめとする鉄製品も、一部を除くとほぼ排水溝周辺から出土した。鉄製品の出土状況についても、須恵器の場合と同様規則性はない。轡や兵庫鎖などの比較的大形のもの、排水溝周辺に集中している。玄室内からは大刀や鉄鏃と考えられる鉄片が数十点出土しているが、いずれも細片が中心となっており、特定できないものが多い。

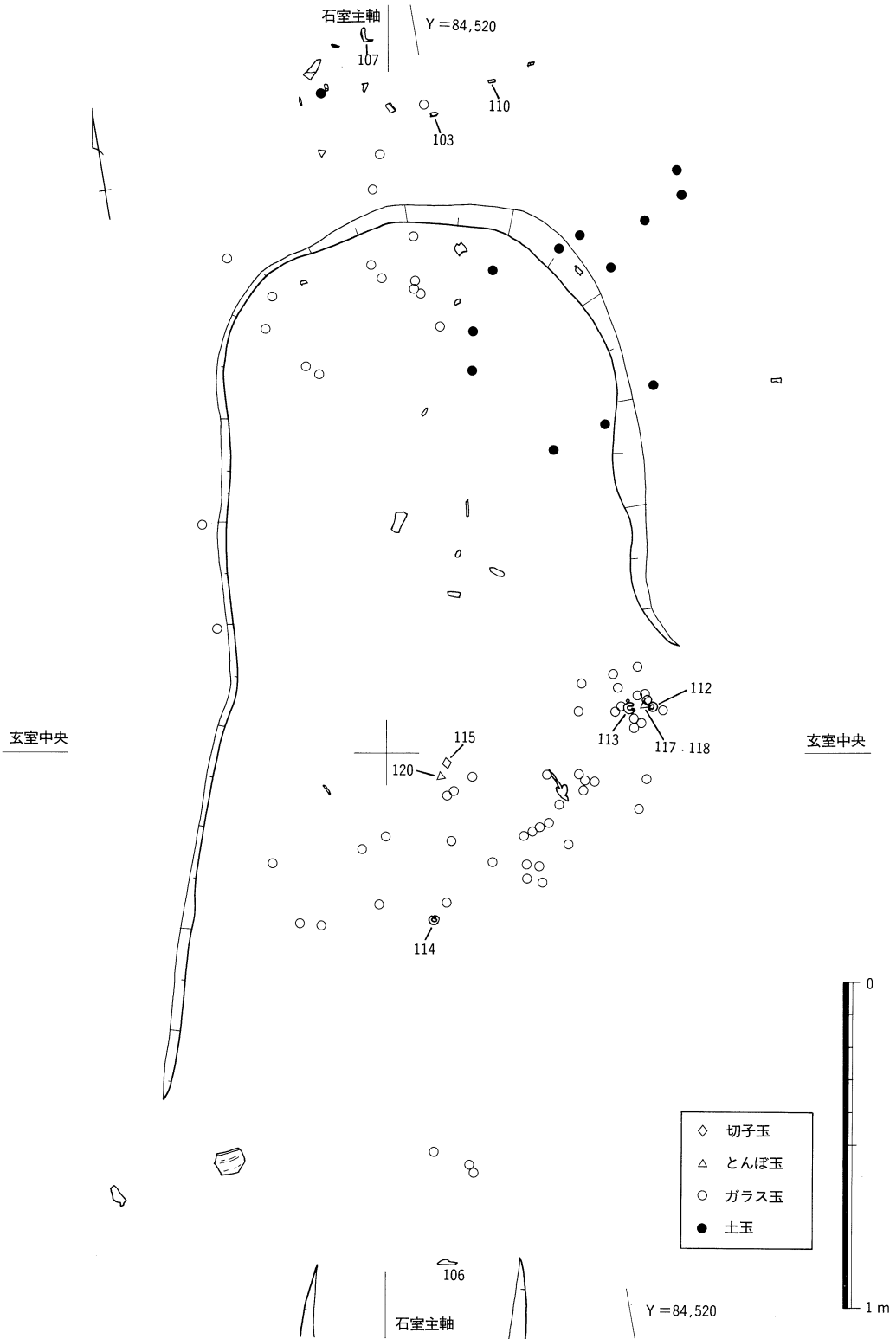
玉類は、一部が排水溝などより出土したが、おおむね玄室内に集中していた。特に出土数の最も多いガラス玉と次に多い土玉についてみると、玄室内に集中している。そのほかに耳環は玄室内の中央部から出土した。合わせ部分の方向などに規則性がみられず、本来の副葬位置ではないことが明らかである。須恵器や馬具と比較すると、より原位置に近い状態の出土ということができ、その小ささが故に破壊・盗掘の手から免れたともいえる。



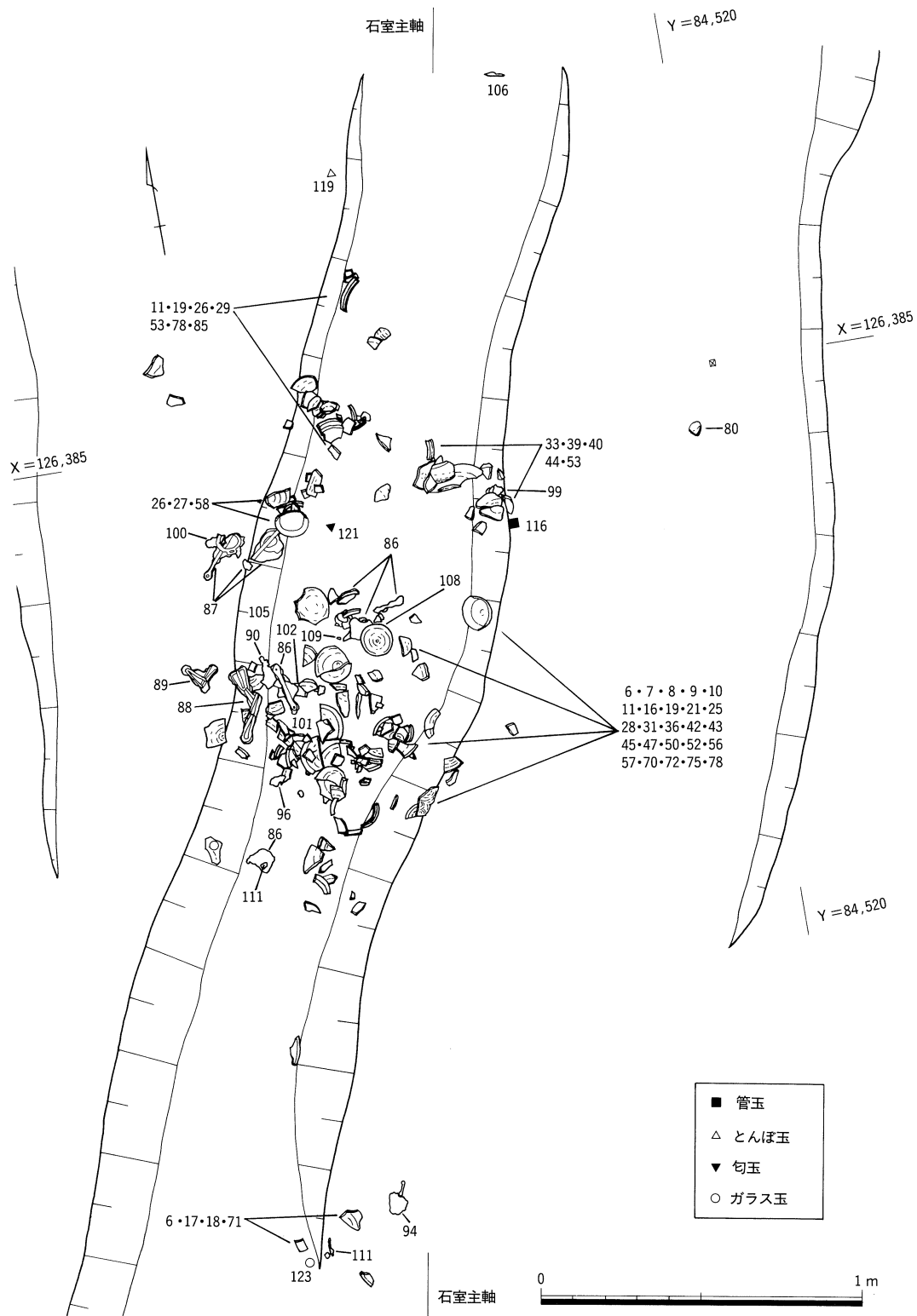
第9図 SM1001排水溝土層図



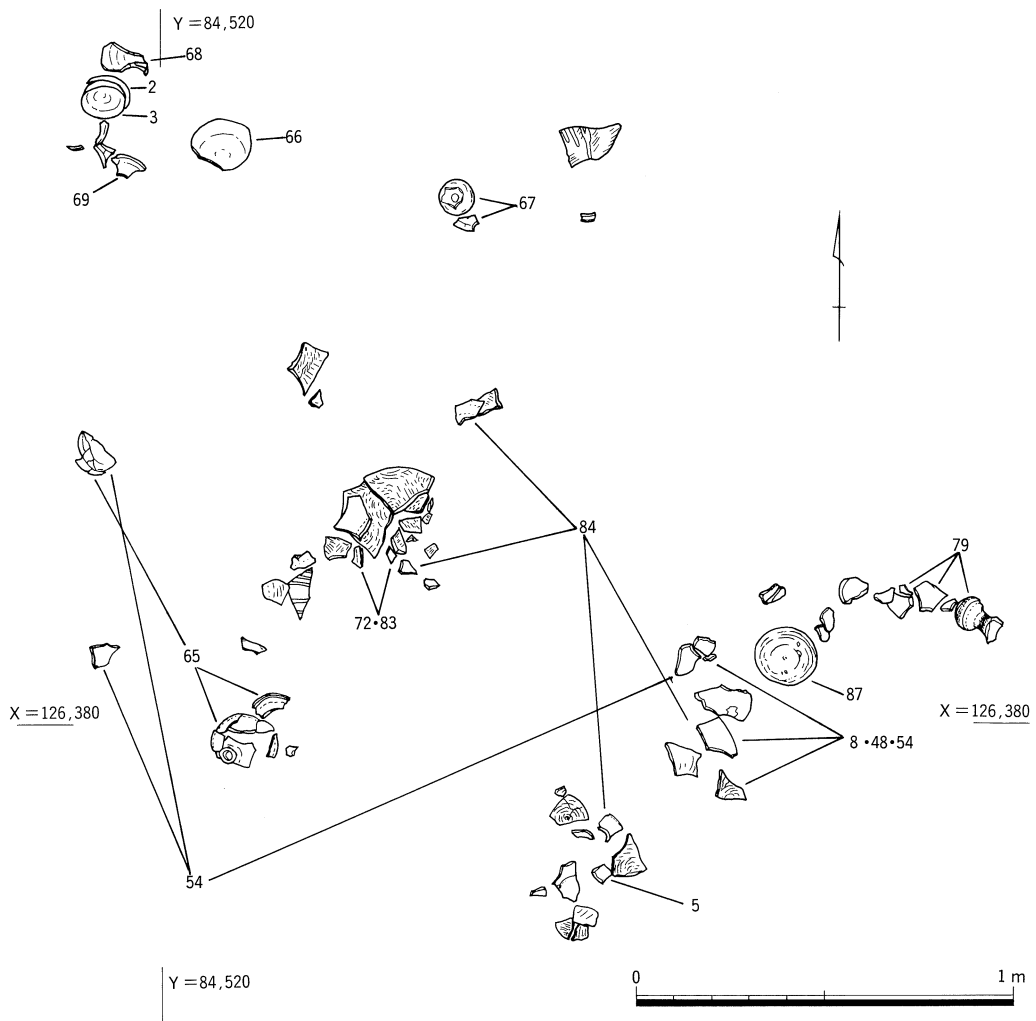
第10図 SM1001遺物出土状況図 (全体)



第11図 SM1001遺物出土状況図 (1) 玄室



第12図 SM1001遺物出土状況図 (2) 排水溝



第13図 SM1001遺物出土状況図 (3) 前庭部

遺物

須恵器 (第14～17図)

蓋杯は、器種の判明したものの中で最も出土数の多く、杯蓋30点、杯身32点の計62点について、図化が可能であった。

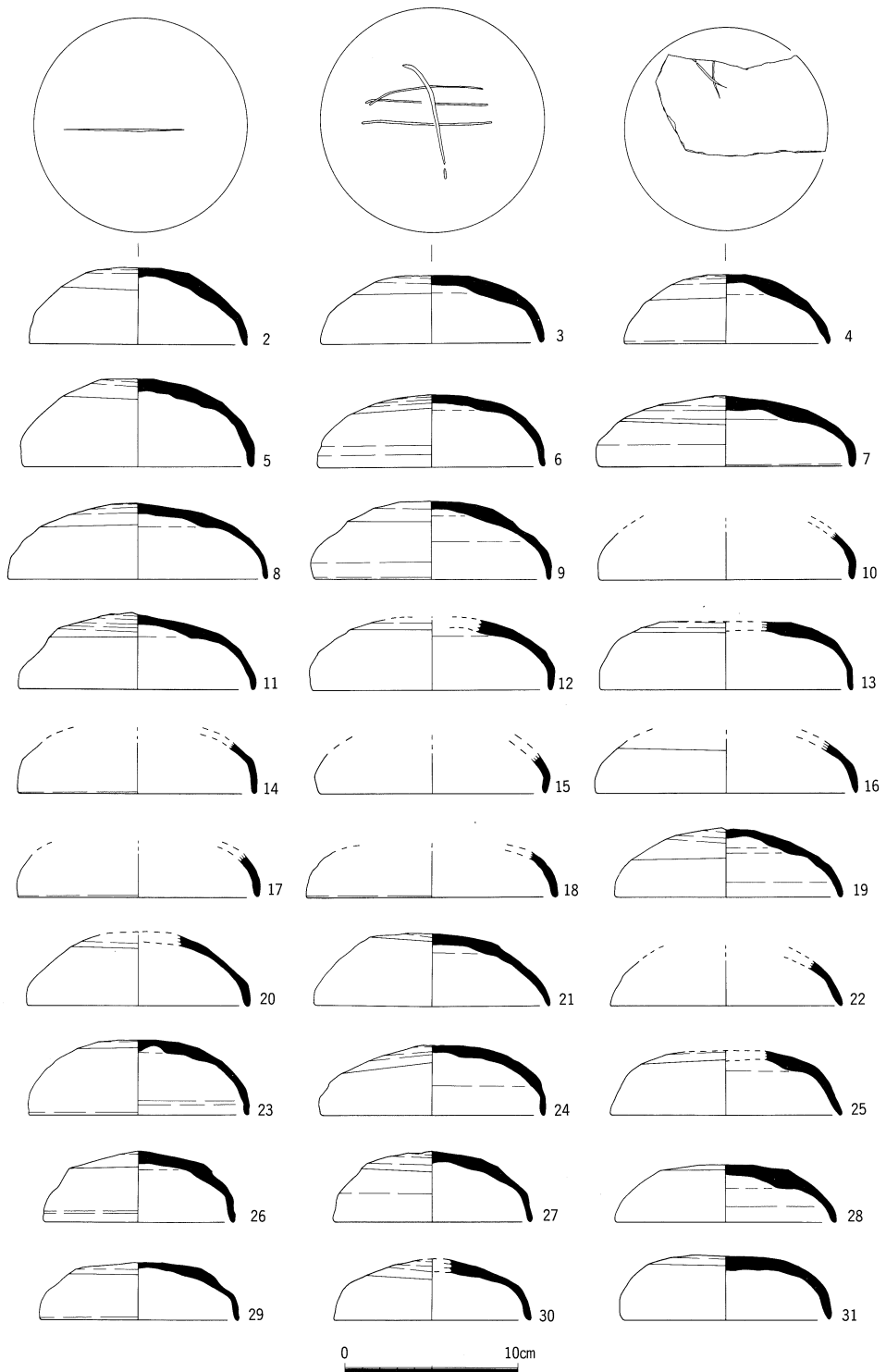
杯蓋はいずれも扁平で丸みを帯びた器形をもち、肩部の稜・口縁端部内面の沈線は退化しており、まったくみられないか、ごくわずかな痕跡をとどめるものである。口径11～15cm、器高は3.3～5.0cmの幅の中におさまる。口径・器高ともに大形のものが多い傾向をとどめていることが、他の遺跡における出土例において明かである。しかし、連続的な変化であり2～4段階に分けうる点が指摘されるが、出土状況などの根拠が伴わない。2・3・4には天井部外面にヘラ記号が認められる。

杯身はその形態から3群に分けることができる。第1群(33~60)は偏平な皿形の体部に内傾する立ち上がりをもつもので、これに32点のうち大部分の29点が含まれる。形態にはバリエーションの幅がみられ、明確な線引きは困難でさらに細分することも可能である。立ち上がりの長さから8mm~10mmのもの(32~40)、6mm~7mmのもの(41~49)、6mm以下のもの(50~60)の3種程度には分類が可能である。立ち上がりが短くなるにつれて口径・器高とも小形のものを含む割合が高くなる。47・54の底部にはヘラ記号が認められる。第2(61)・第3群(62・63)は蓋と身の形態が逆転後のもので、第2群はやや平坦な底部に直線的な口縁部をもつものである。第3群は第2群に比べて大形の口径をもつもので、62には断面方形の高台がつく。この2群には内面にかえりを有する蓋を伴うものと考えられるが、その出土は確認されていない。

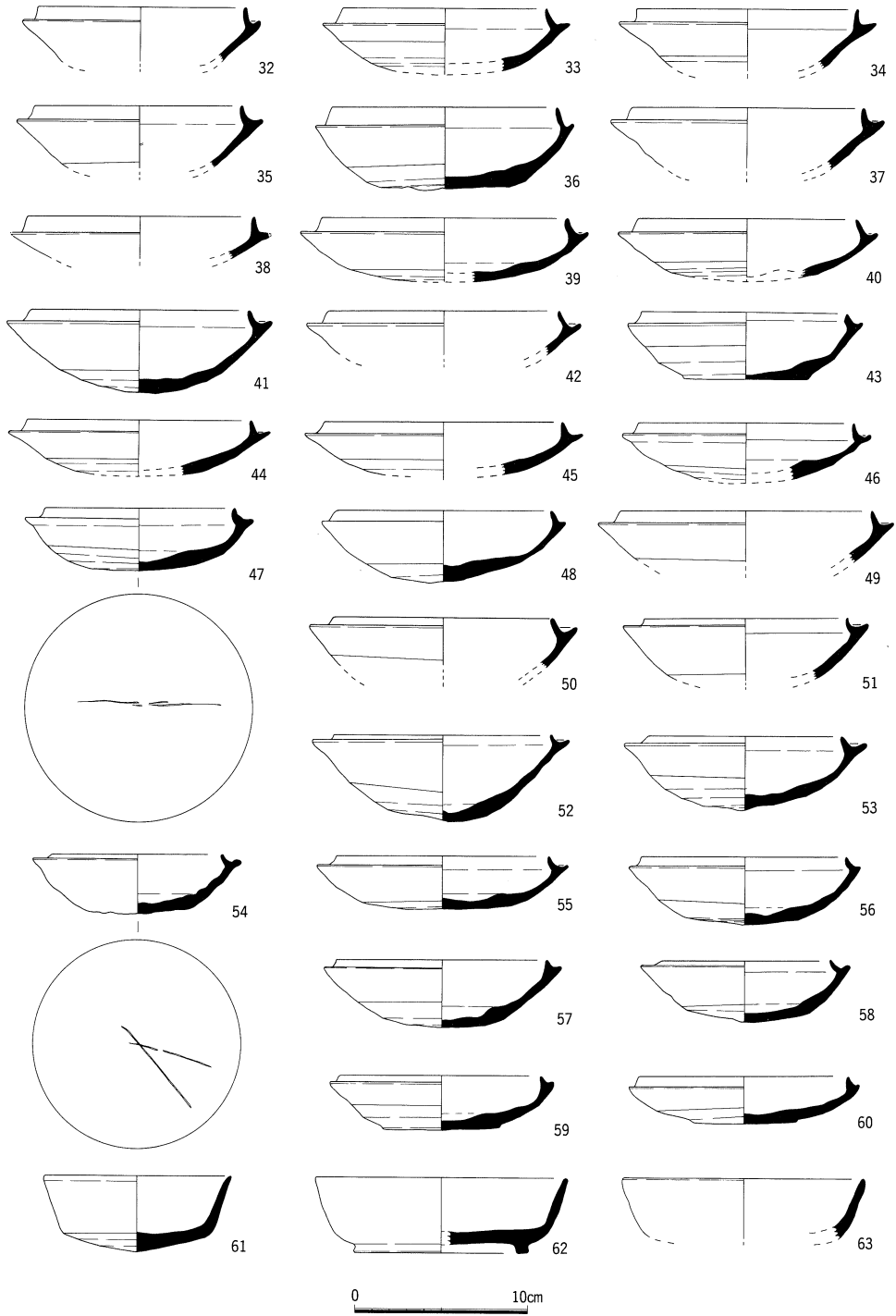
これらの蓋杯のうち、①13・39、②21・26・27・29、③28・56・57・59・60は色調や調整からみて、同工によるものと考えられる。①は軟質焼成でそのためか胎土中の黒色の鉱物が浮きだして見えるものである。②は焼成がやや甘く、黄色っぽい色調を呈するものである。回転ヘラ削りが粗いか施されないため、回転ヘラ切りの痕跡を明瞭にとどめる。26・29には、口縁部外面にナデによる弱い凹線が巡る。21は形態は異なるが、同様の胎土・色調・技法による。③は内面が赤っぽい色調をもつことによって他と区別が可能である。杯身は底部に平坦面をもち、短い立ち上がりという共通の特徴を有する。杯蓋28の天井部も平坦な特徴をもつ。これらはそれぞれの供給窯・工人の違いを示すものであろう。

高杯には、蓋を伴う長脚有蓋のもの3組、無蓋高杯1点とその他に脚端部のみの遺存で杯部などの形状が不明なものなどが3点含まれている。蓋杯の出土数と比較するとやや出土の割合が低い。有蓋高杯(68~70)はいずれも脚が端部に向けて八の字状に大きく広がるもので、脚端部が強いナデによって上下に拡張するものである。脚中位には弱い2条の沈線がめぐり、その上下に2方向の長方形透かしを穿つ。68・70の透かしは幅をもたないスリット状のものである。これらに伴う蓋(64~66)はいずれも偏平なつまみをもっており、つまみの上面に外側に傾く端面をもつもの(65・66)には肩部にやや退化気味の稜がめぐり、古い形態をとどめる。64の天井部には、彫りの浅いヘラ記号がみられる。色調・法量などの点から64と48、65と69、66と70がそれぞれ一組になるものと考えられる。67は脚部が欠損しているが、開き具合から短脚となるものとみてよい。無蓋高杯71は脚柱がやや細身で、脚端部が丸く緩やかに接地し、上方へ拡張するものである。2条の弱い沈線で区画された2方向の長方形透かしを有する。杯体部下半には2条の突線間に櫛描の列点文を有する。72から74は端部の形状からみて短脚の高杯につくものであろう。

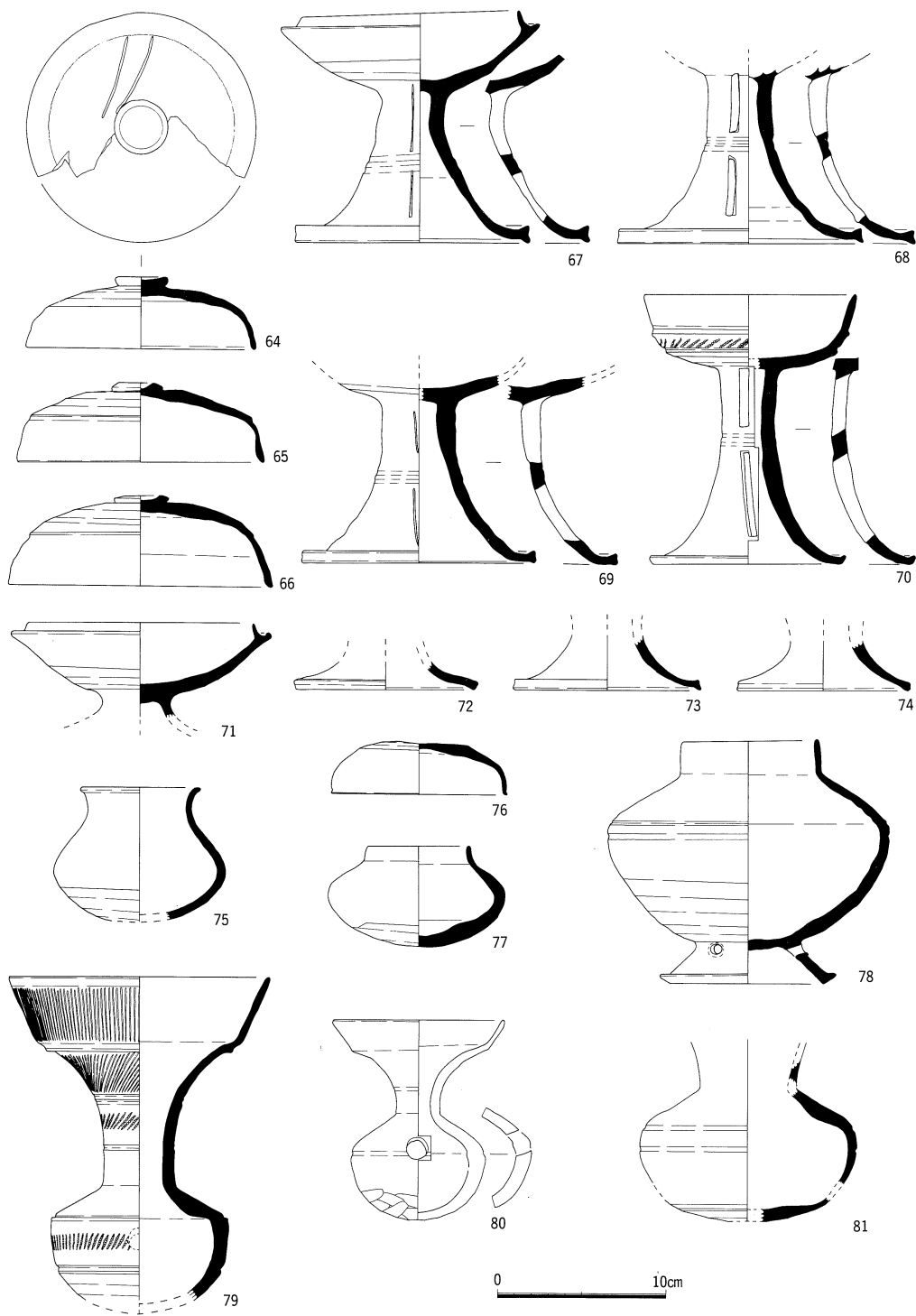
短頸壺には完形である77と破片となっている2個体(75、78)が確認された。いずれも蓋を伴わない。3点とも体部はやや扁平で新しい形態をもつが、口縁の形態はまったく異なる。



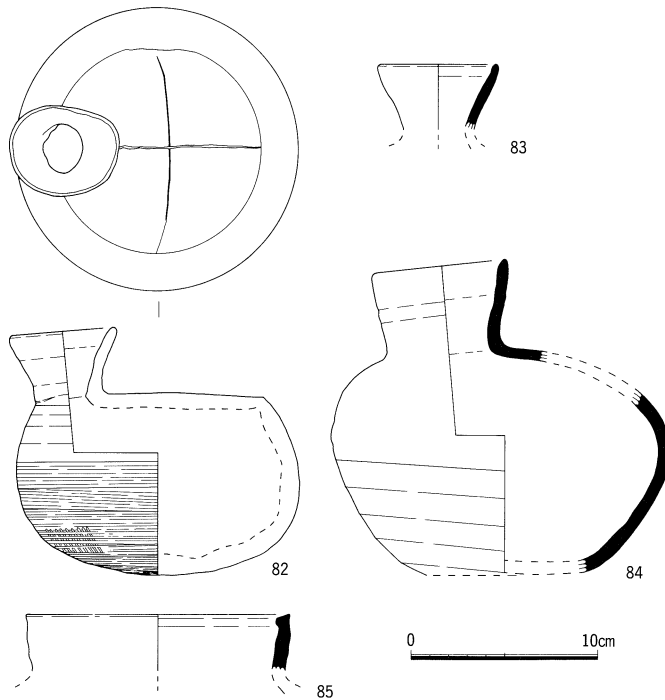
第14図 SM1001出土須恵器 (1)



第15図 SM1001出土須恵器 (2)



第16图 SM1001出土須惠器 (3)



第17図 SM1001出土須恵器 (4)

や沈線によって壺部に1文様帯が、口頸部には4つの文様帯が区画されている。口頸部上2段にはヘラ状工具による条線による文様が、3段目と壺部の文様帯には櫛描列点文の文様が施されている。80は壺部と比べて短い口頸部をもち、口縁部はラッパ状に大きく開く。81は残存部位が少なく、図上での復元を行っている。壺部には沈線2条を巡らせる。79・81は円孔部を欠く。

平瓶は3個体が出土した。うち83は口縁部のみの出土であるが、端部の開きからみて平瓶とみられる。82は完形品で、体部は平坦面を上にし口縁部をつけ、通常のものとは逆につくや希有な例である。従って、下半は平行タタキ後回転カキメ調整、上半は回転ヘラ削りによって整形されている。体部上面の平坦面全体に「×」字のヘラ記号をいれる。84は復元によって完形となったもので、体部下半には回転ヘラ削りがみられる。端部はほぼ平底に近い。82・84ともに体部製作時に粘土盤を充填した痕跡が内面に観察できる。

甕85は口縁部のみの破片で、直立し端部内面が大きく拡張している。

以上の須恵器は、蓋杯・高杯・壺・平瓶などで構成されており、なかでも蓋杯の個体数が多い点の特徴である。また、出土している個体数が80個体以上に及んでいる点も県内の古墳でももっとも多い部類と言える。

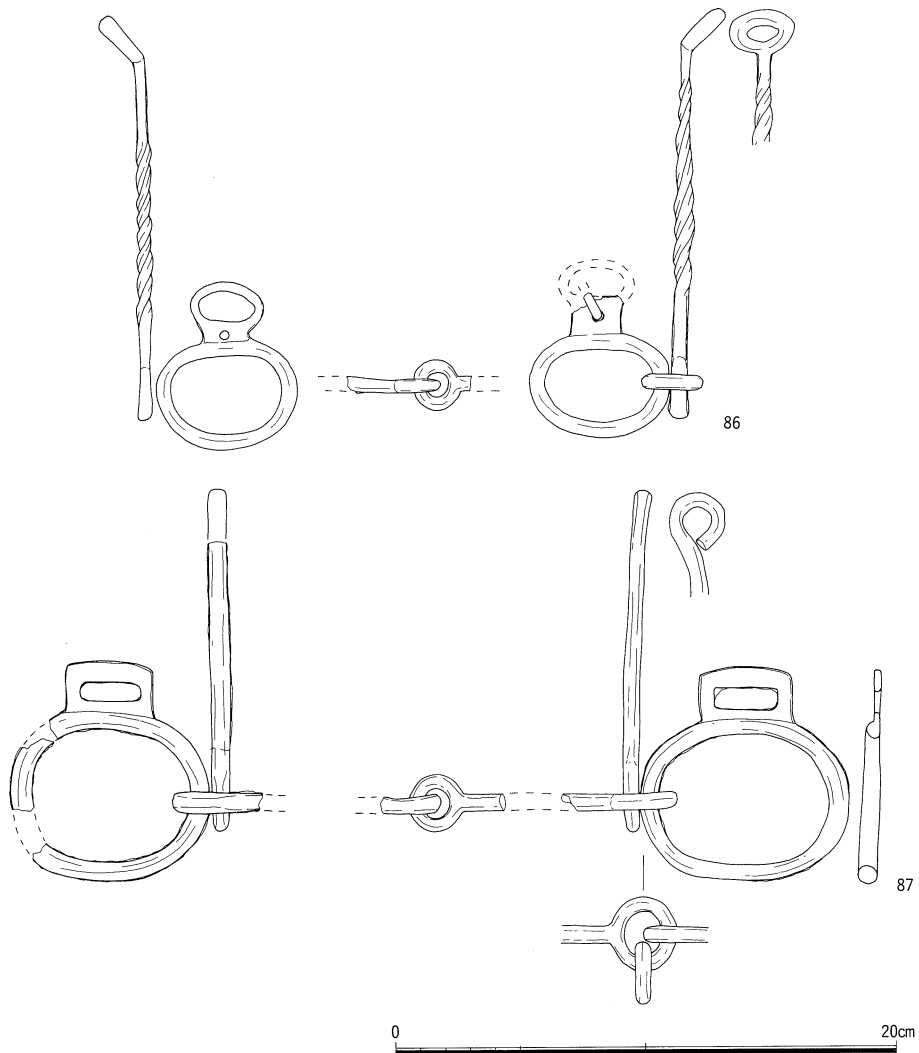
須恵器の年代を蓋杯のグルーピングからみると、第一群が田辺昭三氏の須恵器編年⁽²⁾

中でも、75の口縁は端部付近で外側へ強く折れ曲がるという特徴を有する。78は3方向に円孔を穿つ短脚を有し、この器種としてはやや特異な例である。体部中位に2条の沈線が巡る。脚端部は斜め上方へ大きく拡張する。

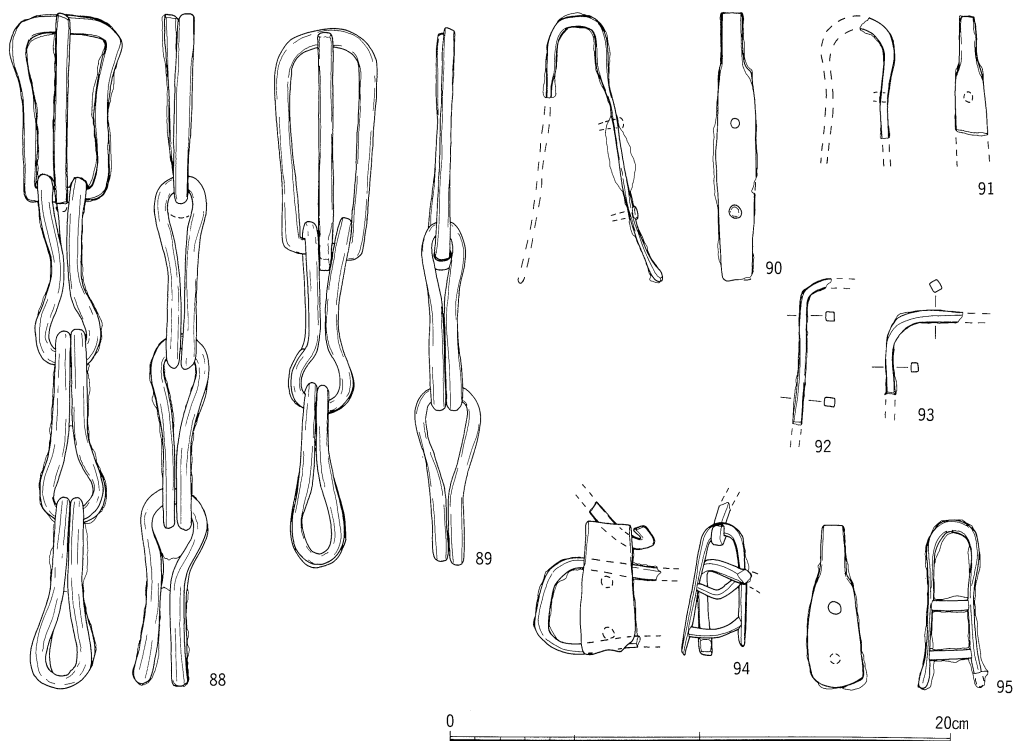
甕は3点が出土し、そのうち79・80は全体の形状が明らかなものである。79は壺部に比して大きく開く朝顔状に口頸部をもつ。突線

のTK43型式～TK209型式で6世紀後葉から7世紀初頭までのやや幅のある年代に該当する。1号墳出土の土器群でもっとも古い群であり、古墳築造の年代が6世紀後葉にあったことが分かる。また須恵器が複数型式にまたがっており、この群内の期間で追葬がすでに行われていたことが想定される。第二群はTK46型式・飛鳥Ⅱ～Ⅲ式⁽³⁾、第三群はTK48型式・飛鳥Ⅳ式にそれぞれ位置づけられ、これらは追葬に伴うものとみられる。第二・第三群はいずれも杯身しか出土しておらず、副葬土器の内容が少ない。出土状況が安定してはいなかったとはいえ、ある程度副葬時の状況を表しているものと推定される。

鉄器 (第18～21図)



第18図 SM1001出土鉄器 (1) 馬具 ①



第19図 SM1001出土鉄器 (2) 馬具 ②

馬具

いずれも追葬によるかたづけ行為によって、原位置から遊離した状態で排水溝などから検出された。内訳は素環鏡板付轡2セット、鏡に伴う金具8点、貝製雲珠の宝珠形飾金具3点、などである。

86は素環鏡板付轡である⁽⁴⁾。銜は二連式であり、小円環を介して連結する。欠損部分が多く、規模などに不確定な部分が多いが、引手と銜を連結させていたものと考えられる。鏡板は長径6.6cm、短径4.5cm(図面左側)または4.2cm(同右側)の横長の環状を呈する楕円形で、径5mmの鉄棒を使用している。鉸具造りの立間をもつ。方形部の形態は左右でやや異なっている。径0.4cmの刺金を伴い、右側の立間では1.2cm分が遺存していた。左側の立間では、鉸具造りの円環部分は高さが2.9cmを測る。引手は両端に小円環をもつ一条造りで柄と壺部がが一体に造られており、全長16.1cm(同左側)または16.2cm(同右側)である左右いずれも2周分の捩りが加えられている。引手壺はそれぞれ外側に45度開いている。

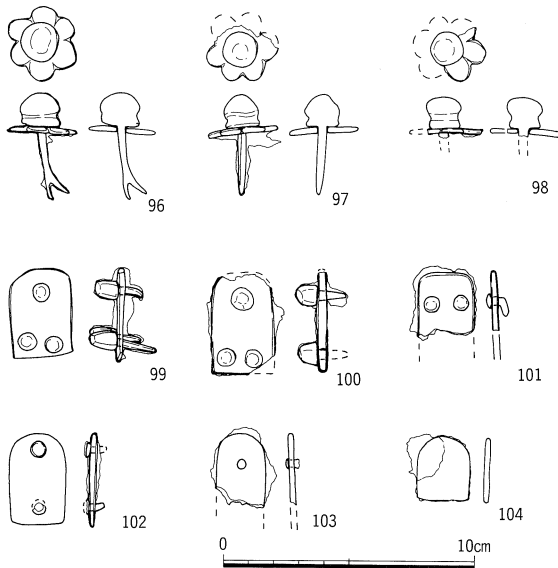
87も素環鏡板付轡で、86と比べて全体に大きめである。二連式銜をもつと考えられるが、やはり欠損部分が多いため銜の長さなどは不確定である。図上では20.0cmに復元している。鏡板は横径が8.3cm、縦径が6.5cmの横長の環状を呈する楕円形である。径7mmの鉄棒を使用している。立間は横長長方形の透しをもつ矩形を呈する。規模は左側が幅3.5cm、高さ2.0cm、

厚み0.3cmで、右側が幅3.7cm、高さ2.0cm、厚み0.3cmである。引手は両端に小円環をもつ一条造りで、柄と壺部が一体に造られている。86の引手のような振りや引手壺での開きはない。径8～9mmの鉄棒が使用されている。

88と89は兵庫鎖で、鑑に伴うものである。88は3連式の兵庫鎖で長方形の鉸具を伴う。銹化によって本来の形状を失っているが、復元される全長は26.9cmである。鉸具は幅0.6～0.7cm、厚み0.5～0.6cmの断面方形の鉄棒を中央部に弱いくびれをもつ瓢箪形を呈する。刺金も鉸具全体と同様の角棒による。長さが7.9cm、最大幅4.5cmである。鎖は径0.5～0.6cmの円形の鉄棒を用い、一連ごとの長さは上より7.7cm、7.7cm、7.6cmで同大である。89は現状ではやはり銹化が進み、本来の形状を失っているが、現状通りの鉸具を伴う2連式とすると全長は21.4cmとなる。鉸具は幅・厚みとも0.5～0.7cmの断面方形の鉄棒を用いている。上辺の丸い長方形を呈しており、幅4.1cm、長さ9.6cmで長さ9.4cmの刺金を伴う。鎖は径0.4～0.6cmの断面円形の鉄棒を用いる。一連ごとの長さは7.8cm、7.3cmとなっており、やや不揃いである。

90・91・92・93・94・95・96は木製壺鎖と鑑に伴う金具である。90・91・95・96は、鑑鞆金具である。逆V字形を呈しており、兵庫鎖に連結する厚手の部分と木心部を挟み込む舌状の部分とからなり、2か所に鉸を伴うものである。確認された4点は舌状部分の長短などからみて2セットにはおさまりきらないものである。いずれにも有機質部分は遺存していない。90は木心を挟み込む部分が欠損しているが、大きく八の字状に開いている現状での全長が10.6cm、復元される幅が5.7cmとなる。兵庫鎖に連結する部分は幅が0.9cm、厚みが0.5cmを測り、明瞭な関をもたない。舌状部分は幅が不安定で、前半部分に最大幅1.4cmをもち、厚みは0.2cmである。舌状部分の2か所の鉸は遺存部分が少ないが、頭の径が0.5cm、脚の径が0.3cmである。91は、90と比べてさらに遺存状態が悪いが、同様の構造をもつ。兵庫鎖との連結部分の幅0.6cm、厚み0.5cmを測り、やはり明瞭な関をもたない。舌状の部分は幅1.3cm、厚み0.3cmである。鉸は完全に欠損しているが、鉸穴の径は0.4cmである。94と95は90・91と比べると舌状の部分が短い形態である。94は兵庫鎖部分との連結部分から舌状部分が完存している唯一の例である。全長3.9cm、下端の幅2.2cmである。連結部分は幅1.8cm、厚み0.5cm、上端を貫通し上部構造へとつながる金具を有する。舌状部分の最大幅2.1cmで、厚みは0.3cmとである。連結部分と舌状部分の厚みに差がみられるが、関はみられない。舌状部分には2か所の鉸が通っているが、頭の部分は4か所とも欠損している。脚は径4mmの断面円形である。鉸の脚に絡まるようにしてコの字状の金具が銹着している。鑑に伴うものであろう。95は構造上は90と類似しているが、全長6.5cm、下端の幅2.1cmとやや相違がある。連結部分の幅0.8cm、厚み0.5cm、舌状部分の幅2.1cm、厚み0.2cmで、関は不明瞭である。頭部は痕跡を残し欠損しているものの径0.5cmで、鉸脚は2か所とも完存しており径0.4cmである。

92・93は、他の破片との明確な共伴関係が確認できなかったため、本来の機能などは推定



第20図 SM1001出土鉄器 (3) 馬具 ③

となるが、94に付属するコの字形を呈する金具と同様に、鑑に伴うものと考えられる。2点とも一辺4mm四方の断面方形で、ほぼ直角に折り曲げられている。

96・97・98は貝製雲珠飾金具⁽⁵⁾で、3点とも鉄地金銅張りである。有機質部分が欠失し金属部分のみの遺存であるために、別の用途も想定し得るが、他遺跡出土の類例からみて貝製雲珠とした。くびれによって弁を表現した六花卉の花形座と宝珠飾とからなる。宝珠飾は花弁座を貫通して下方へ鉤として伸びる。宝珠飾の各所及び花形座の上面には金箔が断片的に観察できる。最も遺存状況の良い96は、高さ53.5mm、幅28.35mm、保存処理後の重さ15.30gである。花形座は厚みが2.75mmで、花卉の幅は10mmから13mmとややばらつきがある。宝珠飾はこの部位だけの高さが13.3mmである。現状ではやや楕円形で、径が15.5~16.8mm、中央部のくびれが13.45mmである。鉤の径は4.0mmで、末端は二股に分かれる。97・98についても、96と構造などに大きな相違はない。97は花形座の六花卉のうち3弁の先端を欠損しており、高さ40.30mm、幅27.80mmで、保存処理後の現存部分の重さは11.37gである。花形座の厚みは2.0mm、花卉の幅は8mmから11mmと96と比べてやや小形である。宝珠飾はやはり現状では楕円形で、高さ13.3mm、径13.7~14.9mm、中央部のくびれは12.4~12.9mmである。鉤のは基部では一辺4.5×5mmの方形で先端はそのままの形状で尖り気味におさまる点が96とは異なる。98は花形座六花卉のうち4弁と鉤を欠損している。現存高15.25mm、復元幅31mmで、保存処理後の現存部分の重さは6.57gである。花形座の厚みは1.8mm、弁の幅は10.0mmである。宝珠飾の高さは12.30mmで、上部の径は14.25~14.5mm、基部の径は12.45~13.0mm、中央部のくびれは12.2~12.3mmである。

帯金具 (99~104)

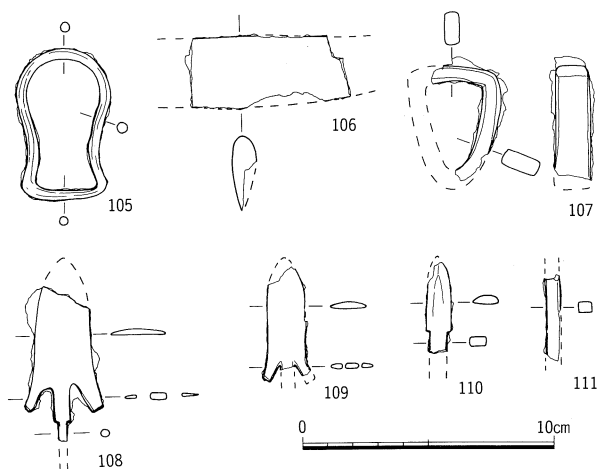
99~104は鉤を伴う薄い金属板の金具で、いくつかの形態差がみられる。やや大きく端部を丸め、3個の鉤を伴うもの(99、100、101?)とやや細長く2個の鉤を伴う(102、103)、鉤の痕跡がみられないもの(104)がある。革などの帯あるいは貝製雲珠に伴うとみられる。

鉸具 (105)

径0.5cmの断面円形の鉄棒を瓢箪形に折り曲げている。遺存部位の長さが5.9cm、最大幅が3.8cm、基部の幅が3.4cmを測る。刺金は欠損している。

大刀 (106)

図化したもの以外にも数十点の破片が出土しているが、いずれも層状に剝落したり、原型をとどめていないために本来の形態や個体数は不明である。106は大刀の切先に近い部分の断片である。刃幅2.8cm、厚み1.0cmで、現存する長さは6.8cmである。断面は偏平な倒卵形をなし、背部は丸みを帯びる。



第21図 SM1001出土鉄器 (4)

刀装具 (107)

鉄刀の鍔金具片である。刃部側の一片を欠く。

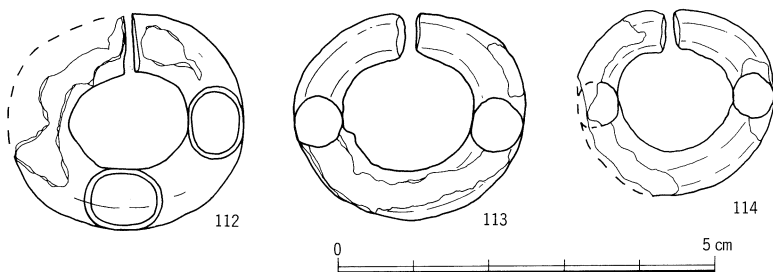
鉄鏃 (108~111)

鉄鏃は頸部のみの遺存を含めて4点の出土で、そのうち形式の判明したものは3点である。上述した馬具の豊富さに比べると、鉄鏃については質量ともにやや物足りなさが感じられる。

108は平造腸袂三角形鏃で、切先と茎部下半を欠く。逆刺は外反気味で関は両角関である。茎部は径0.3cmの断面円形である。109はやはり平造腸袂三角形鏃で、欠損部分が多い。108よりも鏃身が細身で、逆刺は外反している。110は両切刃造長頸鏃で、やはり欠損部分が多い。鏃身関は両角関である。推定鏃身長3.0cm、幅1.0cmで、鎬がある。頸部は断面が偏平な方形である。111は頸部のみの遺存で、断面は偏平な方形である。鏃身の形状は不明である。

装飾品 (第22~24図)

装飾品は耳環、切子玉、管玉、トンボ玉、勾玉、ガラス玉、土玉が出土した。徹底的な盗掘を受けておりや数量的に単発の種類も含まれているものの、本来副葬された種類は一通り含まれていると考えられる。出土した位置がほぼ玄室に集中していること、他の古墳での出土状況からみて欠落している種類があまりみられないことがその理由である。そのため、土器や鉄器と比較すると盗掘の際に石室外に持ち出されにくかったといえる。



耳環 (112~114)

3点が出土した

第22図 SM1001出土耳環

が、いずれも玄室内からのものである。112は銅地金張りで、銅芯は径7.5～10mm、厚さ0.9mmの中空の銅管を芯として用いている。中空造りであるために細片とはなっていたが、表面の金の遺存状況は極めてよく、往時の光沢をとどめている。113と114は銅地銀張りで、やや法量に大小はあるものの一対になっていたと想定される。いずれも、径5～6mmの中実の銅管を芯として使用しており、銅芯部分の腐食が著しいが、表面の銀の遺存状況はよい。

切子玉 (115)

六角形2面と長台形12面による水晶製の切子玉である。稜はいずれも鈍い。穿孔は主に上面からの一方向であるが、上下面いずれの孔の周辺にも細かい剝離が生じている。

管玉 (116)

濃緑色の色調をもつ碧玉製の管玉。上下面・側面いずれも丁寧な研磨が施されている。穿孔は二方向より行われている。

トンボ玉 (117～120)

トンボ玉は細片となっていたものもあるが、4個体が確認された。4点ともベースとなるガラス玉に黄色（パールイエロー）の別のガラス素材を埋め込んでいるもので、大形でベースが紺色に近いもの（118）と、小さ目でベースが明るい緑色のもの（117・119・120）に分かれる。孔の内壁には熱によって溶けた痕跡がある。

勾玉 (121)

ヒスイ製の勾玉で、湾曲が弱く、頭部がやや尖り気味となる。穿孔は主に図右側の側面より行われており、両側面に細かい剝離が生じている。研磨は全体に丁寧であり、滑らかな形状を有する。

ガラス玉 (122～291)

173点について図示したが、この他に細片となっていたものも多いため、本来副葬されていた実数はこれをかなり上回るものと推定される。

173点を法量の分布の集中度から3つのグループに分けると

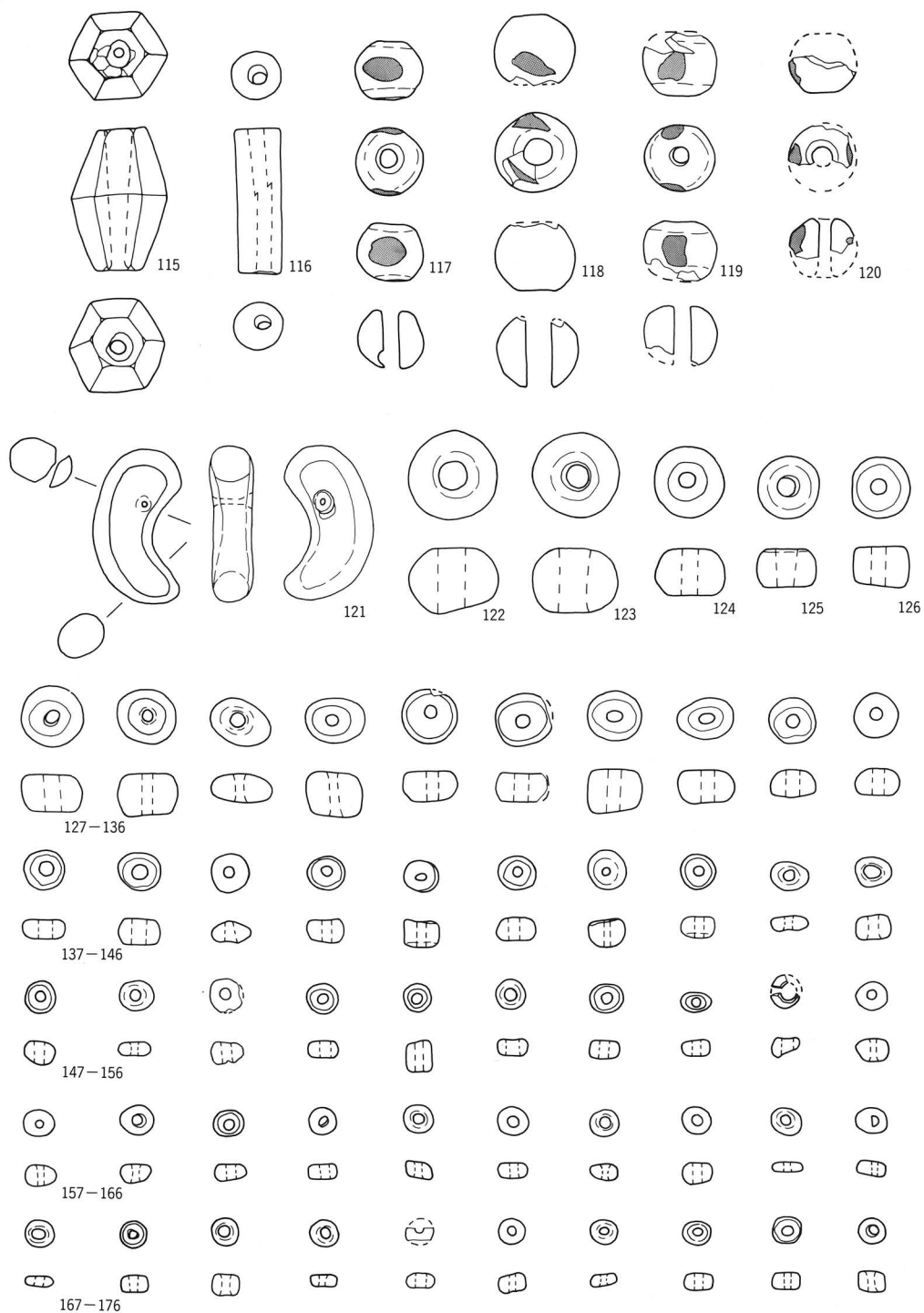
①径が12mmを越える大きさをもつもの（122、123）2点

②径が7.6～10.2mmまでの玉が含まれるやや大きいもの11点

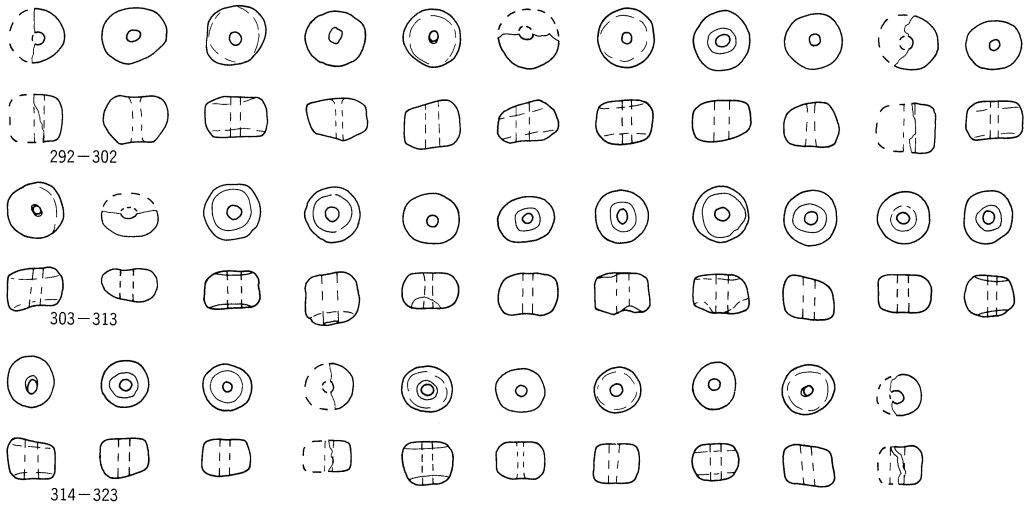
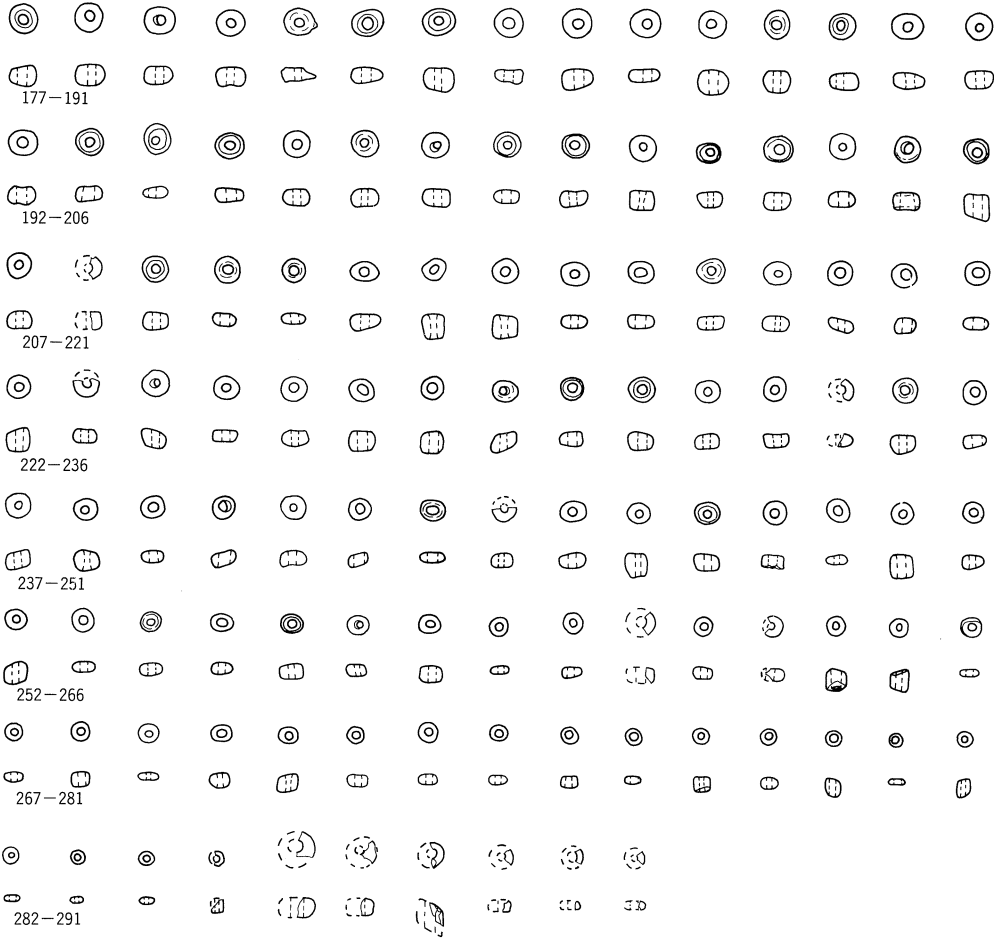
③径が1.8～7mmの玉が含まれ最も大多数の資料（160点）が含まれるグループ

となる。①はいずれも明緑色系統で、重量的にも他よりも隔絶して重く、形態的にも類似している。ガラス玉の中でもやや違った用法が想定される。②③はさらに分類に検討の余地があり、径が3.5mm前後がその境界の候補としてあげられるだろう。

次に色調の面から整理すると、紺系統（オックスフォードブルー、ミッドナイトブルー、ウェストミンスター、ブックウィング、パープリッシュブルー、ウルトラマリン、インキブルー、シアンブルー、コバルトブルー）が69点、濃緑（マリングリーン、サファイアブルー、



第23图 SM1001出土玉類 (1)



第24图 SM1001出土玉類 (2)

ティールグリーン、ピーコックブルー、プルシアンブルー、プルシアングリーン、マートルグリーン) 系統が59点と多く数量上のピークがある。黄色・青緑系統・緑系統も幾分みられるが、紺・濃緑系統と比較した場合その比率は低い。また、後述する1号墓・3号墳で見られるような、法量と色調の相関関係はみられず、色調ごとに分類した場合の各玉の法量にはばらつきがある。

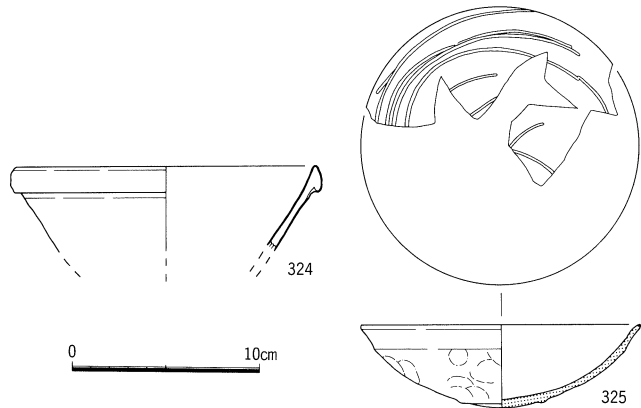
土玉 (292~323)

32点が出土した。径が5.9~8.5mm、厚みが4.6~6.85mmの範囲におさまる。形態・法量ともに範囲内でのばらつきが目立つ。

その他の遺物 (第25図)

白磁 (324)

口縁部のみの破片であるが、反転によって口径が16.0cmに復元された。幅広の玉縁の口縁をもつもので、削り出しの高台を伴っていたものと思われる。釉は厚めに施釉され、灰オリーブ色に発色する。口縁部から体部にかけて釉の垂下がみられる。横田賢次郎・森田勉両氏の分類⁽⁶⁾によるIV-2類に相当し、12世紀代の所産と考えられる。



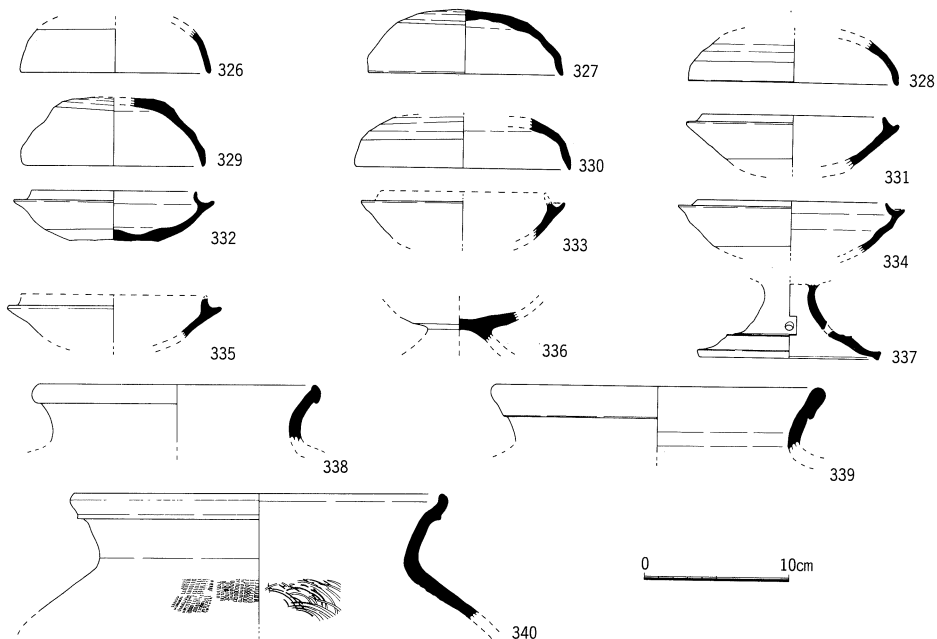
第25図 SM1001出土白磁碗・瓦器

瓦器 (325)

緩やかなカーブをもつ浅い皿形の瓦器碗。底部中心をわずかにはずれた位置に、断面三角形の低い貼付け高台が付く。口縁部はナデによって外側へ屈曲している。外面はユビオサエが顕著である。内面には幅2mm程度の原体による簡略化されたヘラミガキがみられ、見込みでは螺旋状となる。尾上分類⁽⁷⁾のIII-3~IV-1期に相当し、13世紀後半代の年代が与えられる。

1号墳周辺の須恵器 (第26図)

1号墳周辺の表土中、堆積土あるいは攪乱土内より出土した須恵器は、どの遺構に本来伴うものであるか断定することができないものであるが、1号墳から遊離したものである可能性が最も高いものである。いずれも須恵器で、器種には蓋杯、高杯、甕が含まれている。



第26図 SM1001周辺出土須恵器

杯蓋 (86~90) のうち、89はかなり器高が高い特徴を有するが、いずれも肩部の稜が退化し、口縁端部内面の稜もわずかな沈線の痕跡として残るのみであり、同時期のものと考えることができる。杯身 (91~95) は小破片のみで、全体の形状は捉えにくい、立ち上がりが短いものが中心である。高杯96は杯部と脚部との接合部で、短脚高杯であろう。脚部97は三方向に円孔を有し、裾に鋭い突線を巡らせる。高杯または台付壺の可能性もある。甕は口縁部によって3個体が識別された。口縁部の形態・口径にバリエーションがあるが、いずれも体部最大径が40~50cm程度のものであると思われる。1号墳に確実に伴うものと比較すると、甕の個体数が多いという特徴がみられ、本来の副葬位置の違いを反映している可能性がある。

まとめ

1号墳は山田古墳群Aを構成する古墳の中で外部施設・内部施設あるいは副葬品などに関してもっとも豊富な内容をもつ。周濠を有する墳丘径10m、横穴式石室全長7.05mは規模としては決して大きな部類にはいるものではないが、1号墳に付随する小竪穴式石室5基や2号墳・3号墳の規模を考慮すると群内での存在が際だっている。

副葬品のうち須恵器は蓋杯を中心としており、その数において県内でもっとも多い部類に含まれる。甕は横穴式石室内の埋土中からは出土せず、墳丘の周辺から出土した。古墳での祭祀形態を示すものであろう。馬具については、轡・鐙・貝製雲珠の金具などが出土し注目される。県下では上板町柿谷2号墳、菖蒲谷西山B4号墳、山崎2号墳、板野町、蓮華谷

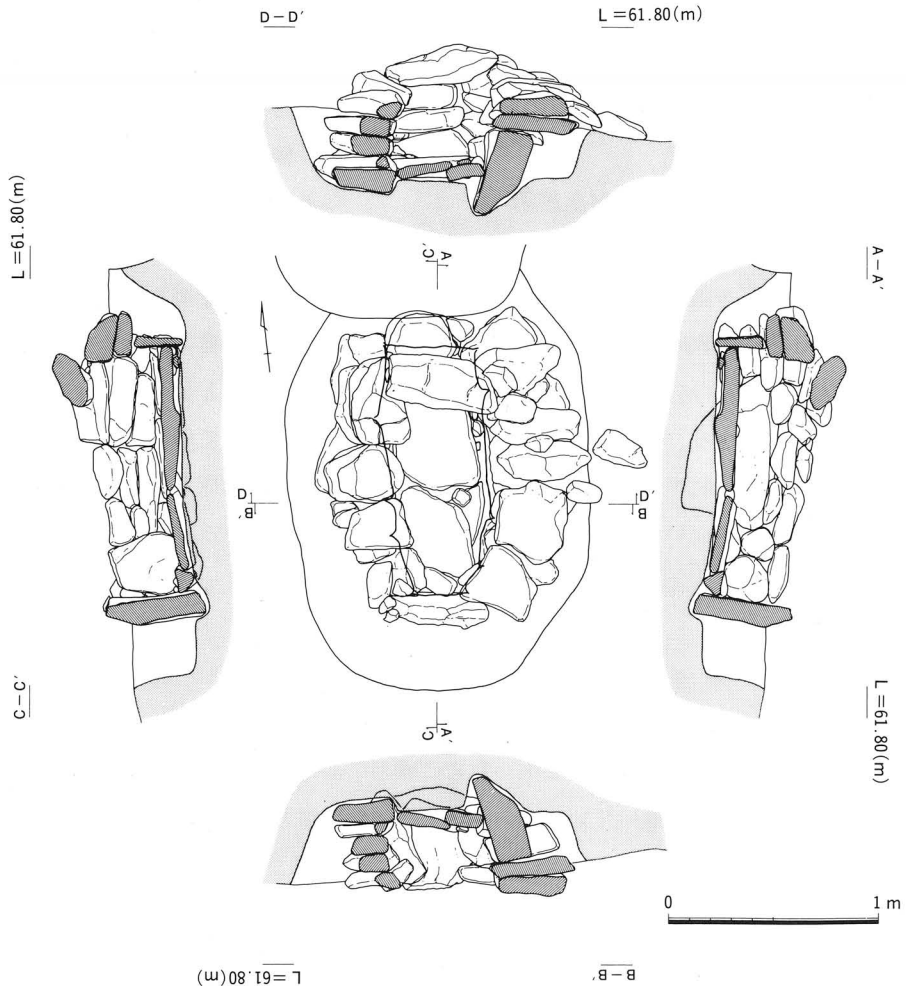
(II) 4号墳、美馬町段の塚穴太鼓塚古墳、徳島市ひびき岩16号墳などで馬具の出土が知られるが、出土古墳数・出土馬具数のいずれについても少なく、そうした中で貴重な資料といえることができる。

築造時期は出土須恵器群の検討から6世紀の後葉におさえることができ、7世紀の中葉・後葉にそれぞれ追葬が行われている。また、断定はできないものの6世紀末から7世紀初頭にも追葬の可能性があり、一世代20~40年間隔の継続的な利用の状況を窺うことができる。

1号石室墓 (ST1001) (第27図)

位置と現状

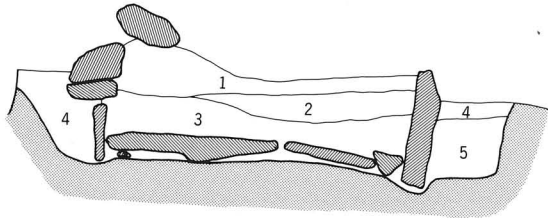
1号墳の墳頂部、横穴式石室の東側のF-5グリッドに位置する。北側には2号石室墓が隣接して築かれている。1号墳の墳丘部の表土を除去中に検出された。検出時には、天井石



第27図 ST1001実測図

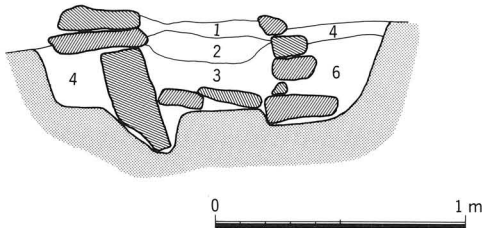
A-A'

L=61.80(m)



B-B'

L=61.80(m)



- | | |
|-------------------|----------------------------------|
| 1 にぶい黄色2.5Y7/3砂質土 | 4 にぶい黄橙色10YR6/3砂質土 |
| 2 にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 | 5 灰黄褐色10YR5/2砂質土 |
| 3 灰黄色2.5Y6/2砂質土 | 6 にぶい黄橙色10YR6/3砂質土
(炭化粒を少量含む) |

第28図 ST1001土層図

石室の構築状況

墓壙内に基底石を据えるための穴を5cmほど掘りくぼめ、壁体を積み上げる。その際、壁体と墓壙との間には数度に分けて土を入れ裏込めとしていた。石材は用いていない。両小口と側壁の大形の石については、平坦な面を壁体とするために豎積とし、墓壙との隙間を土で埋め裏込めとしている。側壁の残りとして2段目以上は小口積みとしている。基底石を積んだ時点では平面プランは北半が広く、南側がすぼまっている。2段目以上では三角積とし緩やかに持ち送って、3段ないし4段を積んだ時点で天井石を置いている。現存する天井石は壁面の上半に使用されたのとはほぼ同形同大の砂岩の自然石である。

床面の形成

砂岩の平たい自然石を2枚敷き、南側の小口寄りに隙間を砂岩の円礫などによって充填している。従って、北が広く南側が狭いプランはこの2枚の礫床の形状に則したためであろう。床面形成に際しては、床面の水平を保つために礫の下面の形状に合わせて、裏込めと同様の土(第28図 第5層)を敷いているが、土圧のためか結果としては南側へわずかに傾斜している。

法量・主軸・頭位

石室墓の規模は内法で長さ1.2m、最大幅0.47mで、北側がやや幅広の平面プランをなす。主軸はN-8°-Eで、後述する遺物の出土状況からやや東よりの北側に頭を向けていたこと

は北側に架けられた一石を除いて原位置にはなかった。また、東側の側壁は土圧によって外側へわずかに倒れていた。石室墓内には二次的な堆積土が3層にわたって堆積していたが、平行な堆積であり盗掘や攪乱は受けていない。(第28図)

墓壙の規模・形態

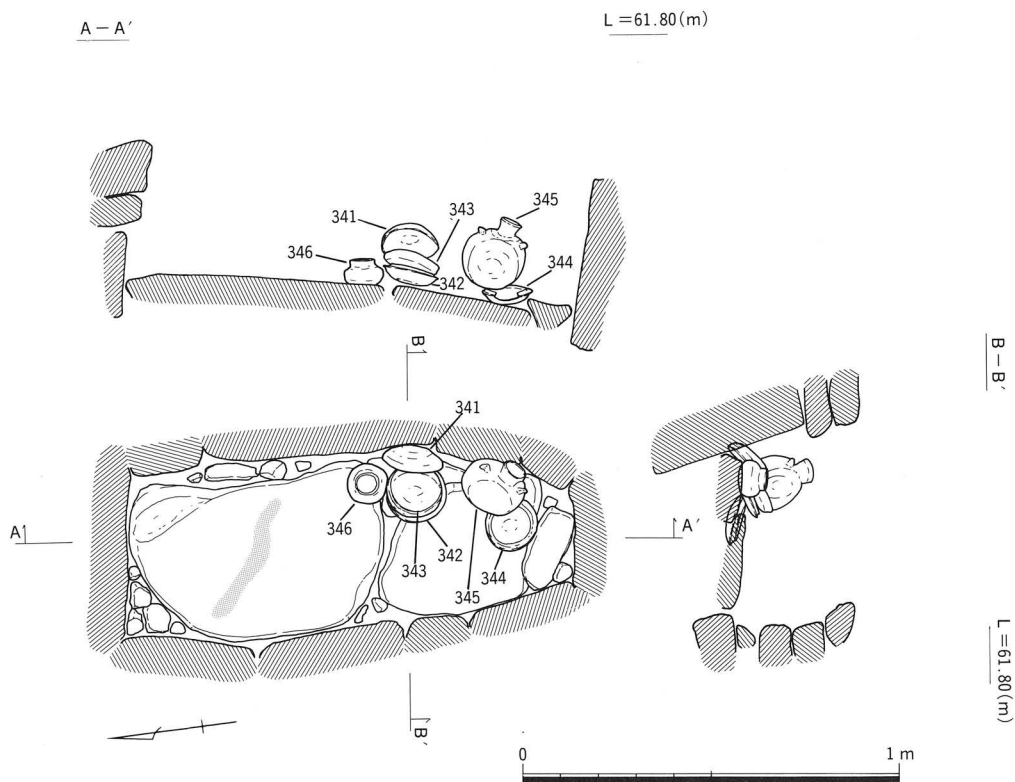
墓壙は1号墳の墳丘部の盛り土を終えた後に、墳丘を切り込んで、掘り込まれている。墓壙は、北端を2号石室墓の墓壙によって一部切られている部分を復元すると、長軸2m、短軸1.43mの小判形で、1号墳の墳丘検出面から0.35~0.4mの深さがある。

が推察される。

遺物の出土状況（第29図）

出土遺物は、須恵器が6点とガラス玉などの装飾品類が100点である。石室内に堆積した土は天井石の下面にまで3層の土が平行な堆積状況を示しており、盗掘などの改変を経なかったことが分かる。従って、以下に述べる遺物の出土状況と組み合わせは本来の副葬状況をそのままと定めるものである。須恵器は石室内床面の南東隅に蓋杯2組と短頸壺、提瓶がそれぞれ1点の計6点がかためられた状態で出土した。蓋杯のうち341～343は杯蓋341・杯蓋343・杯身342の順で重なっていた。提瓶345は壁面にもたせかけるように立った状態で出土した。

また、ガラス玉99点と土玉1点の計100点がやや北よりに帯状に集中し、石室の礫床床面よりもわずかに浮いた状態で出土した。これらのガラス玉が首飾りとして用いられていたと仮定すると、頭の位置は北側ということになる。また、この場合土器は足元側に集められていたことになる。

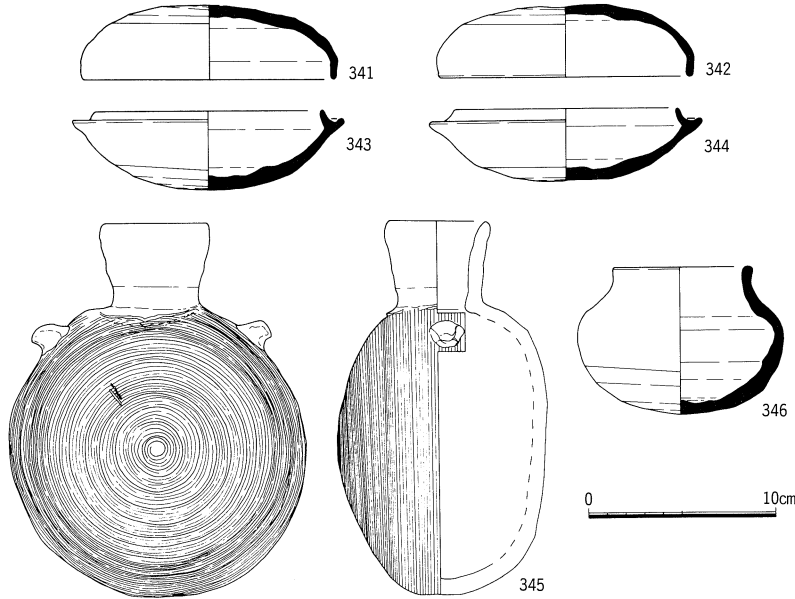


第29図 ST1001遺物出土状況図

出土遺物 (第30・31図)

須恵器

2組の蓋杯341～344は出土状況や焼成から、図のように341と342、343と344セットにあっ



第30図 ST1001出土須恵器

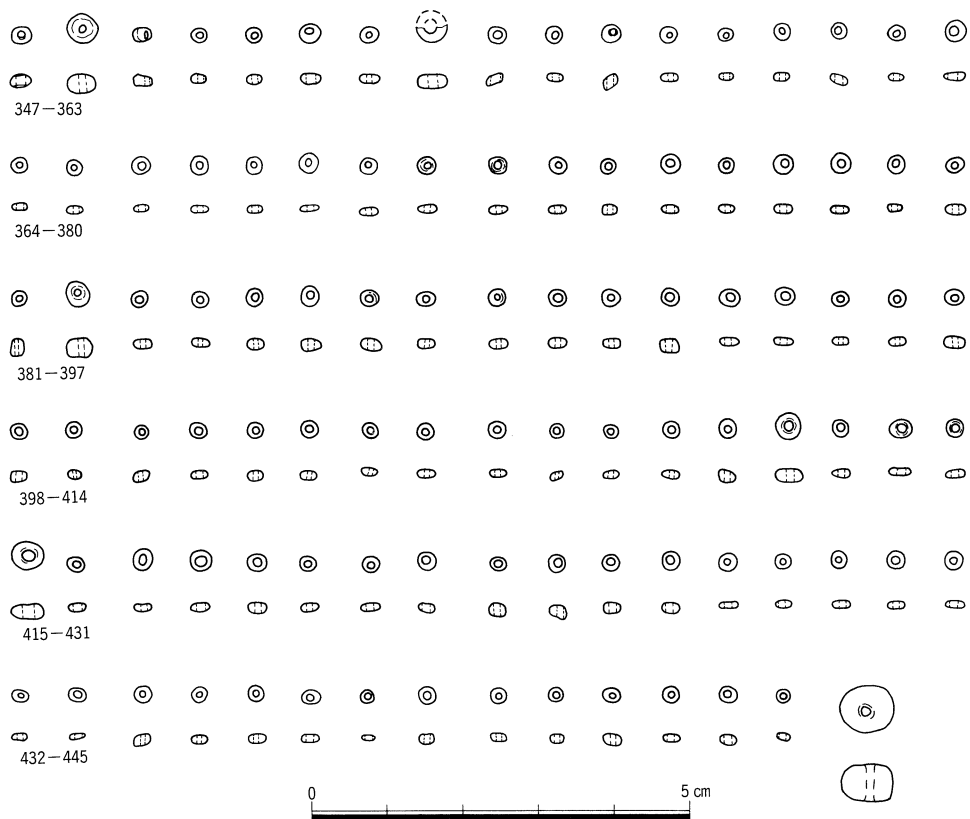
たことが分かる。杯身はいずれも偏平な器形で立ち上がりの退化と内傾化が進行している。立ち上がり内面の屈曲は弱い。杯蓋も杯身同様に扁平で、口縁部はいずれも丸くおさめており、内面に沈線は巡らない。ただし、344の口縁部外面にごくわずかな外への屈曲がみられる。提瓶345は吊り手部分が退化して機能しなくなり、単なる突起として表現されている。口縁部も単純に丸くおさめる形態である。偏球形の壺部の片面を回転カキメ調整で、もう一方の面を回転ヘラ削りで調整している。形態などから、提瓶の中でも新しい傾向をもつ。短頸壺346は肩の張らない形態で口縁端部はやや平坦におさめられ、ごくわずかに外反している。焼成などからみて346に伴う蓋は元々なかったようである。これら6点の須恵器はTK209型式と共通の特徴を有する。

玉類

ガラス玉99点と土玉1点の計100点が出土した。前述のような出土状況や石室自体の遺存状況から100点が一連のものであったと考えられ、その組み合わせを考える上でも貴重な資料といえる。

ガラス玉

総数で99点の出土をみた。いずれもが石室内北よりまとまって出土したものである。法量の面からみると径が1.9～2.8mmに、厚みが0.8～1.8mmにそのほとんどの個体が集中しており、ばらつきが少ないといえるであろう。1号墳のガラス玉と比較すると、小形のものが中心で



第31図 ST1001出土玉類

ある。そうした中で、348・355・415は径が4mm前後あり、大きめである。孔径は0.7mm～1.5mmまでのぼらつきがあるが、1.1mm、0.9mm、0.7mmにそれぞれピークがあり、1号墳・3号墳のガラス玉に比べて全体に小さい傾向がある。

ガラスの色調の面からみると、濃緑（サファイアブルー）が最も多く、94点を数える。そのほかの色調としては明緑（オパールグリーン）1点（411）、緑（ディープグリーン）1点（354）、黄（シトロンイエロー、ペールイエロー）3点（348・382・415）がある。これを法量との比較という観点からみると、紺系統は法量的にほとんどぼらつきがみられず、画一的ともいえる。紺系統と比較すると明緑・緑・黄の各系統は法量的にみても濃緑のグループよりも明らかに大きく、特に径における差が著しい。こうした点は3号墳出土のガラス玉とも共通する特徴である。製作技法・工人との関わりを追求するためにはさらに資料の蓄積が必要である。

土玉

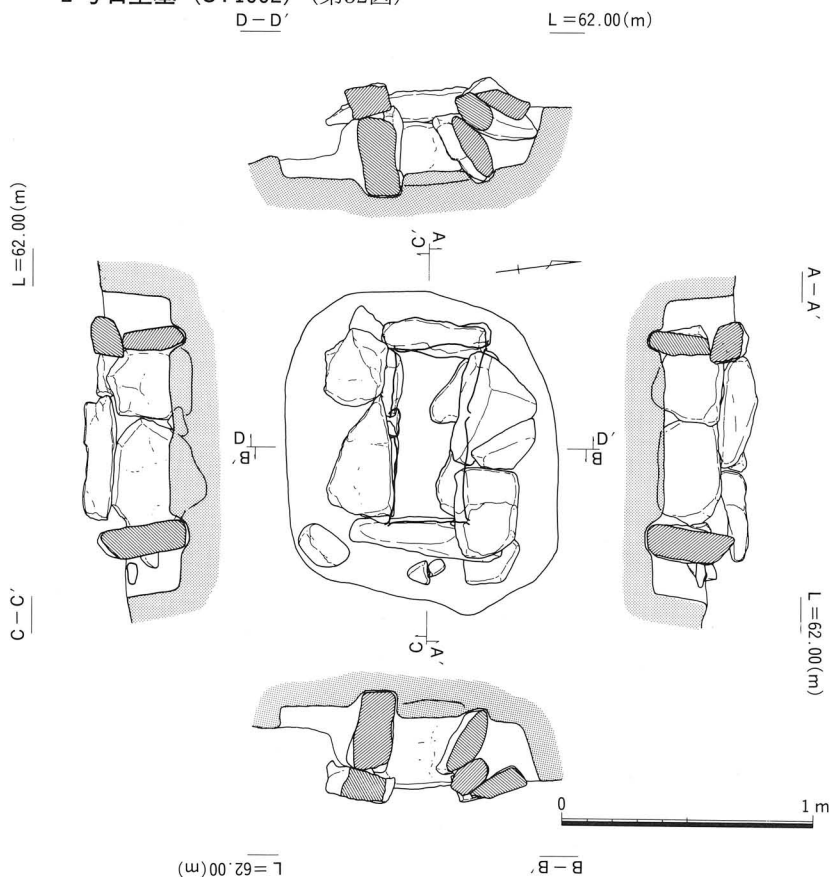
1点のみの出土である。1号墳でみられた土玉と比較すると、ほぼ平均的なサイズ・重量をもつ。装飾品総体としてみた場合、99点のガラス玉の中で1点の土玉がどのように用いられたかは不明である。

1号墳周囲で検出された小竪穴式石室5基の中で、もっとも遺存状況がよいものである。1号墳の墳丘を切り込んでいることから、1号墳に従属的な位置づけをする事が可能である。法量上からは、成人の伸展葬が困難なため再葬墓と考えられる。天井石の架構方法などについて、他の4基の構造を復元するに当たって貴重な資料である。

5基の中で須恵器とガラス玉を副葬品としてもっていたことも注目される。須恵器は蓋杯と壺類による6点で、基本的な副葬パターンが分かる例としても重要である。

副葬土器の型式からは6世紀の後葉の年代が与えられる。1号墳の年代と同時期かまたは直後の段階に築かれており、その関係の強さを示唆している。

2号石室墓 (ST1002) (第32図)



第32図 ST1002実測図

位置と現状

1号墳の墳頂部、横穴式石室の東側のF-5グリッドに1号石室墓に隣接して位置する。1号石室墓と同様1号墳の墳丘部の表土除去中に検出された。壁体は2段分しか残っておらず、天井石は原位置をとどめていなかった。また、北側の側壁は土圧によって内側に傾いていた。石室墓内には二次的な堆積土が3層に

わたって堆積していた(第33図)。

墓壙の規模・形態

墓壙は1号墳の墳丘と1号石室墓の墓壙を切って掘り込まれている。小判形を呈し、長軸1.23m・短軸1.08mの規模をもつ。

石室の構築状況

石材はいずれも砂岩で、板石の平坦面を石室の内側に向けて立て基底石とし、墓壇との隙間を砂質土で充填し裏込めとしている。2段目は自然石のやや丸みをもつ石を基底石に載せ小口積みになっている。壁体は2段目までで、天井石を架構していたものと考えられる

床面の形成

礫床や貼り床などの特別な施設を設けず、墓壇底をそのまま床面として利用している。

法量・主軸・頭位

石室墓の内法は長さ0.63m、中央部の幅が0.28mの長方形プランを呈し、西側はわずかに幅広くつく

られている。主軸はN-80°-Wである。頭位は遺物が出土しなかったために不明であるが、西側がやや幅広くつくられており西側に頭を向けていた可能性が強い。

遺物

石室墓内から検出された遺物はなかった。

1号石室墓と同様、1号墳の墳丘に築かれている。礫床による床面をもたない点が特徴である。上部構造は1号石室墓に類似したものが復元される。法量からは1号石室墓同様、再葬墓とみられる。また、位置関係において1号石室墓と対となっているものの、法量・副葬遺物において劣っている点は、群構成上の重要な問題である。

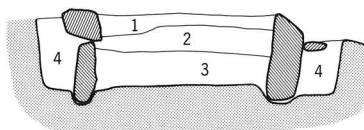
出土遺物をもっていないため年代は推定となるが、1号石室墓の墓壇を切っていることから、6世紀後葉以降であるが、再葬墓としての性格からみて1号墳・1号石室墓に近い、6世紀後葉の新しい段階に位置づけうる。

3号石室墓 (ST1003) (第34図)

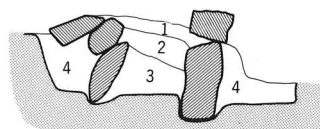
位置と現状

1号墳北東部、G-6グリッドより1号墳周濠の外縁に接するようして検出された。3号石室墓の北西側には小口部分を接して、4号石室墓が築かれている。削平によって大部分が失われており、壁体の2段目はわずかに北側コーナーに残るのみで、遺存状況は良好とはいえない。南西側の側壁が外側へ倒れた状態で検出されたほか、壁体を形成していたと考えられる石材が礫床上面に崩落していた。また、原位置を保っていると考えられるその他の壁

A-A' L=62.00(m)



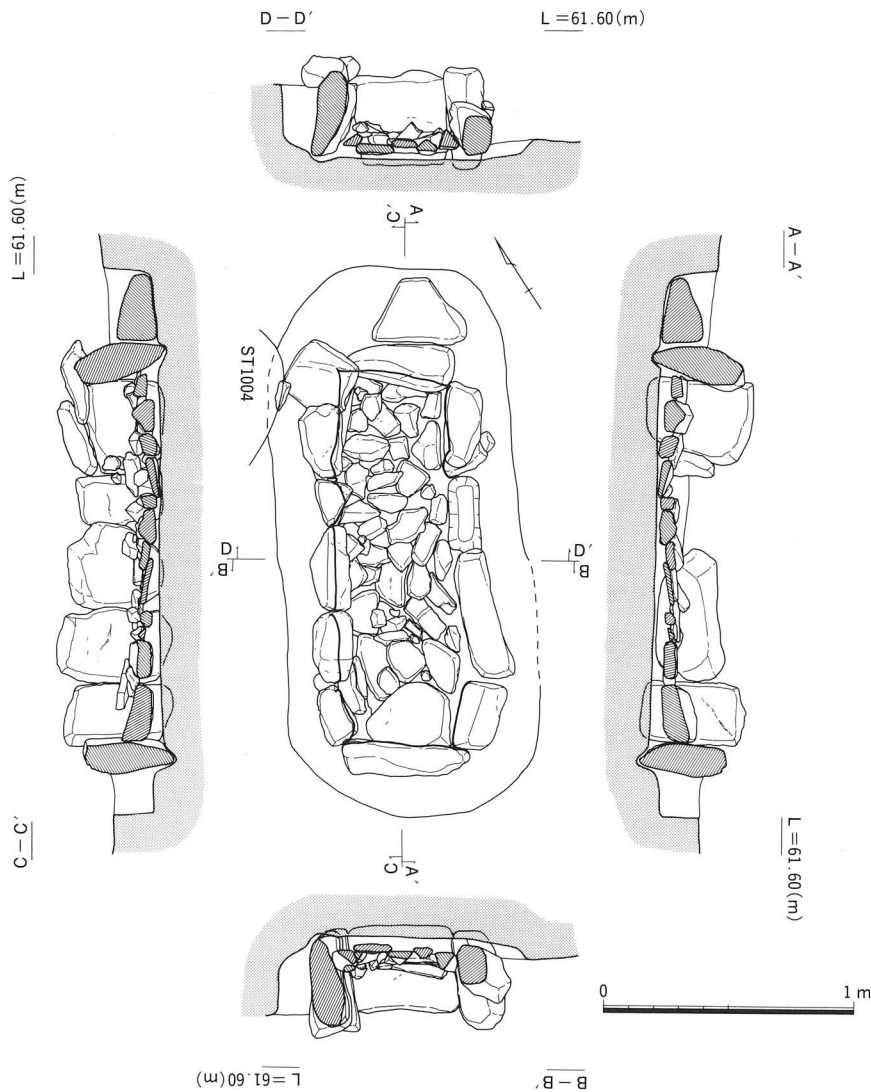
B-B' L=62.00(m)



0 1 m

- 1 にぶい黄褐色10YR5/4砂質土
- 2 にぶい黄色2.5Y6/4砂質土
- 3 にぶい黄色2.5Y6/3砂質土
(炭化粒を少量含む)
- 4 にぶい黄色2.5Y6/3砂質土

第33図 ST1002土層図



第34図 ST1003実測図

石室の構築状況 (第35図)

東側側壁は一部倒壊した側壁の本来の位置が明らかであったため、抜き取り穴に据えることによって形状を復元している。墓壙を掘った後、基底石を据え礫床を敷設する。北側の短側壁の小口の石材の外側には人頭大の砂岩を裏込めとして用いている。礫床下部と壁体の裏込めの砂質土とに差異は認められず、ここまでの工程は一連のものと考えられる。壁体は短側壁では横長となるように、長側壁では縦長となるように板状の石材を使い分けている。北西部のコーナーでは2段目の壁体が遺存しており、基底石と同様の石材を小口積みになっている。

床面の形成

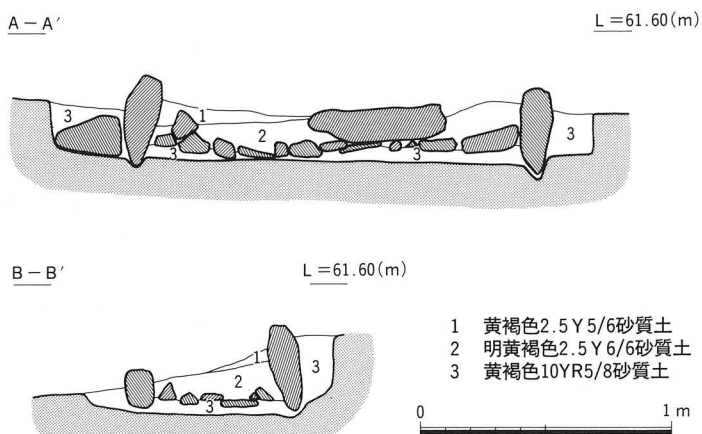
床面は砂岩のやや大きめの平たい礫と小形の円礫を用いて全面に敷き詰められている。平たい礫は南小口沿いに最も大きい石を用いているほか、床面の南側は全般に大きめの石材が

体についても、土圧によってわずかずつではあるが、内傾している。

墓壙の規模・形態

墓壙は基盤層を掘り込んで形成されており、その形状は隅丸長方形を呈し、長軸2.18m、短軸1.01mをはかる。基盤層への掘り込みは現状で最も深い部分で約0.3mを測る。その一部は4号石室墓の墓壙によって切られている。

目立つ。この南小口の礫は枕石の可能性ある。円礫はこれらの平たい礫の間隙を埋めるように充填し、床面を平坦に整えているが、中央部分が5 cm程度くぼんでおり、死屍安置のためあるいは有機質の骨蔵器がおかれている可能性があるが、類例が知られておらず、断定は困難である。



第35図 ST1003土層図

法量・主軸・頭位

石室墓の法量は内法で長軸1.46m、短軸0.45mを測る。礫床床面からの高さは最も残りの良い部分で約0.35mである。平面プランは基本的には長方形であるが、南側でわずかに膨らんでいる。主軸はN-30°-Eで、頭位は不明である。

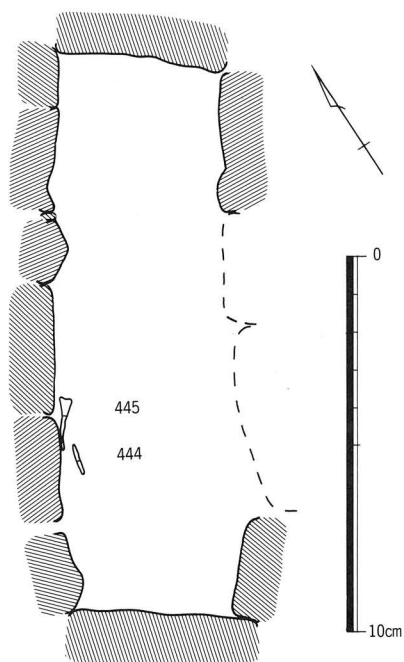
遺物の出土状況 (第36図)

礫床中央部やや南より、西側の側壁と礫床の隙間からは鉄鏃が2点出土した。長頸鏃と方頭鏃が各1点ずつで、いずれも切先は北側に向いている。2点とも破損しており、良好な状況ではないものの、副葬時の状態をほぼそのまま残しているとみられる。

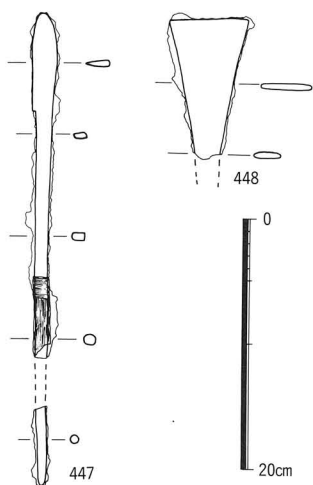
出土遺物 (第37図)

鉄鏃

447は片刃造長頸鏃で、茎部中央を欠く。切先は鈍く、鏃身関は角関で、関部はわずかな台形関である。茎部には木質が遺存し、その上端は幅1 mm未満の紐状繊維を左回りに巻き付けて留めている。448は平造方頭鏃で、鏃身関部から茎部を欠く。鏃身関部の形態が不明である。



第36図 ST1003遺物出土状況図



第37図 ST1003出土鉄鏃

1号墳の墳丘外に築かれた石室墓で、規模の面からは1号石室墓よりも大きく、県内におけるこの形態の石室墓の中でも大形の部類に含まれる。法量上は伸展葬を可能としているが、構造からみて、再葬墓とみておきたい。また、中央部がくぼむ構造も再葬方法についての問題を提起するものである。

副葬遺物として、鉄鏃2点が出土した。1号石室墓よりも質量ともに少ない点は位置関係も含めて、1号墳との関連の強さに因るものであろう。年代は鉄鏃の形式から1号石室墓などと同じ6世紀の後葉～末にかけてのものとみられるが、土器が出土しなかったため、細かい位置づけをすることはできない。

4号石室墓 (ST1004) (第38図)

位置と現状

1号墳の北東部、G-6グリッドで検出された。前述の3号石室墓と接している。検出された時点で上部構造のほとんどが削平を受けており、基底石についても東側・南側のすべての壁体が失われており、また東側の墓壇の肩も削平されていた。一方石室墓の北西部では2段目の壁体が遺存しており、部位により遺存状況に差異が認められる。

墓壇の規模・形態

墓壇は基盤層を掘り込んで形成されており、その形状は西側がやや幅広の隅丸の長方形を呈している。失われた東側の墓壇を復元すると長軸1.26m、短軸は幅広の西側で0.95m、東側で0.53mを測る。墓壇の掘り込みは現在の基盤層から約0.25mである。墓壇の一部は3号墓の墓壇を切っている。

石室の構築状況 (第39図)

墓壇を掘削後、基底石のための掘り方を掘りくぼめる。掘り方の深さは用いた石材の形態によってまちまちであるが、5～10cmにおさまる。基底石を据え、礫床床面を形成するが、その際の裏込めは墓壇掘削時の土を用いている。壁体の基底石はいずれも砂岩の板石を用い、その平坦面を壁面として利用している。2段目の壁体は砂岩の平坦な自然石を用い、その小口の平坦部分を壁面としている。

床面の形成

長軸0.65mの砂岩の大形の平坦な石材をまず置き、西側小口には人頭大の平坦な石材を用いて、床面の平面形態を長方形に整えている。さらに拳大の砂岩礫によって隙間を充填して

いる。床面は標高61.60
mでほぼ平坦である。

法量・主軸・頭位

石室墓の規模は内法
で長軸0.8m、短軸0.36
mの長方形プランをな
す。主軸はN-70°-E
であるが、頭位方向は
不明である。

遺物

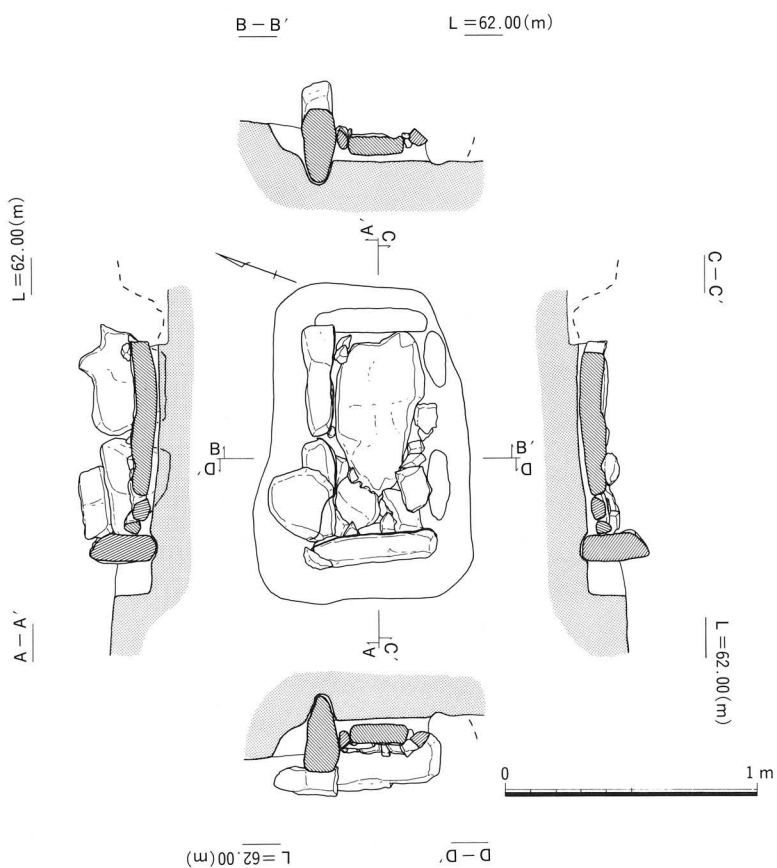
出土遺物は全くみら
れなかった。

3号石室墓に隣接す
る石室墓で、規模的に
は3号石室墓と比較し
てかなり小形である。
ここでは礫床に大形の
板石を1枚用い、その
回りにもやや大形のも
のを使っている点が特徴である。法量からみて、
再葬墓とみられる。したがって、副葬遺物はな
かったものの、6世紀後葉～末の年代が想定され
る。

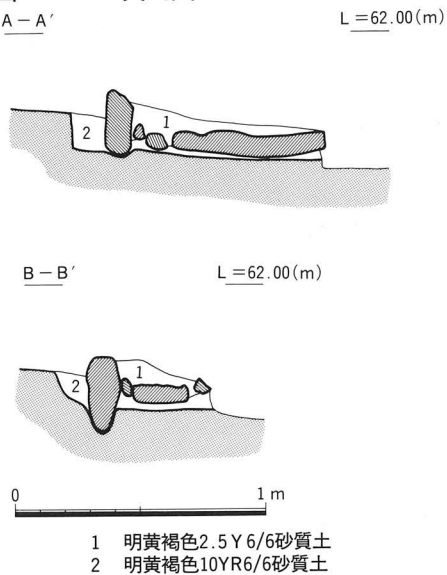
5号石室墓 (ST1005) (第40図)

位置と現状

1号墳と2号墳の墳丘の外側、I-4グリッド
より検出された。2基の横穴式石室の開口部か
らは、ほぼ等距離である。表土掘削の際に検出
されたが、この時点ですでに天井石などは失わ
れていた。しかし、北半では壁体がほぼ3段残
っており、5つある石室墓の中では1号石室墓

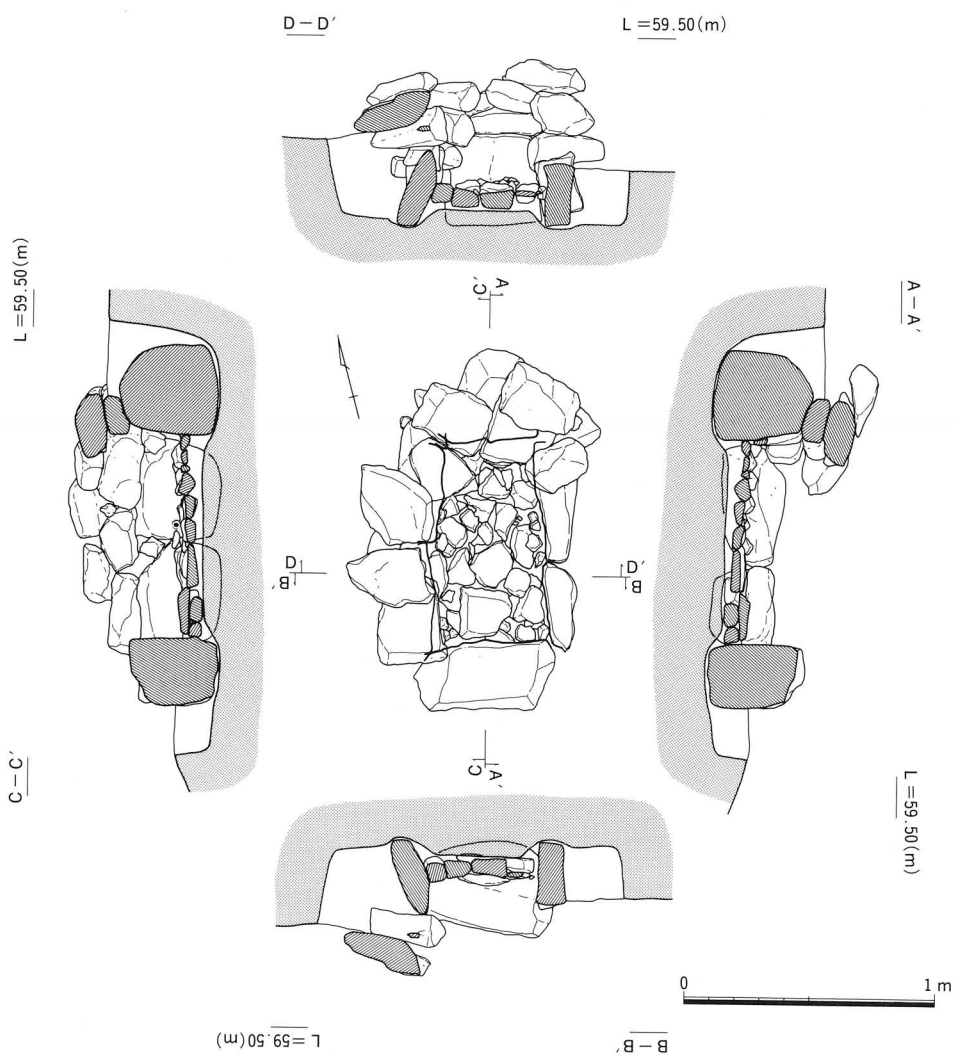


第38図 ST1004実測図



- 1 明黄褐色2.5Y6/6砂質土
- 2 明黄褐色10YR6/6砂質土

第39図 ST1004土層図



第40図 ST1005実測図

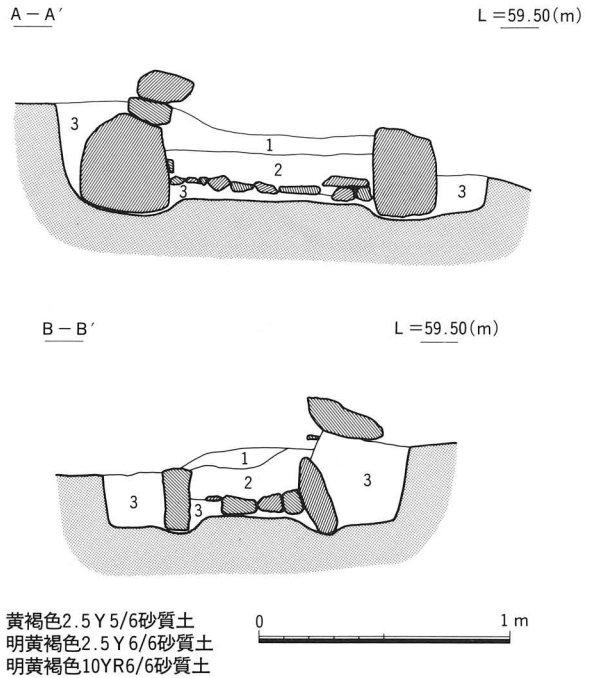
に次いで遺存状況がよい。南側では小口の壁体が外側へ崩落していたが本来の位置が復元できた。なお、5号石室墓の西側に隣接して、石室墓に共通する石材が集中して出土する地点があり、石室墓（6号石室墓）の可能性が考えられていた。しかし、1～5号石室墓でみられるような壁体の構造や礫床の施設をもっていないために、主体部ではないと判断した。

墓壇の規模・形態

墓壇は基盤層を掘り込んで形成されており、長軸1.73m、短軸1.20mの規模をもつ。特に遺存状況の良い北側では基盤層からの掘り込みは0.40mを越えるが、盛り土などは確認されていない。

石室の構築状況（第41図）

図上では、碎けて原位置を離れていた南側小口の壁体の石材の接合によって本来の位置に復元している。墓壇掘削後、基底石を据え礫床を敷設する。その際、基底石の裏側と礫床の下部には同様の土を用いて裏込めとしている。石材はすべて砂岩の自然石を用いているが、基底石には平坦面をもつ石を立てて利用している。基底石の短側壁では薄い石材を横長で用いているため背が低く、土圧によって内傾している。長側壁では厚みのある石材を利用している。基底石による平面プランは南側が広く、北側が狭い台形を呈している。しかし、北側小口では基底石の両側に、石材を小口を内側に向けて添えるように用いており、2段目以上のレベルではプランは丸みを持ち、緩やかに持ち送っている。基底石と小口積み2段で、天井石の架構を行っているであろう。



第41図 ST1005土層図

石による平面プランは南側が広く、北側が狭い台形を呈している。しかし、北側小口では基底石の両側に、石材を小口を内側に向けて添えるように用いており、2段目以上のレベルではプランは丸みを持ち、緩やかに持ち送っている。基底石と小口積み2段で、天井石の架構を行っているであろう。

床面の形成

砂岩の自然石で、径10~15cm程度の平たいものを基本に使い、それらの隙間を径5cmほどの小礫で埋めて礫床としている。南側小口には1辺約20cm、厚さ5cmの平たい礫を礫床の上に置く。礫床レベルでの平面プランでは南側が北側に比べて幅広の台形状を呈していることから、礫床上の石が枕石に用いられていた可能性が考えられる。

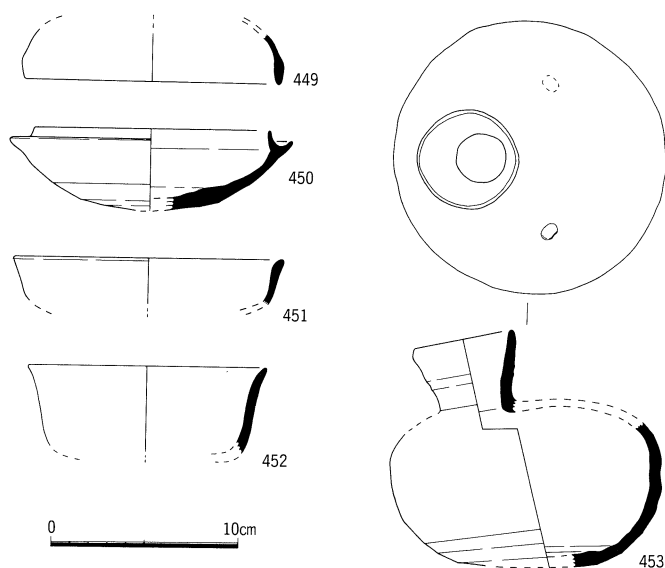
法量・主軸・頭位

石室墓の法量は内法で長軸0.85m、短軸0.45mを測る。最も遺存状況の良い北東隅部分の礫床床面からの高さが約50cmである。主軸は南北よりやや右廻りに振った状態(N-14°-E)であるが、枕石らしい石を用いることや平面プランから南側に頭を向けていた可能性が高い。

遺物の出土状況

石室墓外側の北西角の部分、及び石室墓上面において数点の須恵器の出土をみた。調査時に棺外副葬の可能性も考えたが、他の遺跡を含めた石室墓の例や時期的にばらつきがみられることを考慮すると本来の副葬土器ではないとみられるが、埋葬後の祭祀に伴う可能性も考

えられ、参考のために図を付した。



第42図 ST1005周辺出土須恵器

出土遺物(第42図)

須恵器

蓋杯が1組、杯身形態逆転後の杯が2点、平瓶が1点出土した。蓋杯(449・450)は蓋・身のいずれもがやや径が大きく偏平である特徴をもつ。450の口縁部のつくりは薄く、立ち上がりは短く、内傾化が進行しており、

TK209型式に属す

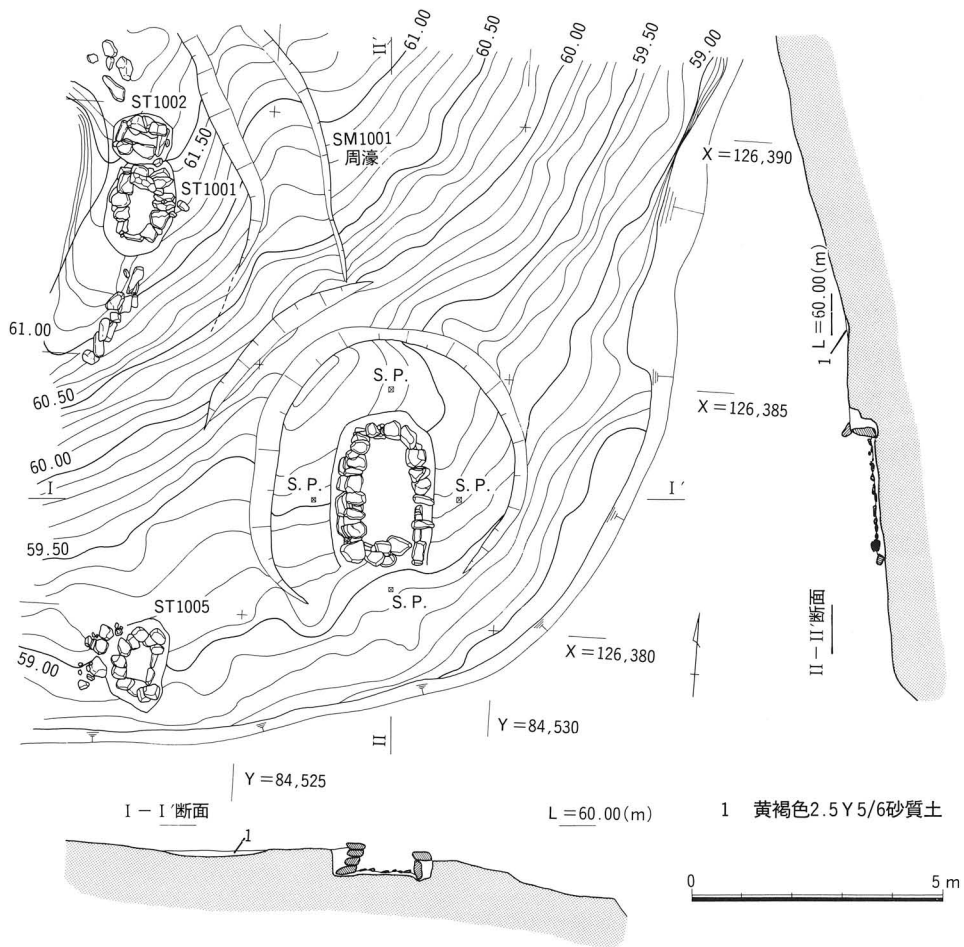
る。451・452は杯身形態の逆転後のもので、法量がやや異なるが口縁端部がナデによって外反するものである。TK48型式・飛鳥Ⅳ式である。平瓶は偏球形の体部に単純な形態の口縁部をもつ。体部上面の円形浮文は吊手の痕跡器官である。調整は全般に行き届かず、器壁は粗い。口縁の形態などから蓋杯と同じ時期かその次の型式に位置づけられる。

5号石室墓は墳丘の前面部に築かれていたが、遺存状況はよい。1号石室墓と基本的に同じ構造をもっているが、規模的には大形の1号・3号の各石室墓、小形の2号・4号の各石室墓のちょうど中間である。法量から再葬墓とみられるが、人骨は出土していない。遺物は石室墓の外で出土したものであり、年代を決める精密な資料とはならない。築造の年代は他の4基同様の6世紀後葉～末とみるべきであろう。

2号墳 (SM1002)

位置と現状

1号墳が位置する尾根の中心部より南東寄り、J・K-4～6グリッドにまたがって位置する。盛り土部分が完全に流失しているために、調査前の地形測量時点では墳丘としての認識ができなかった。逆に古墳としての認識を受けていなかったために、横穴式石室や副葬遺物が保護されたということもできよう。また、横穴式石室内には石室に用いられているのと同形同大の石材が十数点落ち込んでいた。石室内の堆積は平行堆積であることから、石材を



第43図 SM1002墳丘図

盗るための上面の破壊以外には、盗掘も行われていないとみてよいだろう。

墳丘

墳丘・周濠および横穴式石室のための墓壇は地山削り出しによって形成されているが、盛り土部分は流失しており、その盛り土の工程については墓壇の裏込めから若干復元できる程度である(石室の構築の項)。現存する墳丘は周濠を含めた径が5.2m、高さ0.5mであった(第43図)。本来の高さは2.2m前後、盛り土部分は約1.2~2.1mはあったと推定することができる。

周濠

周濠は、墳丘が流失している石室前面部を除く全周に巡っていた。1号墳周濠との境界にあたる北西側では幅2.2m、深さ0.1mを測り、1号墳の墳丘を一部切り込んでいた。堆積は黄褐色の砂質土で、しまりが悪い。

横穴式石室（第44図）

石室の構築

地山を長径3.08m、短径2.05mに掘りくぼめて墓壇としている。壁体の構築と同時に裏込め部分の土を何層にも分けて充填している（第45図）。その堆積は西側壁においてもっとも遺存状況がよく残っており、基底石の裏込めも含めて6層が確認できた。6層はいずれも黄褐色の砂質土で、炭化物を含む層があり（4層）、しまりが良好な層（7・8層）と不良な層（6・9層）がみられる。このことから1号墳同様に、盛り土が行われている部分に関しても連続的な工程が行われていることが想定される。

横穴式石室は無袖式で、玄室の平面形態は開口部寄りが丸く膨らむ胴張り形態をとっている。墳丘径からみてもこれ以上大きく伸びる形態となることはないであろう。奥壁は主として板石2枚を立てて用い、その横にもう1石添えるような小形の石材を立てている。これらの奥壁及び壁体の最下段については、やや偏平な石材の平坦面を内側に向けて据えるいわゆる腰石で、2段目以上の石材は小口積みとしている。腰石は右側壁よりも左側壁に、開口部寄りと比較して奥壁近くに大形の石材が使われている。右側壁中央部では腰石も小口積みが行われている。奥壁コーナーでは、2段目は側壁にもまたがる三角積みを行っており、丸みを作り出している。側壁に関しても緩やかに持ち送っている。

横穴式石室各部の計測値は、全長2.52m、奥壁から閉塞石までを玄室とみると玄室長2.02m、奥壁部での幅0.86m、中央部の幅1.17m、開口部での幅1.04m、残存高0.68mである。

閉塞石

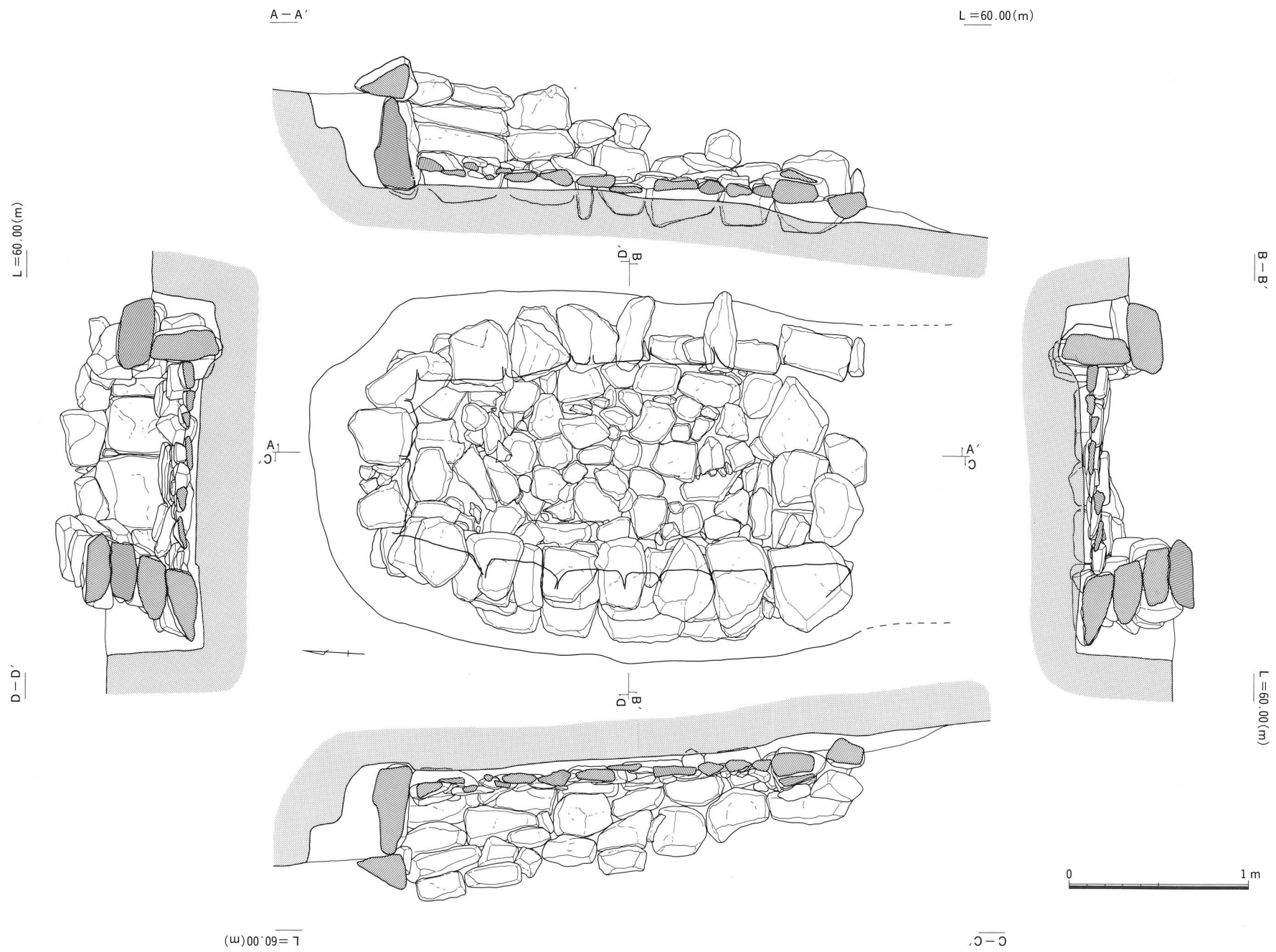
検出段階の開口部分に砂岩の自然礫が小口積みにして2段分据えられていた。積み重なりや須恵器の状況からみて閉塞石であろう。特に土を多く詰めた痕跡はなく、石のみによるものとみられる。遺存する石材が2段しかなく、追葬による積み替えについては不明である。

床面

砂岩の平たい川原石を敷いた礫床による床面が1面形成されていた。敷き詰め方は、奥壁沿いの4石をまず置き、その後壁体に沿うように行っている。したがって、中央部付近では整然と配列していない。奥壁部分は標高59.25m、開口部付近で59.10mと向かって緩やかに傾斜している。人骨や原位置での装飾品の出土がなかったために、埋葬の状況については不明であるが、規模や礫床の構築からみて主軸に平行な中央部への一体の埋葬を基本として作られていることが分かる。

遺物の出土状況（第46図）

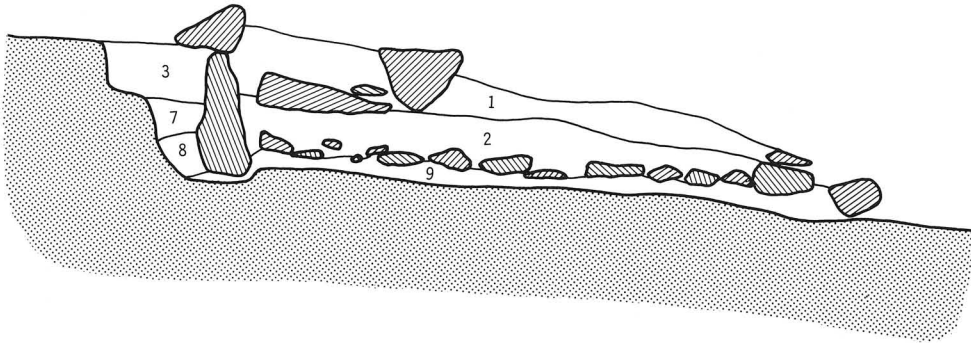
閉塞石の内側に須恵器の杯身2点、杯蓋1点の計3個体が原位置で出土した。鉄製品は鉄鏃と刀子が石室内の各所に散乱している状態で、切先の方にも規則性はなく原位置から遊



第44图 SM1002横穴式石室实测图

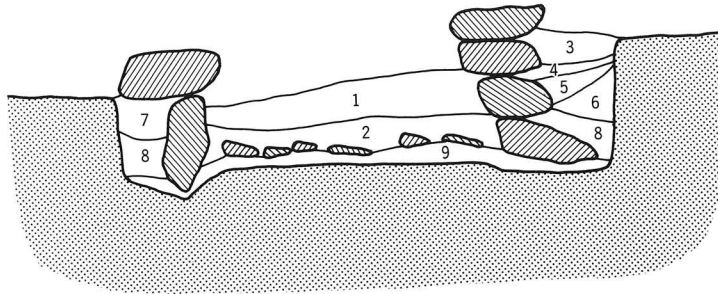
A-A'

L=60.00(m)



B-B'

L=60.00(m)



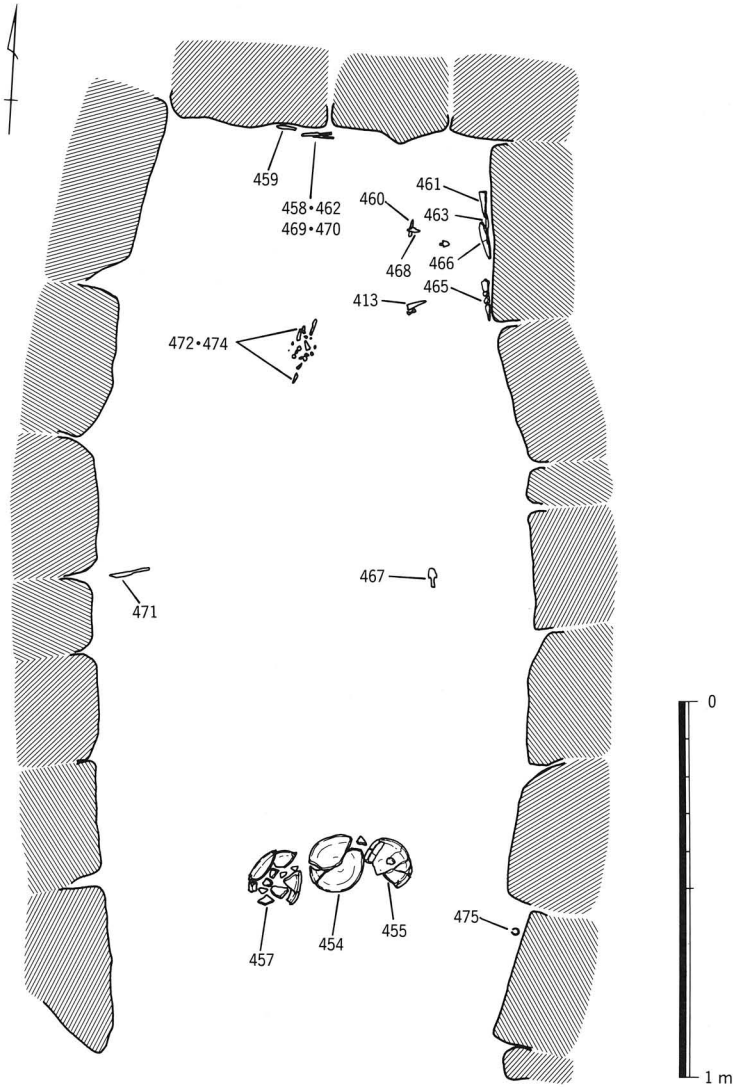
- | | |
|--------------------------|-------------------|
| 1 浅黄色2.5Y7/4砂質土 | 6 浅黄色2.5Y7/4砂質土 |
| 2 浅黄色2.5Y7/4砂質土 | 7 にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 |
| 3 にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 | 8 浅黄色2.5Y7/6砂質土 |
| 4 灰黄色2.5Y6/2砂質土(炭粒を少量含む) | 9 浅黄色2.5Y7/4砂質土 |
| 5 にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 | |

第45図 SM1002横穴式石室土層図

離している。

玄室内の遺物の出土の状況は大きく4つに分けることができる。壁面に沿うように出土した鉄器は切先が揃い、種類もまとまっており、原位置を保っているか側壁と礫床の隙間に転落したと考えられるグループである。このグループはさらに奥壁に沿い切先を西へ向ける一群と、東側の側壁に沿い切先を奥壁側（北側）へ向ける一群とに分かれる。奥壁の一群には長頸片刃鏃・圭頭鏃・柳葉鏃が、東側壁のグループには方頭鏃・柳葉鏃・圭頭鏃が含まれ、鉄鏃の形式ごとのまとまりはみられない。

玄室内床面上の閉塞石沿いから出土した須恵器3点は土圧などの力によって細片となっ
てはいたものの、その場で破碎したものでいづれも復元することによって完形となるもので、



第46図 SM1002遺物出土状況図

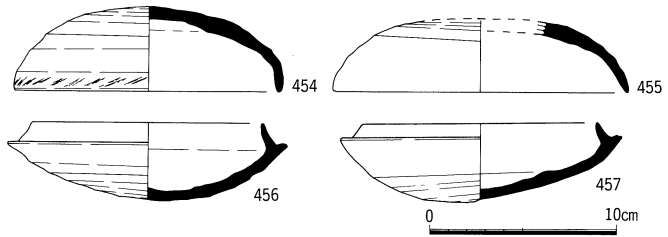
やはり原位置を保っているグループである。このうち454の杯蓋と455の杯身は出土状況からもセット関係になる蓋杯である。また、457の杯身とセットとなる蓋456は床面から浮いた状態で破片となって出土した。閉塞石に接するように置かれていたことや後述する耳環の出土位置を考え合わせると、初葬時の状態ではなく追葬時にこの位置へ

据えられたものと考えられる。

玄室内床面上中央部から出土した鉄器は切先も揃わず、破片となっているものも多い。床面よりも数cm浮いた状態で出土した。刀子、鉄鏃が含まれる。原位置を保っていた壁沿いのいずれのグループにも刀子が含まれていないことから、上記の3つとは異なるグループを形成していた可能性がある。

閉塞石と側壁の隙間から出土した耳環は、その出土位置から意図的にその場所へ置かれたものではない可能性が高い。追葬時に閉塞石をはずして、前の遺体・副葬品の移動を行った

際に、何かの要因で転落したと想定するのが妥当であろう。追葬時の片付けなどによると考えれば、最終葬に伴うものではないことになる。



出土遺物 (第47・48図)

第47図 SM1002出土須恵器

須恵器 (454~457)

閉塞石の内側部分からまとめて出土した杯身2点、杯蓋1点の3点、さらに床面から浮いた状態で出土しており、原位置から遊離していた杯蓋1点の計4点が出土した。4点の須恵器は色調などからみて、454と455・456と457という組み合わせが考えられ、蓋身とも扁平化が進み、やや小形である。蓋杯の立ち上がりはほぼ直線的に内傾し、端部はやや尖り気味におさまる。454の口縁端部外面には刀子などの先端の鋭利な工具による斜行する文様がみられる。これらの須恵器はいずれも、TK43型式の範疇におさまるものである。

鉄器

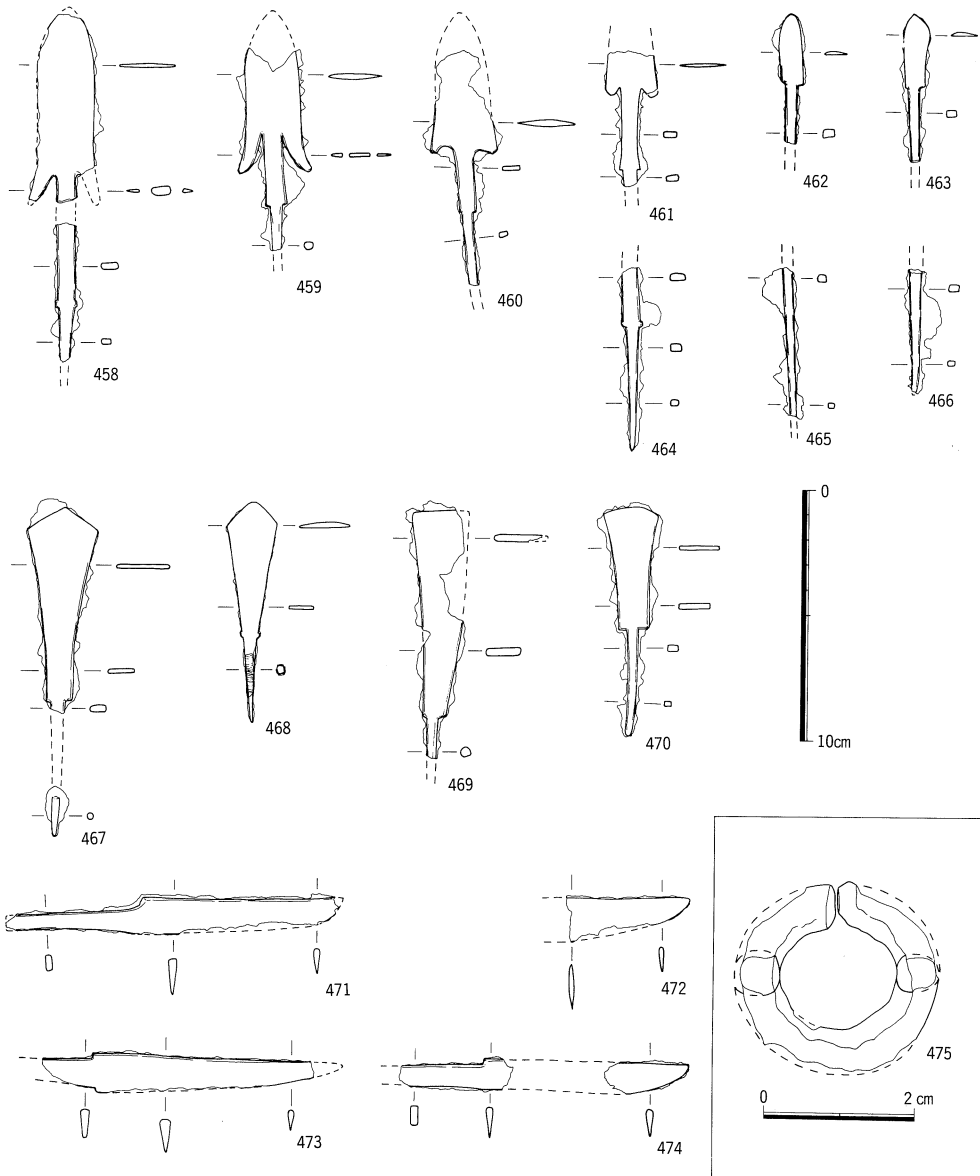
鉄鏃 (458~470)

458・459・460・461は両丸造腸扶三角形鏃である。458は棘状関を、459・461は台形関を、460は両角関を有する。これら4点には逆刺の形態・反りに差異が認められる。460・461の逆刺の反り・扶は弱い。462・463は片丸造長頸鏃である。462の鏃身関は角関と斜め関で左右が異なり、頸部長などは不明である。463は刃部右側がやや膨らみ気味で、鏃身関は両角関である。464・465・466はいずれも長頸鏃の頸部から茎部にかけての破片であるが、460・461には直接接合しない。464は頸部・茎部ともに断面長方形で棘状関を有する。465・466は断面長方形を呈する。467・468は平造圭頭鏃である。467の鏃身の関は両角関で、刃部は拡大気味で、関部にかけて内側に反りがみられる。468は完形品で、鏃身の関は棘状関で、刃部は467よりも鋭い。茎部に木質が遺存する。469・470は平造方頭鏃である。469の鏃身の関は両角関で、茎部は断面不整円形を呈する。470は完形品で、刃部はやや円頭状を呈し、関部から刃部に向かってやや開き気味である。

鏃身部の観察から、腸扶三角形鏃で逆刺が外反するもの2点、逆刺の短いもの2点、圭頭鏃2点、方頭鏃2点、片丸造三角形長頸鏃2点という組成である。全体で10本と決して豊富ではないものの、多種にわたっている点で興味深い。

刀子 (471~474)

いずれも玄室中央部分から出土したもので、図化した4個体以外にも別個体となる可能性



第48図 SM1002出土鉄器・耳環

のある破片があった。471は刃部などを欠く。刃は無関で、背は角関を有する。茎は細身である。472は切先・茎尻を欠く。研ぎ減りのためか刃部が鋭い。刃は角関で、背にも角関を有する。473は切先のみ残片である。背は明瞭な段をなさない。474もやはり欠損が多い。刃は無関で、背には角関を有する。

耳環 (475)

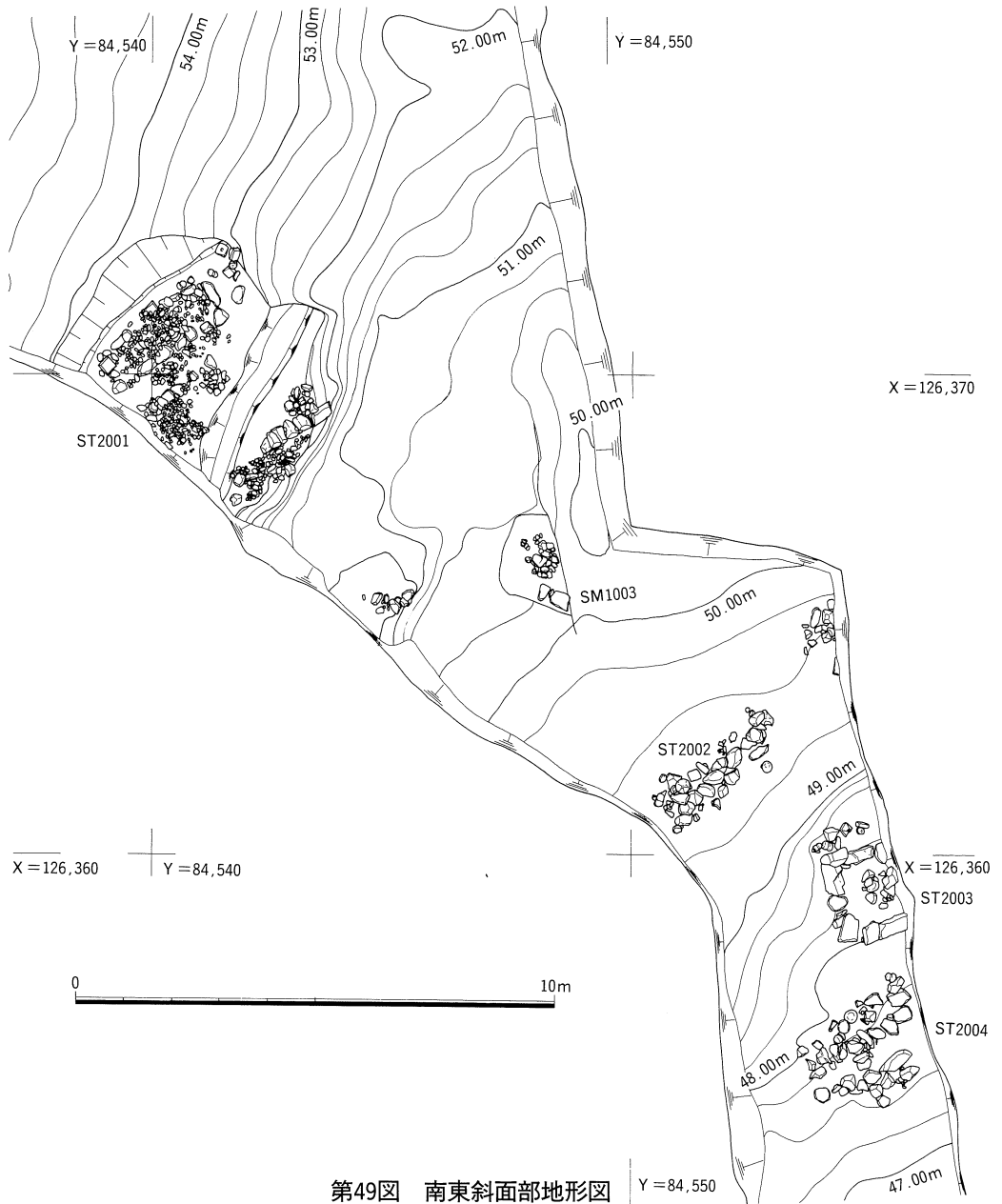
銅芯銀張りで、径4.2~4.8mmの中実の銅管を芯として用いている。表面の銀が剥落し、また銅芯も腐食が著しく、遺存状況は良くない。

まとめ

2号墳は墳丘径・高さとも小さく、目立ちにくいがために残された古墳である。西側に隣接する1号墳との強い関連性を窺わせる古墳である。墳丘や横穴式石室の規模では1号墳を下回っているが、墳裾を接するように築造され、横穴式石室のやや胴が張る形態が1号墳の玄室と共通する点は注目される。

遺物については、須恵器の副葬は4点と貧弱であったが、鉄鏃・刀子が床面よりまとまって出土し、その形式も多岐にわたっている。須恵器の型式からは1号墳と同様の6世紀の後葉の築造が考えられるが、周濠の切合い関係からは2号墳がより新しく位置づけられ、6世紀後葉の中でもやや新しい段階のものであろう。

B 斜面部の遺構 (第49図)

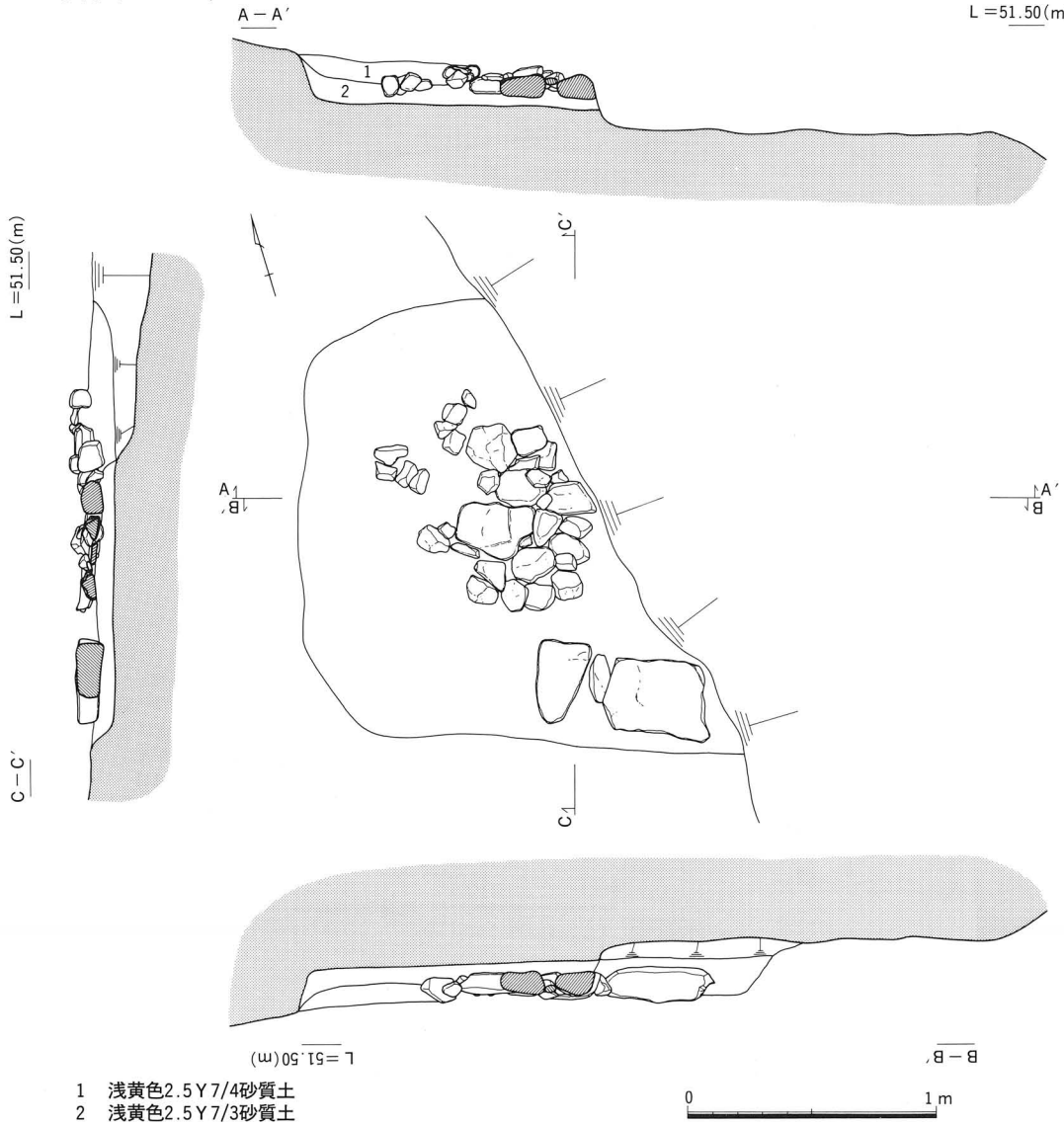


第49図 南東斜面部地形図

斜面部における遺構は、調査区が尾根上部分から幅を狭める地点に集中している。古墳時代の遺構は標高50.5m前後の斜面で検出された3号墳のみである。中世墓は斜面の上位よりにおいて1～4号墓が検出された。

3号墳 (SM1003)

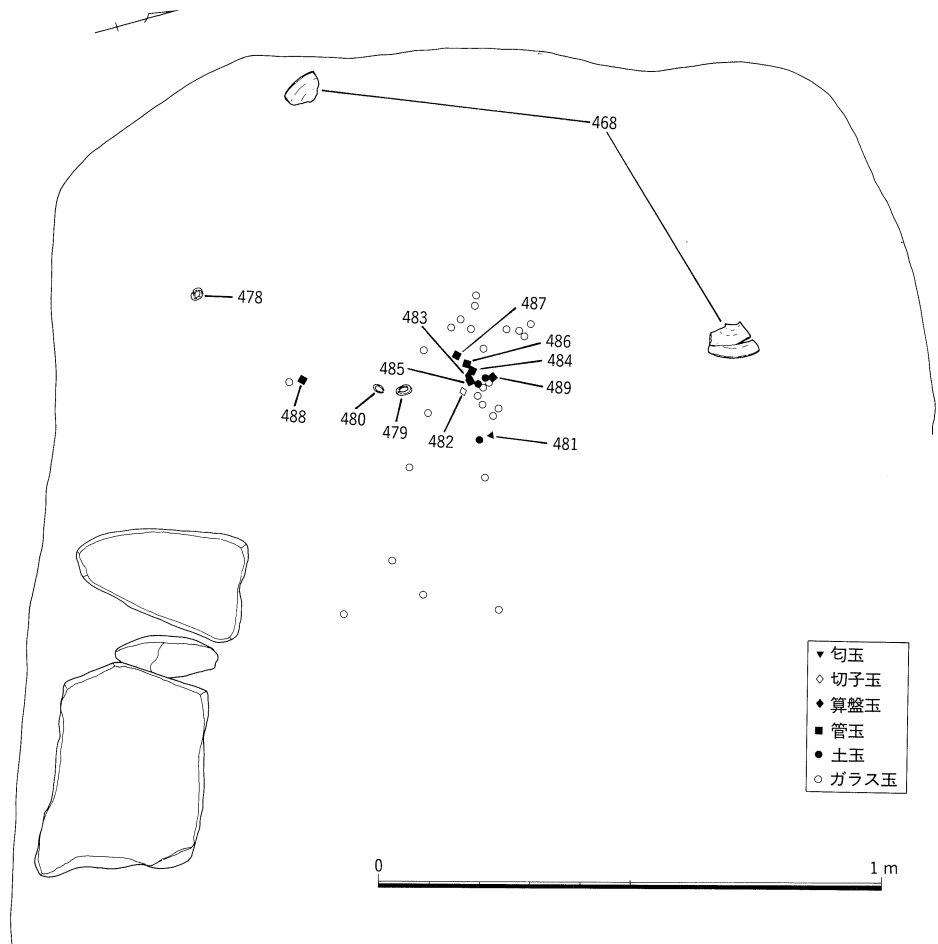
L = 51.50(m)



第50図 SM1003横穴式石室実測図・土層図

位置と現状

1号墳・2号墳の位置する尾根の稜線からみて南東側の斜面、G・F-9グリッドに位置する(第49図)。横穴式石室を主体とする古墳であるが、上面及び玄室の前面を大きく削平されており墳丘及び石室の大部分が失われていた。周囲の等高線の若干の乱れが3号墳築造の時点の地形を少しでもとどめていると仮定すれば、墳丘径が6~7.5m程度に復元できる。削平を受けている横穴式石室の前面では基底石に用いられているのと同形同大の石材が点在しているが、レベル的に一致しておらず原位置を保ってはいない。横穴式石室の奥壁よりの基



第51図 SM1003遺物出土状況図

底石と礫床床面の一部が遺存しており、床面上のわずかな堆積土内から玉類・耳環・須恵器が出土した。

横穴式石室（第50図）

全体に遺存状態が悪く、玄室奥壁側にのみ石材が原位置を保っていた。主軸をN-73°-Wとし、東南東に開口する。墓壙は幅が180cmで、深さ15cm以上に掘りくぼめ2層の砂質土（第49図1層、2層）で墓壙の底面形状を整えた後、砂岩の自然礫による基底石と礫床を敷いている。基底石は3石が原位置にあり、平たい面を上下とし小口を内側に向くように据えられている。玄室のプランは墓壙の平面形から胴張りになっていたと想定される。墓壙の形態から復元される玄室幅は最大で1.15m、奥壁部で0.85mである。

礫床は砂岩の一辺10～30cmの平たい礫を敷き詰めている。検出された範囲ではほぼ平坦で、そのレベルは標高51.30mである。人骨の出土はなかったものの、装飾品類の出土状況から1体の中央部への埋葬状態が明らかとなった。玄室幅からみると主軸に平行な埋葬が行われていたようである。

遺物の出土状況（第51図）

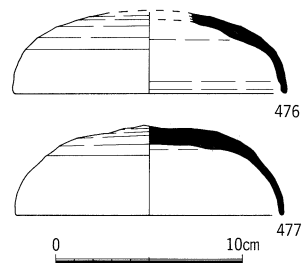
須恵器は墓壇の上面の、やや床面より浮いた状態で破片となって出土した。したがって、これらは原位置から遊離しているとみることができる。また、玄室前面の削平箇所を浮いた位置から出土した須恵器片が数点出土しており、3号墳に伴うものとみられるため、後に一括して実測図を掲載した（第54図）。

一方耳環を含む装飾品類は、その集中の度合いや出土レベルが床面直上であることからみて、原位置を保っているものとみられる。耳環479の出土位置を中心とする中央部付近には勾玉・切子玉・算盤玉・管玉・土玉・ガラス玉の3号墳出土のすべての種類が40cm×25cmの狭い範囲に集中し、被葬者の上半身の位置に比定できる。1点遊離していた耳環478は479とのセット関係が確実であり、若干の移動も考慮する必要がある。

横穴式石室出土遺物（第52～53図）

須恵器（476・477）

3号墳に確実に伴う須恵器は蓋杯の2点のみで、476はほぼ完形品である。476・477はいずれも天井部が丸みを帯びる器形で、肩部の稜は退化している。476の口縁部内面には緩やかな沈線が巡る。これらに伴う杯身は出土していないが、周辺で出土したものに年代的に近い須恵器がみられ、3号墳との関係が考えられる。これらについては別項で紹介する。TK43型式に相当する。



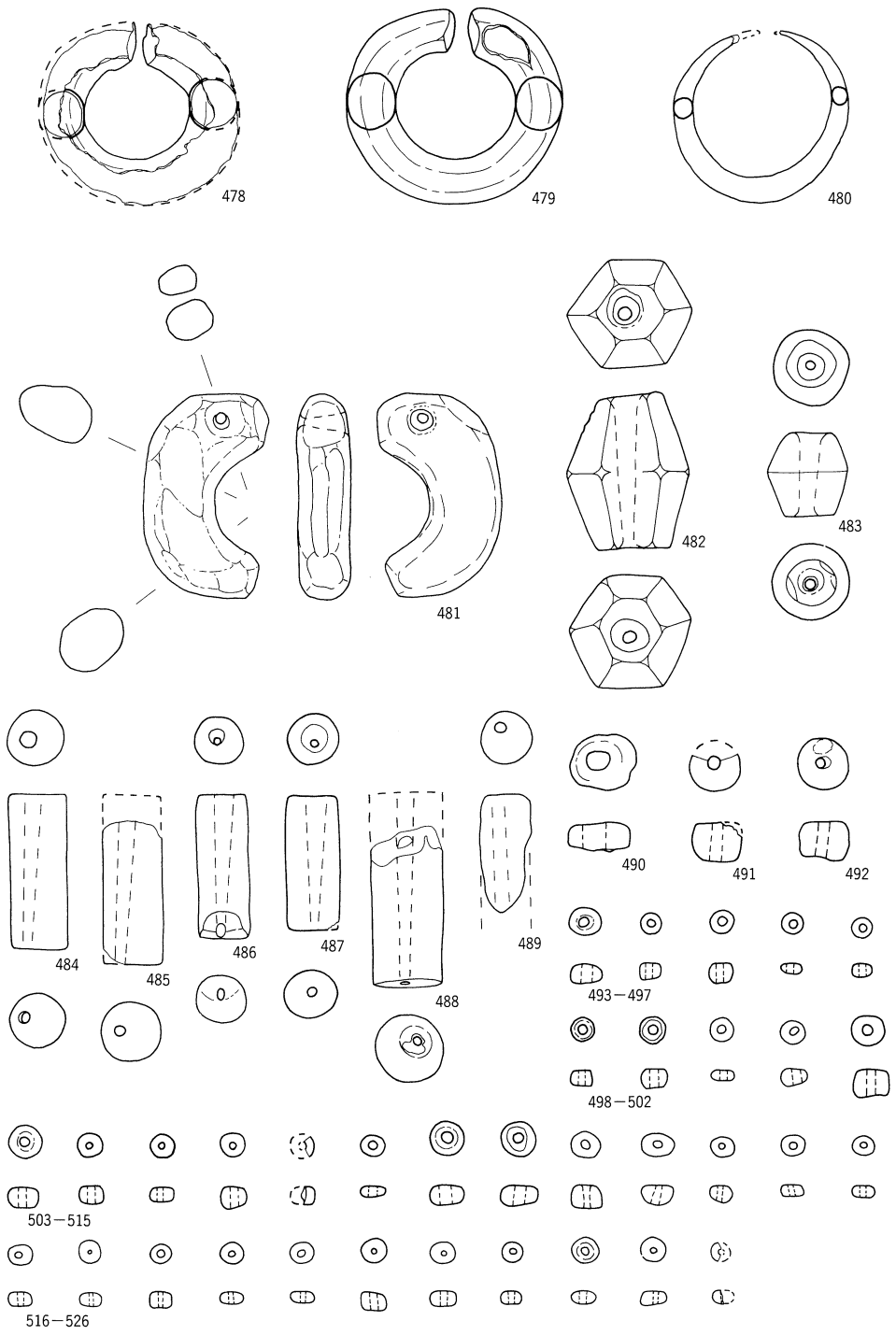
第52図 SM1003出土須恵器

装身具（478～526）

石室の遺存状態の悪さから見れば、玉類については意外ともいえるほどの種類と点数が出土した。

耳環（478～480）

法量・遺存状況とも異なる3点が出土している。478は銅地銀張りで、径6～7mmの中実の銅管を芯として使用しているが、芯の太さは一定ではない。環の内側の銀張り部分が本来の形状をよくとどめているのに対して、環の外側は表面の銀の剥落が著しい。479は478よりやや大形の耳環で、銅地銀張りである。径7～8mmの中実の銅管を芯として使用している。表



0 5 cm

第53图 SM1003出土耳環・玉類

面の銀張りは非常に遺存状況がよく光沢をとどめているが、部分的に亀裂が生じている。以上の2点はセットをなすものであろう。480は最も遺存状況の悪い耳環で、太さが1.7~4.25 mmと一定しない銅管を使用している。

勾玉 (481)

C字状を呈するもので、瑪瑙製である。中間部分の腹や背の部分が長く、頭や尾の部分はやや角ばっている。穿孔は主に図右側の側面より行われ、左側側面では孔周辺に細かい剝離がみられる。表面はすべて研磨の対象となっており、研磨の単位は明瞭に観察できるが、そのことは全体の形状が滑らかではないことを示す。また、各所に粗い面がみられ、研磨がその部位に及んでおらず研磨の前段階の表面の状態をとどめている。

切子玉 (482)

六角形2面と長台形12面で構成される切子玉で、半透明の水晶製である。内側には原石のわずかな亀裂が観察できる。側面部中央の稜は不明瞭である。穿孔は基本的には上面からの片面穿孔であるが、下面にも剝離がみられる。穿孔後、剝離の生じた部分は再び研磨が施されている。

算盤玉 (483)

切子玉を小形にして、台形の面を簡略化した形態である。材質的にも482と肉眼観察では類似しており、半透明である。片面穿孔で、側面中央の稜は波打っており研磨の状況をとどめる。

管玉 (484~489)

管玉は材質によって2種類が認められる。484・486・487・488は碧玉製で硬質であり、濃緑色（ボトルグリーン）の色調をもつ。485・489は緑色凝灰岩製で軟質であり、淡緑色（フレンチグリーン）の色調をもち、481については細片となっている。いずれのグループも片面穿孔で、面径の大きい側より主たる穿孔を行っており（487を除く）、研磨の際には穿孔の方向が関係していたと考えることができる。また、碧玉製の486・487には成形時の破損を丁寧に研磨し、補修した痕跡があり、形態に乱れが生じている。488の破損部には研磨はみられないものの、ローリングが観察でき、破損後もかなりの使用期間があったことを窺わせる。

土玉 (490~492)

3点の出土があり、色調にもわずかな違いはあるものの、同工の手によるものであろう。1号墳出土の土玉と比較すると、ほぼ平均的な法量である。破損している個体の断面を観察すると、胎土は精良でごく細かい粒子の混入物をわずかに含む。

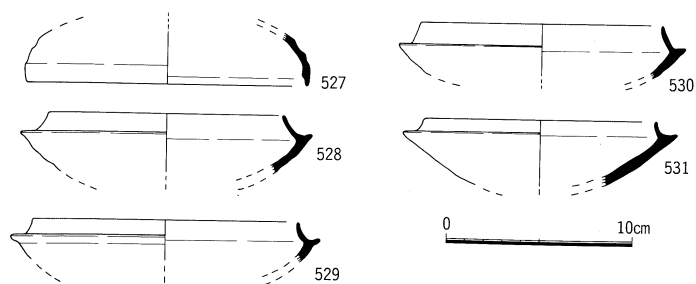
ガラス玉 (493~526)

34点の出土があったが、1号石室墓出土のガラス玉と比較すると、法量・色調いずれの面でもバリエーションの幅が広く、これらの玉類が本来のセットであったか否かに関わらず、豊かな組合せをもっていたことが分かる。

法量の面からは径が2.65~3.8mm、厚みが1.5~3.2mmに集中しており、このグループの範疇を大きい側へはずれるものと、小さい側へはずれるものとの主に3つのグループに分けることができる。孔径は0.9mm~1.4mmまでの幅がある。ピークは1.2mmと1.0mmとにある。傾向としては1号墳のものにやや近い。色調の面からみると、黄（シトロンイエロー）2点、紺系統（ブックウィング、コバルトブルー、パープリッシブルー、オックスフォードブルー、シアンブルー）6点、青緑系統（シーグリーン）8点、濃緑系統（マートルグリーン、ピーコックブルー、プルシアンブルー）3点、明緑系統（フレンチタークオーズ、オパールグリーン）13点、緑（タークオーズグリーン）1点、橙（マンダリンオレンジ）1点と数量的に豊富な1号墳・1号墓を上回っている。これを法量との関係でみると、紺・青緑両系統は最も集中する範囲にほぼ含まれ、明緑・黄両系統には大きい法量をもつものが含まれており（493・494・495・501・502・503・504）、1号墓と同様の傾向がある。

3号墳周辺出土の須恵器（第54図）

3号墳の周辺において出土した須恵器は、この古墳に伴っていた可能性が高い。3号墳の横穴式石室で出土した須恵器が非常に少なかったため、年代などを検討するのに重要な資料となろう。



第54図 SM1003周辺出土須恵器

やや長く、体部の器壁が薄くつくられている傾向がある。こうした点からは、当遺跡内でもやや古い特徴を示すものともいえるが、TK43型式の範疇にはおさまるもので、横穴式石室出土のものと年代的な矛盾はない。

まとめ

3号墳は斜面上に築かれた、東南東に開口する横穴式石室を主体とする古墳である。横穴式石室の一部を残してそのほとんどが破壊されていた。墓壇から復元される弱い胴張りの玄室形態は2号墳のそれと共通のものであり、同様の小形の石室であったと想定できる。耳環が3点出土していることから最低1度の追葬が行われている。

副葬品では全体の内容は推定にとどまるが、須恵器が少なく装飾品類が豊富であったこと

は注目される。装飾品は集中した出土状態からみて、追葬による若干の混入の可能性も否定できないが、追葬による一体の埋葬次のもと考えられる。同様の小規模の横穴式石室である2号墳が装飾品が少なく、鉄器類を比較的多く副葬していたのとは対照的である。

築造年代は周囲で出土した須恵器を含めてみても、6世紀の後葉で問題はないと考えられる。しかし、1号墳や2号墳の占地条件を考慮すると、2号墳同様に1号墳よりは新しく築かれたものとみることが妥当であり、6世紀後葉の中でも新しい段階に築かれたのであろう。

1号中世墓 (ST2001) (第55図)

位置と現状

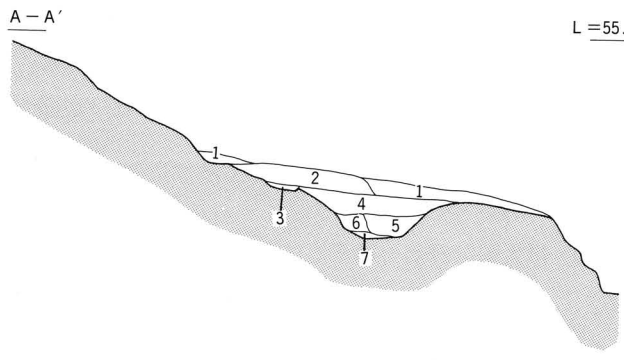
2号墳と3号墳の間地点となる尾根の南東斜面、F～G-7～9グリッドに構築されている。標高にして51.0m～53.0mにまたがり、前後の地形と比較すると傾斜がかなり急な地点である点は以下で述べるこの遺構の性格と関係があるものとみられる。この遺構については、最初に斜面を階段上に整形した段階から石組による基壇をもつ中世墓を構築し、埋没する段階まで各段階を経ている。そこで、検出状況を概観し、構築の段階を順を逐ってみてゆくことにする。

また、基壇状遺構はほぼ全形を確認することができたが、下部の遺構の一部については調査区外へ延びており、中世墓の各施設を全体で捉えようとする場合には慎重に扱わねばならない。

第1段階 (第57図)

尾根の南東側の斜面をの一部を階段状にカットすることにより、数段からなる平坦面に整形し、土坑SK01を築く段階である。ただし、平坦面は厳密に言えば平坦とはなっておらず緩やかな傾斜をもつが、後に基壇状遺構が築かれる上位の箇所は下位に比べてより傾斜の度合いが弱くなるよう整形されている。中央部を帯状に、また斜面下位よりの部分、北東部分のいずれもが攪乱を受けているが、平坦面の規模は長さが南西側の最大部分で4.55m、北東部分で2.60m、幅が3.80mの規模を測り、面積は13.5㎡以上ということとなる。SK01は平坦面の調査区壁に近い南西よりに築かれている。

SK01 下位よりの部分が削平されているが細長い長楕円形の平面プランをもつ土坑である。主軸方向はN-20°-Wで、長さ2.35m、最大幅0.97mを測る。底面には6～15cmのレベル差をもつ一段低い掘り込みがみられる。この掘り込みをのぞくと底面のレベルはほぼ平坦である。土坑内はほとんどがしまりをもたない砂質土で埋められている。北西側の断面(A-A')では底面全面に2cm～10cmの厚みをもって焦土ブロック(第2層)が混入している。両側の壁面はいずれも赤変しており、坑内において火葬が行われたことを示している。さらに



- 1 明黄褐色10YR6/6砂質土
- 2 明黄褐色10YR6/6砂質土(炭化物を少量含む)
- 3 明黄褐色2.5Y7/6砂質土
(炭化物を少量含む) - SP01埋土
- 4 暗黄褐色10YR6/6砂質土
- 5 明黄褐色10YR7/5砂質土 - SD01埋土
(炭土を少量含む)
- 6 黄褐色2.5Y5/6砂質土 - SD01埋土
- 7 黄褐色2.5Y5/4砂質土

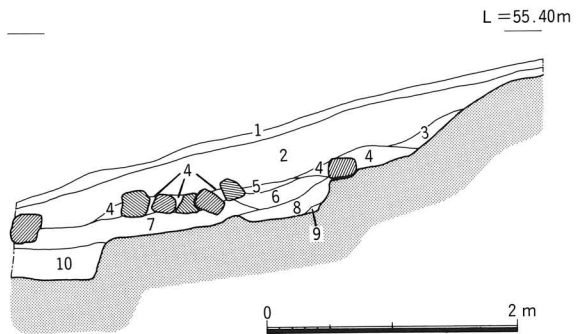
第55図 ST2001検出状況図・土層図

SK01上面には細長く焦土が広がっている部分が見られ、土坑埋没後にも火葬を行っていたことになる。この焦土面は第2段階・第3段階において築かれる溝(SD01・SD01')によって、切り込まれている。

第2段階(第58図上)・第3段階(第58図下)

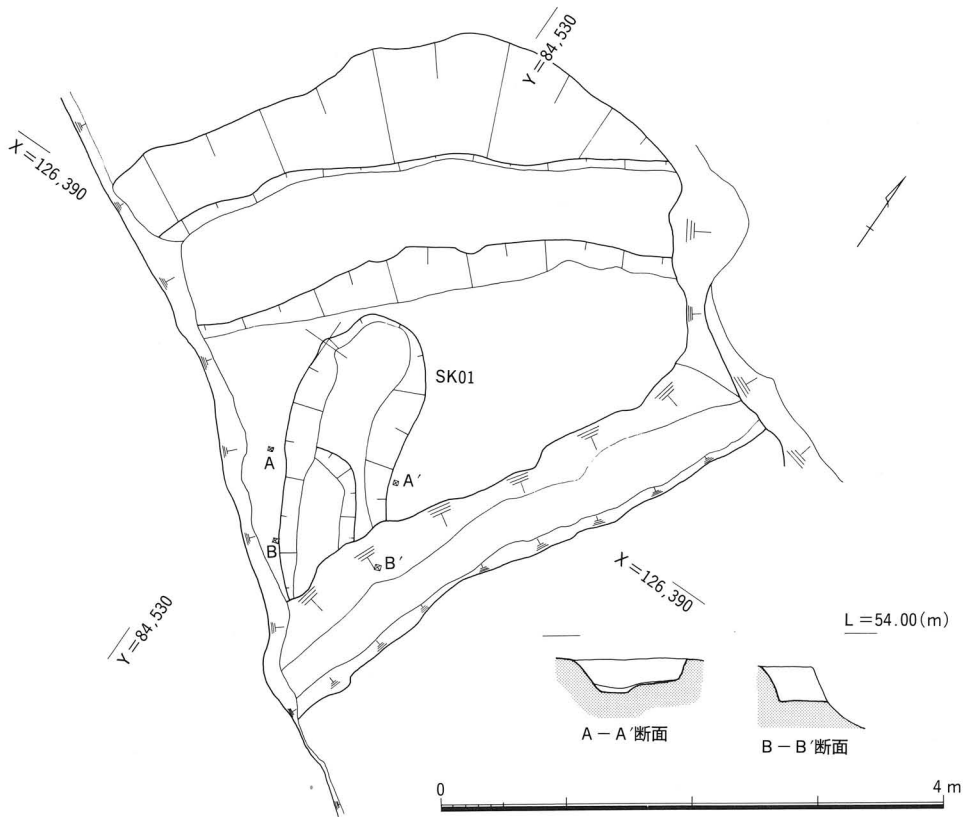
この二つの段階では、等高線に平行する同様の規模の2条の溝が築かれる。

SD01・SD01' いずれも上からみて2段目となる平坦面の落ち際に掘り込まれている。切り合いからSD01、SD01'の順で築かれたことが分かる。SD01はSD01'

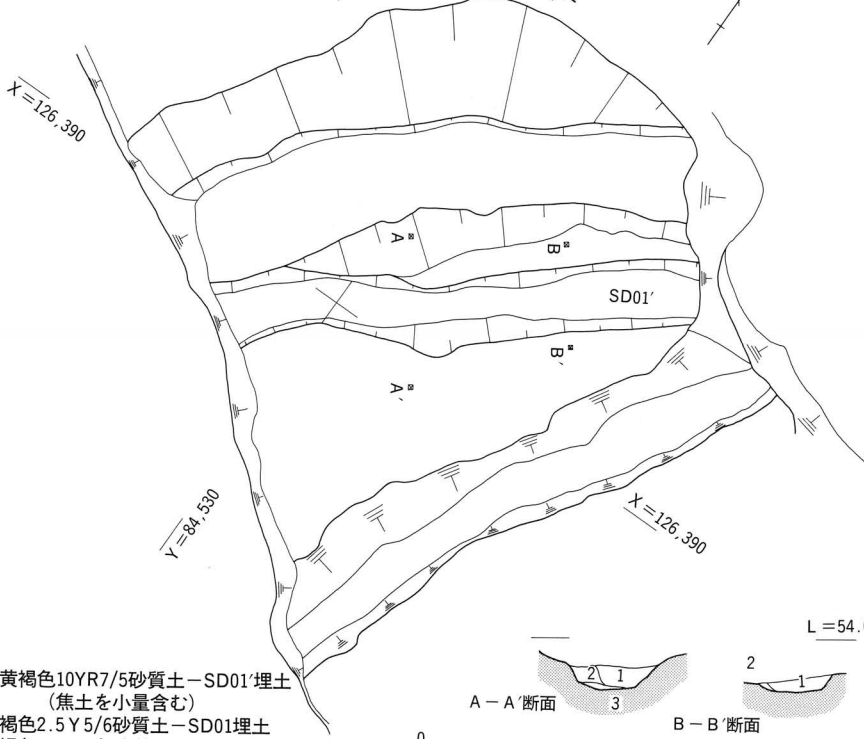
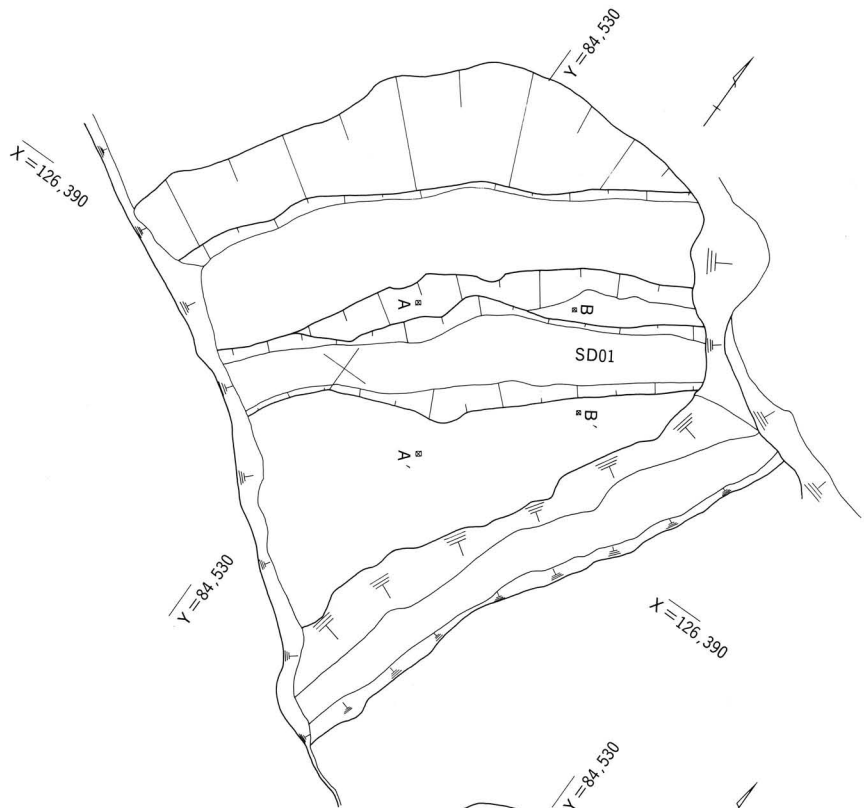


- 1 暗褐色10YR3/3粘質土(表土)
- 2 にぶい黄褐色10YR5/3砂質土
- 3 明黄褐色10YR6/6砂質土
- 4 明黄褐色10YR6/6砂質土(炭化物を少量含む)
- 5 灰黄褐色10YR6/2砂質土(炭化物を多く含む)
- 6 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土(炭化物を多く含む)
- 7 明黄褐色10YR6/2砂質土
- 8 明黄褐色10YR7/6砂質土—SD01'埋土
(焦土を少量含む)
- 9 黄褐色2.5Y5/6砂質土—SD01埋土
- 10 にぶい黄色2.5Y6/4砂質土—SK01埋土

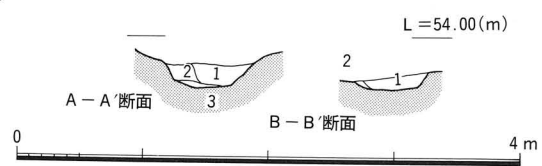
第56図 ST2001南西壁面土層図



第57図 ST2001第1段階



- 1 明黄褐色10YR7/5砂質土—SD01'埋土
(焦土を少量含む)
- 2 黄褐色2.5Y5/6砂質土—SD01埋土
- 3 黄褐色2.5Y5/4砂質土



第58図 ST2001第2段階(上)・第3段階(下)

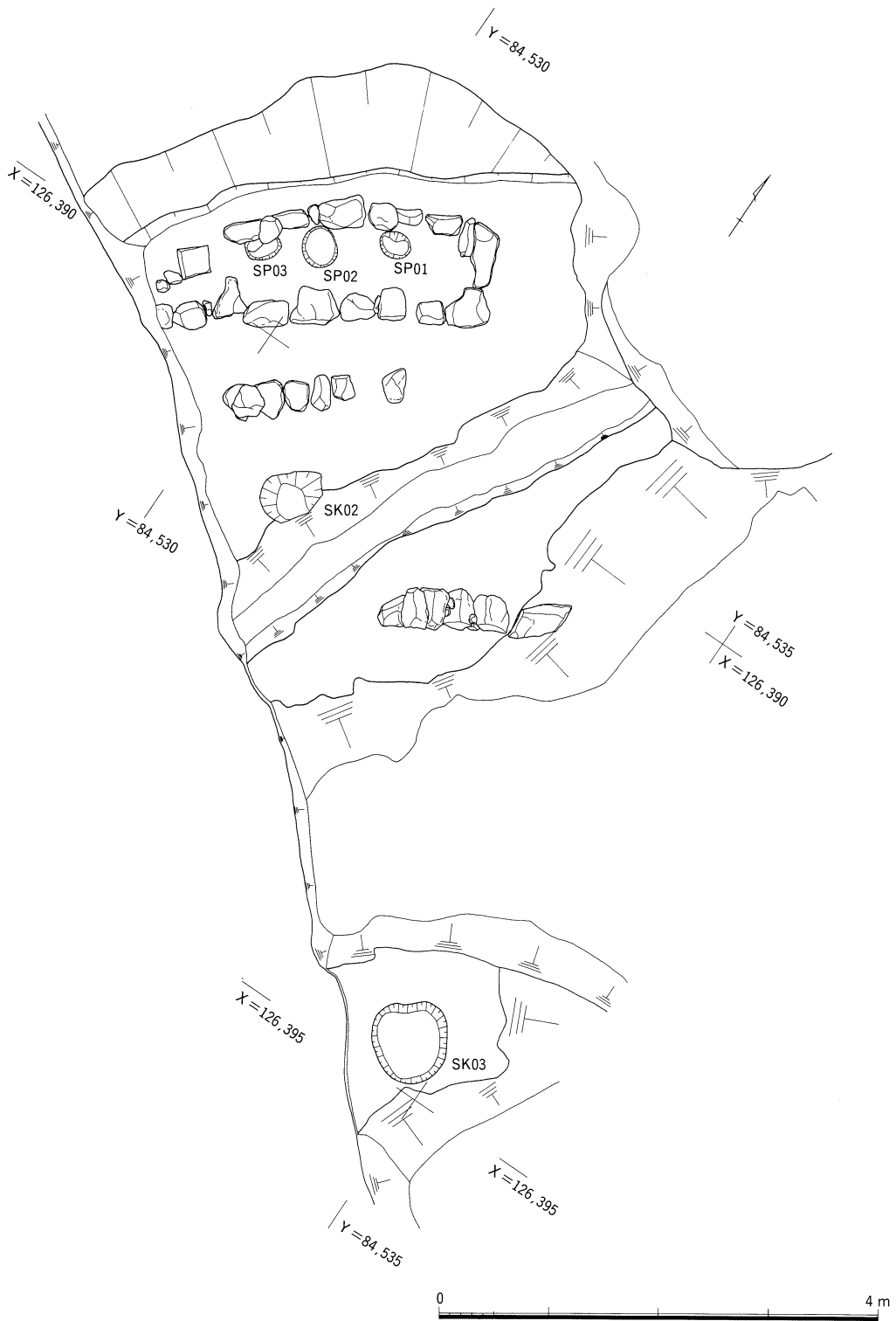
のわずかに北側に位置しているが、SD01'によって切られておりその規模は明かではない。方位や流れの方向はSD01'と同様であろう。溝内にはしまりの弱い砂質土が堆積している。深さは20～25cmである。SD01'を切っているSD01'は直線的にN-55°-Eに延びる溝で、検出延長3.87m、幅0.50～0.55mを測る。深さは20～30cmである。底面のレベルは南西から北東へ約3°傾斜しており、流れがあったとすればこの方向となる。溝にはやや粘質のある砂質土が堆積しており、焦土のブロックが断片的に混入していた。SK01に伴う焦土面を切っているためである。2条の溝はほとんどが重なるように延びており、同様の役割をもって掘削されたものが埋没したため再掘削されたと推定できる。調査区外に広がる関連遺構に伴う可能性も残されているため、その機能は不明である。

第4段階（第59図）

この段階には1段目から2段目にかけて基壇状遺構の基礎となる方形の石組を築き3基のピット、2段目に火葬施設SK02を、4段目にSK03を築く。長方形の石組は砂岩の自然礫からなり、25cm～40cm四方のものを基本に小形の礫で隙間を埋めている。石組に際しては、盛り土は基盤層と同様の砂質土（第55図第2層、第56図第4層）を用いて平坦な形状に整えている。SK01、SD01・01'の埋没状態に20cm程度の盛り土（第56図第7層）によって整地を行った上に築かれている。また、調査区外に広がっているために、土層観察のみによってその存在が認識され、内容を明らかにすることができなかった遺構としてSK04がある。SK04は土層観察によって（第56図第5・6層）、整地層と石組との間に築かれていることが明かである。

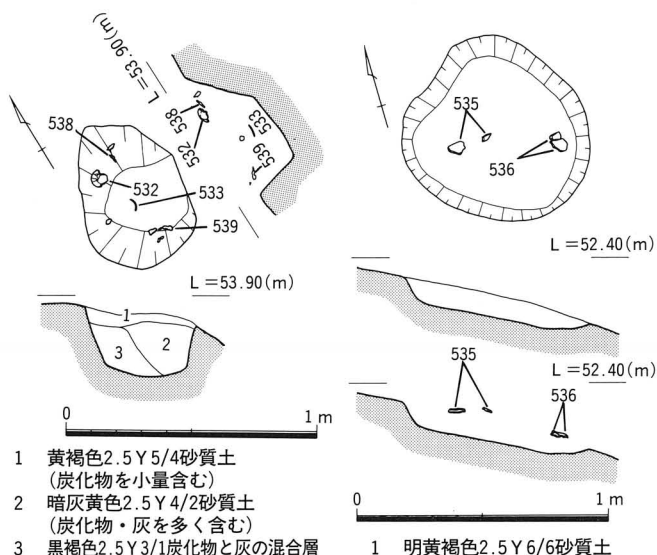
この時点で1段目と2段目の段差は解消されて、一つの面として使われる。石組の主軸はN-55°-Eで、長さ3.03m（内法2.43m）、幅1.17m（内法0.50～0.65m）を測る。2段目、3段目においても同様の石列が検出されており、基壇状かまたはそれに類する遺構が築かれていた可能性があるが、SP01などのような下部遺構は見られない。

SK02（第60図） 2段目のやや下位に築かれた土坑で、南東側が攪乱を受けており全形はつかめないものの、長径51cm、短径43cmを測る不整形円形を呈する。坑は直線的な傾斜で平坦な底面に達する。溝内の堆積は3つに分かれる。第1層は適度なしまり具合をもつ砂質土で、炭化物を少量含む。第2層は砂質土であるが、炭化物もより多く含みさらに灰を含むことも認識された。第3層は炭化物と灰の単純層である。埋土中からは、土師質土器小皿・鉄釘・人骨が出土した。土師質土器532はほぼ完形での出土であるが、他2点は小片での出土でありこれらは本来この施設への副葬品として納められたものではないとみられる。鉄釘（538・539）は頭部の形態が異なっており、複数の埋葬であった可能性も残されている。堆積及び出土遺物から有機質の蔵骨器を用いた埋葬施設であったと考えられる。



第59図 ST2001第4段階

SK03 (第61図) 4段目に築かれた土坑で、上面にはやはり砂岩自然礫による集石を伴っている。自然礫は拳大の円礫から30cm四方以上のやや大形のものまでが用いられている。どのような形態であったかは出土時の状況からは不明である。長径74cm、短径69cmの不整円形を呈する。埋土は砂質土でしまりが弱く、炭化物や人骨片は含まれず、焦土面も認められない。

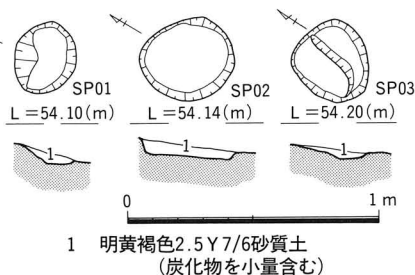


第60図 ST2001・SK02平断面図・遺物出土状況図

第61図 ST2001・SK03平断面図・遺物出土状況図

坑内からは堆積の上位部分で土師質円筒形土器片が数点出土した。以下でも触れるように、土師質円筒形土器が蔵骨器であると考えられることから、火葬は行われず埋葬のみを行う施設であったと考えられる。

SP01・SP02・SP03 (第62図) 石組の内側、北東辺の石列に接するように並んで築かれていたピット3基である。北東から SP01・02・03とした。SP01は径25~30cmの不整円形で、深さは16cmである。SP02は SP01と39cm、SP03と19cmの間隔をもつ。長軸38cm、短軸32cmの楕円形で、深さは16cmである。SP03は径33cmの不整円形で、深さは11cmである。埋土はいずれも炭化物をわずかに含む砂質土で、内部に蔵骨器・人骨は認められなかった。

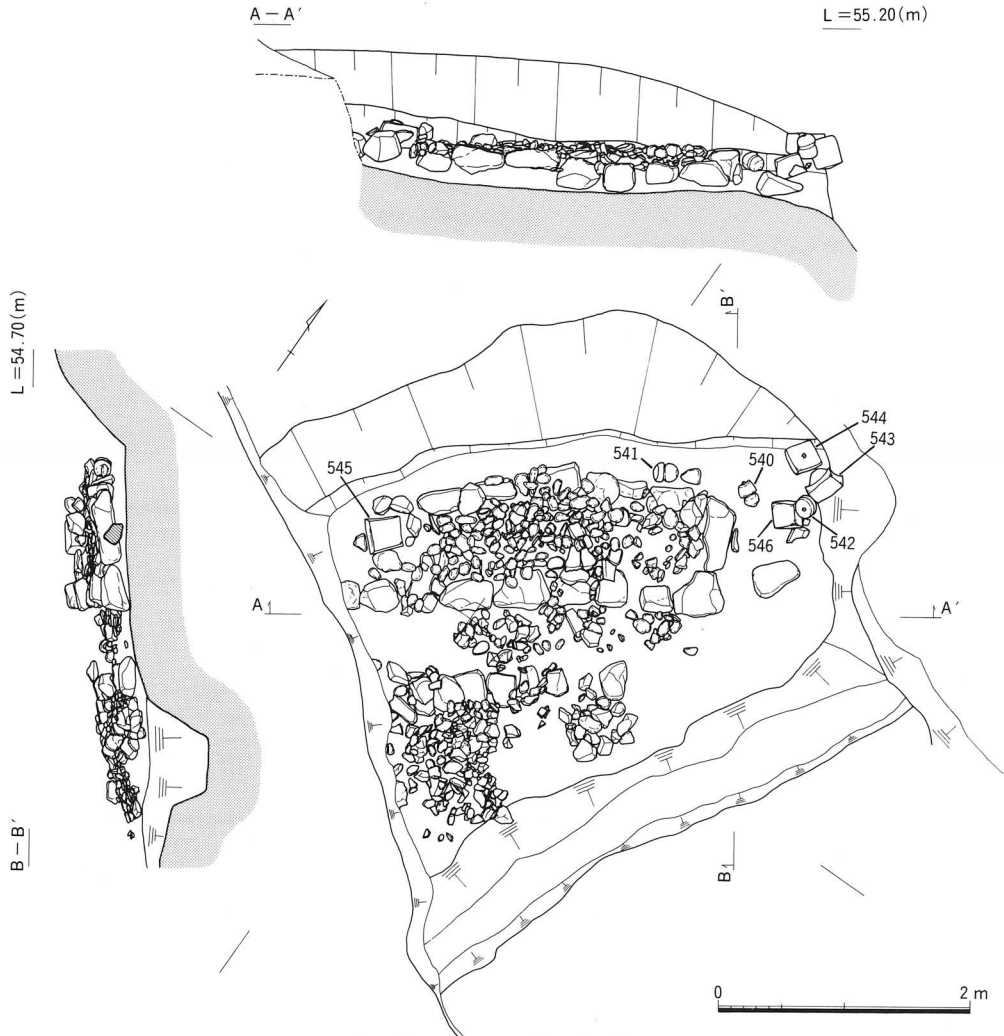


第62図 ST2001・SP01・02・03平断面図

第5段階 (第63図)

第4段階で築かれた長方形の石組に礫を充填して基壇状の施設とする段階である。充填される礫は径約10cmの円礫を用いている。円礫は長方形の基壇状施設内だけではなく、下位の石列との隙間やその南側にも同様にみられる。特に第4段階に築かれたSK02についても、基壇またはそれに類する形態の石組をもっていたことが想定される。

基壇状施設の構築と並行して、墓の上表施設としての五輪塔の設置が行われた。五輪塔の各部位は倒壊または破壊によって原位置を遊離していたが、凝灰岩製地輪545は基壇状施設の南西側の一角に位置し、原位置またはそれに近い状況にあるものとみられる。基壇状施設の北東部分には、空風火水地のうち水輪を除く各部位が出土した。出土した7個体の内、3個



第63図 ST2001第5段階

体が凝灰岩製、4個体が砂岩製であるが、いずれにしても本来の組合せは復元できない。

出土遺物 (第64・65図)

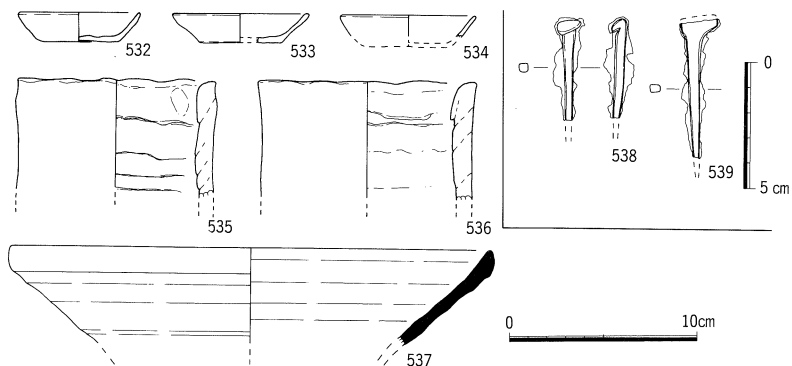
土器

土師質土器小皿 (532～534)

3点とも口径6～7cmで、口縁の形態などに若干の相違がある。底部の遺存している572・573は、いずれも底部に回転ヘラギリ技法を用いている。3点ともくすんだ淡黄色で、胎土はやや粗い。底部の形態や口縁端部のおさめ方にわずかな違いがみられる。回転ヘラ切り技法の使用から14～16世紀にかけての時期を当てることができるが、県内資料の整備が進んでいないため、より細かい時期の比定は現状では困難である。

土師質円筒形土器 (535・536)

数点の出土がみ
られたが2点だけ
が図化可能であっ
た。いずれも円筒
形の器形をもち端
部では外面に弱く
屈曲している。口
径は535が10.4cm、
536が11.5cmであ
る。外面には板ナ



第64図 ST2001出土土器・鉄釘

デまたは板押圧後にナデ調整をしている。内面は粘土紐接合時の痕跡を明瞭にとどめ、口縁端部内面には指オサエを施している。底部の形態は不明であるが、名西郡石井町浦庄遺跡⁽⁸⁾・阿波郡市場町上喜来遺跡⁽⁹⁾などから同様の口縁形態の円筒形土器が出土している。火葬墓あるいは再葬墓として利用された遺構からの出土ということを考えれば、蔵骨器として利用されていた可能性がある。

東播系須恵器 (537)

基壇状遺構内より体部中半以上の破片1点が出土した。外側へ直線的に開き、やや外面に肥厚し口縁端部を丸くおさめるものである。調整はおおむね回転ナデによっているが、内面は回転ナデ後の斜め上方へのナデが著しい。森田稔氏の編年⁽¹⁰⁾の第II期第2段階に相当し、12世紀末葉から13世紀初頭に位置づけられる。

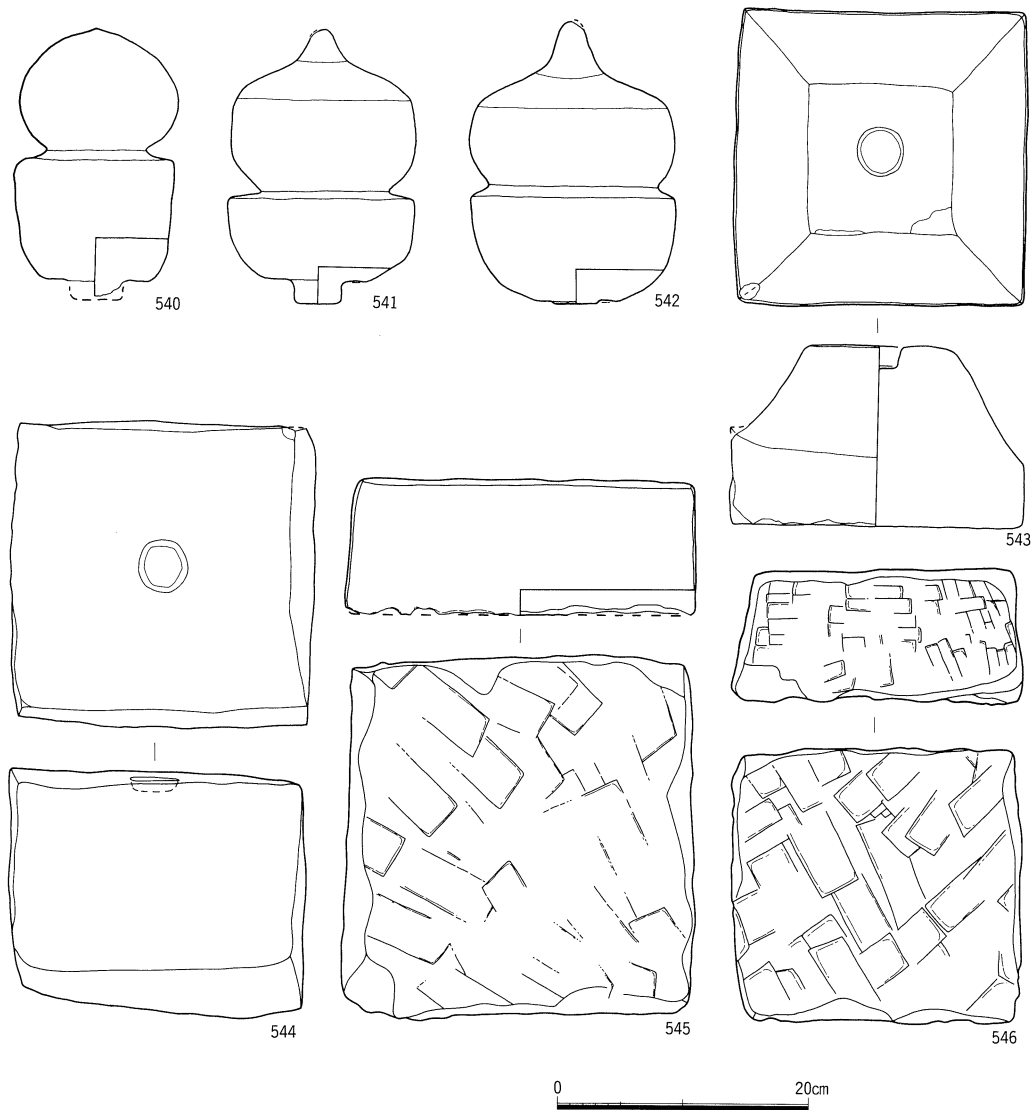
鉄釘 (538・539)

頭部を平たく伸ばして折り曲げたものと方形のものが各1点ずつ出土した。いずれも欠損しているために正確な寸法は不明であるが、538は頭部幅0.9cmで、全長が5～6cm、539は頭部幅1.5cmで、全長は6.5～7cmとなる。身部の断面形態はいずれも方形である。

五輪塔 (540～546)

1号中世墓に伴う五輪塔は空風輪3点、火輪1点、地輪3点の計7点である。出土時には点在しており、水輪が欠落していることから五輪塔としてのセットは復元できず、個別に所見を記すことにする。

空風輪3点のうち541は凝灰岩製、542・543は砂岩製でいずれもほぼ完形品である。石材によって形態上はそれぞれが異なっている。540は空輪部分・風輪部分のいずれもが細長い形態をもち、空輪の頂部はわずかに突出するのみである。また、風輪の下部の突起は欠損してはいるものの、2cm程度の安定した突出度をもつ。541・542はやや幅広の形態で空輪には明瞭



第65図 ST2001出土五輪塔

な突出をもつ。下部の突起の形態や空輪と風輪のバランスが異なる。

砂岩製の火輪543は上面に径3.7cm、深さ1.8cmの断面矩形のほぞ穴をもつ。傘部にはわずかな反りがある。下面は平坦で、鑿による加工痕がみられる。

地輪(544~546)は石材によって形態がまったく異なる。砂岩製の544はほぼ立方体の形態をもち、上面には径3.85cm、深さ0.85cmの断面U字形のほぞ穴を穿つ。凝灰岩製の545・546は幅・奥行きに対して高さが1/2以下と低く、上面下面とも平坦である。側面と下面には鑿による整形の痕跡を非常に明瞭に残し、側面では整形時の左右方向へ、下面では外から内側

への整形が行われている。整形に使用された鑿のうち刃幅の明かなものは545が3.6cm、546の側面が1.2cm、下面が3.5cmである。

こうした五輪塔のうち、空風輪の形態、砂岩製火輪の傘部の反りからみて、凝灰岩製のものにより古い傾向がみられる。しかし、石材の違いが形態に制約を与える可能性があり、ここでは中世末というような幅のある年代の位置づけにとどめておきたい。

以上のように、1号中世墓は2基の火葬施設（SK01・SK04）と2基の埋葬施設（SK02・SK03）、それに覆う基壇状施設またはそれに類する集石、基壇状施設の上表施設としての五輪塔、という3つの中世墓としての要素をもっていた。そして、それらが築かれていく状況は以下の通りである。

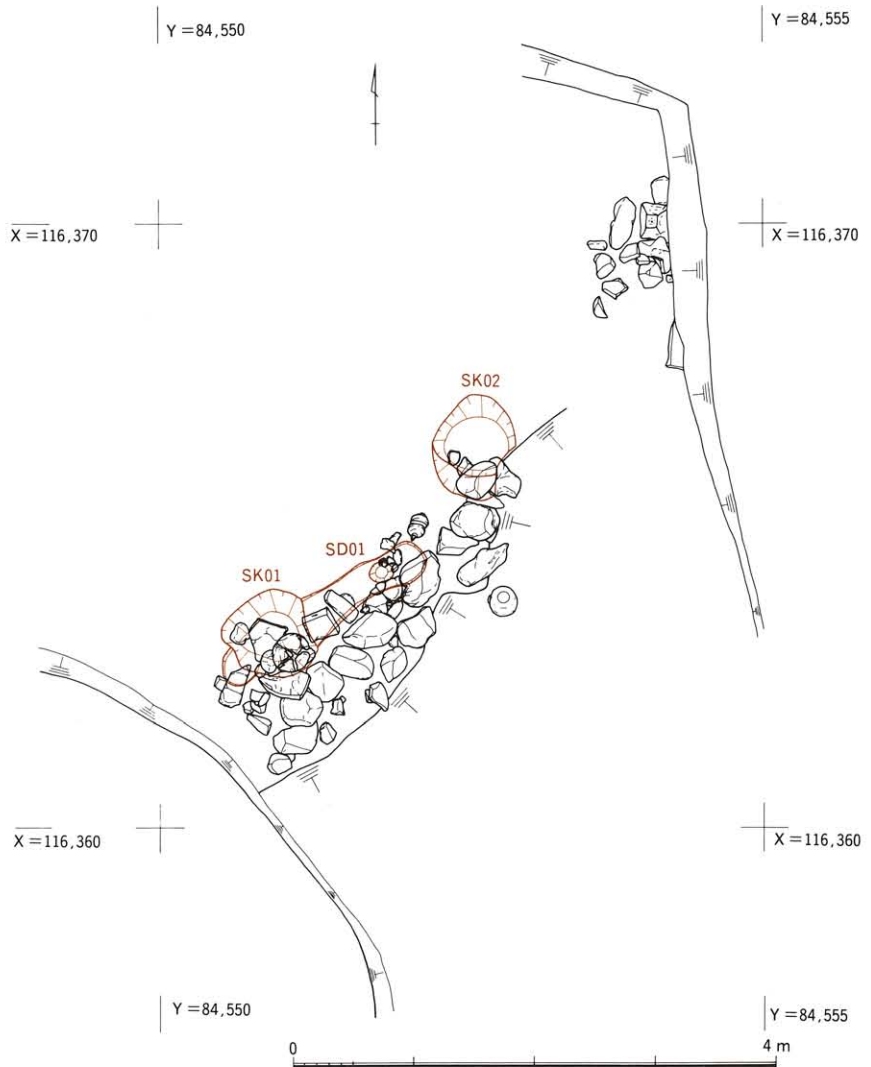
第1段階→第2段階→第3段階→第4段階→第5段階

整地	SD01	SD01'	SK02	基壇状施設
SK01			SK03	五輪塔設置
			SK04	
			SP01	
			SP02	
			SP03	
			長方形石組	

これによると、火葬施設・埋葬施設の2組が異なる段階で形成されていながら、最終的に基壇状施設へと結びついている点が興味深い。築造された年代は出土した土器からだけでは、厳密におさえることができないが、五輪塔の型式からみると近世のものも含まれており、築造から五輪塔による継続的な供養にいたる年代幅を数十年を基本としていると見積もれば、中世末の15世紀頃とみることも可能であろう。類似した遺構として県内では、阿波郡市場町上喜来遺跡⁽¹¹⁾が知られているが、築造の諸段階が明確に逐えるという点で本遺跡例は注目される。今後、中世土器と遺構出土の五輪塔の資料の蓄積と編年が期待される。

2号中世墓 (ST2002) (第66図)

南東部斜面の
標高49.3m、
F・G-9・10
グリッドにおい
て検出された。
調査区がくびれ
る部分で、砂岩
の石材などが帯
状に連なって出
土したことから
存在が確認され
た。砂岩の自然
石に混じって、
砂岩製・凝灰岩
製の五輪塔や五
輪板碑が散見さ
れる。検出時点
で砂岩の石材に
凝灰岩製の五輪
塔の水輪・地輪
が混入していた
ことから、下部
遺構があること
が予想された。

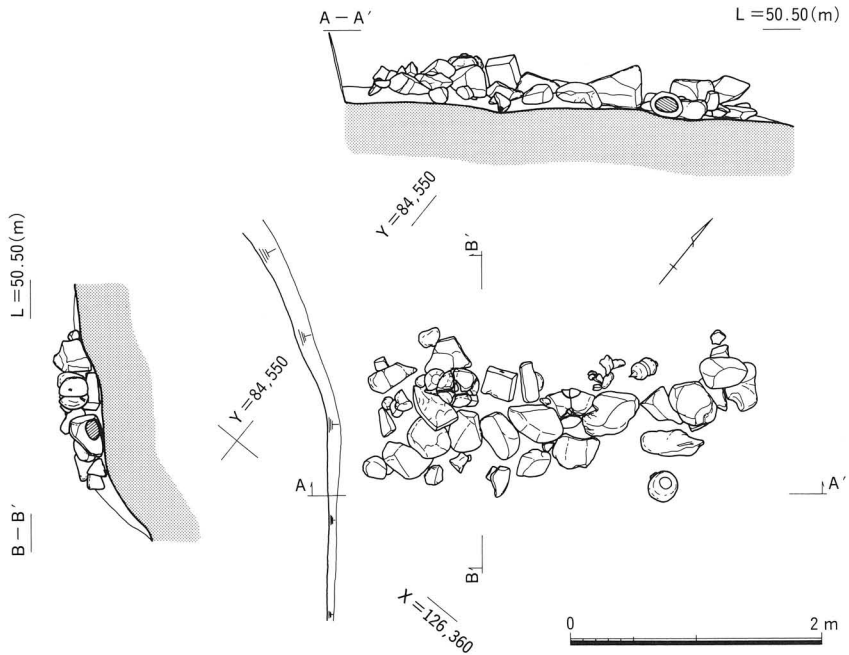


第66図 ST2002検出状況

上位の浮いた石材や五輪塔などを除去すると、土坑 (SK01) の上面に火輪・水輪・地輪が重なって出土した。また、SK01は溝 SD01を切って形成されるほか、SK02も SD01の延長上より検出された。調査区東壁において検出された一群の石材については、下部遺構が伴っていないが、調査区外にその中心となる別遺構があったと考えることができる。

SK01 (第68図) 火葬を経た人骨を埋納した土坑である。ややいびつな円形で、長軸0.88m、短軸0.70m、深さ0.30mを測る。土坑の上面には凝灰岩製の地輪と水輪が本来の位置関係の状態 で重なって出土し、その北側には火輪が幾つかの断片となって出土していたため、倒壊した状態が非常によく分かる。空風輪こそ失われていたもの本来は一組が揃って墓標として

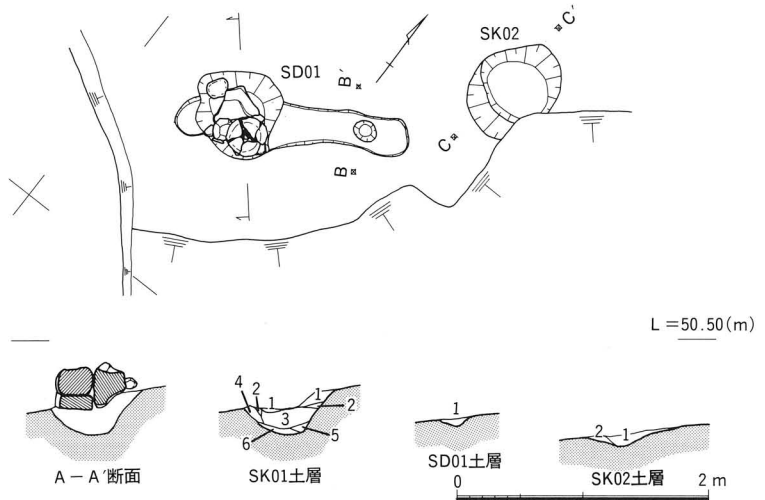
用いられていたことが想定できる。土坑内の堆積には焦土が含まれていないことからこの遺構内では火葬が行われていなかったが、第3層は炭化物和灰の混合した堆積であり、火葬人骨はこの層と共にSK01に持ち込まれたことが想定される。その後基盤層と似た性質



第67図 ST2002平面図・断面見通し図

の第2層、さらに第1層が五輪塔の地輪を据えた後に堆積したと考えられるため、火葬人骨を埋納した後に第2層によって整地し、五輪塔を据えるという一連の行為が復元できる。

SK02 (第68図) やや変形した円形で、長軸0.85m、短軸0.67m、深さ0.09mを測る。上部に砂岩製の五輪塔が散見されたものの、SK01の様な五輪塔の集中した出土はみられなかった。鉄釘が1点第1層中より出土している。第1層には多量の炭化物を含んでいることから、SK01と同様の築造過程が復元できる。これらのことより、SK01の様な五輪塔による表象施設を供えていたかについては



SK01	1 にぶい黄色2.5Y6/4砂質土	5 灰黄色2.5Y7/2砂質土
	2 浅黄色2.5Y7/4砂質土	(4層より炭化物多く含む)
	3 黒色2.5Y2/1炭化物・灰の混合層	6 黄灰色2.5Y5/1砂質土
	4 灰黄色2.5Y7/2砂質土	
SD01	暗灰黄色2.5Y5/2砂質土	
SK02	1 灰黄褐色10YR4/2砂質土	2 灰黄褐色砂質土10YR6/2砂質土
	(炭化物を多く含む)	

第68図 ST2002下部遺構平断面図

不明であるが、有機質の骨蔵器におさめた火葬人骨を埋納した土坑として機能していたことを想定しておきたい。

SD01 (第68図) 長細く伸びており、その規模は全長1.10m、最大幅0.36mを測る。主軸方向はN-58°-Eである。底面のレベルは北東側へ緩やかに傾斜している。溝は全般に浅い落ち込み上を呈しており、深さは最も深い部分で0.06mである。溝内の北東部寄りには径0.17~0.20mの浅い落ち込みがある。出土遺物や、溝内の堆積状況からは性格を特定することは困難であり、SK01・SK02との位置関係を考慮して火葬に伴う可能性を指摘するのにとめておく。

出土遺物 (第69~72図)

鉄釘 (564)

頭部を平たく伸ばして折り曲げたものがSK02より1点出土している。頭部幅0.85cmで、全長6~7cmとなるものである。蔵骨器などに伴うものであろうか。

五輪塔 (547~563)

SK01に伴うもの (第69図)

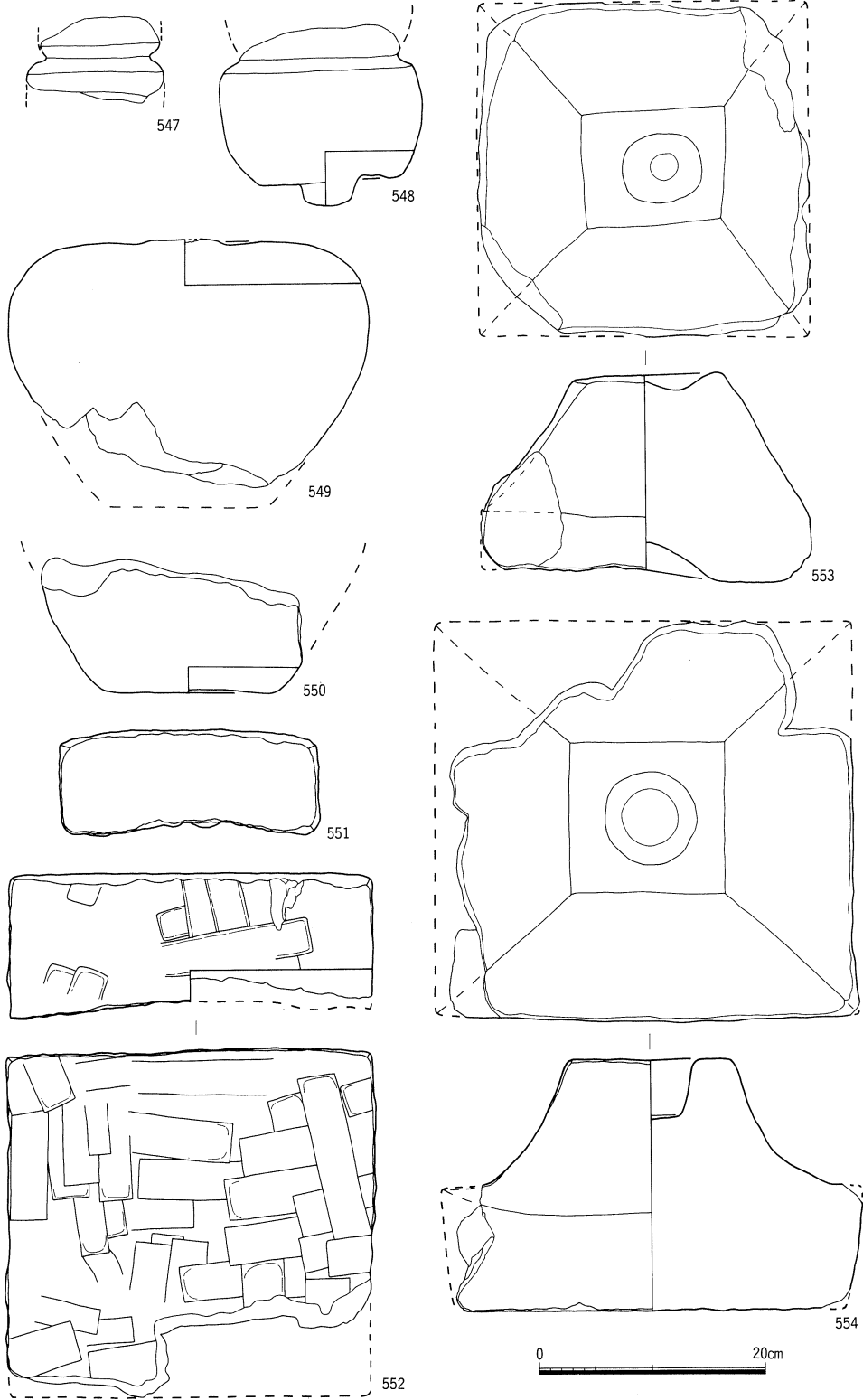
出土した五輪塔の各部位はいずれも凝灰岩製であり、セット関係を復元するのに良好な状況であった。

出土状況から火輪554・水輪549・地輪552のセット関係が明かである。火輪554は石材が脆いために細かい破片となっていた。上面に径8.2cm、深さ5.1cmの矩形のほぞ穴を穿つ。傘部には緩やかな反りがある。水輪549は554同様十数片に割れて一部を欠損していたが、接合によって図のように復元できる。胴体部分の最大径を上位寄りにもつ。上面には高さが1.1cmの偏平なほぞがある。552は幅・奥行きに対して高さが1/3に近く偏平である。下面には特に鑿による整形痕が著しく、3cm以上が端面より削り込まれている。鑿の刃幅は3.2cmである。

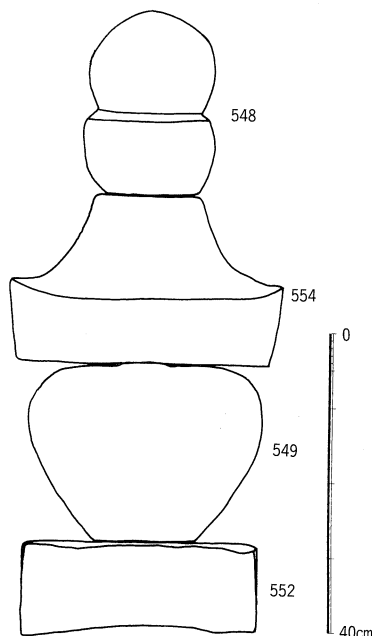
空風輪547は空輪と風輪のくびれのみを残存状態はきわめて悪い。火輪553は全体の形状はとどめているものの、各端部が摩耗している。上面には径7.0cmのほぞ穴を穿つが、深さが1.4cmでほぞ穴として機能していたかは疑問である。水輪550は上半を欠損している。下面はほぼ平坦である。地輪551は小型で偏平である。法量・石材からみれば空風輪547・火輪553とセットとなることが想定される(第70図)。552のように明瞭な鑿による整形痕は残さない。

その他 (第71図・第72図)

空風輪2点はいずれも砂岩製で、砂岩製のものの中ではやや細身の特徴をもつ。555は下面に明確な平坦面をもつ。火輪557は凝灰岩製で、一部を欠損しているもののシャープな造りであり、上面のほぞ穴には明確な下端がある。水輪559は凝灰岩製で磨滅が著しく、本来の形状



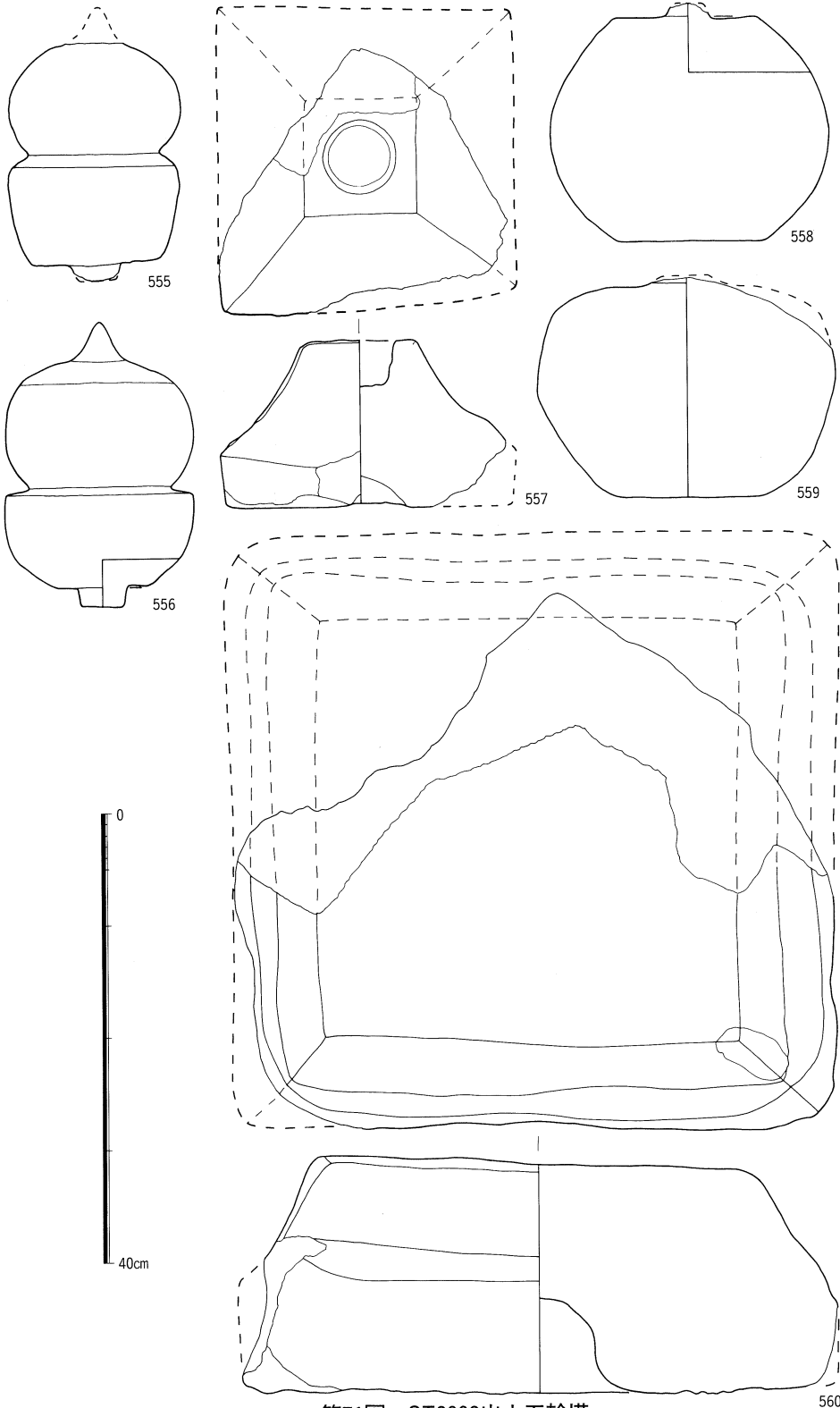
第69图 ST2002·SK01出土五輪塔



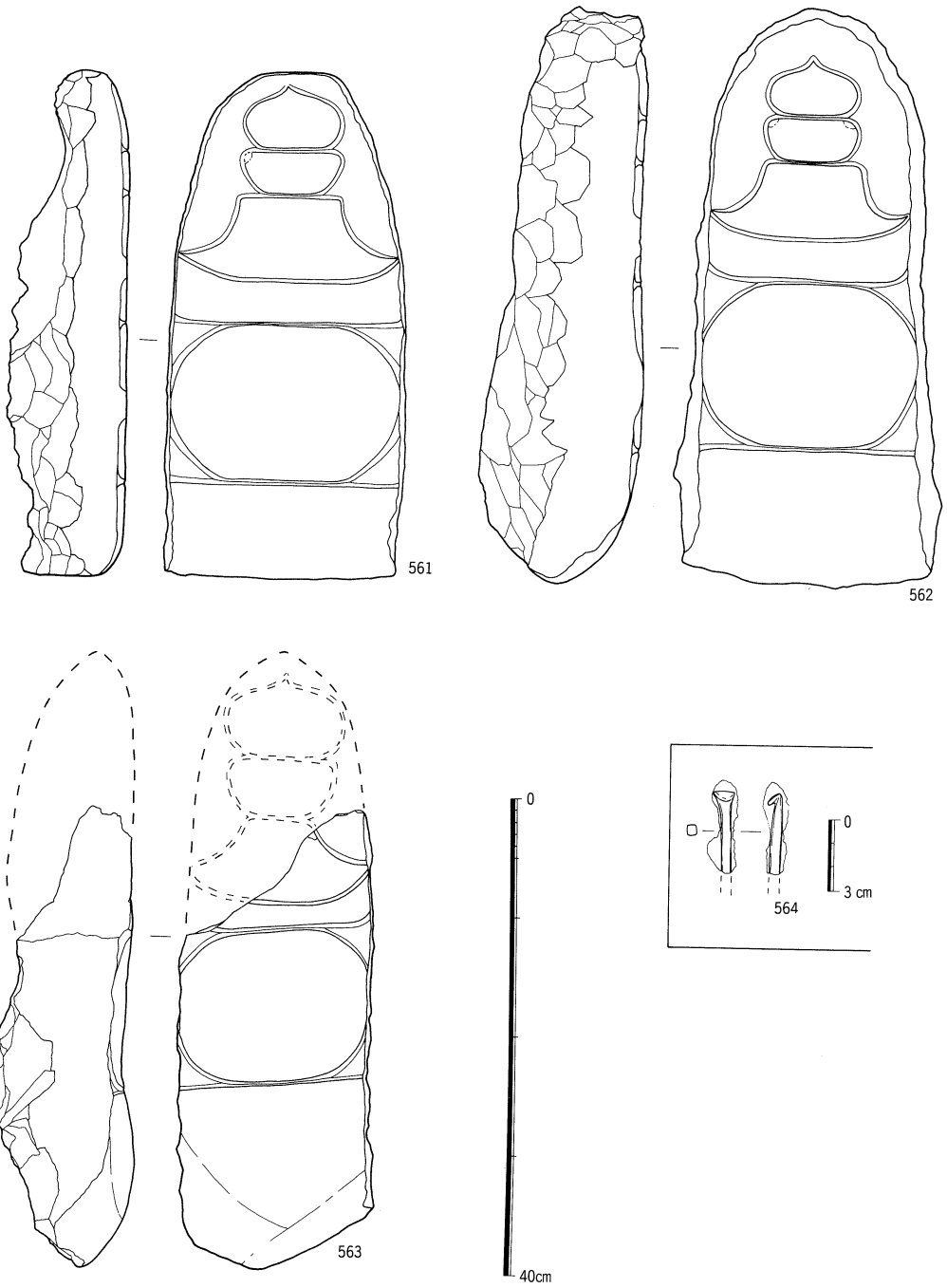
第70図 ST2002・SK01出土五輪塔復元図

をとどめている部分は少ない。
 台座560は広い範囲に破片が広がっており、帰属する遺構が不明であるが、2号中世墓周辺からもっとも多くの破片が出土した。凝灰岩製である。上面には一辺38cmに復元される平滑に整形された平坦面を有し、下面には径12.85cm、高さ8.5cmの大形の穴をもつ。
 五輪板碑は砂岩の自然石を利用し、その平坦な自然面を利用して五輪塔の各部位を浮き彫りに刻み、背面は舟底形に鑿によって加工が施されている。561はやや全体に幅広で、当遺跡出土のものとしては寸詰まりの感を受ける。自然面を側面の一部に生かし、背面には鑿による大きな加工痕がある。火輪の傘の部分は反り上がっているが、全体の形に制約を受けるためか水輪・地輪は偏平な形に刻まれている。562は561に比べるとやや細身ではあるが、刻まれた五輪塔各部位の形態はやはり偏平なものとなっており、そのためか空輪頂部にはやや間隙を残す。鑿による加工は背面から頂部にまでゆきわたり、一度の加工によって削り落とす量はやや少な目である。563は2号中世墓の中でも最も細身のもので、頂部を欠損している。裾部分の形態は利用した石材の形態に制約され、丸くなっているため、地輪本来の形態が描写されていいない。鑿による加工は大きな単位で行われている。

2号中世墓の状況を整理しておくとして、SK01・SK02の二つのほぼ同一の規模を有する2基の埋葬施設とその上表施設からなるものであった。いずれの遺構にも、強い焼成の痕跡は認められなかったため、火葬は別の施設で行われている。周辺にみられる砂岩製の石材についても後述する3号中世墓や4号中世墓同様に基壇状の施設を有していたとみることが可能である。SK01では、上表施設として据えられた五輪塔が現位置で出土した。五輪塔のセットがおさえられたことと共に、中世墓における上表施設の状況が窺える貴重な資料である。出土した土器がないため、築造年代は明確にしがたいが、SK01の上面に据えられた五輪塔の型式が1号中世墓のものよりも古い要素をもっている。ただし、五輪塔の材質が型式差に関与している可能性も現段階では否定できず、2号中世墓自体に火葬施設をもたないことや供養の年代幅を考慮すれば1号中世墓と同様中世末と考えておきたい。また、周辺で点在していた五輪板碑などは継続的な供養によるものとみられ、近世まで供養の対象とされていたことが想定される。



第71図 ST2002出土五輪塔



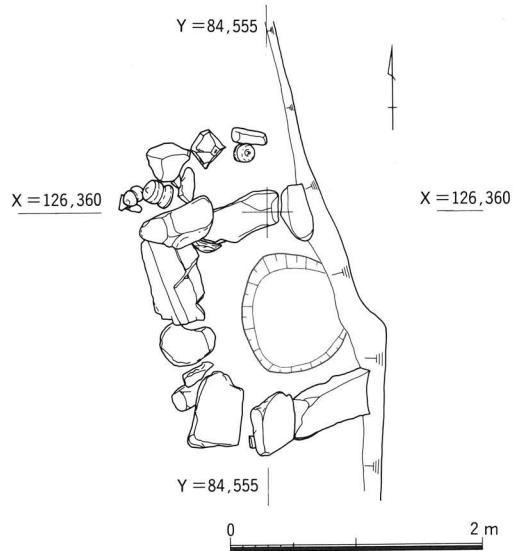
第72図 ST2002出土五輪塔・SK02出土鉄釘

3号中世墓 (ST2003) (第73図)

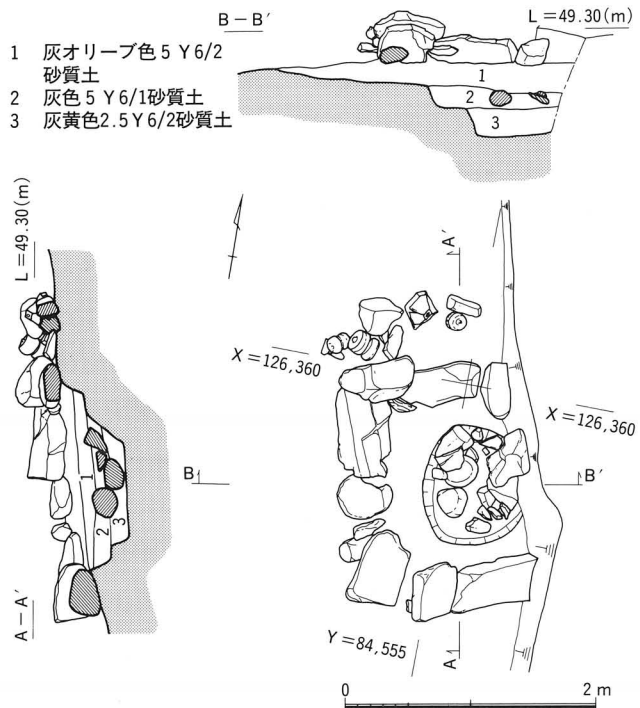
南東部斜面、緩やかな傾斜地のE・F～10・11において検出された。標高は48.2mにあたる。北西側のST2002、南側のST2004とはそれぞれ約2m離れている。検出時において石材が□字形に組まれていることが明かとなったが、調査区外に一連の遺構が広がっているものとみられ、本来は「□」字形であったと想定される。□字形石組の北側には空風輪3点、火輪1点が散乱していた。

□字形石組は南北の長さが2.34mで、北辺では1.39m・南辺では1.52mが検出された。いずれも砂岩製の自然礫で、形態・大きさにはばらつきがみられ、特に規則性は窺えない。北西コーナーでは2段目が残っている。この部分の高さは下部の土坑検出面から0.41mである。下部の土坑を埋めた段階で砂質土による若干の盛り土を行い(第74図1層)、石組を築き始めている。

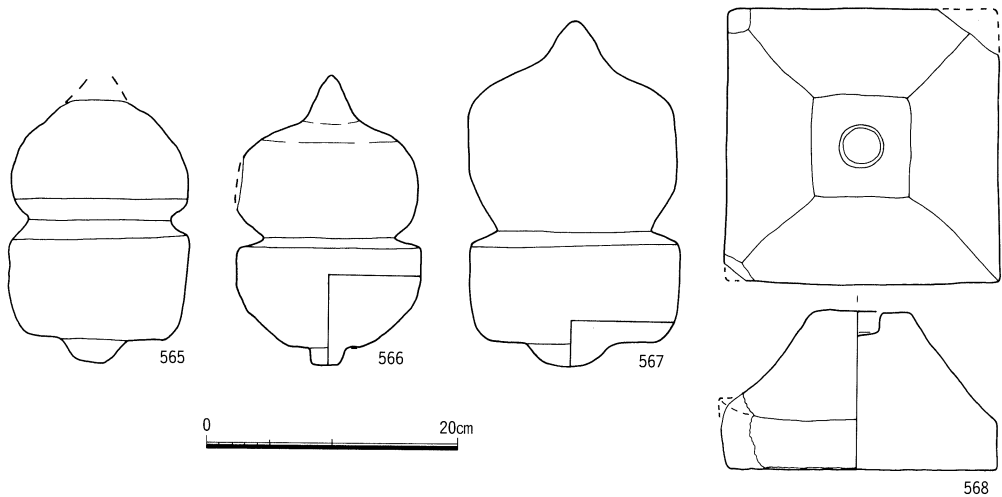
石組内中央部より、やや歪んだ円形の土坑が1基検出された(第74図)。この土坑も調査範囲の関係で全形は不明であるが、長径0.88mで、短径は0.80mに復元される。深さは0.25～0.41mである。ほぼ半分の高さに段が巡る。底面は平らに整えられている。坑内にはマンガンを少量含む2層の砂質土が平行に堆積していた。炭化物や人骨、その他の遺物は認められなかった。土坑の壁には焼けた状況は観察されなかった。しかし、土坑の規模・形状や石組施設、散乱する五輪塔の状況から埋葬施設とみられる。



第73図 ST2003検出状況



第74図 ST2003平面図断面見通し図



第75図 ST2003出土五輪塔

出土遺物 (第75図)

五輪塔 (565～568)

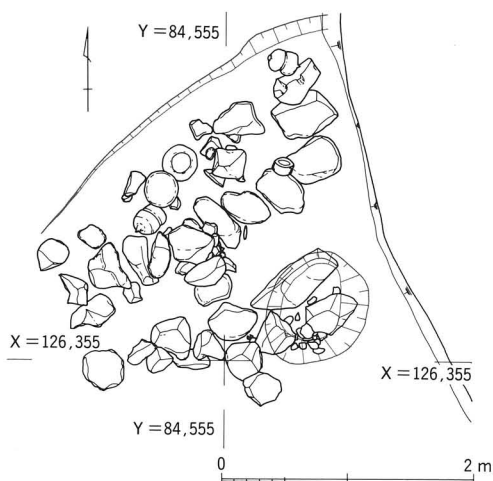
凝灰岩製の空風輪 1 点 (565)、砂岩製の空風輪 (566・567)・火輪 (568) の計 4 点が出土した。本来の組合せは復元できない。565は軟質であるために、空輪部分が摩滅してやや細身となっている。566は頂部は尖り気味である。下方への突出もしっかりしている。567は他の 2 点と比較して大形であるが、同じ砂岩製の566と比較すると頂部や下方への突出にシャープさが欠けている。568は下面にくり込みをもたない。稜線がシャープで566との組合が想定できる。

3号中世墓について若干のまとめを行っておくと、調査範囲の関係上全体を調査することができなかったが、□ (□) 字形の石組を伴う埋葬施設である。しかしながら、埋葬施設である土坑内では火を焚いた痕跡は認められず炭化物も出土しないことから、埋葬が行われた1号中世墓 SK02、2号中世墓 SK01と比較すると、火葬を経ないで埋葬に至っている点異なる。石組の上部の構造は破壊されているため不明であるが、石組によって基壇状の施設とし五輪塔を上表施設として設けていたことが想定されるが、地輪など五輪塔の下位の部材が付近から出土していない。築造された年代は土器の出土が出土していないことから決めがたいが、五輪塔の形態が1号中世墓・2号中世墓出土のものと同様の傾向を有することから、これらに近い中世末の年代を想定しておきたい。

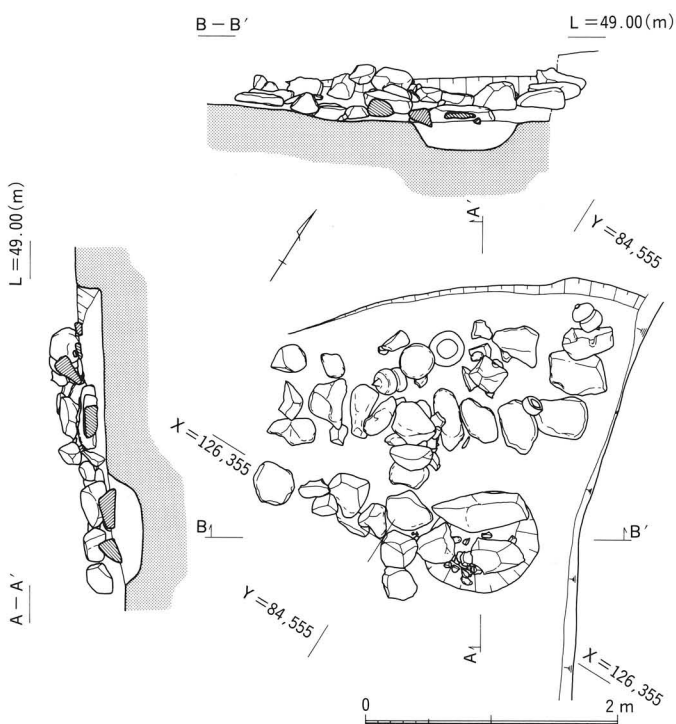
4号中世墓 (ST2004) (第76図)

D・E-10・11において検出された中世墓で、本遺跡において最も南で検出された遺構である。3号中世墓とは隣接する位置にある。標高47.75mの等高線に沿うように帯状に石材が広がって検出された。検出状態において石材は、 Γ 字形の部分とこれにつけ加わる西側の部分とからなるとみられた。一部は調査区外へ伸びており、 \square 字形になっていたものと想定される。 Γ 字形石組の北西コーナーでは2～3段分の石組が残る。これらの Γ 字形石組の北側にはさらに石材や五輪塔が散乱していることからみて、上部構造を伴っていたことがわかる。 Γ 字形の石組の西側からは、下部遺構が検出されなかった。

Γ 字形の内側では、不整形の土坑が検出された(第77図)。土坑は長軸0.93m、短軸0.79mの規模をもつ。浅い皿形の掘り込みで、深さは20～30cmである。埋土には少量のマンガンを含む砂質土が平行に堆積しており、焦土・炭化物・人骨などは認められなかった。他の中世墓の状況からみて火葬を経ていない埋葬施設であると考えられる。



第76図 ST2004検出状況

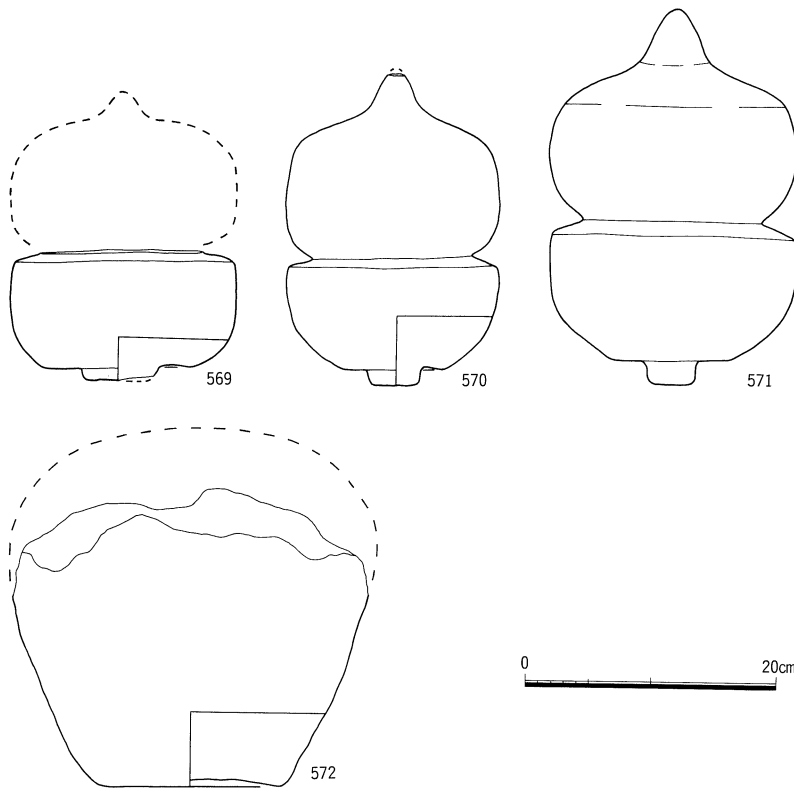


第77図 ST2004平面図・断面見通し図

出土遺物 (第78図)

五輪塔 (569～572)

砂岩製空風輪3点、凝灰岩製水輪1点が出土した。空風輪は、1～3号中世墓のものと比較すると、大形の傾向がある。砂岩製のやや寸胴となる特徴はここでもみられる。特に569は風輪部のみの破片であるが、下半が強く張る傾向をもつ。570は重量12.8kgで特に大形のもの



第78図 ST2004出土五輪塔

の石組であったとも考えられる。上部の構造は不明であるが、基壇状の施設とし五輪塔を上表施設としていたとみられ、3号中世墓と類似した構造が指摘できる。方形の石組を伴う中世墓ではその一辺を共有した石組を連続して築くことがしばしばみられるが、西側のやや崩れた石組については当てはまらなかった。築造年代は出土土器がなかったために不明であるが、出土した五輪塔の形態の特徴が他の中世墓出土のものと類似しており、それらとの近い中世末年代を想定するとどめておきたい。

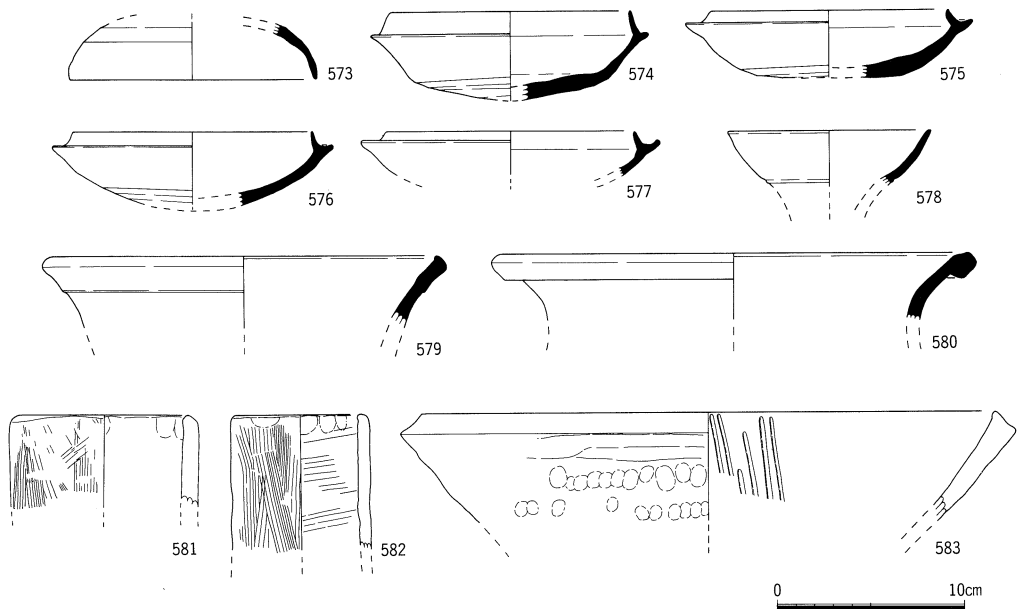
中世墓周辺出土の土器 (第79図)

中世墓周辺からは、古墳時代に属する須恵器と中世に属する土師質土器の2種がみられた。それらの帰属する遺構は不明ではあるが、3号墳や中世墓群との関わりから重要と思われるものもあり、図示を行った。

須恵器の蓋杯にはやや形態差が認められる。574は口径・器高・立ち上がりについて他の3点と異なる特徴をもち、古い型式の特徴をもつ。これらについては、TK43型式～TK209型式にかけてのものであり、本来古墳に副葬されたものであろう。

である。水輪571は頭頂部が欠損しており、全体の形状は不明であるが、やや胴長の傾向をもつ。これは五輪塔の形態変遷の中では、やや古い特徴である。

4号中世墓では、「字形または□字の石組を伴う埋葬施設を有していた。斜面の下位側が切れていることになるが、破壊のため失われていたとすれば□字形



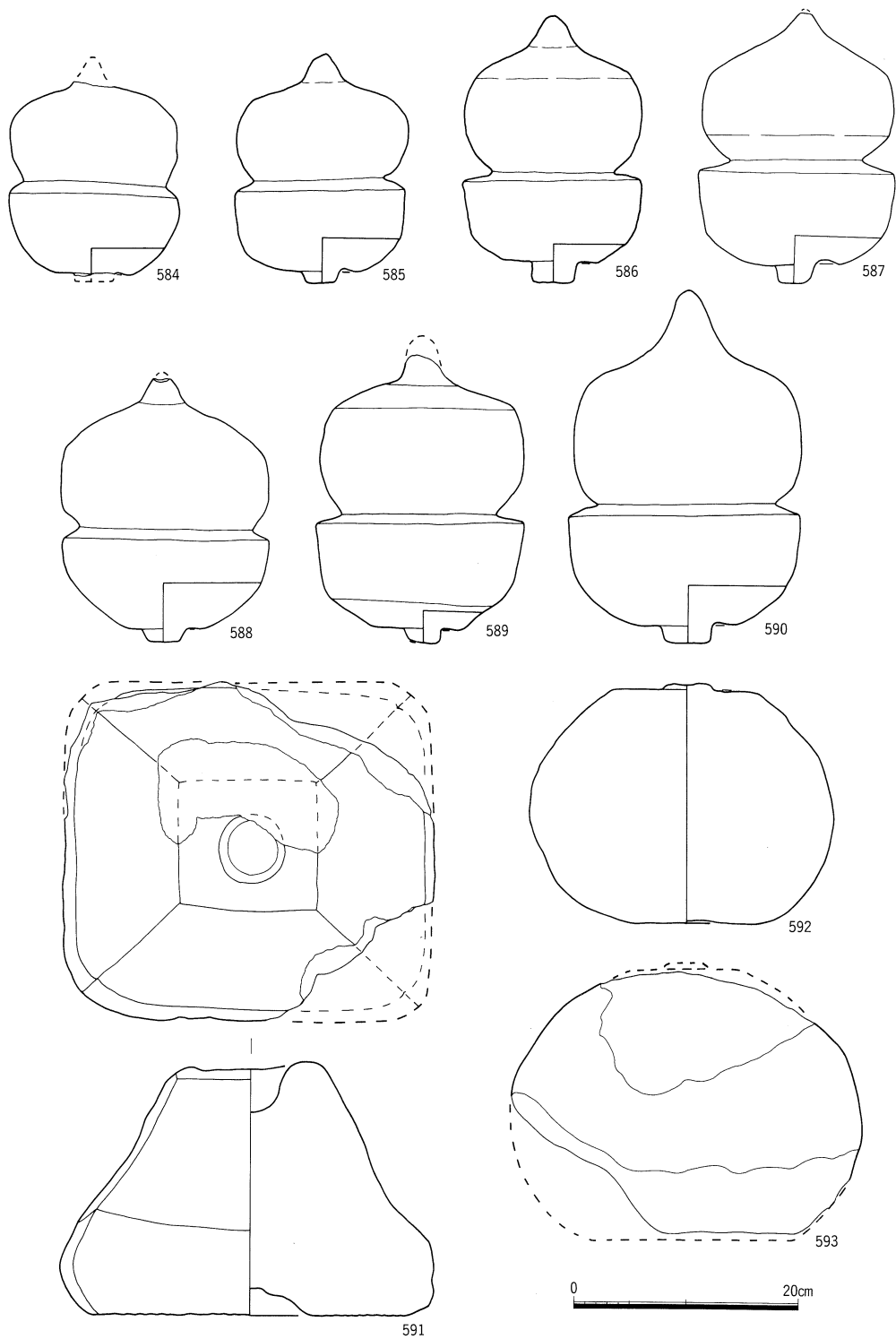
第79図 中世墓周辺出土土器

581・582は同様の形態をもつが別個体の口縁部で、1号中世墓で出土した円筒形の土師質土器と形態的に類似している。581は直立する器形で口縁端部が内側への折り曲げがやや強いものである。内面には縦方向のハケ（6条/cm）が端部付近まで施され、口縁部内外面には指頭圧痕が顕著である。582も円筒状に直立する器形であるが、581と比較して端部の折り曲げが弱い。外面のハケは斜め方向（5～6条/cm）にもみられ、内面にはやや粗い原体（3～4条/cm）による横方向のハケが施される。2点とも調整の不十分な内面の器壁が粗く、砂粒の浮き出しが著しい。遺構に伴っていないものの、調査区外にさらに中近世墓の分布が広がっていることから、1号中世墓出土土器と同様蔵骨器の用途が考えられる。

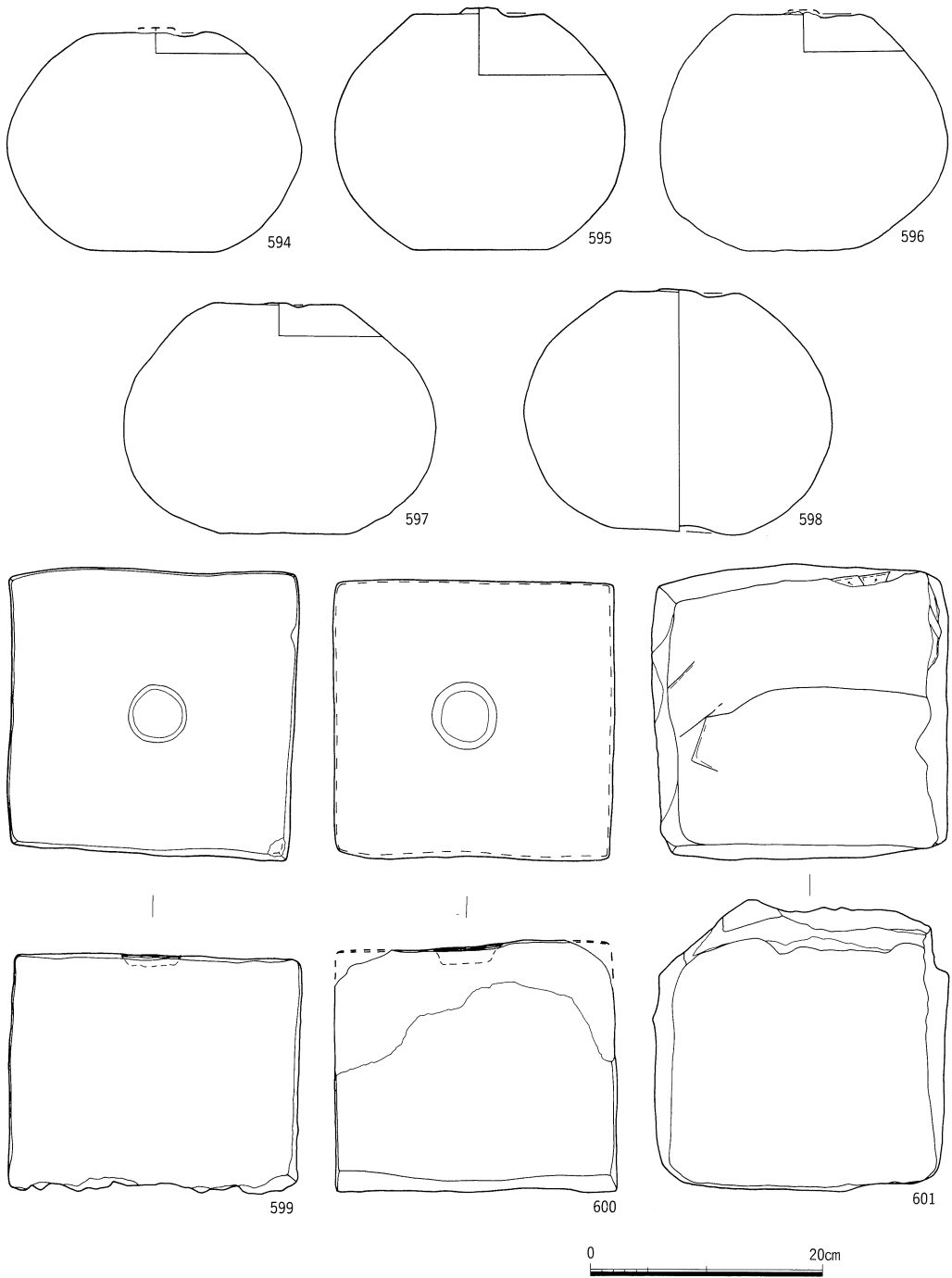
遺構に伴わない五輪塔（第80～83図）

本来の位置を離れて出土したもののうち、遺存状況の比較的良いものから28点選び図化を行った。以下では、これらをST2001周辺で出土しST2001に伴う可能性が高いもの（第80図・第81図）と、ST2002以南で出土しST2002～2004または調査区外に広がる別遺構に伴うもの（第82・83図）に大きく分けて記述する。

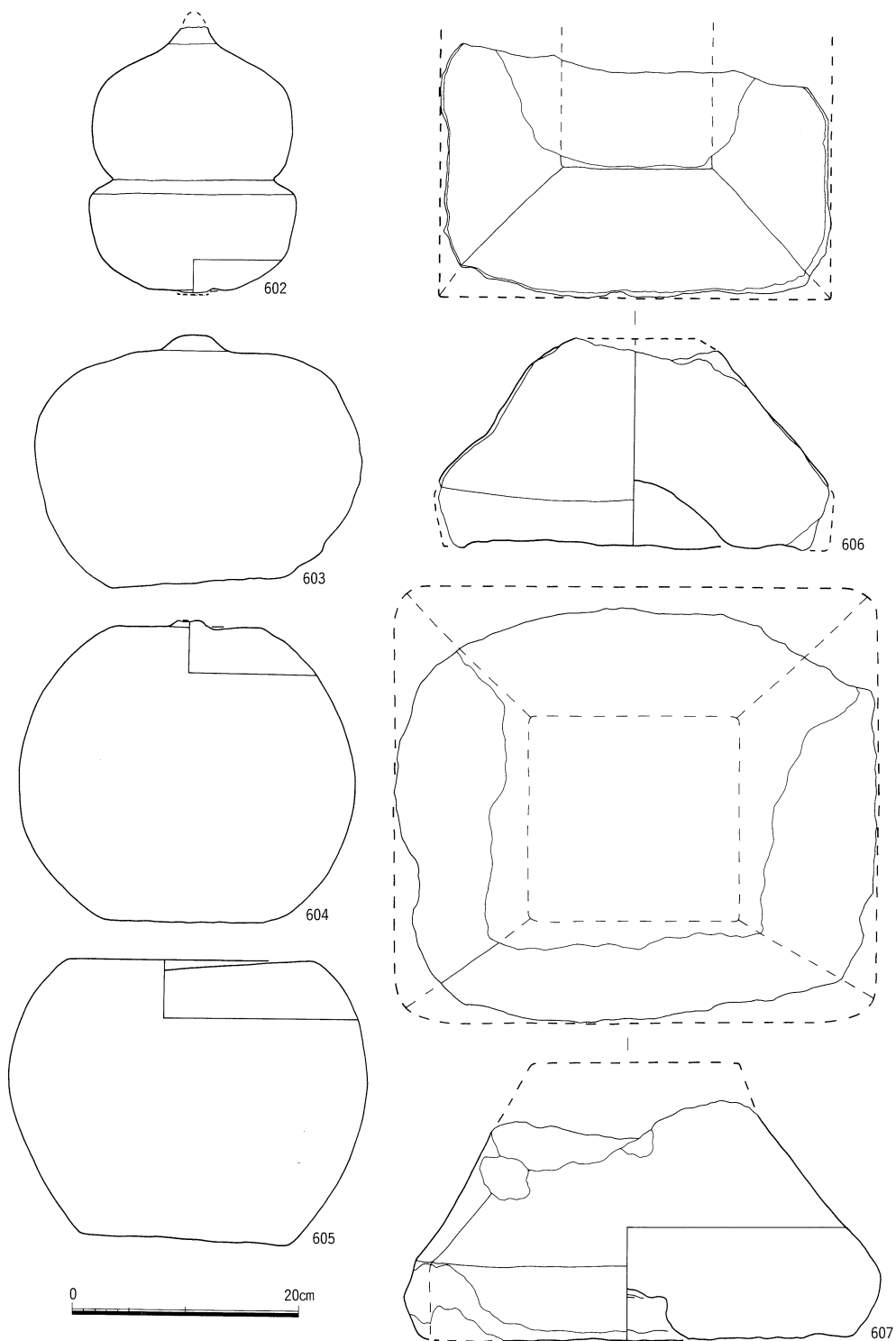
ST2001周辺で出土した五輪塔は砂岩製のものが中心である。空風輪は7点でいずれも砂岩製である。部分的に欠損しているものも含まれるが、遺存状況はおおむね良好である。高さ20～30cm、幅が風輪の上端で15～20cmの範囲におさまるものである。各部位の形態などに若干の違いがみられる。その中でも590はもっとも大形で、空輪頭頂部の突出や下部の突起は明瞭である。火輪591は凝灰岩製で各所が破損して欠損している。幅・奥行きに対してやや高い。



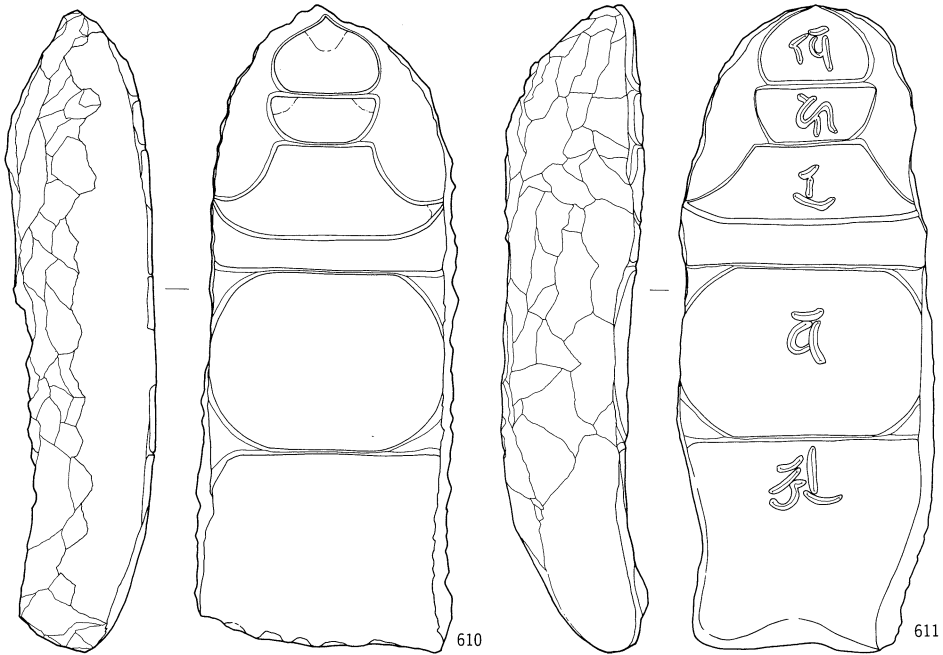
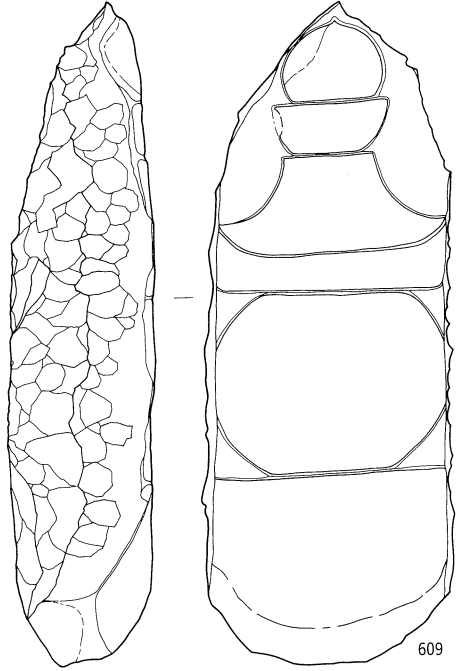
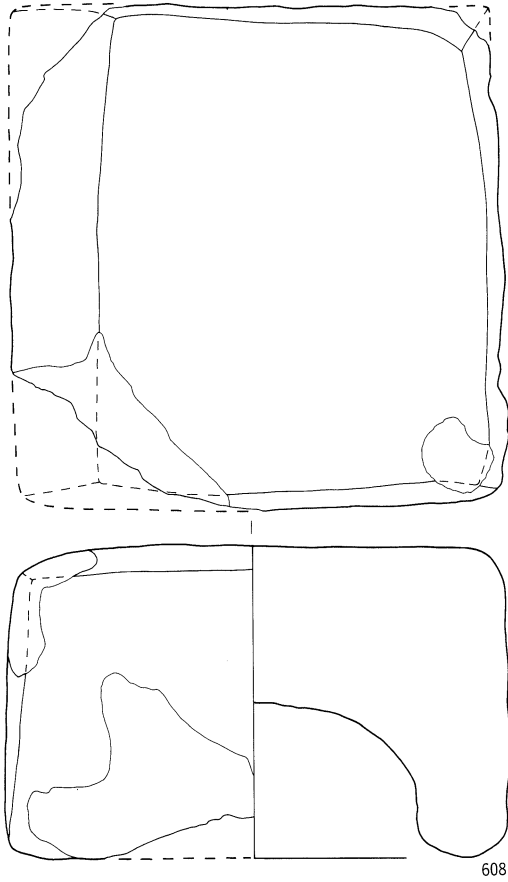
第80図 遺構に伴わない五輪塔 ST2001周辺 (1)



第81図 遺構に伴わない五輪塔 ST2001周辺 (2)



第82図 遺構に伴わない五輪塔 ST2002~2004周辺 (1)



第83図 遺構に伴わない五輪塔 ST2002~2004周辺 (2)

上面には径6.15cm、深さ3.65cm、下面には径10.3cm、深さ2.5cmの円孔をそれぞれ穿つ。水輪は592、594～598が砂岩製、593が凝灰岩製である。592、594～598は火輪の下面にほぞ穴を穿つものがあることから上下を正確に特定できなかつた。最大径が中央部にこない偏球形で、片面に弱いほぞをつく。593は表面の剝落が著しく、原形はほとんどとどめていない。地輪599～601は砂岩製で、立方体に近い形態を呈する。599・600は上面に浅い円孔を穿つ。599の下面は平坦に仕上げられていない。601は上面も平坦ではなく、未製品であろうか。

ST2002以南の五輪塔は砂岩製と凝灰岩製が相半ばしている。602は凝灰岩製の空風輪で、凝灰岩製としてはやや高さに比して幅広の形態である。606・607はいずれも凝灰岩製の火輪で欠損部分大きい。いずれも下面にほぞ穴をち、傘部の反りはほとんどない。603～605は水輪である。605は上下とも明確な平坦面をもち、ほぞをもたない。608は凝灰岩製の地輪で、他の地輪と比較すると、幅・奥行きに対する高さが著しい。五輪板碑はD-4グリッドを中心に3点が出土した。いずれも砂岩製で、自然石を利用し、自然面に五輪塔を浮き彫りとなるように線刻したもので、背面の成形は鑿によって舟底形に加工を加えたものである。611は五輪塔の各部位にさらに梵字を刻んだもので、空輪より下へ向かって「キヤ・カ・ラ・バ・ア」で、「空風火水地」を表したもので、五輪塔に刻まれる文字としては最も一般的なものである。

注

- (1) 「山田古墳B」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 3 1991年度』(財)徳島県埋蔵文化財センター 1992
- (2) 西弘海「土器様式の成立とその背景」『土器様式の成立とその背景』真陽社 1987
『古代の土器 1 都城の土器集成』古代の土器研究会 1992
- (3) 田辺昭三『陶邑古窯址群』平安学園考古クラブ 1966
田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- (4) 轡についての用語は、岡安光彦「いわゆる『素環の轡』について—環状板付轡の型式学的的分析と編年」『日本古代文化研究』創刊号(古墳文化研究会 1984)による。
- (5) 宮代栄一「いわゆる貝製雲珠について」『駿台史学』76 1989
- (6) 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4 1978
- (7) 尾上実「大阪南部の中世土器—和泉型瓦器椀—」『中近世土器の基礎研究』1985
尾上実「南河内の瓦器椀」『藤沢一夫先生古希記念 古文化論叢』1983
- (8) 『石井町史 上巻』1981
- (9) 「上喜来遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 3 1991年度』(財)徳島県埋蔵文化財セン

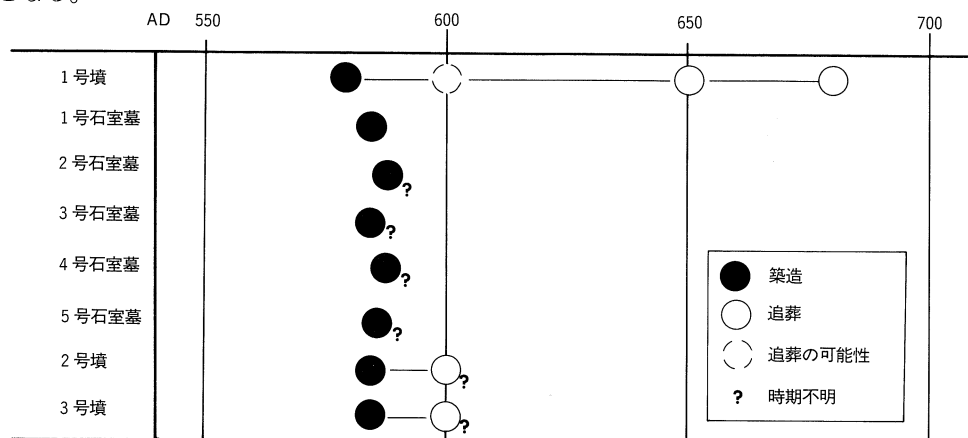
ター 1992

- (10) 森田稔「東播磨」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸窯検討のための「会津シンポジウム」資料 1992
- (11) 注（9）文献に同じ

3 まとめ

1 古墳群の築造課程

今回の調査では、尾根上において横穴式石室を主体とする2基の円墳（1号墳・2号墳）と5基の小竪穴式石室（1～5号石室墓）が、南東斜面部では1基の横穴式石室（3号墳）が検出された。それぞれの築造と追葬の過程を副葬された須恵器の年代から示すと次の通りとなる。



第84図 各遺構の造営過程

1号墳は出土状況が安定していなかったものの、排水溝内と前庭部にかけて100個体近くの須恵器が出土した。須恵器は複数型式にまたがるものの、もっとも古いグループである6世紀後葉のものが大部分を占め、この年代の築造であることになる。2号墳はその周壕が1号墳の墳丘を一部切り込んでいることが確認され、1号墳より後出することが確実である。出土した須恵器は蓋杯2組と多くはなかったが、年代を決め得る資料である。1号墳築造段階のものと型式差はなく、6世紀後葉の段階でもわずかに新しい年代を想定した。3号墳は横穴式石室から出土した須恵器は杯蓋2個体分で年代決定にはやや弱いですが、周囲で出土した須恵器についても同型式である。6世紀後葉の築造とみられるが、3号墳が築かれた南東斜面部分に尾根に先行して古墳を築造することは考えにくいいため、1号墳の直後の年代を与えた。したがって、古墳の築造は6世紀の後葉～末にかけてすべて終了していることになる。

追葬については、1号墳と2号墳・3号墳の各古墳で行われている。2号墳は耳環の移動を、3号墳は耳環の点数（3点の出土）を根拠としており、それぞれの年代は不明であるが、1号墳での場合のように長期間にわたる追葬ではなかったものと想定できる。1号墳では出土須恵器から7世紀中葉と後葉にそれぞれ追葬が行われていることが確実である。その他に須恵器の形態が2段階程度に型式分類が可能であること、7世紀中葉までの追葬までの間隔

が長すぎることから西暦600年頃の追葬を想定している。耳環が3点出土しており、金銅製の1点(112)を初葬に伴うと仮定した場合、残りの2点(113・114)は早い段階での追葬に伴うとみられる。

1号墳周囲の5基の石室墓のうち、年代決定の根拠となる副葬須恵器をもつものは1号石室墓のみである。5号石室墓の場合は数点の須恵器が上面などから出土しているものの、これらの須恵器に年代幅がみられることを考慮すれば、埋葬後の祭祀などの可能性は否定できないが、むしろ1号墳の横穴式石室より掻き出されたとみなしうる。1号石室墓出土の須恵器は1号墳出土の須恵器のうち古いグループと同じ特徴を有するもので、1号墳と同年代である。墳丘を切り込んでいるため、墳丘の盛り土よりも新しい段階に築かれている。3号石室墓には、須恵器の出土はなかったものの、鉄鏃が2点出土し、その形式からほぼ6世紀後葉～末におさまるものとみられる。2号石室墓・4号石室墓はそれぞれの墓壇が1号石室墓・3号石室墓の一部を切り込んでいるが、副葬土器がなかった。厳密な年代は決めがたいが、5基がともに再葬墓とする見方に基づけば、築造の年代幅はなく、まず同時期とみてもよいであろう。1・2号、3・4号の2基一単位となる2組の小竪穴式石室は規模的にも大小の組合せとなっており、隣接して築かれており、群構成上の特徴の一つである。

1号墳を嚆矢とする古墳群の築造は、6世紀末までにそのピークを迎え、新しい古墳の築造は行われぬ。各横穴式石室に追葬が行われ、1号墳では100年間にわたる継続的な利用が行われる。この後、中世墓が南東斜面部に築かれるまでの期間の遺構は検出されていない。しかし、8世紀後半～9世紀前半の須恵器蔵骨器⁽¹⁾、12世紀の白磁(324)、13世紀の瓦器(325)などによって、なにがしかの活動(火葬墓などの再利用・盗掘)は想定されるが、明確な痕跡は残していない。

以上のような築造状況を整理すると、1号墳の築造を契機として周辺に横穴式石室や小竪穴式石室が築かれている。墳丘規模や後述する横穴式石室の構造・副葬品の組成などからみると、1号墳の群内における優位は揺るぎないものである。古墳群の群構成については、県内において明かな事例は少ない段階であるが、1号墳にみるような群における「主墳」の位置づけを得る古墳はきわめて稀である。県内にはこの年代に前方後円墳は知られておらず⁽¹⁾、墳形の上からの階層性は窺うことができないものの、さほど墳丘規模においても大きい部類でもなく⁽²⁾、横穴式石室の規模についても同様である。つまりは全県的な広い規模での比較では、注目される度合いは低いが、群内における相対的な位置は非常に高いということになるのであろう。そうした場合、2・3号墳や1～5号石室墓については従属するような主体部であり、被葬者についても同様の関係にあるとみてよい。後期古墳は同族墓としての性格を与えられる場合が多いが、山田古墳群Aの各古墳についての関わりが強さは特殊な例として注目される。

横穴式石室の構造

3基の横穴式石室の調査を通じて構造が細部まで明確になったのは2号墳のみである。1号墳は床面直上にまで攪乱が及んでおり、一部の基底石と掘り方によってその形態を判断せざるを得なかった。玄室は基本的に長方形のプランで、わずかに中央部が膨らむ胴張りの傾向も併せもつ。玄室の規模は全長が2.7ないし3.2m、幅が最大幅1.55mとさほど大規模ではない。奥壁は2石で構成されているらしい。基底石は小口積みで、いわゆる腰石は用いない。排水溝を有する。

2号墳は小型の横穴式石室を有する。無袖式で、羨道部が省略されているか、きわめて短い形態である平面形は長方形プランで、中央部で大きく膨らんでいる。側壁は一部腰石を用い、2段目以上で徐々に持ち送っている。偏平な砂岩礫床を持つ。

3号墳はごく一部のみの遺存で、墓壙の形態により辛うじて玄室がわずかな胴張りを有することがわかる。その他の構造は不明であるが、復元される法量が2号墳の計測値とほぼ一致しており、年代が近いことも考慮すれば同様の形態を持っていたことが推定される。

小竪穴式石室の構造

5基の小竪穴式石室は、壁体の構造に関すれば共通している。すなわち、長側壁において基底石は板石を立てて横穴式石室と同様の腰石として用いている。ただし、1号石室墓については西側の側壁のほとんどを小口積みとしている。短側壁部分はすべて1石の立石により構成され(5号石室墓はやや異なる。)、3号石室墓では裏込めを用いている。2段目以上はやはり小口積みである。高さは1号・5号石室墓で0.45mであり、この数値は平面形の規模に関わらずほぼ変わらないものとみられる。1号石室墓で1石が架構状態で検出された。こうした小竪穴式石室において天井石までを含めた構造が明らかな例として県内では麻植郡鴨島町吐気山2号墳第2・第3石室しかない⁽³⁾。吐気山2号墳の小竪穴式石室は用いている石材が結晶片岩であり、短側壁も小口積みにするなどやや違いもみられるが、おおむね法量などにおいては近似しており、同様の構造とみてよいであろう。

床面は主体部ごとに状況がやや異なる。板石を主に用い、隙間を小円礫で補うもの(1号・4号石室墓)、平たい円礫を用いるもの(3号・5号石室墓)、特別な施設を設けないもの(2号石室墓)がある。法量や次項でみる副葬遺物の面においても規則性は見いだせず、床面の構造については、どのような選択が行われたかは不明である。

2 出土遺物について

副葬品組成

1～3号墳・1～5号石室墓の副葬遺物を一覧表にすると以下のようなになる(次頁表)。

遺物 遺構名	須 惠 器					装 飾 品					武 具		馬 具	工 具							
	蓋 杯	高 杯	平 甕	提 瓶	短 頸 甕	耳 環	勾 玉	管 玉	切 子	算 盤	ト ン ボ 玉	管 玉	ガ ラ ス 玉	土 玉	鉄	鍬	大 刀	雲 轡 珠	鏡	刀 子	
															三 角 形	方 頭					圭 頭
1号墳	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
1号墓	○				○										○	○					
2号墓					○																
3号墓															○	○					
4号墓																					
5号墓	?			?																	
2号墳	○					○					○	○	○	○							○
3号墳	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○							

1号墳では、須恵器・装身具・鉄鍬・大刀・馬具を含む。須恵器には蓋杯・高杯・甕・平瓶・甕などの各器種で構成され、副葬土器として一般的なものがすべてみられる。装身具については、実数ももっとも多く、構成する種類もほぼ出そろっている。馬具は山田古墳群Aでは唯一の出土で、轡・鏡が2組みられた。農工具類はみられないことと鉄鍬の点数も少なく、本来の組合せからはかなり欠けている可能性があるが、副葬遺物の組成としてはもっとも充実しているといえる。2号墳は須恵器・鉄鍬・刀子が出土し、装身具は耳環1点のみであった。須恵器は蓋杯が2組で、きわめて少なく最低限の単位であった可能性がある。鉄製品の副葬遺物の中に占める位置が高いところに特徴がある。鉄鍬については1号墳出土のものよりも、実数・形式数で上回っている。反面装身具の比率の低さが強調される。3号墳では須恵器・装身具が出土した。須恵器は杯蓋2点できわめて少なかったが、横穴式石室の依存状況を考えればやむを得ない。装身具類は山田古墳群Aでみられるすべての種類を備えており、その位置づけが高い。武器・馬具類の出土は全くなかった点は好対照である。

石室墓においては、1号石室墓には須恵器6点と玉類100点が、3号石室墓には鉄鍬2点が副葬されていた。群構成でみたように、2基一組の小竪穴式石室のうちの規模の大きなものに伴っており、ここにランク付けが働いていることが明瞭である。また、1号石室墓と3号石室墓とを比較すると、規模的には3号石室墓が大形である。このことは、築造された位置と不可分の関係とみておきたい。

総合すると、立地的にも規模的にも中心となる1号墳が、須恵器・武器・馬具・装身具を副葬品としてももっとも豊富である。2号墳では鉄製品中心、3号墳では装身具のみの副葬となっており、1号墳とは対照的である。副葬遺物に現れたこうした違いは、被葬者集団内の関係をも表しているものとみられる。1号墳が群構成において軸となっていることは、遺物の組合せの上からも説得力をもつ。

馬具

馬具は素環鏡板付轡と鏡がそれぞれ2組出土しており、2セットの馬具の副葬が想定される。7世紀以降の追葬段階の土器の副葬量がきわめて少ないものであることから、新しい段階での副葬は行われていないものとみられる。したがって、初葬あるいは初葬から時間を隔てないで行われた可能性のある追葬に伴うもので、本来の組合せからは大きくは離れていないものと考えられる。

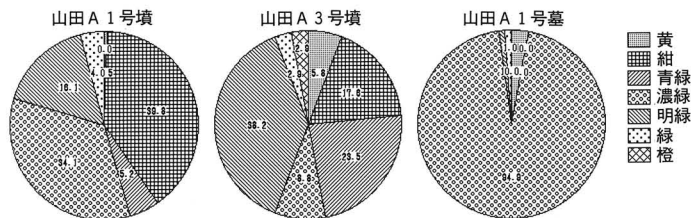
馬具の中には県下初の出土である貝製雲珠の飾り金具が含まれていた。四国においては香川県高松市南山浦11号墳においてその出土が確認されている⁽⁴⁾が、その出土数はきわめて少ない。全国的には関東地方と北部九州に集中しており、集成を行った宮代氏はイモガイの生息範囲との比較から大和朝廷による配布と地方生産の二つの可能性を想定している⁽⁵⁾。山田古墳群Aにおいては、横穴式石室の構造が今一つ明瞭でないため、どのような要因で貝製雲珠がもたらされたかは判断しかねるが、ここでは前者の可能性を重視しておきたい。

装身具

出土遺物総数600点余りのうち半数以上を占める。ガラス玉・土玉がそのほとんどではあるが、耳環・勾玉・切子玉・管玉・トンボ玉などを含み、多様な種類をもつ。1号墳で玄室奥壁付近から排水溝にかけてと出土範囲が広く、遺体への装着状況などは明らかにし得ない。ガラス玉・土玉が、圧倒的な数を占める。1号石室墓からはガラス玉99点と土玉1点が出土した。追葬がなく帯状に集中していたことから、原位置にありかつ本来の組み合わせを示す例として注目される。2号墳では耳環が1点出土したが、追葬された遺体には伴っておらず、またガラス玉などはどちらの遺体にも装着されていない。3号墳は横穴式石室の遺存する範囲が狭かったが、玄室の奥壁に近い箇所に集中していた。耳環が3点含まれていることから1体分ではなく、2体目も含めた装身具が集中していた可能性がある。算盤玉が含まれており、1号墳よりも豊富な組み合わせをもつことになる。土玉が3点のみの出土で、実数は不明ながら全体に占める割合が低い。この点は1号石室墓の状況と共通する。

そのうち、出土数のもっとも多かったガラス玉についてみると、サイズ・色調の点で出土古墳それぞれの傾向をもつ。1号墳では径が3～4mmのサイズにピークが集まり、2～3mm・3～4mmのものが続き、やや大きめである。また、5mm以上のものも少なからずみられる。12mmを越える2点は他のガラス玉とは異なる装着方法が想定できる。3号墳では、1号墳のものに近いサイズをもつものが多いが、径6mm以上のものは含まれない。1号石室墓では2～3mmにピークがあり、このサイズに当てはまらないものは非常に少ない。重量は径にほぼ比例しており、同様の傾向がある。色調は『色名帳』によって細別したものを、色の系統ごとに再度まとめた(第85図)。1号墳では、紺系統が半数を占め、その残りを濃緑・明緑の緑

色系統が約半数づつを占める。緑黄・青緑・緑などの系統はごく少数しか含まれない。3号墳では、明緑系統が3分の1以上を占めもっとも多く、濃緑・紺系統の割合が少ない。黄・橙の比率が高いのは、絶対数が少ない(34点)ためであろうか。1号石室墓では濃緑系統が大多数を占め、それ以外のものはきわめて少ない。サイズ・色調からみると主体部ごとに状況が異なっている。一体への装着かどうか疑問を残しているが、本来



第85図 山田古墳群A出土ガラス玉の色調構成

の組合せを残す1号石室墓のガラス玉のサイズが横穴式石室出土のものよりも小さいことから、主体部構造と同様にガラス玉にもランク付けが行われているとみることができる。類例をさらに整えて検討すべき課題である。

3 中世墓の構造と群の構成

4 墓の構造と年代について

4基の中世墓は南北に伸びる尾根の南東斜面部に築かれていた。調査区外には、次項でみるようにさらに中近世墓が広がる。ここでは、4基の構造とその位置づけについて簡単に整理しておきたい。

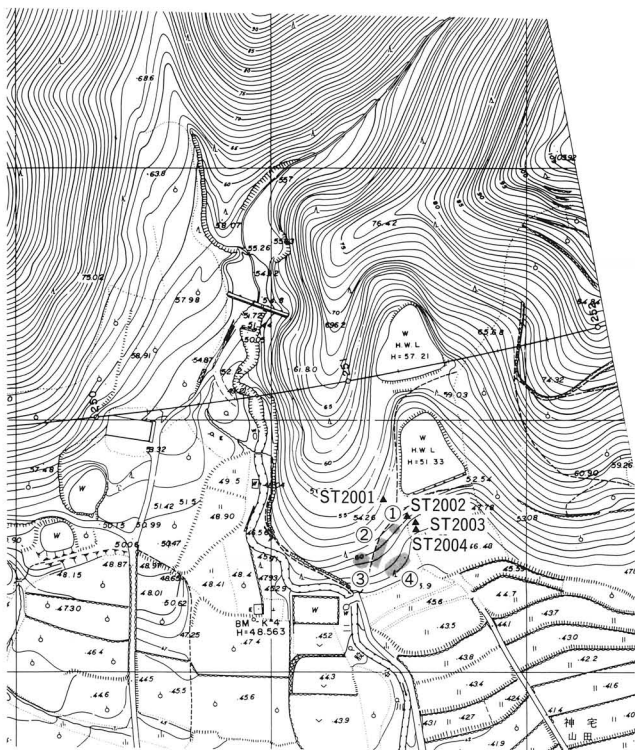
もっとも高い位置に築かれた1号中世墓は斜面を階段状にカットして平坦面を作り出して、火葬施設を築いた後に、埋葬施設を設け(一部は火葬施設を利用)、墓壇状の石組を築き、上表となる五輪塔を置く。埋葬施設のうちSK02は、骨蔵器として円筒形の土師質土器を用いている。火葬施設には煙道を設けていない。その他の3基について、火葬骨の埋葬施設を覆う石組を築く2号中世墓では、五輪塔の一部が埋葬施設(SK01)の上面で原位置をとどめていた。3号・4号中世墓でもそれぞれ若干の五輪塔が出土していることから、すべての中世墓に五輪塔が伴っている。骨蔵器が検出されなかった多くの埋葬施設では、有機質の骨蔵器の存在が想定される。

4基の中世墓の年代は、紀年銘のある遺物がみられなかったことから、土器や五輪塔の形態などに拠るが、それらの資料の編年は確立しておらず、幅のある推定の域を出ない。1号中世墓や2~4号中世墓周辺で出土した土師質の円筒形土器は、類例が増えつつある段階で年代をおさえうる状況ではない。浦庄遺跡の年代の根拠が正しければ(文永7【1270】年銘の板碑)、存続期間がかなり長いようである。五輪塔の型式は火輪の傘部分の反りや水輪の最大径の位置などについて、凝灰岩製のものが砂岩製のものよりも古くなる傾向がある。造墓の方法として、中心地から外へ向かって、高い位置から低い位置へ継続して築く傾向が認め

られている⁽⁶⁾。また、火葬墓としての機能からも、1号中世墓を築いた後に2～4号中世墓が築かれた可能性が高い。しかしながら、五輪塔の先述の型式上の特徴からは1号中世墓のものは新しい傾向がある。このことは継続的な供養にも起因するとも考えられるが、五輪塔の形態が石材による規制を受け、凝灰岩製のものに古い形態を残していることも考える。近世初期に位置づけられる五輪板碑⁽⁷⁾は、ややまとまって出土した2号中世墓周辺のものでも中世墓築造段階のものとは考えにくく、築造時から若干の時間を隔てた時点での供養によるものとみられる。したがって、2号中世墓を含めた3基の火葬施設をもたない火葬墓については、1号中世墓において、各段階で認められた時間差は2～4号中世墓築造の年代差との対応の可能性はある。築造時以降の供養についても石造物を根拠とする他はないが、五輪板碑よりも新しい形態のもの（一石五輪塔）などがみられず、江戸時代の初期段階で終了しているようである。

調査区周辺の中近世墓群

調査が行われた尾根の南東斜面の里道に沿うように、現在も五輪塔などが散乱し中近世墓が広がっている様子が観察される(第86図)。調査された4基の中世墓の位置づけにも関わる部分であり、地点ごとの状況を整理しておきたい。



第86図 中近世墓の広がり

第①地点は2・3・4号中世墓にもっとも近い位置にある。径7～8mの塚状の土盛りがある。五輪塔や積み石などは現況ではみられない。

第②地点は里道東側に沿い約10mにわたって、五輪塔などがみられる。わずかに集石らしいものもみられるが、特別な施設はみられず別の中近世墓などから集められてきた可能性が高い。いずれも砂岩を素材としており、空風輪3点、火輪3点、水輪8点、地輪4点が認められた。

第③地点は里道の西側に隣接する地点で、南北5～6m、東西3.5mの不整形円形を呈する塚状の高ま

りがある。現状での高さは1mを上回る。盛り土の隙間には結晶片岩などの円礫による積み石の状況がみられる。墓標の施設はない。

第④地点はもっとも下位の水田近い位置にある。7～10m四方の範囲に五輪塔類が集中する。意図的に砂岩礫を積み上げた感のある集石箇所や基壇状の施設があり、そうした中に五輪塔などが散見される状況である。五輪塔には空風輪2点、火輪5点(うち1点に梵字)、水輪13点、地輪1点、五輪板碑5点があり、ほかに仏像類の墓標が5点ある。これらは集積される状態に不自然な状態であり、他の中近世墓から集められたものであろう。

以上の4地点の状況を整理すると、2地点に塚状の盛り土が注目される。1～4号中世墓において上部構造が築造当初の形態を保っているものがなかったが、1号中世墓のような基壇状の石組を築く場合と第①・第④地点の塚状に盛り土を行う二つの形態が並存しているようである。盛り土の行われた中近世墓の詳細は不明であるが、上表としての五輪塔が確認できないことから下部構造なども異なっている可能性がある。五輪塔や仏像類はすべて砂岩製で凝灰岩製のものはみられなかった。五輪塔の各形式においても、1～4号中世墓出土のものよりも古い特徴を有するものはなかった。仏像類の型式からは、室町時代の終わりから江戸時代の初頭と考えられる⁽⁸⁾。五輪塔などの特徴からみると、1～4号中世墓と同年代かやや新しい可能性が想定される。したがって、これらの4地点に展開する中近世墓も1～4号中世墓と一連の流れの中で築造され、継続した供養が行われたものとみられる。現在も中近世墓の間を縫うように残っている里道は、この形態がどの段階までさかのぼるかは不明であるが、以上みてきたような造墓活動の名残である可能性が非常に高い。

また、調査地点のすぐ南側の水田面には寺院があったとの古老の伝承がある。

中世墓群の類例との比較

山田古墳群Aの4基の中世墓に関して、これまでの限られた県内の調査例⁽⁹⁾から類似するものを見つけるのは困難である。

奈良県宇陀地域の中世墓群は群単位の調査が数カ所で行われており、群構成を検討する上でモデルケースとなりうる地域であり、楠元哲夫氏⁽¹⁰⁾と白石太一郎氏⁽¹¹⁾によって考察がなされている。宇陀郡榛原町野山遺跡群⁽¹²⁾・同町所在能峠遺跡群⁽¹³⁾などの6遺跡の中世墓群について調査が行われ、その意義が整理されている。楠元・白石両氏の論を参考にしながら、その位置づけを検討してみよう。立地条件においては、尾根の稜線状を用いる例が一般的であり、古墳の立地条件と重なる場合が多いとされている。野山遺跡群野山支群では尾根の稜線上状に5世紀を中心とする古墳群の墳丘の頂部や裾部に中世墓が8基築かれるのとは別に、北西側の斜面ではテラス状に平坦面を削り出し34基の中世墓を築いている。(以下の文中では野山支群北斜面)。年代的にほぼ同時期であり、副葬遺物に差異がみられることから、階

層差を表現しているものとみられる。山田古墳群Aでは、尾根上では古墳が築かれたのみで、中(近)世墓は南東斜面に集中しており、古墳の墳丘や主体部を利用した痕跡はみられない。斜面部を中心に展開する中世墓群としては、福岡県北九州市白岩西遺跡⁽¹⁴⁾があるが、墓群の規模が格段に大きく(13群230基以上)、隣接する寺院や特定氏族との関係で捉えうるなど、実態の解明の度合いに優る。

構造の面で比較すると、墓の上部構造に石組をもつものはきわめて普遍的で、多くの例が知られている。野山支群北斜面の場合、中世墓のほとんどに石組を伴っており、その形状にもばらつきがみられ、山田古墳群Aにおける2～4号中世墓の状況に類似している。3・4号中世墓のように、石組を□または□字形とする方法もまた一般的である。そうした中で側辺を共有して連続的に築く例も頻繁にみられ、宇陀地域に關すれば野山支群北斜面ST03～05や奈良県宇陀郡榛原町大王山遺跡東尾根地区⁽¹⁵⁾、その他の地域に目を移せば三重県松坂市横尾墳墓群A区の南西斜面⁽¹⁶⁾などでみられる。4号中世墓において連続した造墓を想定したのもこうした例をふまえたからである。火葬施設を伴う場合と伴わない場合とがあり、宇陀地域においても遺跡ごとに異なる様相をもつ。こうした点は、火葬墓に用いる蔵骨器の材質や五輪塔の保有状況にも現れている。

以上諸点について比較検討を加えてきたが、尾根全体を覆うような大規模な中世墓群と数基程度で構成される中世墓群とでは、墓に現れる以前に造営主体そのものに大きな差異があることが当然予想される。造営主体たる集落遺跡の考古学的資料や文字史料の研究の蓄積が望まれ、その基本的な条件をまず満たしうる遺跡の一つになり得たことが大きな成果といえよう。

注

- (1) 美馬郡穴吹町三島1号墳は前方部・後円部にそれぞれ横穴式石室をもつる前方後円墳とする見方があるが(A)、墳丘の形態からの批判的な見方もあり(B)、一墳丘二石室の構造とみた方が妥当性が高いように思われる。
A 岡山真知子「三島古墳群の研究」『徳島考古』創刊号 徳島考古学研究グループ 1983
B 菅原康夫『日本の古代遺跡 39 徳島』保育社 1988
- (2) 菅原康夫「徳島県」(『古代学研究』第120号・円墳特集 1990)の一覧による。
- (3) 『吐気山古墳発掘調査概報』鴨島町教育委員会 1982
- (4) 『南山浦古墳群調査報告書』(高松市教育委員会 1985)掲載の第26図414。
- (5) 宮代栄一「いわゆる貝製雲珠について」『駿台史学』76号 1989
- (6) 楠元哲夫「中世後半期における集団墓地—とくにその生成と展開をめぐって—」『末永先生米壽記念 献呈論文集 坤』明新印刷 1985

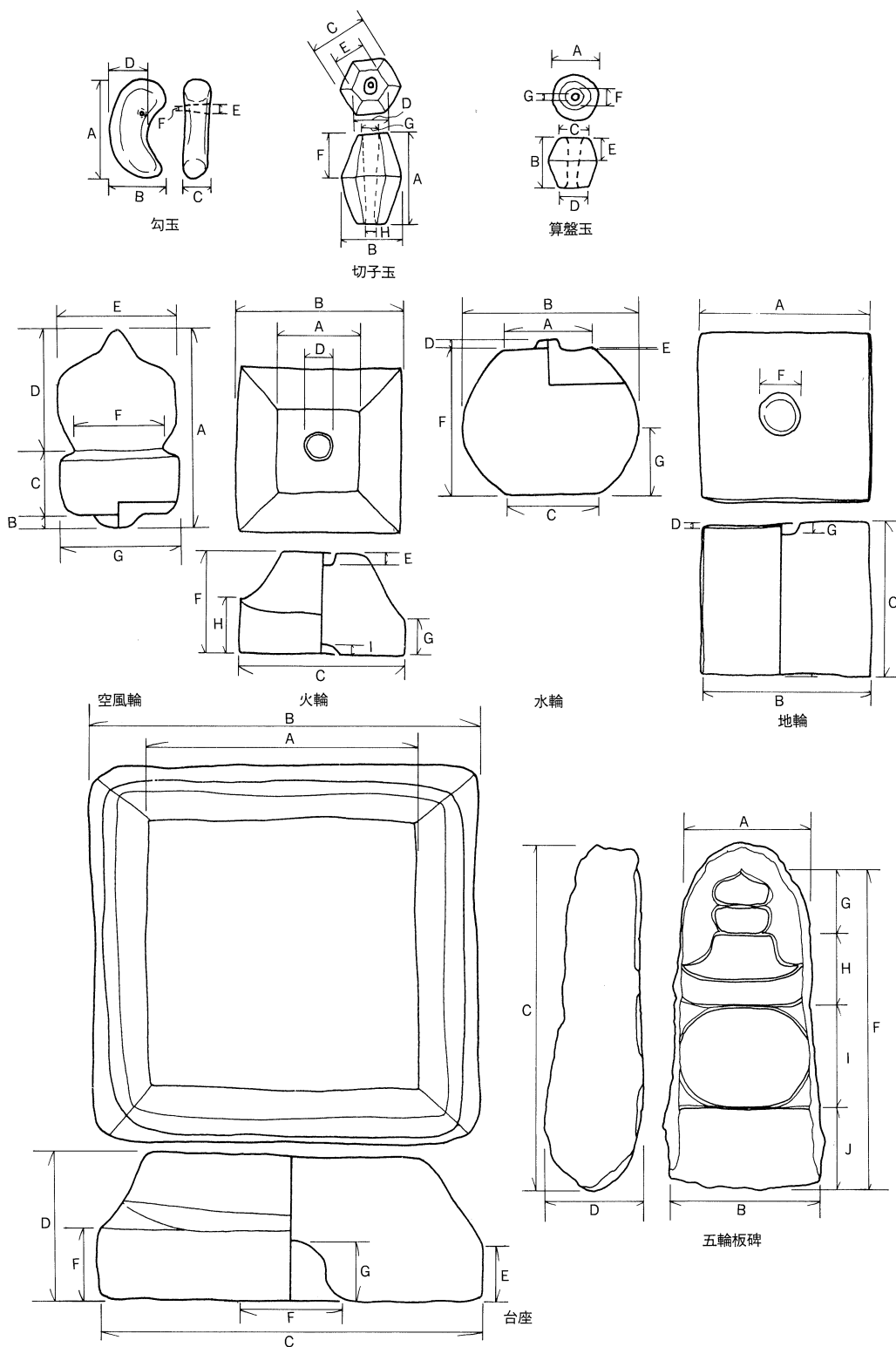
- (7) 坪井良平「山城木津惣墓墓標の研究」『考古学』第10巻第6号 1939
- (8) 注(5)文献
- (9) 徳島県下における中世墓の調査例については、辻佳伸氏の以下の成果にまとめられている。
辻佳伸「徳島県の中世墓－火葬墓の展開に関する予察－」『徳島県埋蔵文化財センター研究紀要 真朱』第2号 1993
- (10) 注(4)文献
- (11) 白石太一郎「奈良県宇陀地方の中世墓地」『国立歴史民俗資料館研究報告』第49集 1993
- (12) 『野山遺跡群Ⅰ』奈良県立橿原考古学研究所 1988
『野山遺跡群Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所 1989
- (13) 『能峠遺跡群Ⅰ(南山編)』奈良県立橿原考古学研究所 1986
- (14) 『白岩西遺跡』北九州市教育文化事業団 1984
- (15) 『奈良県宇陀郡大王山遺跡』榛原町教育委員会 1977
- (16) A 『近畿自動車道(久居～勢和間)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』三重県教育委員会 1986
B 『三重県の中世墓』三重県埋蔵文化財センター 1992

以上の注に挙げた文献のうち、原典資料に接することのできなかった遺跡があり、それらについては注4・16Bの他に以下の文献を参考にした。

参考文献

『仏教芸術』第182号 特集・中世の墳墓 1989

遺物觀察表



第87図 計測値凡例

第1表 Q-5・6グリッド須恵器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
1 5 11	Q - 4・5	蔵骨器	口径 10.0 器高 16.8 最大 15.5 頸部 11.4	丸みをもち上半より最大径をもつ体部に、短く立ち上がる口頸部と脚台をもつ。口頸部は上方へ強く屈曲し、口縁端部はやや四角くおさめ、上面に端面を作り出す。脚部は全周にわたって欠失している。	体部は下から3分の1以下の部位に回転ヘラ削りが施される他は、回転ナデ調整である。脚部内面はナデ調整により削りの痕跡はほとんど観察できない。肩部外面に指頭圧痕。	(外)黄灰色 (内)暗灰黄色	密、径0.5mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	反時計回り	

第2表 SM1001出土須恵器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
2 14 8	前庭部	杯蓋	口径 12.4 器高 4.45	天井部は丸みをもち、緩やかなカーブで口縁につながる。口縁は端部でわずかに外反する。器壁が全体に厚い。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他はナデ調整。天井部内面は回転ナデ調整後、一定方向ナデ。	灰色	密、径3mm未満の砂粒やや多く含む	良好	時計回り	天井部外面に「 」字のヘラ記号
3 14 8	羨道部 前庭部	杯蓋	口径 13.0 器高 4.0	口径に比して偏平な体部で、全体に器壁は厚い。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。天井部内面は回転ナデ後、一定方向ナデ。	暗青灰色	密、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	「卍」のヘラ記号
4 14	羨道部	杯蓋	口径 11.6 器高 4.0	半球形のプローションをもつ。口縁部内面にごくわずかなくぼみがある。	天井部外面に回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整を施す。天井部内面は回転ナデ後、一定方向ナデ。	灰色	密、径3mm未満の砂粒含む	良好	時計回り	天井部外面に「×」字のヘラ記号
5 14 8	前庭部 周濼	杯蓋	口径 13.2 器高 5.1	背が高く丸い天井部をもつ。口縁は丸くおさめる。	天井部外面に回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)灰色 (内)灰白色	精良	やや軟質	時計回り	
6 14 8	羨道部 前庭部	杯蓋	口径 12.95 器高 4.2	丸みをもつ天井部と端部が丸くおさまる口縁部とからなる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰色	精良	良好	時計回り	
7 14 8	羨道部	杯蓋	口径 14.6 器高 4.1	口径に比してやや偏平な器形で、口縁部はやや内湾気味であり。口縁部はやや四角い。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	オリーブ灰色	密、2mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	内面に鉄錆付着
8 14 8	羨道部 前庭部	杯蓋	口径 15.0 器高 4.4	丸みをもつ天井部と薄いつくりの口縁部とからなる。口縁端部は丸くおさめられている。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰色	密	良好	時計回り	
9 14 8	羨道部	杯蓋	口径 13.5 器高 4.55	やや背が高く、丸い天井部と緩やかなカーブをもつ肩部とからなる。口縁端部は丸くおさめている。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)黄灰 (内)灰白色	密、径2mm未満の砂粒少し含む	良好	時計回り	溶着物あり
10 14	羨道部	杯蓋	口径 14.6 器高 2.7	緩やかなカーブの肩部と丸くおさめる口縁端部をもつ杯蓋破片。	残存部位は回転ナデ。粘土紐接合時の絞り痕顕著。	(外)灰色 (内)灰白色	密、径0.5mm未満の砂粒やや多く含む	良好	不明	

番号 挿図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
11 14 8	羨道部 椀石下	杯蓋	口径 13.5 器高 4.4	全体に丸い器形で、口縁も内湾する。口縁端部は丸くおさめられている。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)灰色 (内)オリープ 灰色	密、径1mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	時計回り	
12 14	羨道部	杯蓋	口径 13.8 器高 4.3	丸みをもつ天井部にやや内湾する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その回転ナデ調整。	(外)灰色 (内)灰白色	精良	良好	時計回り	
13 14	羨道部	杯蓋	口径 14.6 器高 3.9	天井部は平坦で、緩やかなカーブの肩をもつ。口縁端部は丸くおさめている。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデを施す。削り面に植物繊維の圧痕あり。	(外)灰黄色 (内)淡黄色	やや粗	良好	時計回り	39に類似
14 14	羨道部	杯蓋	口径 13.65	緩やかな肩部をもち、口縁は丸くおさめる。	残存部位は回転ナデ調整。	(外)灰色 (内)灰白色	精良	良好	不明	
15 14	羨道部	杯蓋	口径 13.0	緩やかなカーブで口縁部にいたり、やや尖り気味におさまる。	残存部位は回転ナデ調整。	(外)灰色 (内)灰白色	やや粗、径1mm未満の砂粒やや多く含む	良好	不明	
16 14	羨道部	杯蓋	口径 15.0	丸みをもつ肩部と、先端をやや細く仕上げる口縁部とからなる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰白色	精良	良好	反時計回り	
17 14	羨道部	杯蓋	口径 13.9	稜をもたない肩部と先端をやや細く仕上げ、丸くおさめる口縁とからなる。口縁部内面には非常に弱い稜がある。	残存部位は回転ナデ。	(外)浅黄色 (内)灰白色	精良	やや軟質	不明	
18 14	羨道部	杯蓋	口径 14.5 器高 3.2	緩やかなカーブをもつ口縁部の破片で、口縁端部は厚く仕上げられている。	残存部位は回転ナデ。	(外)灰色 (内)灰白色	密	良好	不明	
19 14 8	羨道部	杯蓋	口径 13.1 器高 4.0	全体に丸みをもち、口縁端部はやや厚く丸くおさめている。	天井部外面に回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。粘土紐接合の痕跡が亀裂として観察できる。ヘラ削り工具の止まった痕跡から工具の幅が1.7cm以上であることが分かる。	灰色	精良	良好	時計回り	
20 14	羨道部	杯蓋	口径 13.0 器高 4.1	丸みをもつ天井部から、直立する口縁部へとつながる。口縁端部は丸くおさめる。	天井部外面は回転ヘラ削り、そのほかは回転ナデ調整。天井部内面は回転ナデ後、一定方向ナデ。	灰色	密、径0.5mm未満の砂粒やや多く含む。	良好	反時計回り	
21 14 8	羨道部	杯蓋	口径 13.4 器高 4.2	天井部にヘラ切り時の平坦面を残す。口縁部は大きく開き、端部は丸くおさめる。	天井部外面は回転ヘラ削りがなく、ヘラ切り後無調整。その他は回転ナデ調整。	灰白色	精良	良好	時計回り	26、27、29と類似
22 14	羨道部	杯蓋	口径 13.3	肩部は緩やかなカーブをもち、口縁端部は丸くおさめる。	残存部位は回転ナデ。	(外)黄灰色 (内)灰白色	精良	良好	不明	
23 14 8		杯蓋	口径 12.6 器高 4.3	丸い天井部に、直立する口縁部をもつ。口縁部内面には稜線がめぐる。	天井部外面に回転ヘラ削り、その他は回転ナデを施す。内面回転ナデによる凹凸著しい。	灰色	密、径1mm未満の砂粒含む。	良好	反時計回り	

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
24 14 8	羨道部 前庭部	杯蓋	口径 13.0 器高 4.1	天井部は緩やかな丸みをもち、口縁部は直立またはわずかな内湾である。口縁内側にはナデによる凹部がある。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰白色	やや粗、径2mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	
25 14	羨道部	杯蓋	口径 13.2 器高 3.65	平坦な体部に外側へ開く口縁部が付く。口縁部内面にはごくわずかな沈線がめぐり、口縁部が厚手。	天井部外面には回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	緑灰色	密、径1mm未満の砂粒含む	良好	反時計回り	
26 14 8	羨道部	杯蓋	口径 11.0 器高 4.1	器高に比してやや口径が小さい。口縁部外面には弱い稜線がめぐり、端部は丸くおさめる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。回転ヘラ削りは粗く、ヘラ切りの痕跡を明瞭に残す。天井部内面は回転ナデ後、一定方向ナデ。	灰色	密、径1mm未満の砂粒わずかに含む	やや軟質	時計回り	ハケ状工具の 圧痕、 29と類似
27 14 8	羨道部	杯蓋	口径 11.35 器高 4.1	体部は全体に丸く、肩部には口縁部との境となるごく弱い稜がある。口縁端部はわずかに外側へ肥厚し、丸くおさめる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。天井部内面は回転ナデ後、一定方向ナデ。	灰色	密、径0.5mm未満の砂粒含む	やや軟質	反時計回り	ヘラ状 工具の 圧痕あり
28 14 8	羨道部	杯蓋	口径 12.5 器高 3.3	平坦な天井部をもち、そのままのカーブで口縁につながる。器壁が非常に厚い。	天井部外面には回転ヘラ削りがなく、ヘラ切り後回転ナデ。その他は回転ナデ調整	(外)暗赤灰色・赤灰色 (内)灰白色	密、径5mm未満の砂粒含む	良好	時計回り	56、57、 60と類似
29 14 8	羨道部	杯蓋	口径 11.4 器高 3.4	やや平坦な天井部をもち、口縁部は強いナデによってわずかに外反している。器壁は全体に薄く仕上げられている。	天井部外面は回転ヘラ削りがなく、ヘラ切り後の調整がない。その他の部分は回転ナデ調整で、天井部内面は回転ナデ後一定方向ナデが施されている。	灰色	精良	良好	時計回り	ハケ状 工具の 圧痕
30 14 8	羨道部	杯蓋	口径 11.4 器高 3.6	天井部はやや偏平で、肩部に緩やかなカーブがある。口縁部は丸くおさめる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整による整形を施す。天井部内面には回転ナデ後、一定方向ナデを施す。	灰色	精良	良好	時計回り	
31 14 8	羨道部	杯蓋	口径 11.8 器高 3.7	肩部が丸く、全体に厚く仕上げられている。口縁端部は単純に丸くおさめられている。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。天井部内面には回転ナデ後、一定方向ナデ。	(外)褐灰色 (内)灰色	密、混入砂粒やや多い。	良好	時計回り	
32 15	前庭部	杯	口径 12.0 受部 13.8 立上 0.8	やや深い杯部に上方へまっすぐ立ち上がる口縁部をもつ。立ち上がり内面の屈曲はない。	残存部位は回転ナデ。	灰色	密	良好	不明	
33 15	羨道部	杯	口径 11.75 器高 3.8 受部 14.35 立上 0.9	浅い皿形の体部に、内傾する口縁が付く。口縁端部は細く仕上げられている。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデで調整されている。回転ヘラ削りの範囲は他のものに比べ広い。	(外)灰色・明 オリープ灰色 (内)灰色	密、径2mm未満の砂粒やや多く含む	良好	反時計回り	底部外 面に 「×」 字のヘ ラ記号

番号 挿図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
34 15	羨道部	杯	口径 12.7 受部 14.8 立上 0.75	壺の大きい小破片であるが、口縁が直立する形態をとる。口縁端部はわずかに外反し、立ち上がり内面の屈曲はほとんど見られない。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	明オリーブ灰色	密、径1mm未満の砂粒少し含む	やや軟質	不明	
35 15	前庭部	杯	口径 12.0 受部 14.2 立上 0.8	やや深い体部に上方へ反り上がる立ち上がりをもつ。立ち上がり部分はやや厚手。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰白色	精良	良好	反時計回り	
36 15 9	羨道部 前庭部	杯	口径 13.1 器高 4.7 受部 15.0 立上 1.0	やや深い杯部に内傾する立ち上がりをもつ。立ち上がりは本遺跡の須恵器の中ではやや長い。立ち上がり内面の屈曲は弱い。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。底部内面は回転ナデ後、一定方向ナデ。	(外)灰色 (内)オリーブ灰色	精良	やや軟質	時計回り	
37 15	前庭部	杯	口径 13.4 受部 15.8 立上 0.7	やや深い杯部に短く太い立ち上がりをもつ。立ち上がり内面の屈曲は弱い。	残存部位は回転ナデ。	灰白色	密、径1mm未満の砂粒含む	良好	不明	
38 15	羨道部	杯	口径 13.0 受部 15.0 立上 0.9	浅い皿形の体部に直立する短い立ち上がりをもつ。	残存部位は回転ナデ。	灰白色	精良	軟質	不明	
39 15 9	羨道部	杯	口径 14.2 器高 3.8 受部 16.6 立上 0.8	浅い皿形の杯部と、上方へ立ち上がる口縁部とからなる。立ち上がり内面の屈曲は弱い。	底部外面に回転ヘラ削り、そのほかは回転ナデを施す。	灰白色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	軟質	時計回り	
40 15	羨道部	杯	口径 12.6 器高 3.7 受部 15.0 立上 0.8	浅い皿形の杯部に内傾して立ち上がる口縁部をもつ。全体に薄く仕上がっている。	底部外面に回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰白色	精良	軟質	反時計回り	
41 15 9	羨道部 前庭部	杯	口径 12.6 器高 4.3 受部 15.3 立上 0.7	丸い体部に短い立ち上がりが付く。立ち上がりは内傾して端部近くでごくわずかに外反している。立ち上がり内面にはやや強い屈曲がある。	底部外面に回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰色	密、径2mm未満の砂粒含む	良好	反時計回り	

番号 挿図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
42 15	羨道部	杯	口径 13.6 受部 16.0 立上 0.7	短く内傾して立ち上がる 口縁部をもつ。立ち上が り部分は薄く仕上げられ ている。	残存部位は回転ナデ。	浅黄色	精良	軟質	不明	
43 15 9	羨道部	杯	口径 11.9 器高 3.9 受部 13.5 立上 0.7	底部に明確な平坦面を残 す。立ち上がりは短くわ ずかに内傾している。口 縁内面にはやや強い稜が あり、端部はやや尖って いる。	底部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。底部内面は回転ナデ 後、一定方向ナデ。	褐灰色	精良	良好	反時計回 り	
44 15 9	羨道部	杯	口径 12.9 器高 3.3 受部 15.1 立上 0.7	浅い皿形の杯部に内傾す る立ち上がりをもつ。立 ち上がり内面には屈曲は ない。	底部外面に回転ヘラ削 り、その他は回転ナデが 施されている。	灰白色	密、径0.5mm未 満の砂粒わず かに含む	軟質	不明	
45 15	羨道部	杯	口径 13.8 器高 3.3 受部 16.0 立上 0.7	浅い皿形の杯部に短く直 立する立ち上がりが付 く。立ち上がり部内面の 屈曲は全くない。	底部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。	灰白色	密、径0.5mm未 満の砂粒わず かに含む	軟質	反時計回 り	
46 15	周濠	杯	口径 12.4 器高 3.5 受部 14.35 立上 0.65	浅い皿形の体部と短く上 方へ立ち上がる口縁部と からなる。立ち上がりの 内面の屈曲が明瞭であ る。	底部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデで 調整されている。	(外)灰白色・ 灰色 (内)灰白色	密、径2mm未 満の砂粒含む	良好	時計回り	
47 15 9	羨道部	杯	口径 10.95 器高 3.65 受部 13.2 立上 0.6	浅い皿形の体部に短い立 ち上がりをもつ。立ち上 がりは内傾し上方へ屈曲 して、丸くおさめる。	底部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。底部内面は回転ナデ 後、一定方向ナデ。	(外)オリーブ 灰色・灰白色 (内)灰色	精良	良好	時計回り	「」 のヘラ 記号
48 15 9	羨道部 前庭部	杯	口径 12 器高 4.2 受部 14.0 立上 0.65	浅い皿形の体部に短い立 ち上がりが付く。立ち上 がりは内傾し、内面に屈 曲はない。	底部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。回転ナデ調整は粗雑 でヘラ切りの痕跡が明瞭 に残る。	浅黄色	精良	良好	反時計回 り	
49 15	羨道部 前庭部	杯	口径 14.5 受部 17.2 立上 0.7	短く内傾して立ち上がる 口縁部をもつ。杯部は立 ち上がりに比してやや深 い。	底部外面に回転ヘラ削り その他は回転ナデ調整。	灰白色	精良	軟質	時計回り	

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
50 15	羨道部	杯	口径 12.8 受部 15.5 立上 0.45	やや深い体部に短く内傾する立ち上がりが付く。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰白色	精良	軟質	反時計回り	
51 15	羨道部	杯	口径 11.7 器高 4.6 受部 14.1 立上 0.4	深い杯部と短く上方へ反る口縁部とからなる。立ち上がり内面の屈曲は鋭い。	底部外面に回転ヘラ削り、そのほかは回転ナデを施す。	灰白色	やや粗	良好	反時計回り	緑色の自然袖付着
52 15 9	羨道部	杯	口径 12.5 器高 5.5 受部 14.85 立上 0.25	やや深い杯部に、非常に短い立ち上がりをもつ。立ち上がり内面には弱い屈曲がある。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)明オリープ灰色 (内)灰白色	精良	良好	反時計回り	
53 15 9	羨道部	杯	口径 11.2 器高 4.3 受部 14.0 立上 0.45	浅い皿形の体部に短い立ち上がりが付く。立ち上がりは内傾しており、やや厚手で、内面の屈曲はない。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	淡黄色	密、径2mm未満の砂粒含む	(外)良好 (内)やや軟質	時計回り	底部外面に自然袖付着
54 15 9	前庭部	杯	口径 11.95 器高 3.4 受部 9.8 立上 0.3	浅い皿形の体部に短い立ち上がりが付く。立ち上がりは内傾が顕著で、内面には弱い屈曲がみられる。	底部外面には回転ヘラ削りがなく、不整方向のナデによって調整されている。そのほかは回転ナデ調整。底部内面は回転ナデ後、一定方向ナデ。	灰色	密、径2mm未満の砂粒わずかに含む	良好	不明	「×」のヘラ記号
55 15 9	羨道部	杯	口径 12.2 器高 3.1	口径に比して器高、立ち上がりが低い。立ち上がり内面の屈曲は弱い。	底部外面は回転ヘラ削り、そのほかは回転ナデによって調整されている。外面の一部に板ナデ状の痕跡。底部内面に回転ナデ後の一定方向ナデ。	灰色	精良	良好	反時計回り	
56 15 9	羨道部	杯	口径 11.85 器高 3.9 受部 13.3 立上 0.55	浅い皿形の杯部に、非常に短い立ち上がりをもつ。立ち上がり内面はやや強く屈曲している。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。底部内面は回転ナデ後、一定方向ナデ。底部外面のヘラ削りが粗いため、ヘラ切りの痕跡が観察できる。	(外)灰黄褐・灰白色 (内)赤灰色	精良	良好	時計回り	
57 15 9	羨道部	杯	口径 12.05 器高 3.9 受部 13.7 立上 0.45	底部に平坦面をもつ。底部内面はナデにより凹凸が著しい。立ち上がりは極端に太く、短い。立ち上がり内面の屈曲は全くない。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)暗赤灰 (内)灰白色	密、径1mm未満の砂粒やや多く含む	良好	時計回り	

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
58 15 9	羨道部	杯	口径 9.75 器高 3.5 受部 12.1 立上 0.3	浅い体部に、短い立ち上がりが付く。立ち上がりの内傾は顕著で、内面の屈曲も強い。	底部外面はヘラ切り後の調整はなく、その周辺部に回転ヘラ削りがみられる。その他は回転ナデ調整。底部内面は回転ナデ後、一定方向ナデ。	灰白色	密、径2mm未満の砂粒わずかに含む	良好	反時計回り	
59 15 9	羨道部	杯	口径 11.7 器高 3.2 受部 13.0 立上 0.4	杯部には明確な平坦面があり、立ち上がりは短く内傾している。立ち上がりの内面の屈曲は全くない。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)褐灰 (内)灰白色	密、混入砂粒やや多い。	良好	時計回り	
60 15 9		杯	口径 13.0 器高 2.7 受部 15.5 立上 0.6	非常に浅い体部に、短く内傾する口縁部がつく。立ち上がりは基部が太く、先端ほど尖っている。	底部外面には回転ヘラ削りがなく、ヘラ切り後の調整はみられない。そのほかは回転ナデ調整。	黄灰色	精良	良好	不明	
61 15 9	羨道部	杯	口径 10.7 器高 4.4	外側へまっすぐ開く口縁をもつ杯。底部は中央が尖り気味で、平坦ではない。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)灰白色 (内)におい黄 橙色	精良	良好	時計回り	
62 15 9	周濠	杯	口径 14.5 器高 4.4 脚端 10.0	平底にまっすぐ開く口縁をもつ。貼り付け高台は断面台形を呈している。	全面回転ナデ。高台の内側に回転ヘラ削りの痕跡。	黄灰色	精良	良好	不明	
63 15	周濠	杯	口径 13.8	緩やかに立ち上がる口縁をもつ。	全体に回転ナデ。	(外)明オリーブ 灰色 (内)灰白色	精良	良好	不明	
64 16 10		高杯 蓋	口径 13.5 器高 4.25	丸い天井部に低いつまみが付く。口縁は丸くおさめる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデが施されている。	灰色	密、径5mmまでの砂粒がやや多く含まれる。	良好	反時計回り	天井部 外面に 「II」 状のヘ ラ記号
65 16	前庭部	高杯 蓋	口径 14.5 器高 4.7	つまみを付ける蓋で、肩部にはやや弱い稜と沈線がめぐる。つまみは扁平で中央部には明確な稜をもつ。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。つまみ接合時に回転ヘラ削りの痕跡をナデ消している。	灰白色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	やや軟質	時計回り	
66 16 10	前庭部	高杯 蓋	口径 15.6 器高 5.3	丸みをもつ体部につまみを付ける。肩部にははっきりした稜をもつ。口縁部は内湾しているが、端部はごくわずかに外反している。つまみは扁平で鋭角的な稜をもつ。	天井部外面は回転ヘラ削りを施しており、その範囲は本遺跡内の他の杯蓋よりも広い。その他の部分は回転ナデ調整で、つまみ接合時のナデは一部回転ヘラ削りの痕跡を消している。	灰白色	密	良好	時計回り	

番号 挿図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
67 16 10	前庭部	有蓋高 杯	口径 13.3 受部 15.4 立上 0.55	浅い皿形の体部に短い立 ち上がりをもつ杯部に、 おそらく短脚の脚台が付 く有蓋高杯片である。立 ち上がりは短く内傾し、 受け部はナデによって内 側へ折られている。	底部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整である。底部外面は回 転ヘラ削り後、脚台の接 合の際のナデによって一 部分ナデ消されている。	(杯部外) 緑灰色 (杯部内) 褐灰色	密	良好	時計回り	
68 16 10	前庭部	有蓋高 杯	口径 12.8 器高 13.8	口径に比して短い立ち上 がりをもつ杯部と、八の 字状に開き端部が上下に 拡張する脚部からなる。	全体に回転ナデによって 整形されている。杯部底 外面には回転ヘラ削りが 施されているが、脚部接 合字のナデにより大半が 消されている。	灰色	精良	良好		
69 16	前庭部	高杯 脚部	脚端 14.5	杯部の大部分を欠失した 高杯脚部片。2 状の沈線 によって 2 段構成とな り、それぞれに長方形の 透かしを前後 2 方向に穿 つ。脚端は水平となり、 端部は上下にやや大きめ に拡張している。	残存部位は回転ナデ調 整。脚端内面には強い回 転ナデによって凹部が生 じている。	明オリーブ灰 色	密、径 1mm 未 満の砂粒やや 多く含む	良好	不明	
70 16 10	羨道部	高杯 脚部	脚端 13.6	杯部の大部分を欠失する 高杯の脚部片。脚部は弱 い 2 条の沈線によって 2 段の構成になっており、 それぞれにスリット状の 透かしを前後 2 方向に穿 っている。上段は筒状、 下段は八の字状に末広が りとなる。脚端水平にな っており、端部は上下に 拡張している。拡張部外 側には弱い凹部を作り出 している。	杯部外面の残存部位は回 転ヘラ削り。脚部はない 外面とも回転ナデ調整。 杯部への接合部はやや強 いナデ。	明オリーブ灰 色	やや粗、径 2 mm 未満の砂粒 わずかに含む	良好	不明	
71 16 10	羨道部	無蓋高 杯 杯部	口径 6.3	丸い底と緩やかに立ち上 がる口縁部とからなる。 下半には上下 1 状の沈線 で区画された文様帯があ り、櫛描列点文で充填さ れている。口縁部は丸く おさめる。	底部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ。 列点文は回転ナデの後に 施されている。	オリーブ灰色	密	良好	反時計回 り	脚部と 接合可
71 16 10	羨道部	高杯 脚部	脚端 11.6	八の字状に広がる脚部 で、端部は斜め上方に拡 張する。弱い 2 状の沈線 によって上下に区画さ れ、長方形透かしを前後 2ヶ所に穿つ。	残存部位は回転ナデ。	明オリーブ灰 色	精良	良好	不明	
72 16	羨道部	高杯 脚部	脚端 10.7	八の字状に末広がりで、 端部には下方にのみ弱い 拡張がある。	全体に回転ナデ。	緑灰色	精良	良好	不明	
73 16	羨道部	高杯 脚部	脚端 11.0	八の字状に末広がりに関 き、端部が上下にわずか に拡張する。	全体に回転ナデで、脚端 の内外はナデによって拡 張をつくりだしている。	灰白色	密、径 1mm 未 満の砂粒をや や多く含む。	良好	不明	
74 16	羨道部	高杯 脚部	脚端 10.4	八の字状に末広がりの脚 部。端部はやや肥厚し、 端面にごくわずかな沈線 がめぐる。	全体に回転ナデ。	明オリーブ灰 色	精良	良好	反時計回 り	

番号 挿図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
75 16 10	羨道部	短頸壺	口径 7.1 器高 8.0 最大 11.0 頸部 6.2	体部はその下半に最大径をもち、肩部はなだらかである。口頸部は緩やかに外反し、さらに端部で外側へ折り曲がる。	体部下半は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰色	精良	やや軟質	時計回り	
76 16 10	羨道部	短頸壺蓋	口径 10.25 器高 3.1	平坦な天井部に直立する口縁部が付く。口縁部は外面で外側へ小さく屈曲し端部は丸くおさめている。	天井部外面に回転ヘラ削りはなく、ヘラ切りの痕跡が明瞭に残る。その他は回転ナデ調整。	灰色	密、径3mm未満の砂粒や多く含む	良好	時計回り	
77 16 10	前庭部	短頸壺	口径 6.0 器高 6.0 最大 10.5 頸部 6.4	扁平な球形の体部から短い口縁部上方へのびる。体部と口縁部の境目の屈曲は内外面とも弱い。	体部下半外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。体部内面はナデによる凹凸が顕著。	灰色	精良	良好	時計回り	
78 16 10	羨道部	台付短頸壺	口径 7.9 器高 14.35 最大 16.6 頸 部 8.4 脚端 9.0	体部最大径部分が張りだした算盤玉形の壺部に口縁を丸くおさめる口縁が付く。脚部は八の字状に開き、斜め上方に大きく拡張している。脚部に3ヶ所の円形透かし。	壺部外面下半のみ回転ヘラ削りで、その他は回転ナデ調整である。頸部内面には、口頸部接合時の絞りの痕跡がある。	灰色	精良	良好	時計回り	
79 16 11	前庭部	甌	口径 15.3 器高 20.0 最大 8.5 頸部 4.2	小形で偏球形の壺部に、細長い筒状で上方で大きく開き、逆「く」の字状に屈曲する口頸部がつく。壺部は二条の沈線によって文様帯を構成し列点文を充填している。穿孔は残存していなかった。口頸部の上4/5に沈線や突帯で画された3つの文様帯をもち、上からヘラによる縦の条線文：条線文：列点文となっている。	壺部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ。部分的に文様が回転ナデによって消されている。	(内外面) 青灰色 (断面)褐色	精良	良好	時計回り	
80 16 11	羨道部	甌	口径 10.1 器高 11.8 最大 8.0 頸部 5.5	やや上半より斜め下への穿孔がある球形の壺部に大きく朝顔形に広がる口頸部が付く。頸部は体部や口縁の広がりには比べ細い。壺部の中央と頸部中央には1条の弱い沈線がめぐる。頸部は弱く内側へ屈曲して口縁へとつながり、口縁端部はそのまま丸くおさめる。	壺部の底部外面は静止ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	淡黄色	密、径3mm未満の砂粒含む	良好	不明	
81 16 11	周濠	甌	最大 12.8 頸部 5.75	二条の弱い沈線を体部最大径に巡らせる。口頸部は欠失している。	底部外面は回転ヘラ削り、そのほかは回転ナデ調整を施す。	暗灰色	精良	良好	時計回り	

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
82 17 11	前庭部	平瓶	口径 5.6 器高 13.2 最大 15.1 頸部 3.75	体部は底部が丸く、天井部が平坦となる通常と逆さとなる形態。短く外反する口縁は、体部の縁辺の平坦面の境目に付けられている。通常の器形と逆さになるために、粘土円板の充填は底部内面で行われている。	体部下半はタクキ成形後、カキメ調整を施す。上半は回転ヘラ削りによる成形。	灰白	精良	良好	時計回り	天井部全体に「+」字のヘラ記号
83 17	羨道部	平瓶?	口径 6.2	外側へ大きく開く平瓶の口縁片。口縁部内面にはナデにより、弱い凹部が生じている。	残存部位は回転ナデ、体部への接合部はタテナデ。	灰色	精良	良好	不明	
84 17 11	前庭部	平瓶	口径 7.0 器高 16.9 最大 18.0 頸部 6.2	体部上半に最大径をもつ丸い体部の、上面の中心からややずれた部位に口頸部が付く。底部は平底に近い。口頸部はわずかに外側に開く。	体部下半には回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整が施されている。体部上面には最終的に粘土塊の蓋の痕跡が明瞭に観察できる。	灰白色	密	良好	時計回り	
85 17	羨道部	甕?	口径 14.0	口縁部が直立する。端部には平坦面をもうけ、内面側が肥厚する。	内外面とも回転ナデ。	灰白色	精良	軟質	不明	

第3表 SM1001出土鉄鏃計測表

(単位cm)

番号	形 式	全 長	刃部長	刃部幅	刃部厚	茎部長	茎部幅	茎部厚	備 考
108	三角形		6.0	2.3	0.2		0.7	0.3	
109	三角形			1.5	0.3		0.6	0.25	
110	片刃長頸		3.0	1.0	0.4		0.7	0.4	
111	不明						0.6	0.45	

第4表 SM1001出土耳環計測表

(単位mm)

番号	材 質	技 法	縦 径	横 径	幅	厚	重さ(g)
112	金銅	中空	28.80	31.00	8.25	10.25	
113	銅地銀	中実	27.80	30.80	7.00	7.10	
114	銅地銀	中実	24.35	26.10	6.00	6.35	8.19

第5表 SM1001出土切子玉計測表

(単位mm)

番号	出土位置	A	B	C	D	E	F	G	H	重さ (g)	色 調	備 考
115	玄室	20.95	14.10	12.9	8.6	7.4	9.65	3.9	1.9	5.04	水晶製、半透明	片面穿孔

第6表 SM1001出土管玉計測表

(単位mm)

番号	上面径	下面径	厚み	上面孔径	下面孔径	重さ(g)	色調	備考	穿孔方法
116	6.95	6.9	21.50	2.3	1.9	1.91	ティールグリーン	碧玉製	両面穿孔

第7表 SM1001出土トンボ玉計測表

(単位mm)

番号	出土位置	径	厚み	孔径	重さ(g)	色調	備考
117		9.40	6.15		0.26	ペールイエロー・タークオーズ	一部欠損
118		10.45	8.60		0.93	ペールイエロー・タークオーズ	
119	羨道部	12.00	10.10		1.50	ペールイエロー・タークオーズ	一部欠損
120	玄室	10.02	8.70	2.4	1.02	タークオーズ	一部欠損

第8表 SM1001出土ガラス玉計測表

(単位mm)

番号	出土位置	径	厚み	孔径	重さ(g)	色調	備考
122	羨道部	12.90	9.65	4.0	3.88	カクタスグリーン	
123	羨道部	12.25	9.50	3.2	3.52	カクタスグリーン	
124	玄室	10.20	6.60	2.4	0.49	ペールタートルグリーン	
125		9.00	6.20	2.8	0.70	オックスフォードブルー	
126	玄室	8.72	6.25	2.2	0.82	ミッドナイトブルー	
127		8.65	5.65	2.0	0.67	オックスフォードブルー	
128	玄室	8.50	6.40	1.8	0.14	ミッドナイトブルー	
129	玄室	8.20	4.30	1.9	0.40	ミッドナイトブルー	
130	玄室	8.12	7.05	1.0	0.71	オックスフォードブルー	
131	玄室	8.00	4.40	1.6	0.41	サファイアブルー	
132		7.95	4.30	2.4	0.40	オックスフォードブルー	
133	玄室	7.90	6.60	2.2	1.62	ミッドナイトブルー	
134	玄室	7.60	4.90	1.8	0.40	ウェストミンスター	
135	玄室	7.00	4.00	1.8	0.29	ディーブグリーン	
136	玄室	6.25	3.80	1.6	0.21	オックスフォードブルー	
137	玄室	6.20	2.80	1.8	0.16	ブックウィング	
138	玄室	6.15	3.70	2.1	0.21	パープリッシュブルー	
139	玄室	5.75	3.10	1.2	0.11	サファイアブルー	
140	玄室	5.50	3.50	1.4	0.15	ブックウィング	
141		5.40	4.00	1.6	0.17	ビーコックブルー	
142	玄室	5.32	3.75	1.6	0.15	ミッドナイトブルー	
143	玄室	5.30	4.20	1.3	0.18	サファイアブルー	
144		5.00	3.00	1.3	0.11	ブルシアンブルー	
145	玄室	4.97	2.40	1.7	0.08	サファイアブルー	
146	玄室	4.97	3.70	1.8	0.12	ミッドナイトブルー	

番号	出土位置	径	厚み	孔径	重さ(g)	色調	備考
147		4.87	3.40	1.3	0.11	ブックウィング	
148	玄室	4.80	2.40	1.8	0.09	ブックウィング	
149	玄室	4.75	3.50	1.4	0.08	フレンチタークオーズ	
150	玄室	4.75	2.45	1.4	0.09	ウルトラマリン	
151	玄室	4.70	4.22	1.3	0.13	パーブリッシブルー	
152	玄室	4.50	2.75	2.0	0.07	シーグリーン	
153		4.50	2.75	1.6	0.09	ブルシアンブルー	
154		4.45	2.10	1.0	0.01	ブルシアンブルー	
155	羨道部	4.45	2.70		0.04	サファイアブルー	
156	玄室	4.42	3.25	1.1	0.08	インキブルー	
157	玄室	4.42	3.15	1.2	0.09	オックスフォードブルー	
158	玄室	4.42	3.45	1.6	0.07	パーブリッシブルー	
159	玄室	4.40	2.40	1.5	0.05	パーブリッシブルー	
160	羨道部	4.30	2.35	1.2	0.06	パーブリッシブルー	
161	玄室	4.27	2.50	1.6	0.06	ピリジャン	
162	玄室	4.27	2.60	1.6	0.07	シーグリーン	
163	玄室	4.22	2.55	1.7	0.06	シーグリーン	
164	玄室	4.20	3.00	1.3	0.08	タークオーズ	
165	玄室	4.20	1.70	1.5	0.05	シーグリーン	
166	玄室	4.20	2.40	1.0	0.06	ティールグリーン	
167	玄室	4.15	1.85	1.8	0.05	シーグリーン	
168	羨道部	4.10	2.80	1.6	0.07	ビーコックブルー	
169	玄室	4.10	3.20	1.3	0.09	オックスフォードブルー	
170	玄室	4.10	2.15	1.4	0.05	ブックウィング	
171	玄室	4.10	2.55		0.03	フレンチタークオーズ	細片
172	玄室	4.10	2.95	1.5	0.07	ブルシアンブルー	
173	玄室	4.02	2.10	1.2	0.04	エメラルドグリーン	
174	玄室	4.02	2.40	1.3	0.06	パーブリッシブルー	
175		4.00	2.75	1.2	0.07	パーブリッシブルー	
176	玄室	3.97	3.15	1.6	0.07	ブルシアングリーン	
177	玄室	3.95	3.00	1.4	0.07	ビーコックブルー	
178		3.95	2.80	1.2	0.06	ベニスグリーン	
179		3.95	2.30	1.4	0.04	タークオーズ	
180	玄室	3.90	2.60	1.1	0.06	ミモザ	
181	玄室	3.90	2.10	1.2	0.05	オックスフォードブルー	
182	玄室	3.90	1.95	1.6	0.04	タークオーズグリーン	
183	玄室	3.90	3.10	1.3	0.07	ウルトラマリン	

番号	出土位置	径	厚み	孔径	重さ(g)	色調	備考
184	玄室	3.90	2.10	1.5	0.04	ブライトグーニッシブルー	
185	玄室	3.90	2.70	1.2	0.06	パーブリッシブルー	
186	玄室	3.90	2.45	1.2	0.06	オックスフォードブルー	
187	玄室	3.90	3.10	1.1	0.07	ベニスグリーン	
188	玄室	3.90	2.90	1.0	0.08	フレンチタークオーズ	
189	玄室	3.85	2.60	1.2	0.05	グリーンフレア	
190	玄室	3.82	2.35	1.3	0.05	ベニスグリーン	
191	玄室	3.80	2.50	1.0	0.05	シアンブルー	
192	玄室	3.75	2.60	1.3	0.05	ブルシアングリーン	
193	玄室	3.75	2.10	1.5	0.04	インキブルー	
194	玄室	3.75	1.60	1.4	0.03	ベニスグリーン	
195		3.75	1.85	1.3	0.04	ブルシアンブルー	
196		3.70	2.15	1.4	0.01	サファイアブルー	
197	玄室	3.62	2.40	1.1	0.04	ベニスグリーン	
198	玄室	3.60	2.60	1.0	0.05	ナイルブルー	
199	玄室	3.60	1.85	1.0	0.06	ナイルブルー	
200	玄室	3.60	1.90	1.2	0.05	ピーコックブルー	
201	玄室	3.55	2.60	1.1	0.05	オックスフォードブルー	
202		3.55	2.25	1.4	0.02	ブルシアンブルー	
203	玄室	3.55	2.20	1.2	0.03	パーブリッシブルー	
204	玄室	3.55	2.00	1.0	0.03	パーブリッシブルー	
205	玄室	3.50	2.70	1.4	0.04	ベニスグリーン	
206	玄室	3.50	3.20	1.5	0.06	サファイアブルー	
207	玄室	3.50	2.40	1.0	0.05	オックスフォードブルー	
208	玄室	3.50	2.30		0.01	フレンチタークオーズ	一部欠損
209	玄室	3.50	2.30	1.2	0.04	パーブリッシブルー	
210	玄室	3.45	2.10	1.2	0.07	ブクウイング	
211	玄室	3.45	1.65	1.2	0.03	ブルシアングリーン	
212	玄室	3.42	2.30	1.2	0.03	サファイアブルー	
213	玄室	3.40	3.40	1.2	0.05	ブルシアングリーン	
214	玄室	3.40	3.20	1.2	0.06	ブルシアングリーン	
215	玄室	3.40	2.00	1.1	0.03	シーグリーン	
216	玄室	3.40	1.90	1.3	0.03	ウェストミンスター	
217		3.40	1.70	1.3	0.01	ディーブグリーン	
218	玄室	3.40	1.80	0.9	0.02	サファイアブルー	
219	玄室	3.40	1.75	1.2	0.03	ドライアド	
220		3.40	2.30	1.1	0.01	タークオーズ	

番号	出土位置	径	厚み	孔径	重さ(g)	色調	備考
221	玄室	3.40	1.90	1.4	0.03	ピーコックブルー	
222	玄室	3.35	3.00	1.2	0.05	サファイアブルー	
223	玄室	3.35	1.90		0.02	サファイアブルー	一部欠損
224	玄室	3.35	2.45	1.2	0.03	ブルシアンブルー	
225	玄室	3.35	1.70	1.2	0.03	オックスフォードブルー	
226	玄室	3.35	2.15	1.5	0.01	ベニスグリーン	
227	玄室	3.35	2.50	1.6	0.06	ブルシアンブルー	
228	玄室	3.32	2.90	1.2	0.04	ベニスグリーン	
229	玄室	3.30	2.35	1.2	0.03	ブルシアングリーン	
230	玄室	3.30	1.70	1.0	0.03	パーブリッシブルー	
231	玄室	3.30	2.50	1.2	0.05	シーグリーン	
232		2.27	1.80	1.2	0.01	ブルシアンブルー	
233		3.27	1.80	1.1	0.03	パーブリッシブルー	
234		3.25	2.00			マートルグリーン	一部欠損
235	玄室	3.25	2.70	1.2	0.05	ベニスグリーン	
236		3.22	1.80	1.0	0.02	パーブリッシブルー	
237	玄室	3.20	2.40	1.0	0.04	ブルシアンブルー	
238	玄室	3.17	2.65	0.8	0.04	ブルシアングリーン	
239	玄室	3.15	1.70	1.2	0.02	ブルシアングリーン	
240	玄室	3.15	2.15	1.4	0.01	ウルトラマリン	
241		3.15	2.00	1.0	0.03	ベニスグリーン	
242		3.15	1.70	1.2	0.02	パーブリッシブルー	
243	玄室	3.10	1.55	1.4	0.02	ブルシアングリーン	
244		3.10	2.00		0.01	サファイアブルー	一部欠損
245	玄室	3.10	1.70	1.3	0.01	ナイトブルー	
246		3.10	3.20	1.1	0.06	ベニスグリーン	
247	玄室	3.05	2.20	1.0	0.05	パーブリッシブルー	
248		3.00	2.35	1.0	0.03	シアンブルー	
249	玄室	3.00	1.50	1.1	0.02	ブルシアンブルー	
250	玄室	3.00	3.00	1.0	0.05	ドライアド	
251	玄室	2.95	1.95	1.1	0.02	ウルトラマリン	
252		2.95	2.80	1.0	0.03	ベニスグリーン	
253	玄室	2.90	1.30	1.2	0.01	ブルシアンブルー	
254	玄室	2.90	1.70	1.2	0.01	コバルトブルー	
255	玄室	2.87	1.60	1.2	0.02	ブルシアンブルー	
256	玄室	2.85	2.10	1.2	0.02	パーブリッシブルー	
257	玄室	2.82	1.75	1.2	0.02	パーブリッシブルー	

(単位mm)

番号	出土位置	径	厚み	孔径	重さ(g)	色調	備考
258	玄室	2.80	1.95	1.0	0.02	オックスフォードブルー	
259	玄室	2.75	1.20	1.2	0.01	パーブリッシブルー	
260	玄室	2.72	1.45	1.0	0.01	コバルトブルー	
261	玄室	2.70	1.70		0.01	ナイトブルー	細片
262	玄室	2.70	1.70	1.0	0.01	ブルシアンブルー	
263	玄室	2.70	1.90		0.02	パーブリッシブルー	一部欠損
264	玄室	2.65	2.85	1.0	0.03	ナイルブルー	一部欠損
265	玄室	2.65	2.50	0.9	0.02	サファイアブルー	
266	玄室	2.60	1.00	1.3	0.01	ブルシアンブルー	
267		2.60	1.70	1.0	0.01	ウェストミンスター	
268	玄室	2.60	1.90	1.1	0.01	ビーコックブルー	
269	玄室	2.55	1.10	1.1	0.01	パーブリッシブルー	
270	玄室	2.52	2.00	1.0	0.02	ミッドナイトブルー	
271	玄室	2.50	2.45	1.1	0.02	パーブリッシブルー	
272	玄室	2.50	1.60	1.2	0.01	パーブリッシブルー	
273	玄室	2.50	1.50	1.0	0.01	ビーコックブルー	
274	玄室	2.40	1.20	1.0	0.01	サファイアブルー	
275	玄室	2.30	1.85	1.1	0.02	オックスフォードブルー	
276		2.30	1.25	1.0	0.01	ビーコックグリーン	
277		2.20	2.00	0.7	0.01	ビーコックブルー	
278	玄室	2.20	1.40	1.0	0.01	サファイアブルー	
279	玄室	2.20	2.00	1.0	0.01	コバルトブルー	
280	玄室	2.10	1.10	0.8	0.01	サファイアブルー	
281	玄室	2.10	2.20	0.8	0.01	オックスフォードブルー	
282	玄室	2.00	1.20	0.8	0.01	サファイアブルー	
283	玄室	2.00	1.00	1.0	0.01	タークオーズ	
284	玄室	2.00	1.00	0.8	0.01	サファイアブルー	一部欠損
285	玄室	1.80	2.05		0.01	ビーコックブルー	
286			2.75	0.0		ブルシアンブルー	細片
287	玄室	1.00	2.70		0.01	ウェストミンスター	
288			1.00			ベニスグリーン	細片
289			1.00		0.01	サファイアブルー	細片
290			1.30			パーブリッシブルー	細片
291	玄室		1.20		0.01	サファイアブルー	細片

第9表 SM1001出土土玉計測表

番号	出土位置	径	厚み	孔径	重さ(g)	色調	備考
292	玄室	8.50	6.35		0.18	黒色	一部欠損
293	玄室	8.22	6.20	1.4	0.44	黒褐色	
294	玄室	8.15	6.50	1.6	0.46	黒褐色	一部欠損
295	玄室	8.12	5.70	1.6	0.35	黒色	
296	玄室	8.00	6.25	1.3	0.40	黒色	
297	玄室	8.00	5.75		0.19	黒褐色	一部欠損
298	玄室	8.00	6.00	1.4	0.40	黒褐色	
299	玄室	8.00	5.60	1.5	0.46	赤黒色	
300	玄室	7.95	6.85	1.8	0.41	黒褐色	
301	玄室	7.85	7.20		0.27	黒褐色	一部欠損
302	玄室	7.80	5.40	1.6	0.33	黒褐色	
303	玄室	7.75	6.10	1.6	0.40	黒褐色	
304	玄室	7.75	4.70		0.14	黒色	一部欠損
305		7.65	5.00	1.8	0.31	赤黒色	
306	玄室	7.40	7.00	1.8	0.45	赤黒色	一部欠損
307	玄室	7.57	5.20	1.6	0.30	暗赤灰色	一部欠損
308		7.50	6.00	1.6	0.34	黒色	
309	玄室	7.70	5.50	1.7	0.34	赤黒色	一部欠損
310	玄室	7.40	4.60	1.7	0.28	赤黒色	
311	玄室	7.40	5.30	1.7	0.35	赤黒色	
312		7.10	5.00	1.5	0.29	黒色	
313	玄室	7.00	5.75	1.6	0.28	赤黒色	
314	玄室	6.75	5.50	2.0	0.21	黒褐色	
315	玄室	6.70	5.30	1.5	0.25	赤黒色	一部欠損
316	玄室	6.70	5.00	1.1	0.25	黒褐色	
317	玄室	6.65	4.90		0.11	黒色	一部欠損
318		6.60	6.00	1.5	0.28	赤黒色	
319	玄室	6.60	5.00	1.4	0.23	黒褐色	
320	玄室	6.40	5.50	1.4	0.20	黒褐色	
321		6.15	5.50	1.4	0.17	黒色	
322	玄室	6.00	5.50	1.3	0.30	黒褐色	
323	玄室	5.90	5.30		0.11	黒褐色	一部欠損

第10表 SM1001周辺出土土器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎土	焼成	回転台	備考
324 25 11	玄室	白磁碗	口径 16.0	外側へまっすぐ開き、口縁部は外面を折り曲げ、端部は丸くおさめる。	残存範囲は全面に施釉され、貫入は見られない。釉の厚さは平均して0.3mmで、口縁部外面では0.7mmを測る。	灰白色	精良	良好		
325 25 11	義道部	瓦器碗	口径 14.8	浅い皿形の器形で、緩やかに広がり丸くおさまる口縁をもつ。底部には低い貼り付けの高台がつく。	全体にナデ調整の跡、体部下半の外面には弱いエビオサエがある。内面には螺旋状の暗文が施されている。	灰白色	精良	良好	反時計回り	
326 26	F-4	杯蓋	口径 13.0	口縁部だけの杯蓋片。器高がやや高くなると考えられる。	天井部外面に回転ヘラ削り、その他は回転ナデ。	灰色	密	良好	時計回り	
327 26	棺外	杯蓋	口径 13.3 器高 4.4	丸い天井部と直立し、丸く納める口縁部よりなる。	天井部外面にやや丁寧な回転ヘラ削りを施す他は、回転ナデによって調整されている。天井部内面には回転ナデ後、一定方向ナデあり。	(外)灰白 (内)褐灰・灰白	やや粗	良好	反時計回り	
328 26	I-3	杯蓋	口径 14.4	偏平な器形の杯蓋破片。天井部の平坦面が小さくなると予想される。	外面は口縁部を除き、回転ヘラ削り。その他の部位は回転ナデ。	(外)浅黄色 (内)灰白色	密、砂粒を含む	良好	反時計回り	
329 26	棺外	杯蓋	口径 12.5 器高 4.7	口径に比してやや器高が高く、天井部は平坦部をもつ。肩部は丸みをもち、口縁端部は丸くおさめる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。肩部には回転ナデによる凹凸が著しい。内面には粘土紐の巻き上げ痕が観察できる。	灰色	密、径0.5mm未満の砂粒が少し含む。	良好	反時計回り	
330 26	D-5	杯蓋	口径 14.8	平坦な天井部をもつと思われる杯蓋片。口縁端部はやや尖り気味におさめられている。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ。	明オリーブ灰色	精良	良好	反時計回り	
331 26	墳丘南側	杯	口径 12.5 受部 14.7 立上 0.5	短い立ち上がりをもつ杯受け部破片。立ち上がりの基部は厚く、内面に屈曲はない。	底部外面残存部位に回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	(外)褐灰色 (内)灰色	密		反時計回り	
332 26	F-5	杯	口径 11.3 器高 3.4 受部 13.8 立上 0.7	底部は径6cmの平坦面をもつ。口縁の立ち上がりは上方へ急角度で反っており、内面にやや強い屈曲がある。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデで調整されている。	灰色	密、混入砂粒やや多い。	良好	時計回り	
333 26	I-3	杯	受部 14.0	口縁端部を欠く杯身片。口縁内面に屈曲はみられない。	残存部位は回転ナデ。	(外)オリーブ灰色 (内)明オリーブ灰色	密、径0.5mm未満の砂粒や多く含む。	良好	不明	
334 26	I-3 J-3	杯	口径 13.0 受部 15.6 立上 0.4	やや深い皿形の器形に内傾する短い口縁がつく。口縁内面には弱い屈曲がある。器壁に回転ナデによる凹凸著しい。	底部外面は回転ヘラ削り、そのほかは回転ナデ。	オリーブ灰色	密、径0.5mm未満の砂粒やや多く含む	良好	時計回り	

番号 挿図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎土	焼成	回転台	備考
335 26	I-3	杯	口径 12.8 受部 14.8 立上 0.75	浅い皿形の器形に直立する口縁部がつく。立ち上がりの基部はやや厚い。	残存部位は回転ナデ。	灰白色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	不明	
336 26	F-4 落込み	高杯		高杯杯部と脚部との接合部分。脚部は短脚で大きく直線的に開くものがつくと考えられる。	杯底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。杯底部内面は回転ナデ後、一定方向ナデ。	黄灰色	密	良好	時計回り	
337 26	F-6	台付壺 脚部	最大 12.7 脚端 12.2	下方へ八の字状に開く脚部片。中位に4方向の穿孔がある。下半に明瞭な稜が2条巡る。	残存部位は回転ナデ。体部との接合部分にヘラ状工具による接合沈線。	オリーブ黒色	密、径0.5mmの砂粒わずかに含む	良好	反時計回り	
338 26	墳丘西 側	甕 口縁	口径 19	口縁端部を上下に拡張し、上下を丸くおさめる甕の口縁部破片。口縁部内面には稜やかなくぼみがある。	残存部位は回転ナデ調整。	(外)褐灰色 (内)灰白色・オリーブ黒色	密	良好	不明	
339 26	F-3 (墳丘 西側)	甕	口径 22.35	口縁がまっすぐ開く。口縁端部の外面は粘土帯を折り曲げて厚く作られている。	口縁部周辺は全体に回転ナデによって調整されている。体部と口縁部の境目の内面には弱い板ナデ整形が行われている。	褐灰	精良	良好	不明	
340 26	古墳の 間	甕 口縁	口径 25.5	直線的に外側へ開く口頸部をもつ甕の口縁の破片。口縁部外面は幅広く拡張し、さらにその下面を断面三角形に拡張している。内面には強いナデにより緩やかな凹面が生じている。	体部外面は格子タタキ、同内面は同心円タタキによって整形されている。頸部より上は回転ナデ調整である。	赤灰色	精良	良好	不明	

第11表 ST1001出土須恵器観察表

番号 挿図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎土	焼成	回転台	備考
341 30 19	石室内	杯蓋	口径 13.3 器高 4.0	全体に丸みを帯びる器形で、口縁部はやや内湾している。口縁端部は丸くおさめている。	天井部外面は回転ヘラ削りが施されているが、頂部は削られておらず、ヘラ切り後の板ナデが観察できる。	青灰色	密、径3mm未満の砂粒含む。	良好	時計回り	
342 30 19	石室内	杯	口径 10.0 器高 4.2 受部 14.5 立上 0.45	浅い皿形の器形に、短く内傾する立ち上がりが付く。立ち上がり内面には弱い屈曲がみられる。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	青灰色	密、径2mm未満の砂粒含む。	良好	反時計回り	
343 30 19	石室内	杯蓋	口径 13.4 器高 3.9	丸みをもつ器形で、口縁部はやや内湾する。口縁端部はごくわずかに外反し、四角くおさめている。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰色	密、径3mm未満の砂粒含む。	良好	時計回り	

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎土	焼成	回転台	備考
344 30 19	石室内	杯	口径 11.9 器高 3.9 受部 14.6 立上 0.65	浅い皿形の体部に内傾する口縁部をもつ。立ち上がり部分の内側へ著しく内傾し、やや上方へ反る。内面にはやや強い屈曲がある。	底部外面は回転ヘラ削りが施されるが、中央部分は削られていないためにヘラ切り後の板ナデの痕跡が観察できる。その他の部位は回転ナデ調整。	青灰色	密、径3mm未満の砂粒含む。	良好	時計回り	
345 30 19	石室内	提瓶	口径 5.3 器高 19.9 最大 15.9 頸部 4.55	偏平な球形の体部の側面に口縁部を接合し、さらにその両側に吊手を2個もっている。口縁部は厚手で、端部は丸くおさめている。吊手は環として完結しない形骸化の進んだ形態である。	体部外面は一つの面が回転カキメ調整、もう一方の面が回転ヘラ削りによって調整されている。体部内面と口縁部内外面は回転ヘラ削りによって調整されている。回転カキメ側の面の内面中央部には成形時最終的に蓋を詰めた痕跡が明確に残っている。	オリーブ灰色	密、径2mm未満の砂粒少し含む	良好	反時計回り	
346 30 19	石室内	短頸壺	口径 7.0 器高 7.9 最大 11.05 頸部 7.4	上半よりに最大径をもつ体部に、短く直立する口縁部が付く。	体部下外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。工程ごとの調整を行っているために、複数回の回転ヘラ削りが切り合っている。	灰白色	やや粗、径3mm未満の砂粒やや多く含む。	やや軟質	時計回り	

第12表 ST1001出土玉類計測表

(単位mm)

番号	種別	径	厚み	孔径	重さ(g)	色 調	備 考
347	ガラス玉	2.70	1.50	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
348	ガラス玉	4.27	3.20	0.9	0.07	サルファイエロー	北側小口
349	ガラス玉	2.40	1.65	0.8	0.01	サファイアブルー	北側小口
350	ガラス玉	2.40	1.30	1.0	0.01	サファイアブルー	北側小口
351	ガラス玉	2.20	1.45	0.8	0.01	サファイアブルー	北側小口
352	ガラス玉	2.70	1.45	1.3	0.01	サファイアブルー	北側小口
353	ガラス玉	2.65	1.40	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
354	ガラス玉	4.00	2.20	1.5	0.05	ディーブグリーン	北側小口
355	ガラス玉	2.30	1.40	1.0	0.01	サファイアブルー	北側小口
356	ガラス玉	2.10	1.40	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
357	ガラス玉	2.40	1.80	1.1	0.01	サファイアブルー	北側小口
358	ガラス玉	2.20	1.35	0.8	0.01	サファイアブルー	北側小口
359	ガラス玉	2.00	1.20	0.8	0.01	サファイアブルー	北側小口
360	ガラス玉	2.45	1.20	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
361	ガラス玉	2.25	1.40	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
362	ガラス玉	2.30	1.30	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
363	ガラス玉	2.90	1.15	1.3	0.01	サファイアブルー	北側小口

番号	種別	径	厚み	孔径	重さ(g)	色調	備考
364	ガラス玉	2.25	1.20	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
364	ガラス玉	2.20	1.40	0.7	0.01	サファイアブルー	北側小口
365	ガラス玉	2.20	1.40	0.7	0.01	サファイアブルー	北側小口
366	ガラス玉	2.45	1.20	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
367	ガラス玉	2.60	1.40	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
368	ガラス玉	2.40	1.40	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
369	ガラス玉	2.45	1.10	1.1	0.01	サファイアブルー	北側小口
370	ガラス玉	2.45	1.30	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
371	ガラス玉	2.70	1.00	1.1	0.01	サファイアブルー	
372	ガラス玉	2.57	1.20	1.1	0.01	サファイアブルー	
373	ガラス玉	2.50	1.20	1.0	0.01	サファイアブルー	
374	ガラス玉	2.05	1.60	0.7	0.01	サファイアブルー	北側小口
375	ガラス玉	2.45	1.10	1.1	0.01	サファイアブルー	北側小口
376	ガラス玉	2.25	1.15	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
377	ガラス玉	2.55	1.20	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
378	ガラス玉	2.70	1.10	1.1	0.01	サファイアブルー	北側小口
379	ガラス玉	2.50	1.40	1.0	0.01	サファイアブルー	北側小口
380	ガラス玉	2.00	1.40	0.7	0.01	サファイアブルー	
381	ガラス玉	2.00	2.30	0.7	0.02	サファイアブルー	
382	ガラス玉	3.20	2.20	0.9	0.03	シトロンイエロー	
383	ガラス玉	2.10	1.30	0.7	0.02	サファイアブルー	
384	ガラス玉	2.20	1.10	0.9	0.01	サファイアブルー	
385	ガラス玉	2.15	1.30	0.9	0.01	サファイアブルー	
386	ガラス玉	2.52	1.40	0.9	0.01	サファイアブルー	
387	ガラス玉	2.40	1.20	0.9	0.01	サファイアブルー	
388	ガラス玉	2.30	1.40	0.7	0.01	サファイアブルー	
388	ガラス玉	2.30	1.40	0.7	0.01	サファイアブルー	
389	ガラス玉	2.40	1.40	0.9	0.01	サファイアブルー	
390	ガラス玉	2.40	1.40	0.7	0.01	サファイアブルー	
391	ガラス玉	2.22	1.20	0.9	0.01	サファイアブルー	
392	ガラス玉	2.20	1.70	1.0	0.01	サファイアブルー	
393	ガラス玉	2.55	1.20	1.1	0.01	サファイアブルー	
394	ガラス玉	2.50	1.05	1.1	0.01	サファイアブルー	
395	ガラス玉	2.00	1.00	0.7	0.01	サファイアブルー	
396	ガラス玉	2.25	1.40	0.7	0.01	サファイアブルー	
397	ガラス玉	2.40	1.75	0.9	0.01	サファイアブルー	
398	ガラス玉	2.20	1.50	1.1	0.01	サファイアブルー	

番号	種別	径	厚み	孔径	重さ(g)	色調	備考
399	ガラス玉	2.10	1.00	0.7	0.01	サファイアブルー	
400	ガラス玉	1.90	1.50	0.8	0.01	サファイアブルー	
401	ガラス玉	2.30	1.00	1.1	0.01	サファイアブルー	
402	ガラス玉	2.30	1.40	0.9	0.01	サファイアブルー	
403	ガラス玉	2.25	1.40	0.9	0.01	サファイアブルー	
404	ガラス玉	2.00	1.20	0.9	0.01	サファイアブルー	
405	ガラス玉	2.20	1.20	0.8	0.01	サファイアブルー	
406	ガラス玉	2.20	1.10	1.1	0.01	サファイアブルー	
407	ガラス玉	1.90	1.40	0.8	0.01	サファイアブルー	
408	ガラス玉	2.00	1.00	0.7	0.01	サファイアブルー	
409	ガラス玉	2.30	1.20	0.8	0.01	サファイアブルー	
410	ガラス玉	2.20	1.80	0.8	0.01	サファイアブルー	
411	ガラス玉	3.50	1.60	1.1	0.03	オパールグリーン	
412	ガラス玉	2.20	1.30	0.7	0.01	サファイアブルー	
413	ガラス玉	2.55	1.20	0.9	0.01	サファイアブルー	
414	ガラス玉	2.40	1.00	1.1	0.01	サファイアブルー	
415	ガラス玉	3.85	2.45	1.2	0.05	ベールイエロー	
416	ガラス玉	2.20	1.20	0.9	0.01	サファイアブルー	
417	ガラス玉	2.60	1.20	1.1	0.01	サファイアブルー	
418	ガラス玉	2.70	1.40	1.2	0.02	サファイアブルー	
419	ガラス玉	2.60	1.60	0.9	0.02	サファイアブルー	
420	ガラス玉	2.00	1.15	0.9	0.01	サファイアブルー	
421	ガラス玉	2.30	1.20	1.0	0.01	サファイアブルー	
422	ガラス玉	2.40	1.55	1.0	0.01	サファイアブルー	
423	ガラス玉	2.10	2.00	0.7	0.02	サファイアブルー	
424	ガラス玉	2.30	1.90	0.9	0.01	サファイアブルー	
425	ガラス玉	2.15	1.50	0.9	0.01	サファイアブルー	
426	ガラス玉	2.62	1.50	1.1	0.01	サファイアブルー	
427	ガラス玉	2.40	1.15	0.7	0.01	サファイアブルー	
428	ガラス玉	2.15	1.10	0.9	0.01	サファイアブルー	
429	ガラス玉	2.25	1.30	0.7	0.01	サファイアブルー	
430	ガラス玉	2.25	1.00	0.9	0.01	サファイアブルー	
431	ガラス玉	2.47	1.15	1.0	0.01	サファイアブルー	
432	ガラス玉	2.10	1.20	0.7	0.01	サファイアブルー	
433	ガラス玉	2.20	0.85	1.3	0.01	サファイアブルー	
434	ガラス玉	2.40	1.50	1.3	0.01	サファイアブルー	
435	ガラス玉	2.25	1.30	0.7	0.01	サファイアブルー	

(単位mm)

番号	種別	径	厚み	孔径	重さ(g)	色調	備考
436	ガラス玉	2.15	1.30	0.9	0.01	サファイアブルー	
437	ガラス玉	2.10	1.10	0.7	0.01	サファイアブルー	
438	ガラス玉	1.95	0.85	0.9	0.01	サファイアブルー	
439	ガラス玉	2.40	1.60	0.7	0.01	サファイアブルー	
440	ガラス玉	2.40	1.00	0.8	0.01	サファイアブルー	
441	ガラス玉	1.90	1.20	0.9	0.01	サファイアブルー	
442	ガラス玉	2.25	1.50	0.7	0.01	サファイアブルー	
443	ガラス玉	2.15	1.10	1.1	0.01	サファイアブルー	
444	ガラス玉	2.25	1.45	0.7	0.01	サファイアブルー	
445	ガラス玉	2.00	1.30	0.7	0.01	サファイアブルー	
446	土玉	6.95	4.80	1.1	0.27	黒色	

第13表 ST1003出土鉄鏃計測表

(単位cm)

番号	形式	全長	刃部長	刃部幅	刃部厚	茎部長	茎部幅	茎部厚	備考
447	片刃長頸		3.9	1.0	0.25		0.5	0.4	茎部に木質残存
448	方頭			3.2	0.25				

第14表 ST1005周辺出土須恵器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
449 42	上面	杯蓋	口径 13.6	やや内湾する口縁端部片。端部はやや厚手で、丸くおさめている。	残存部位は回転ナデ調整。	(外)灰色、 (内)灰白色	密、径0.5cm未満の砂粒やや多く含む	良好	不明	
450 42 24	上面	杯	口径 12.4 器高 4.4	受部 15 立上 0.55	浅い皿形の器形に短く直立する口縁がつく。口縁端部は丸くおさめられ、内面の屈曲はやや強い。	底部外面は回転へら削り、そのほかは回転ナデ。	灰白色	密、径2mm未満の砂粒やや多く含む	良好	時計回り
451 42	上面	杯	口径 14.4	緩やかに開く口縁をもつ杯身。口縁内面はわずかに肥厚している。	残存部位は回転ナデ。	灰白色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む。	良好	不明	
452 42	上面	杯	口径 12.6	口縁が緩やかに外反する	全体に回転ナデ	オリーブ灰	精良	良好	不明	
453 42 24	上面	平瓶	口径 5.25 器高 12.6 最大 14.5 頸部 3.9	偏平な球形の体部に外側へ直線的に開く口縁部が付く。口縁部中央の外面には弱い沈線が1条めぐり、端部はそのまま丸くおさめる。	体部下半の外面は回転へら削り、その他は回転ナデ調整。口縁部内面及び体部下半の内面には、回転ナデによる凸凹が著しい。	灰色	精良	やや軟質	反時計回り	

第15表 SM1002出土須恵器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
454 47 28		杯蓋	口径 14.2 器高 4.5	全体に丸みをもつ器形 で、口縁部はほぼ直立し ている。端部は丸くおさ まる。	天井部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整を施している。天井部 内面は回転ナデ後、一定 方向ナデ。口縁部外面に 工具小口によると考えら れる圧痕による文様が全 周する。	灰白色	密、径1mm未 満の砂粒ごく わずかに含む	良好	時計回り	
455 47 28		杯	口径 12.2 器高 4.1 受部 15.0 立上 1.1	浅く扁平な体部にやや長 めの立ち上がりが付く。 立ち上がりは内傾してい るが、途中で上方へ弱く 屈折している。	底部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。	灰色	密、径2mm未 満の砂粒わず かに含む	良好	時計回り	
456 47 28		杯蓋	口径 15.6 器高 3.9	全体に丸みをもつ器形で 口縁部は外側へ緩やかに 開く。	天井部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。天井部内面は回転ナ デ後、一定方向ナデ。	灰白色	密	良好	時計回り	
457 47 28		杯	口径 12.5 器高 4.2 受部 15.0 立上 0.7	緩やかなカーブを描く体 部と、内傾して立ち上が る口縁とからなる。立ち 上がりは基部が厚く、先 端は細く仕上げられてい る。	底部外面は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整。	灰白色	密、径2mm未 満の砂粒ごく わずかに含む	良好	時計回り	

第16表 SM1002出土鉄鏃計測表

(単位cm)

番号	形 式	全 長	刃部長	刃部幅	刃部厚	茎部長	茎部幅	茎部厚	備 考
458	三角形		7.9	2.3	0.2		0.8	0.4	
459	三角形			2.2	0.25		0.5	0.35	
460	三角形			2.15	0.25		0.75	0.2	
461	三角形			1.9	0.2		0.55	0.3	
462	片刃長頸		2.8	0.9	0.2		0.45	0.4	
463	片刃長頸		3	1	0.2		0.45	0.25	
464	長頸?						0.5	0.35	
465	長頸?						0.4	0.35	
466	長頸?						0.45	0.35	
467	圭頭		7.7	2.8	0.2		0.55	0.3	
468	圭頭	8.8	5.4	2	0.25	3.4	0.4	0.35	茎部に木質残存
469	方頭		8.3		0.3		0.4	0.4	
470	方頭	9.1	4.9	2.2	0.25	4.2	0.45	0.25	

第17表 SM1002出土刀子計測表

(単位cm)

番号	全長	刃部長	刃部幅	刃部厚	茎部幅	茎部厚
471			1.5	0.4	1.1	0.4
472						
473			1.8	0.25		
474	13.5	8.1	1.5	0.35	0.6	0.3

第18表 SM1003出土須恵器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
476 52 31	玄室内	杯蓋	口径 14.5 器高 4.5	天井部が丸みをもつ杯蓋片。口縁端部内面にはごく弱い沈線が巡る。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ。	灰色	密、径1mm未満の砂粒や多く含む。	良好	反時計回り	
477 52 31	玄室内	杯蓋	口径 14.3 器高 4.8	天井部は全体に緩やかなカーブを描き、口縁はわずかに内傾し、端部は丸くおさめる。	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。天井部内面は回転ナデ後、一定方向ナデ。	灰白色	密、径0.5mm未満の砂粒や多く含む。	良好	反時計回り	

第19表 SM1003出土耳環計測表

(単位mm)

番号	材質	技法	縦径	横径	幅	厚	重さ(g)
478	銅地銀	中実	26.10	27.65	6.60	7.80	14.88
479	銅地銀	中実	27.85	30.30	6.90	8.00	19.88
480	銅	中実	24.15	25.20	3.50	4.25	2.26

第20表 SM1003出土勾玉計測表

(単位mm)

番号	出土位置	A	B	C	D	E	F	G	H	重さ (g)	色調	備考
481	玄室	29.40	10.61	7.6	10.35	3.0	1.2			5.27	瑪瑙製、赤褐色	片面穿孔

第21表 SM1003出土切子玉計測表

(単位mm)

番号	出土位置	A	B	C	D	E	F	G	H	重さ (g)	色調	備考
482	玄室	22.90	17.15	15.85	10.2	9.85	11.0	4.6	1.9	7.86	水晶製、半透明	片面穿孔

第22表 SM1003出土算盤玉計測表

(単位mm)

番号	出土位置	A	B	C	D	E	F	G	H	重さ (g)	色調	備考
483	玄室	10.00	11.60	7.3	7.2	5.8	4.4	1.7		1.96	水晶製、半透明	片面穿孔

第23表 SM1003出土管玉計測表

(単位mm)

番号	上面径	下面径	厚み	上面孔径	下面孔径	重さ(g)	色調	備考	穿孔方法
484	8.10	7.95	22.65	2.5	1.5	2.76	ボトルグリーン	碧玉製	片面穿孔
485	8.20	7.85	20.60	1.5	1.3	1.13	明緑灰色	碧玉製、軟質、 摩滅著しい	片面穿孔
486	7.40	7.3	20.75	2.9	1.2	1.97	ボトルグリーン	碧玉製	片面穿孔
487	7.25	7.45	19.70	3.5	1.4	2.01	ボトルグリーン	碧玉製	片面穿孔
488	10.45	10.3	23.25	2.5	1.4	4.35	ボトルグリーン	碧玉製	片面穿孔
489	8.00		16.60			0.50	緑灰色	碧玉製、軟質、 摩滅著しい	

第24表 SM1003出土土玉計測表

(単位mm)

番号	径	厚み	孔径	重さ(g)	色調	備考
490	9.20	3.80		0.29	黒色	
491	7.60	5.70		0.21	黒褐色	
492	7.32	5.30	1.4	0.31	黒褐色	

第25表 SM1003出土ガラス玉計測表

(単位mm)

番号	径	厚み	孔径	重さ(g)	色調	備考
493	4.37	2.80	1.2	0.08	フレンチタークオーズ	
494	3.00	2.60	1.0	0.03	シーグリーン	
495	3.30	3.20	1.0	0.04	オパールグリーン	
496	3.10	1.70	1.0	0.04	ブックウィング	
497	2.90	1.80	1.0	0.02	コバルトブルー	
498	3.60	2.10	1.3	0.05	ナイルブルー	
499	3.80	2.50	1.2	0.06	シーグリーン	
500	3.60	1.80	1.0	0.02	シアンブルー	
501	3.40	2.80	1.2	0.04	タークウォーズグリーン	
502	5.10	4.20	1.4	0.14	フレンチタークオーズ	
503	4.65	3.00	1.4	0.10	フレンチタークオーズ	
504	3.50	2.40	1.1	0.01	シーグリーン	
505	3.50	2.00	0.8	0.04	シーグリーン	
506	3.32	2.90	1.0	0.05	シーグリーン	
507	2.65	2.50		0.02	ナイルブルー	細片
508	3.32	1.50	1.2	0.03	フレンチタークオーズ	
509	4.87	2.55	1.4	0.09	フレンチタークオーズ	
510	4.95	2.85	1.4	0.10	フレンチタークオーズ	
511	4.17	3.60	1.2	0.10	マートルグリーン	
512	4.22	2.70	1.2	0.06	シトロンイエロー	

番号	径	厚み	孔径	重さ	色調	備考
513	3.40	2.75	1.0	0.03	シーグリーン	
514	3.55	1.50	1.2	0.03	ジャスパーグリーン	
515	3.15	1.95	1.1	0.03	ナイルブルー	
516	3.25	2.15	1.0	0.03	ピーコックブルー	
517	2.10	1.90	0.9	0.02	シーグリーン	
518	2.85	2.50	1.1	0.03	シーグリーン	
519	3.02	1.85	1.0	0.02	オパールグリーン	
520	3.25	1.75	1.1	0.02	パーアッシュブルー	
521	3.10	2.65	1.0	0.05	ナイルブルー	
522	3.25	2.10	1.0	0.03	オックスフォードブルー	
523	2.70	1.80	1.0	0.01	オックスフォードブルー	
524	3.60	1.60	1.3	0.04	シトロンイエロー	
525	3.35	1.90	1.2	0.04	マンダリンオレンジ	
526	2.70	2.10		0.01	ブルシアンブルー	一部欠損

第26表 SM1003周辺出土須恵器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
527 54	H・I- 6・7 I-8	杯蓋	口径 15	丸みのある口縁部片。口縁端部内面にはやや明確な稜をもつ。	残存部位は回転ナデ調整。	(外)灰白色 (内)灰白色・灰色	密、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	不明	
528 54	I-6・7 J-7	杯	口径 12.5 受部 15.6 立上 1.0	内傾する立ち上がりが付く杯身受け部破片。受け部はやや長く、全体に薄く仕上げられており、内面には弱い屈曲がある。	残存部位は回転ナデ調整。	灰色	精良	良好	不明	
529 54	I-6・7 J-7	杯	口径 14.2 受部 16.5 立上 0.85	受け部は外側へ折り曲がる形態をもつ杯身受け部破片。立ち上がりは上方へ弱く反り上がり、内面にはやや強い屈曲がある。	残存部位は回転ナデ調整。	(外)灰色・黒色 (内)灰色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	不明	
530 54	H・I- 6・7	杯	口径 12.9 受部 15.4 立上 1.2	内傾する立ち上がりをもつ杯身受け部破片。受け部状面は平坦で、立ち上がりはやや長く内面に弱い屈曲がある。	残存部位は回転ナデ調整。	(外)灰白色 (内)灰色	精良	良好	不明	
531 54	H-7・8	杯	口径 12.4 受部 14.7 立上 0.7	短い立ち上がりをもつ杯身受け部破片。立ち上がりは上方へ弱く反り、内面には弱い屈曲がある。	残存部位は回転ナデ調整。	灰白色	精良	良好	不明	2次焼成による黒斑あり

第27表 ST2001出土土器観察表

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎土	焼成	回転台	備考
532 60 34		土師器 小皿	口径 6.5 器高 1.5	直線的に開く口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさまられている。	底部外面は回転ヘラ切り後、ナデ調整。ヨコナデ調整。	浅黄色	密、径1mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	時計回り	
533 60 34		土師器 小皿	口径 7.2 器高 1.6	直線的に開く口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさまる。	底部はヘラギリ後ナデ調整、その他は回転ナデ。	淡黄色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	—	
534 60 34		土師器 小皿	口径 7.1	直線的に開く口縁部をもち、底部は欠損。口縁端部は丸くおさまる。	残存部位は回転ナデ。	淡黄色	密、径1mm未満の砂粒少し含む	良好	—	
535 60 34		土師質 骨蔵器	口径 10.4	直立する器形をもつ。端部はナデによって外面側にわずかな拡張がみられる。器壁内面には粘土紐の接合痕の痕跡明瞭に残す。	外面は板押圧後ナデ調整、その他はナデ調整。	橙色	密、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	—	
536 60 34		土師質 骨蔵器	口径 11.5	直立し、口縁部付近でわずかに外反する。端部はナデによって外面側にわずかな拡張がみられる。器壁内面には粘土紐の接合痕の痕跡明瞭に残す。	外面は板押圧後ナデ調整、その他はナデ調整。内面にタテハケ？	橙色	密、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	—	
537 60 34		東播系 こね鉢	口径 25.4	直線的に大きく開くこね鉢の口縁部片。口縁部は外面が肥厚し、端部は丸くおさまる。	残存部位は回転ナデ調整。内面は回転ナデ後斜め方向のナデ。	灰色	密、径1mm未満の砂粒少し含む	良好	反時計回り	

第28表 ST2001出土空風輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G
540	65	34		凝灰岩	2.55	21.7	1.4	10.3	10.4	12.8	8.2	13.2
541	65			砂岩	5.85	22	1.9	7.1	13	14.7	10.3	14.9
542	65	34		砂岩	6.8	22.6	0.3	9.2	13.2	16.4	13.6	16.35

第29表 ST2001出土火輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G	H	I
543	65	34		砂岩	13.8	11.4	23.5	23.3	3.7	1.8	14.5	5.2	7.8	

第30表 ST2001出土地輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G
544	65	34		砂岩	21	22.1	22.45	14.8			3.85	0.85
545	65	34		凝灰岩	10.7	24.3	27.85	10.15				
546	65	34		凝灰岩	5.4	20	23.15	11.05				

第31表 ST2002SK01出土空風輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量(kg)	A	B	C	D	E	F	G
547	69	37		凝灰岩	0.68					10.6	9.2	12.1
548	69	37		凝灰岩	2.83		2.05	11.05			13.9	17.9

第32表 ST2002SK01出土水輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量(kg)	A	B	C	D	E	F	G
549	69	37		凝灰岩	16		32.2	20	0.3	0.2	21.4	9.8
550	69			凝灰岩	4.7			14.3				

第33表 ST2002SK01出土火輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量(kg)	A	B	C	D	E	F	G	H	I
553	69	37		凝灰岩	12.84	13.2	29	29.3	7	1.4	18.4	5.5	11.4	2.4
554	69	37		凝灰岩	18.4	14.4		34.5	8.2	5.1	22.1		11	

第34表 ST2002SK01出土地輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量(kg)	A	B	C	D	E	F	G
551	69	37		凝灰岩	11.8	32	32.1	12.6	0.9	1.4		
552	69	37		凝灰岩	5.2	23.1	22.4	9.3	0.9	1.1		

第35表 ST2002出土空風輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量(kg)	A	B	C	D	E	F	G
555	70	38		凝灰岩	3.85		1.7	10		15.2	11.6	15.2
556	70	38		砂岩	9.04	25.4	1.7	9	14.7	16.6	12.6	16.7

第36表 ST2002出土火輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量(kg)	A	B	C	D	E	F	G	H	I
557	70			凝灰岩	5.39	10.15			6.65	4.15	14.9	4.75	4.75	2.4

第37表 ST2002出土水輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量(kg)	A	B	C	D	E	F	G
572	78	41		凝灰岩	12.99		28.4	14.8				15.5

第38表 ST2002出土基壇計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G
560	70	38		凝灰岩	44.4	37.8	52	52.2	21.2	10	12.85	8.5

第39表 ST2002出土五輪板碑計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
561	72	38		砂岩	12.8	20	19.5	42.7	10.1	18.7	41.7	9	10.5	13	7.9
562	72	38		砂岩	19.7	17.8	20.8	48.7	13.3	16.8	44	8.6	6.2		
563	72			砂岩	9.4	16.3	16.3		16.3					12.9	15.5

第40表 ST2003出土空風輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G
565	75	41		凝灰岩	3		1.9	10.05	10.1	14.1	11.5	14.35
566	75	41		砂岩	5.8	23.2	1.4	8.8	13		10.5	14.6
567	75	41		砂岩	10.6	27.8	1.9	10.9	16.85	16.8	12.3	16.65

第41表 ST2003出土火輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G	H	I
568	75	41		砂岩	8.44	8	22.2	21.5	3.6	18.5	12.7	3.8		

第42表 ST2004出土空風輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G
569	78			砂岩	4.67		0.95	9.3			12.95	17.85
570	78	41		砂岩	9.05		1.2	9	14.8	17.1	12.7	16.8
571	78	41		砂岩	12.8	30	1.9	11.2	16.9	19.55	14.4	19.6

第43表 ST2004出土水輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G
592	80	43		砂岩	20	12	27	10.7	0.55	0.2	20.7	10
593	80		G-9	凝灰岩	16.5		30.15					

第44表 中世墓周辺出土土器観察表

番号 挿図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎土	焼成	回転台	備考
573 75	G-9	杯蓋	口径 13.15	肩部に丸みをもつ口縁部片。端部はやや尖り気味であるが、丸くおさめている。	肩部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰色	密、径3mm未満の砂粒含む	良好	時計回り	
574 75 41	G-9	杯	口径 12.8 器高 4.8 受部 14.8 立上 1.2	平坦な底部に内傾する立ち上がりが付く。立ち上がりはこの遺跡の出土遺物としては長く、古い様相に属する。内面の屈曲はやや強い。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰白色	密、径1mm未満の砂粒含む	良好	反時計回り	
575 75 41	F-9	杯	口径 12.7 器高 3.6 受部 15.4 立上 0.6	器高に比してやや口径の大きい器形に、短く内傾する立ち上がりが付く。立ち上がり内面にはやや強い屈曲がある。口縁端部は尖り気味だが、先端にはわずかな平坦部がある。	底部外面には回転ヘラ削り、その他は回転ナデで調整されている。	灰色	密、径2mm未満の砂粒含む	良好	反時計回り	
576 75	E-10	杯	口径 12.8 器高 4.25 受部 15.0 立上 0.7	浅い皿形の体部に短い立ち上がりが付く。立ち上がりは内傾し、薄く仕上げられている。内面の屈曲はない。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。	灰色	密、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	時計回り	
577 75	G-9	杯	口径 13.3 受部 16.0 立上 0.45	短い立ち上がりをもつ杯身受け部破片。受け部端は上方へ反っている。立ち上がり内面はやや強く屈曲している。	残存部位は回転ナデ調整。	褐灰色	密、径0.5mm未満の砂粒やや多く含む	良好	不明	外面に自然釉付着。
578 75	B-10 ・11	甕	口径 10.8	らっば状に開く甕のうち、頸部との境となる1条の突線以上の口縁部破片。緩やかに上方へ立ち上がるが、端部付近でわずかに外反する。	残存部位は回転ナデ調整。	(外)灰色 (内)紫灰色	密、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	不明	
579 75	B-10 ・11	甕 口縁	口径 20.5	外側へ直線的に開く甕口縁部片。外面には幅2cmの広い突帯が巡る。	残存部位は回転ナデ。	(外)灰白色 (内)黒褐色	精良	良好	不明	
580 75	F-10	甕 口縁	口径 25.0	緩やかに外側へ開く甕の口縁部片。外面に幅1.5cm、高さ0.7cmの突帯を巡らす。	残存部位は回転ナデ。	灰色	密、径5mm未満の砂粒わずかに含む	良好	不明	
581 75 41		土師質 骨蔵器	口径 9.2	直立する器形をもつ。口縁はわずかに内傾し、端部は丸くおさまる。	外面はタテハケ、内面はタテハケ後タテナデ。口縁端部内外面はユビオサエ。	にぶい褐色	やや粗、径1mm未満の砂粒非常に多く含む	良好	—	
582 75 41		土師質 骨蔵器	口径 6.8	直立する器形をもつ。器壁及び口縁の器壁は7mmと均質である。	外面はタテハケ、内面はヨコハケ。口縁端部内外面にユビオサエ。	橙色	やや粗、径1mm未満の砂粒非常に多く含む	良好	—	

番号 挿図 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎土	焼成	回転台	備考
583 75 41	B-10	土師質 播鉢	口径 30.6	大きく開く播鉢の口縁破片。口縁端部は内外面とも四角く仕上げられ、内面端部はわずかにつまみ出されている。	内面はヘラ削り後、ナデ調整。外面は口縁周辺は強いヨコナデ。体部はエビオサエ調整。	にぶい黄橙色	精良	良好	—	おろし目は6～7条／5cm

第45表 ST2001周辺出土土風輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G
584	80		G-9	砂岩	4.4			7.35		14.8	12.7	15.15
585	80	43	G-8	砂岩	5.79	20.5	1.0	8.1	11.2	15.1	11.5	15
586	80			砂岩	7.18	24.8	1.8	8.4	14.8	15.8	10.8	15.8
587	80		G-8	砂岩	8.0	23.9	1.7	9.3	1.7	17.15	11.85	17.55
588	80	43	G-9	砂岩	9.4	24.0	1.3	8.9	13.9	18.4	15.3	17.8
589	80			砂岩	10.5	25.7		10.2		18.0	13.8	18.5
590	80	43	G-9	砂岩	15.2	31.5	1.4	10.9	19.0	20.2	15.8	20.6

第46表 ST2001周辺出土火輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G	H	I
591	80	43	G-8	凝灰岩	15.7	13.9	32.15	33.35	6.15	3.65	22.7	8.1	9.3	2.5

第47表 ST2001周辺出土水輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G
594	81		G-8	砂岩	17.25	11.25	25.2	11.5	0.5	0.25	20.2	10.0
595	81		G-8・9	砂岩	18.6	12.2	24.9	10.4		0.3	20.3	10.0
596	81	43	G-9	砂岩	16.0	10.9	25.55	10.3		0.2	18.85	10.0
597	81		G-9	砂岩	18.9	10.2	27.0	11.2	0.35	0.2	19.9	10.8
598	81	43	G-9	砂岩	18.8	11.2	26.7	10.5	0.25	0.35	20.7	11.0

第48表 ST2002周辺出土地輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G
599	81	43		砂岩	27.5	24.85	25	20.4			5.0	0.8
600	81	43		砂岩	25.2		24.5	21.7			6.0	1.2
601	81			砂岩	30.2	22	23.1	21.5				

第49表 ST2001～2004周辺出土空風輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G
602	82	44	D-10	砂岩	10.35			9.8	15.0	17.6	14.1	18.3

第50表 ST2001～2004周辺出土水輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G
603	82			凝灰岩	14.2		28.8	15.3	1.4	0	20.9	12.5
604	82	44	D-10	砂岩	33.6	13.0	30.0	13.6	0.6	0.25	26.0	13.0
605	82			砂岩	37.2	21.85	31.8	17.7			25.2	15.0

第51表 ST2001～2004周辺出土火輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G	H	I
606	82	44		凝灰岩	9.28	10.5	35.5	34.0			18.5	4.5	5.5	5.9
607	82			凝灰岩	28.8		42.0	39.0			24.3	6.8	7.1	4.4

第52表 ST2001～2004周辺出土地輪計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G
608	83	44		凝灰岩								

第53表 ST2001～2004周辺出土五輪板碑計測表

(単位cm)

番号	挿図	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
609	83	44		砂岩	17.0	19.3	8.6	53.0	11.4	18.1	43.9	11.0	7.8	14.3	12.2
610	83		C-11	砂岩	19.4	19.3	20.5	51.6	11.6	18.4	5.1	10.5	10.3	14.2	15.5
611	83	44	C-11	砂岩	17.5	20.1	16.3	51.1	11.3	18.2	51.1	10.8	9.5	13.6	16.0

写 真 图 版

図版 1



調査前風景（北より）



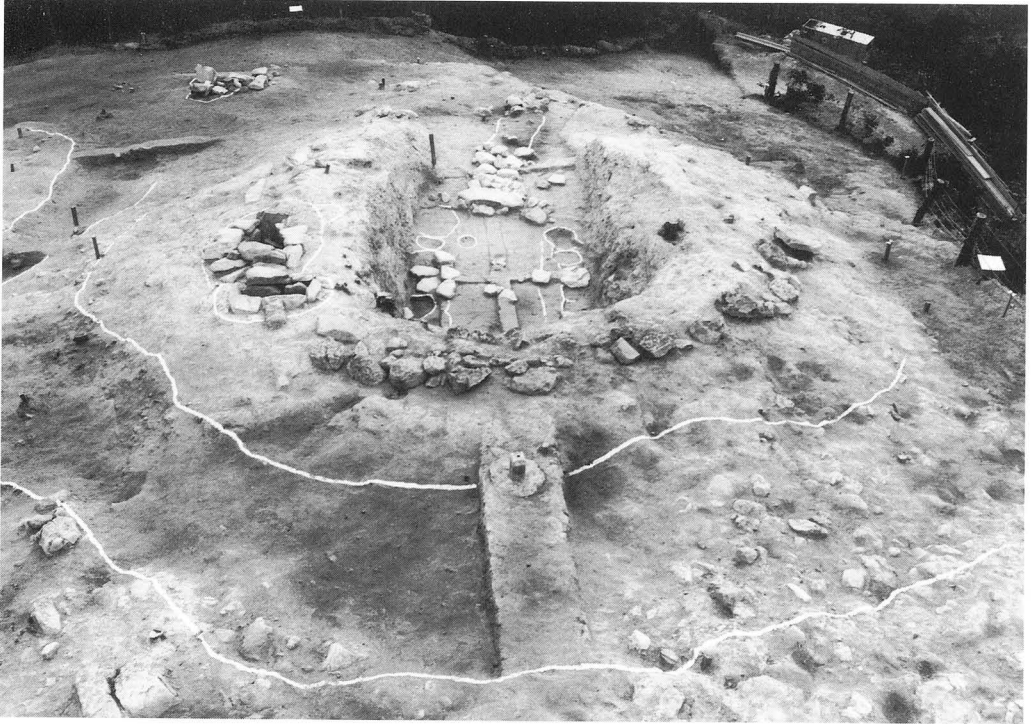
調査前風景（西より）



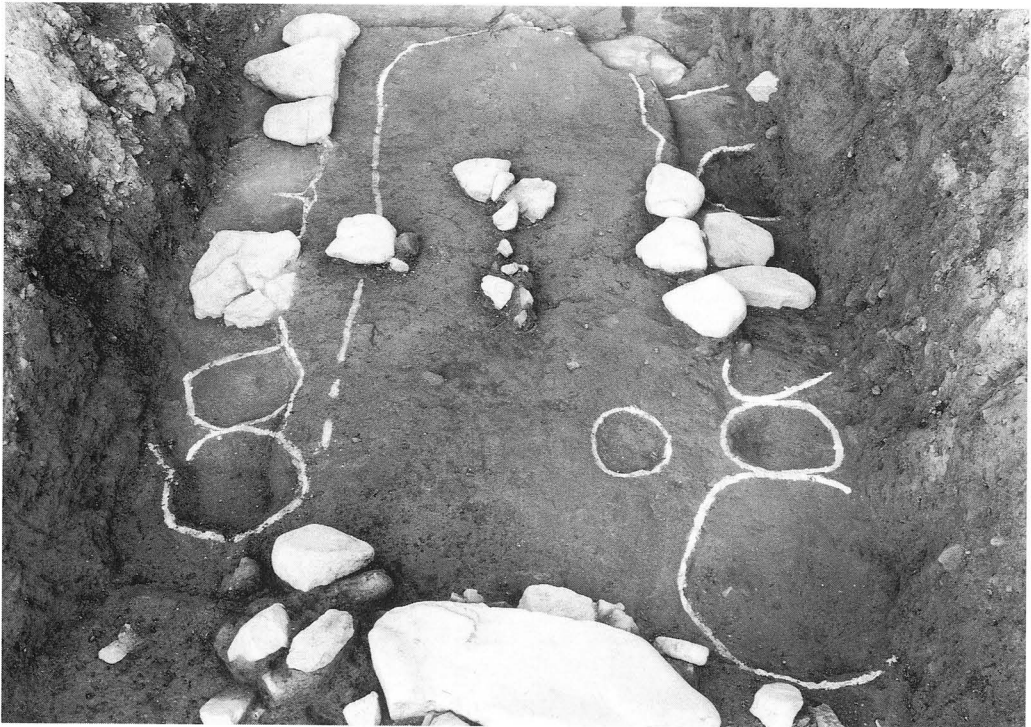
調査区全景



尾根中央部の遺構



SM1001全景（北より）



SM1001横穴式石室



SM1001横穴式石室内堆积状况



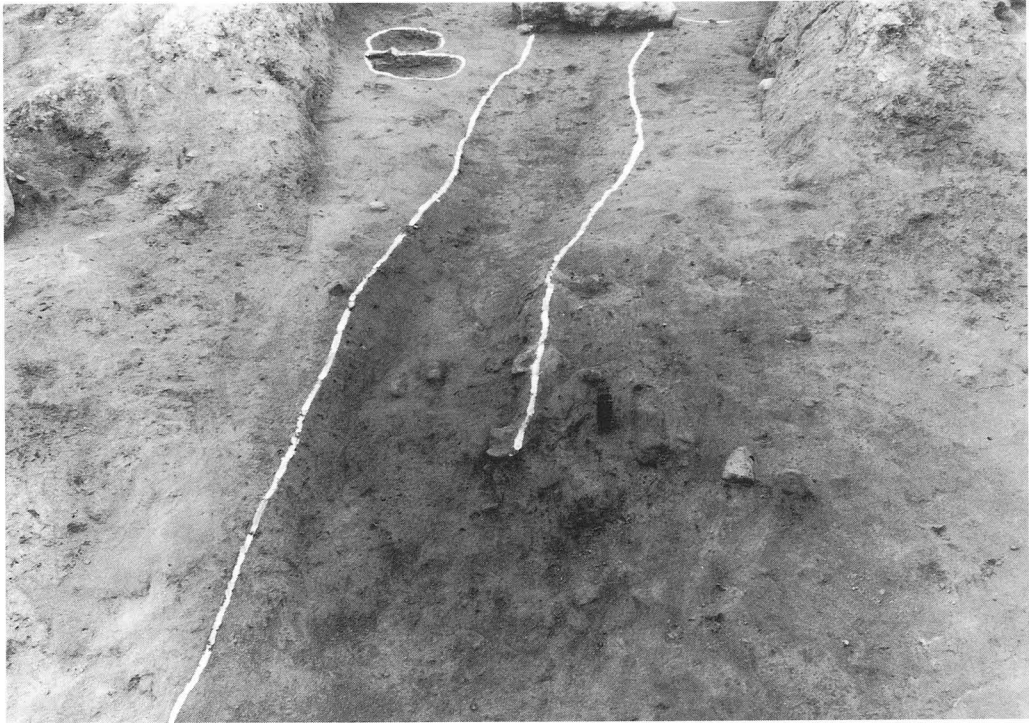
SM1001排水溝上面集石状况



SM1001遺物出土状況 排水溝内



SM1001遺物出土状況 前庭部

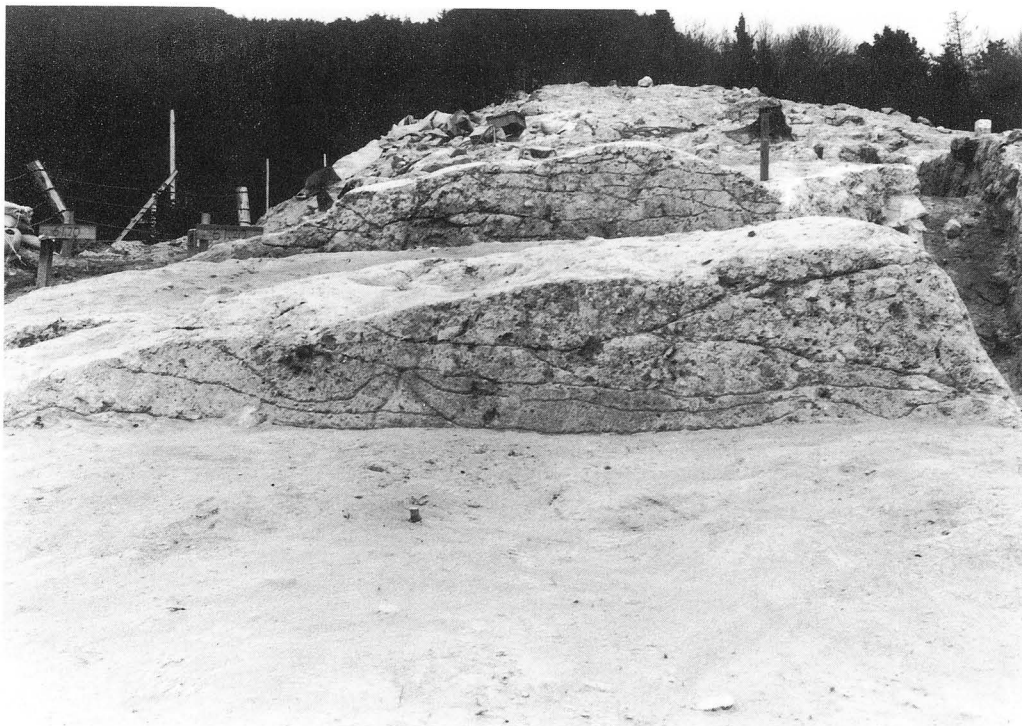


SM1001排水溝完掘状況



SM1001周濠断ち割り状況

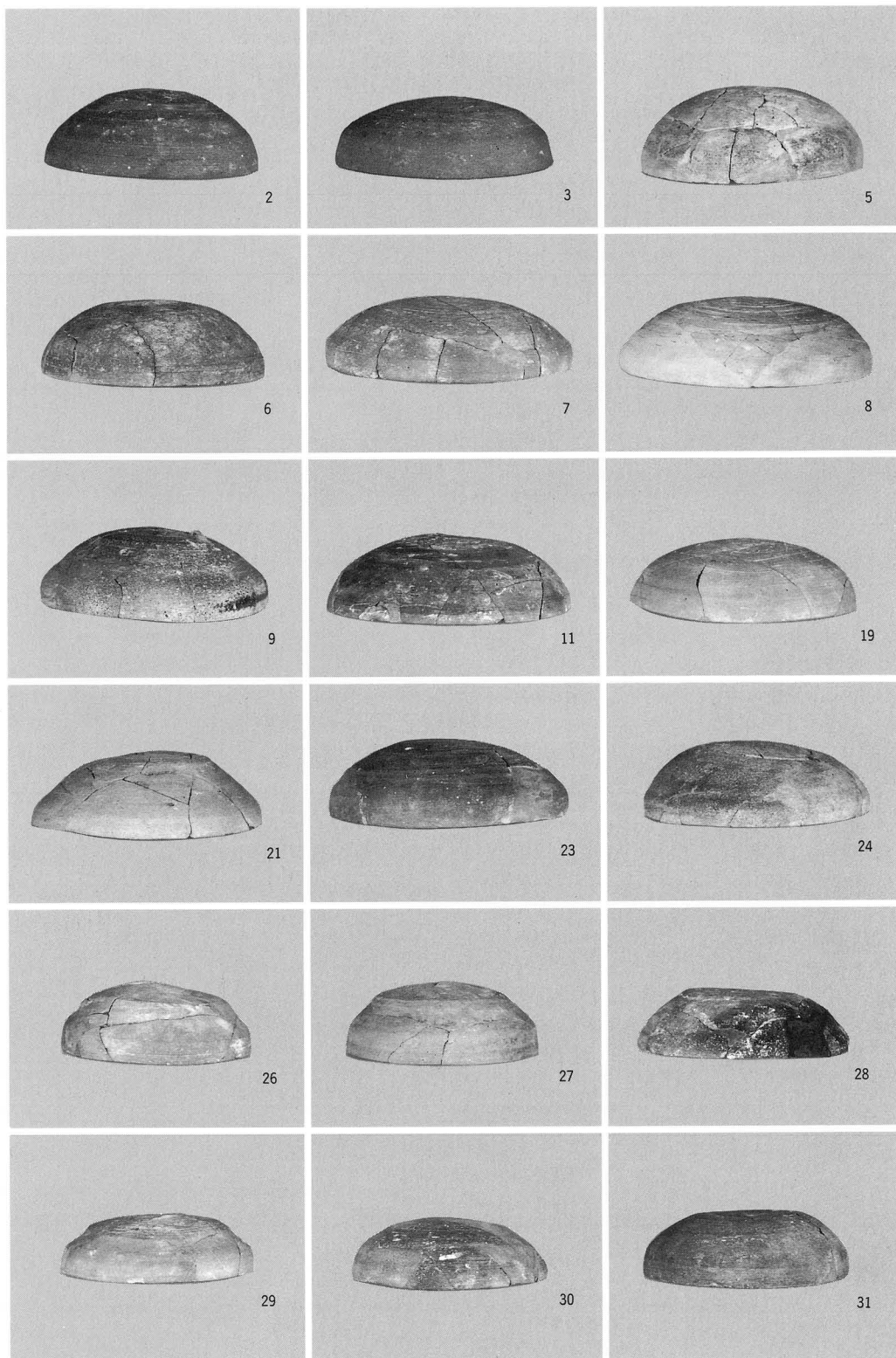
図版 7



SM1001墳丘断ち割り状況（西半）

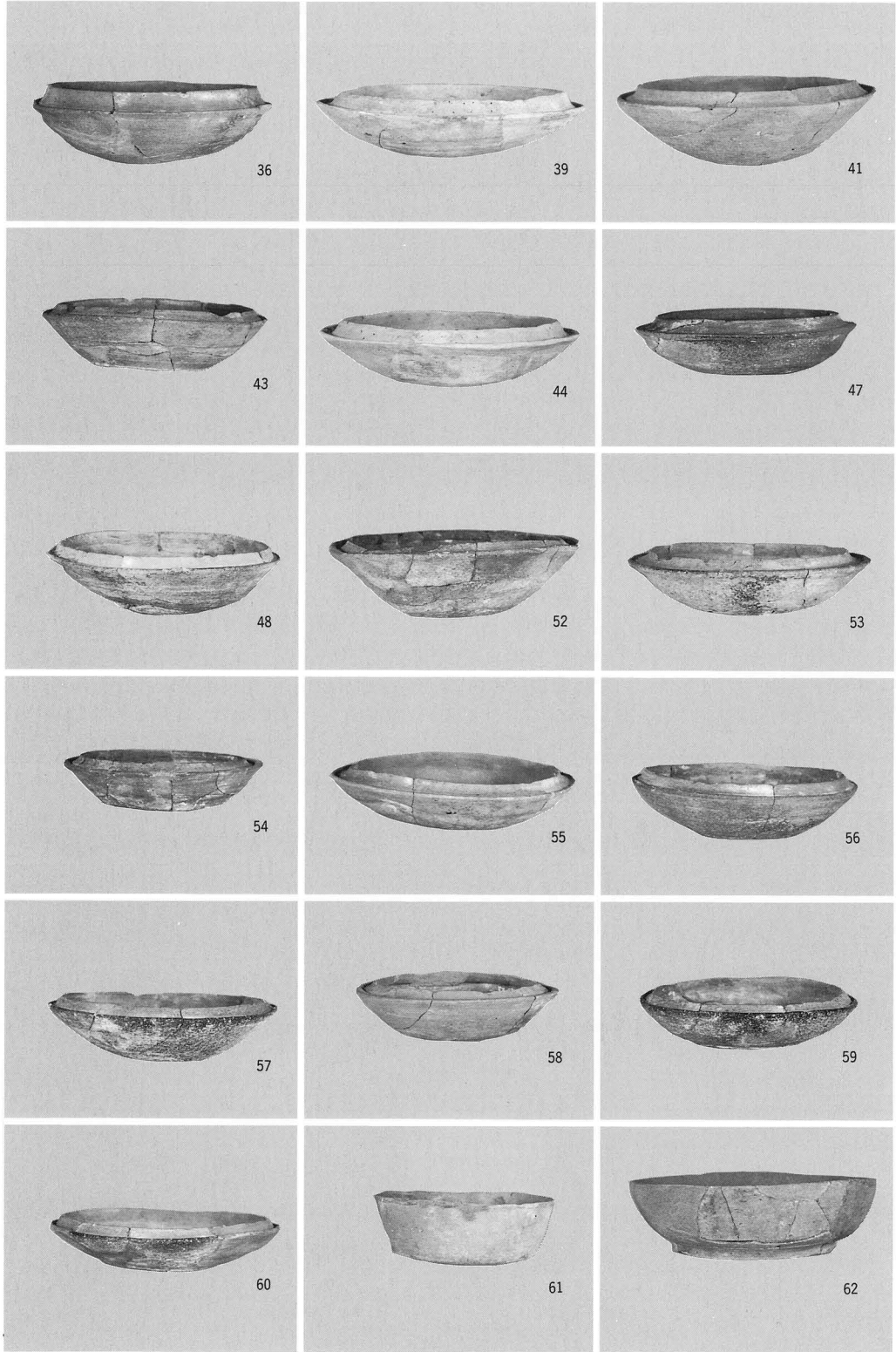


SM1001墳丘断ち割り状況（東半）

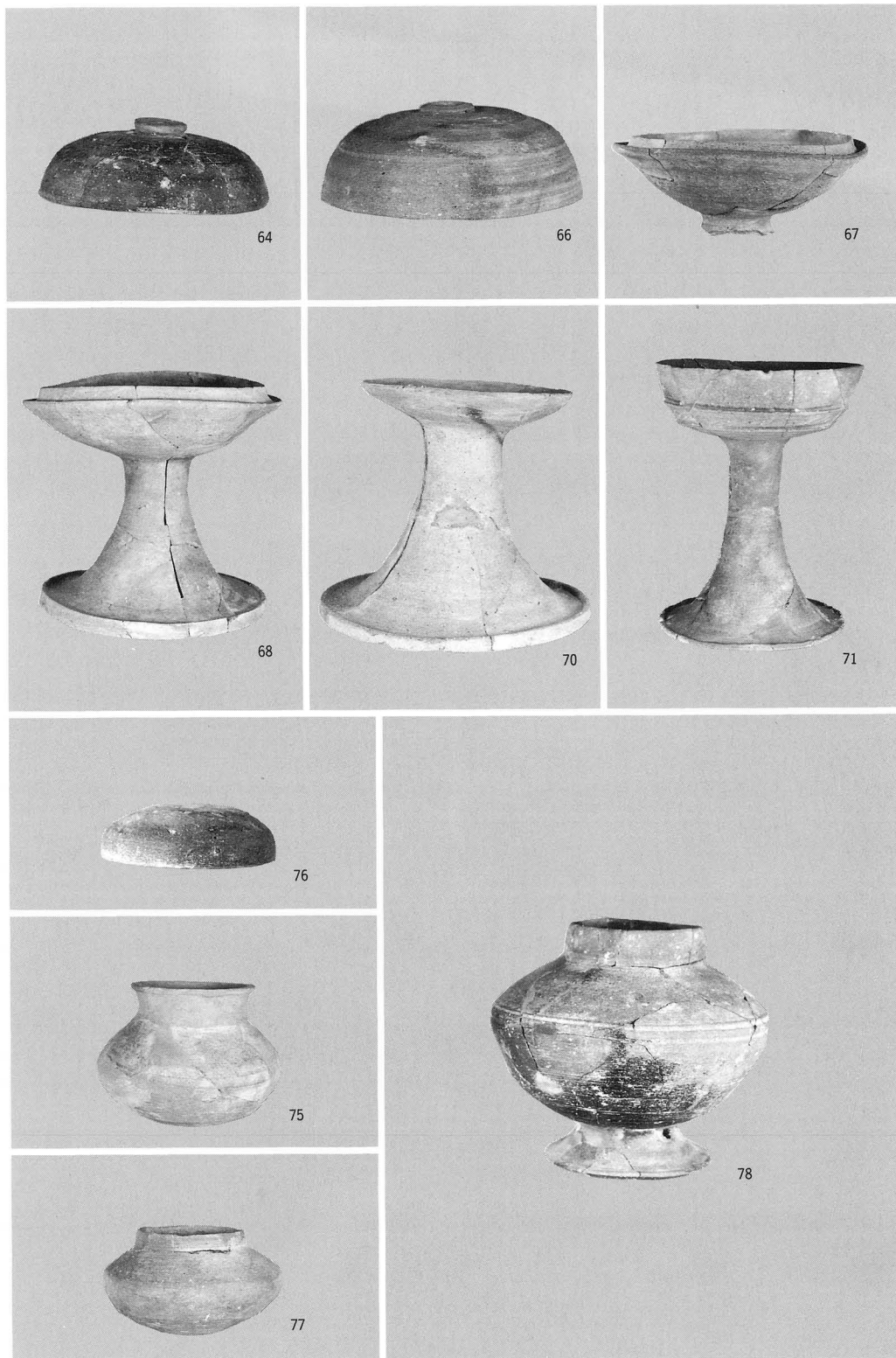


SM1001出土須恵器 (1)

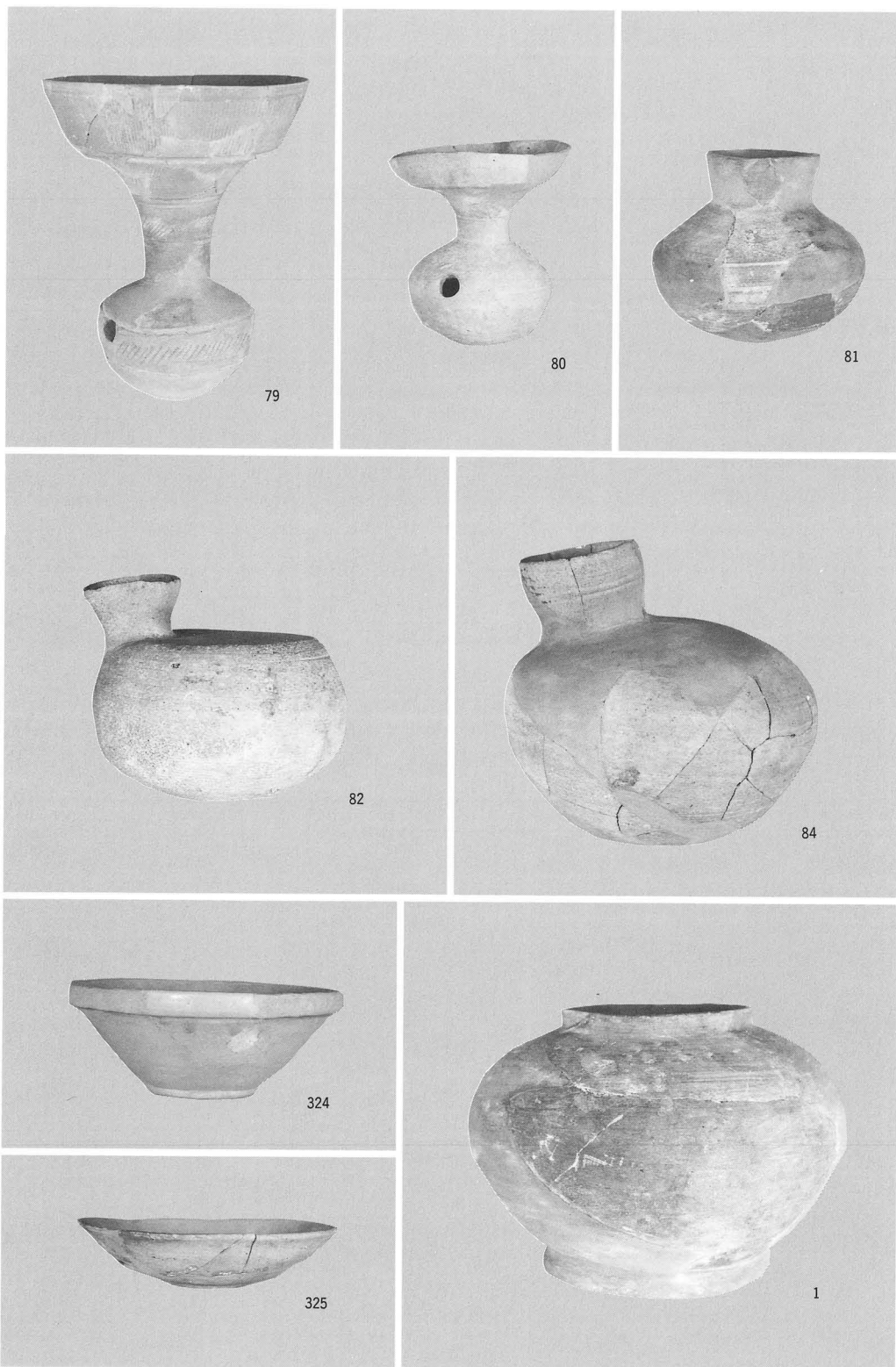
図版 9



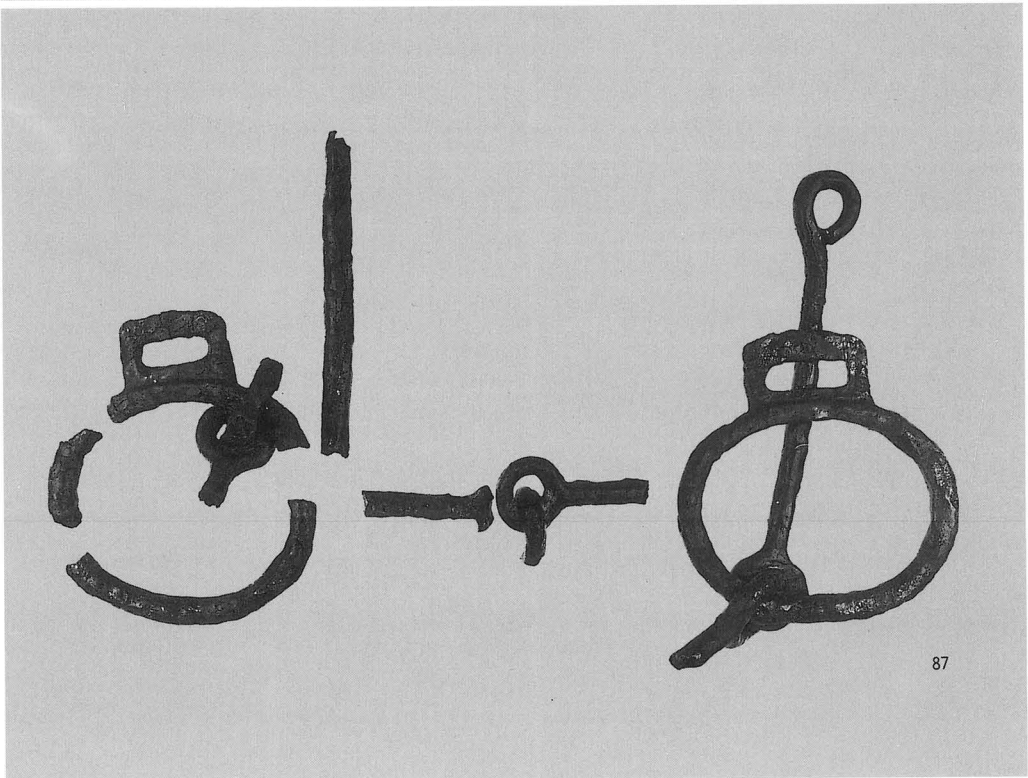
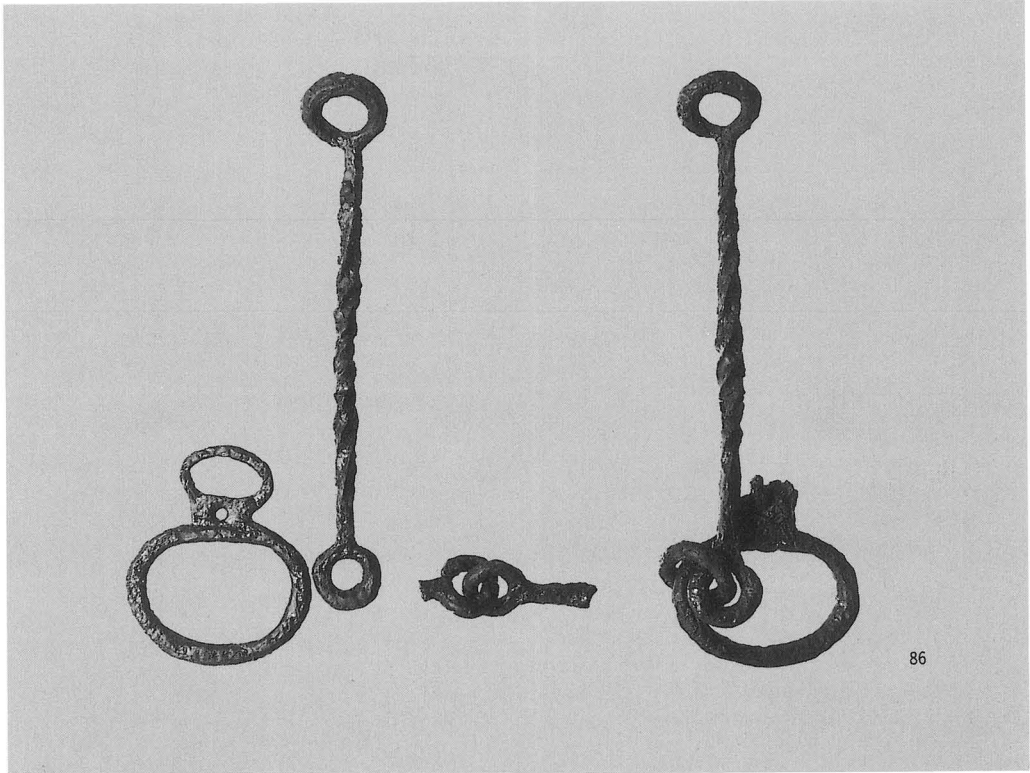
SM1001出土須恵器 (2)



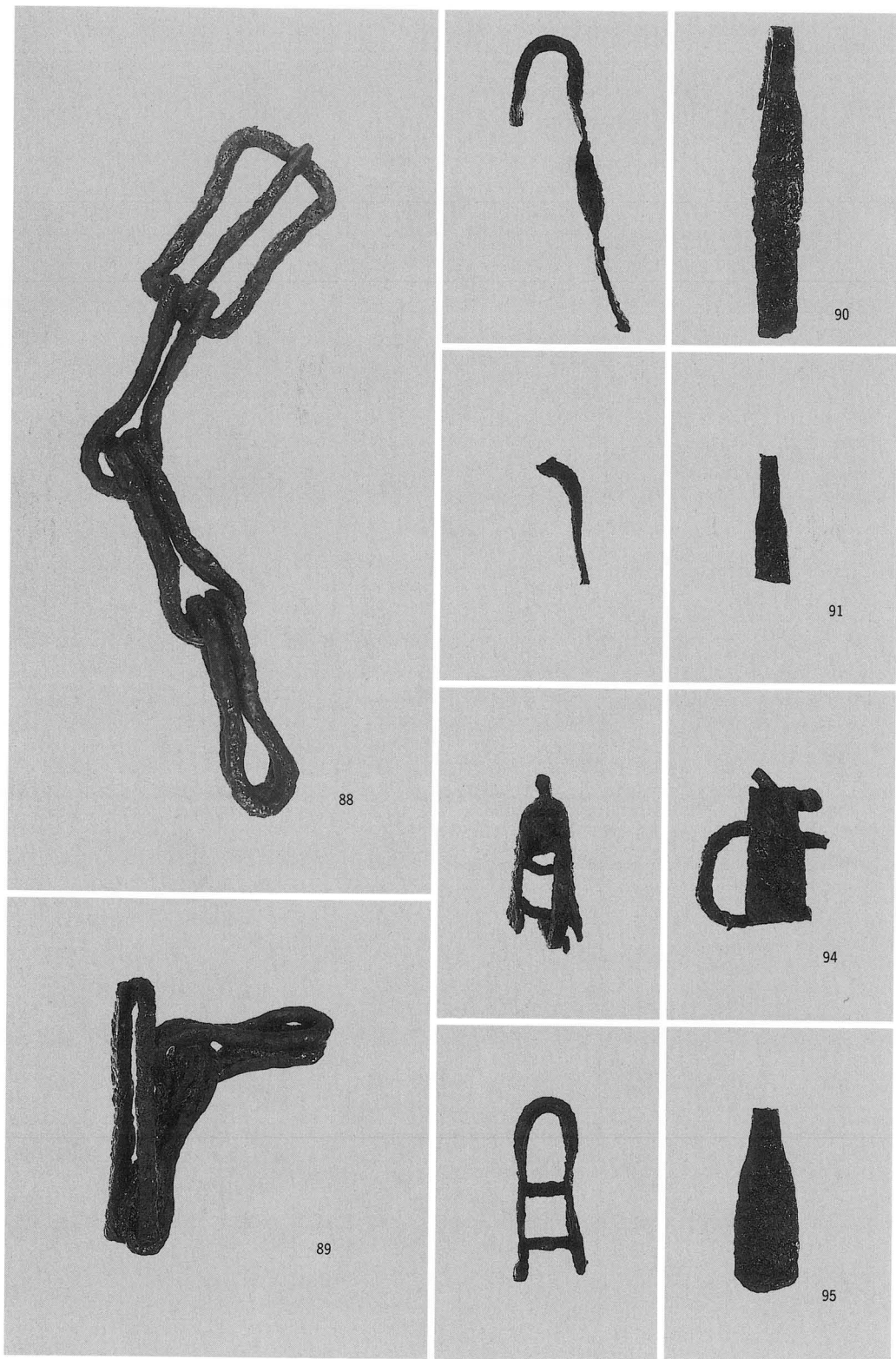
SM1001出土須恵器 (3)



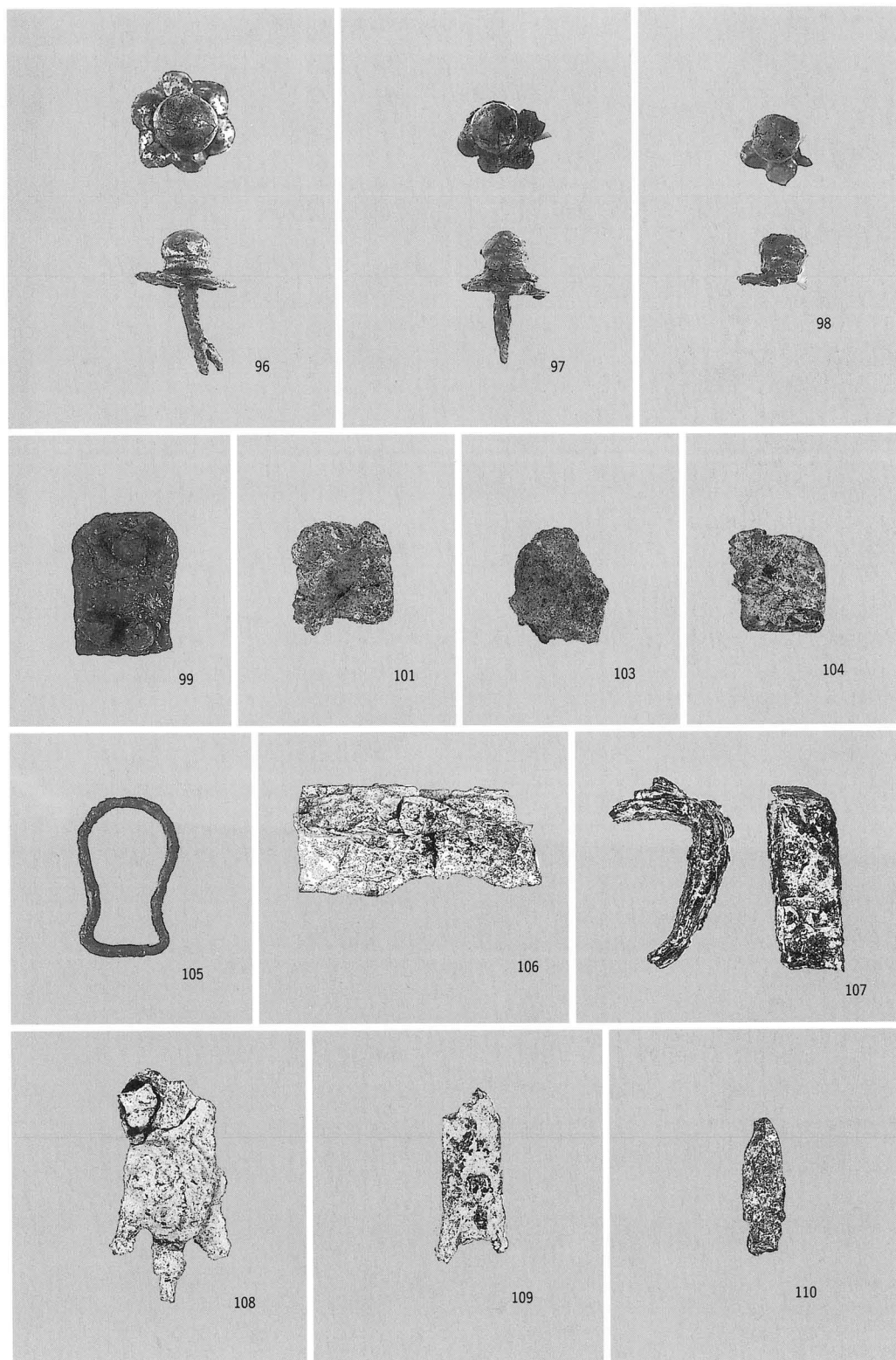
SM1001出土須惠器 (4)・骨藏器



SM1001出土馬具 (1)

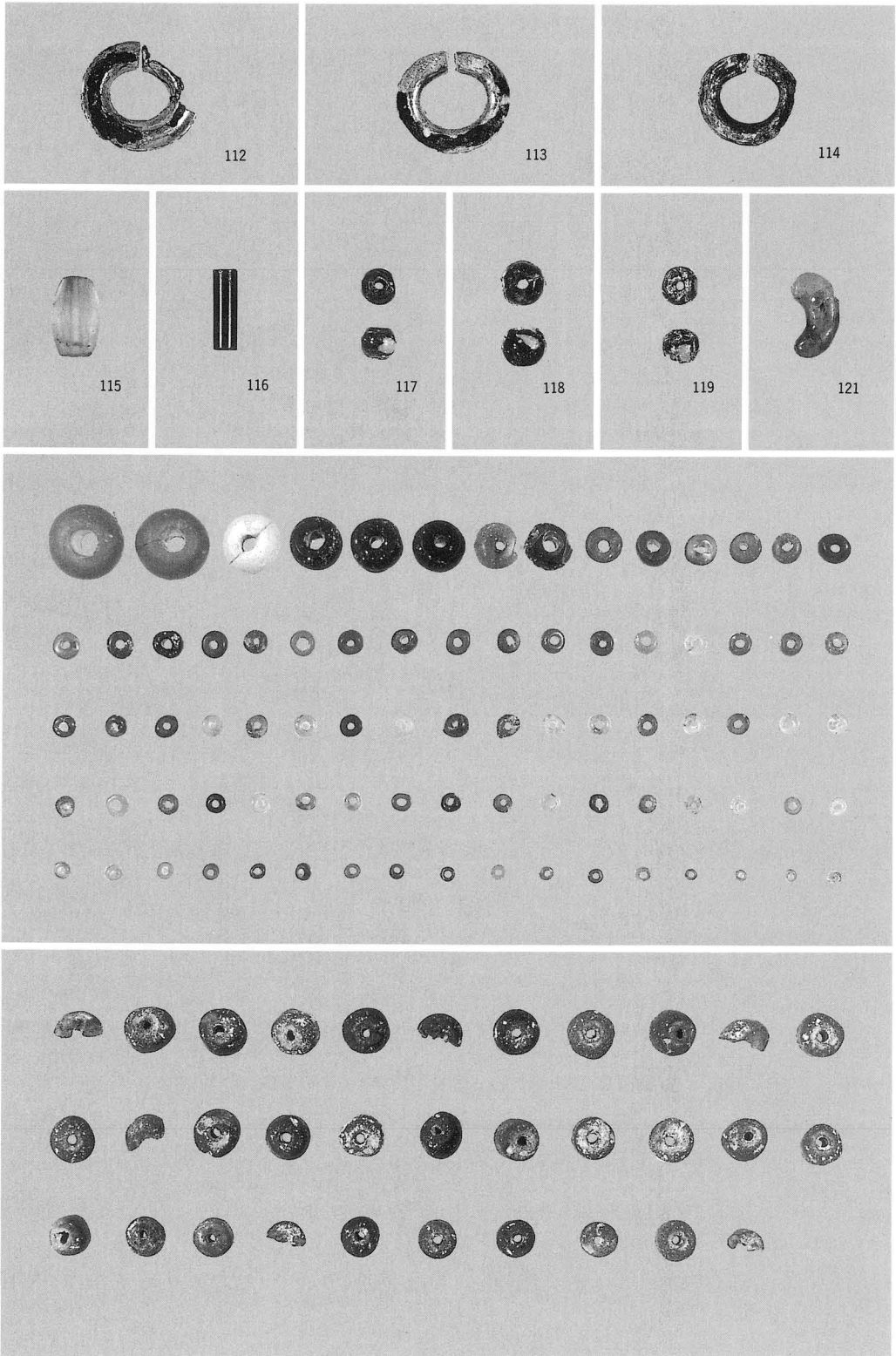


SM1001出土馬具 (2)



SM1001出土馬具 (3)・その他の鉄器

図版15



SM1001出土玉類